
とある科学と魔術の世界に転生しました

馬糞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学と魔術の世界に転生しました

【Nコード】

N24270

【作者名】

馬糞

【あらすじ】

主人公「柴葉葉」が死んで神様に会って「学園都市」にPSYRENのPSI能力貰って転生する話。

メタ発言、ご都合主義などが多いので苦手な人注意

プロローグ（前書き）

初めてなので駄文です

しかも更新遅いかも知れません。

それでもいいと言う方は生暖かく見守ってくれとうれしいです。

プロローグ

「ここはどこだ・・・」

俺こと柴葉葉（せいはは）は真っ白な空間で横たわっていた

右も左も上も下も前も後ろも見渡す限り真っ白な空間

どうしてこんな所に居るのか、その経緯を思い出そうと頭を働かせる
コンビニに行って行方不明のまま死亡扱いとなった兄貴の墓参りに
行ってそれで帰りにトラックに撥ねられたところまで思い出して止
まる

目の前に灰色の髪で白い瞳の12歳ぐらいの少女が土下座していた

「・・・」

どういう状況？

「つまり・・・お前の手違いで俺はトラックに撥ねられて死んだと・
・・・」

さっきまで俺に土下座していた少女は俺に神と名乗った

うたた寝していたら俺を間違えて殺してしまったらしい

つまり俺はまだ死ぬはずじゃ無かったという事か

「まあそういうことだね。ごめんごめんついというたたねしちゃって」

なぜか楽しそうに言う

「ごめんじゃねーよ!!!」

キレて叫ぶと何故か笑いが返ってきた

殺しておいてその態度はどういう事だろうか

「あはは」

「笑ってんじゃねえええ!!!」

切れた俺は自称神の少女にアッパーを繰り出した。

神とはいえ女の子に暴力を振るうのは普段なら後ろめたさで一杯だろうが、現在はそう言う事を気にしている余裕も無く

「ぶべらっ!!!」

自称神は俺の拳によって吹っ飛んだ・・・

「ごめんなさい。」

再び土下座する神

その顎にはアザが出来、吹っ飛んで落ちる時に出来たのか頭にはたんコブが出来ている

痛そうでも見てもらえなかった（棒読み推奨）

「いやそんなかわいそうみたいな描写しないでよ！？やったのあんたでしょうが！？」

「俺を殺しておいて笑ってるからだろう。俺は一切合切悪くありません」

あれ、意味違ったような気がする

「すまん」

再び土下座する

うーん流石にここまで謝られるとなあ（再び棒読み推奨）

殺したお詫びに転生させてくれるらしい

ついでに好きな能力もつけてくれるそうだ

「行きたい世界とほしい能力をこれに書いて」

そう言って渡してきたのはメモ用紙と転生できる世界のリストだった

「うーん・・・どの世界にするか・・・」

そうして探しているとある一つの世界が目に入った。

「ここにするか」

「ここでいいの？」

「ああ」

「安全に暮らせるかどうか分かんないわよ？それでもいい？」

「能力もらえるのに何もない世界に行ってもつまらないだろ？」

どうせならチートで無双したい

「分かった。それで能力はどうするの？」

「やべっ、書き忘れてた」

俺は能力名を記入する

「PSYRENサイレンのPSI能力で・・・って出来る？」

「出来る出来る。ほかに何かある？」

「いや、これだけでいい」

ブログ（後書き）

さて・・・次を更新できるのはいつの日か・・・
出来るだけ早く更新するので見捨てないでくださいお願いします。
それではまた

2011. 8. 20 編集しました

主人公、オリキャラ設定（ネタバレあり）（前書き）

サブタイでも言ってますがネタバレあります

それでも言い方どうぞー

主人公、オリキャラ設定（ネタバレあり）

主人公

名前…柴葉葉^{さいはよう}

性別…男

年齢…15

体重…平均

髪の色…すこし緑の入った黒

目の色…すこし青の入った黒

身長…169？

体型…中肉中背

能力「PSI能力」

ほぼ全部使えます

チートすぎね？と思う方・・・チートですが何か？

あまり使いすぎると多重能力者としてアレイスターとかに目をつけられると思う方

もうすでに目つけられています

なのでアレイスターに直接会わせた後は使いまわります（主にA I Mバーストや神裂、ステイル、一方通行相手に）

P S Iは少し原作のより強力になっています

ノヴァ
思念体とかも使います

ネタバレしてすみません

主人公紹介適當ですんません

性格

神様に殺されて学園都市に転生した

困っている人が居たら見過ごせない・・・と言うほどでもない

結構ドSで強盗や不良に対して脅しをかけたりするときものすごい
いい笑顔になるらしい

不良から他人を助けるたびに不幸な目に遭っているので最近はどう
不良から人を助けるなんてまねやめようかとか思っている

風紀委員と暗部に所属している

風紀委員の支部長、宮咲青葉にはよく振り回されている

しかも弱みのタネを握られていて逆らえないらしい

いつか見返してやるとも思っているがなかなかうまくいかない

基本いい奴

嫌いな奴に対してはドSっぷりを発揮する

機嫌が悪いと八つ当たりすることがある（特に上条）

目上の人には敬語を使う

前世には兄が居たらしい

神

年齢…大体300歳

体重…不明

髪の色…灰色

目の色…白

説明

仕事の途中で寝ることが多く今まで軽く100人は間違えて殺っちゃってるらしいやばい神

そのうち数人が禁書の世界に来ている

性格は天然

頭はいいらしい

主人公は98人目に殺っちゃったらしい

実はこの職（寿命の設定）についてからまだ3年

そろそろクビになるかもしれない

名前..みやさきあおば宮咲青葉

性別..女

身長..162?

年齢..16

体重..平均

髪の色..黒

目の色..こげ茶色

髪型..ショートヘア

体型…平均的

能力…テレパシー L E V E L 3 魔術いろいろ

役職…風紀委員177支部の支部長

説明

記憶力が高く円周率を1000桁まで言える

ついでに計算能力も高く8桁までなら暗算で計算できる

めんどくさがりや

腕章はバッグの中に入れっぱなしで風紀委員だと分かりづらいために
よく不良に絡まれる

実は暗部にかかわりを持ってる

ついでに転生者

神様に魔術の知識と使っても拒絶反応を起こさない身体をもらったらしい

あと限界というものをなくしてもらったそうだ

だが基本めんどくさがり屋なので人間の域を超えていない

能力はカリキュラムを受けて手に入った物で神様に貰ったものではない

ない

なんらかの武道をやってるらしくかなり強いがめんどくさいのでめったに使わない

LEVEL4ぐらいなら倒せる（相手の能力にもよる）らしい

性格は地味に黒い

主人公が多重能力者だと知っている

システムスキャン
毎回身体検査の後は誰がどれくらいLEVELが上がったのかチェックしている

LEVEL3～5の能力を持っている人の名前は大体覚えているらしい

本人曰く

「調査する手間が省ける」

とのこと

二人目のオリキャラ

ひのなつる
日野夏流

年齢.. 15

身長.. 172

体重.. 平均

髪の色.. 赤

目の色.. 赤っぽい黒

能力.. 火の滅竜魔法、鉄の滅竜魔法、雷の滅竜魔法、天の滅竜魔法
というか滅竜魔法全般

十エーテリオン

説明

暗部の組織アトラスのメンバー

転生者

実はギャグキャラ

でもたまにまじめ

方向音痴

主人公とは一応敵同士になるつもりでいるがそれまでは仲良くやってこうみたいなノリ

でも最近自分のチームに主人公の身内が居ることが分かりやっぱやめようかなーとか思っている

15巻まで進んでも殺すつもりも殺されるつもりもない

でも闘う気はあるバトルジャンキー（戦闘狂？）

春樹やアトラスメンバーとは前世からの知り合い

全員、春樹の家でモンハンをやっていた所トラックが突っ込んできて死亡

春樹は一応年上だが特に気にしていない

アトラスメンバーは全員年が違う

エーテリオンは1回撃つと3日は動けなくなる、また学園都市が丸ごと吹き飛ぶ恐れがあるため絶対撃たないと決めている

さいはるぎ
柴葉春樹

年齢…17

体重…平均

身長…180

髪の色と瞳の色は主人公と大体同じ

能力…ジェラールやジーク、ミストガンと同じ魔法＋エーテリオン

説明

主人公の兄

主人公が小さいときにふざけた理由で出て行ったらしいが実は建前
本当は色々あったらしい

まあ魔道師にあこがれてたのは事実

出て行ってから自分では自分で借りた家で暮らしていたらしいが数年後ト
ラックが家に衝突して死亡

ありえねえだろ見たいなこと思いながら死んだら神様のミスとのこと

フェアリーテイル、とある魔術の禁書目録が好きだったのでフェア
リーテイルの魔法を貰って学園都市に来た

原作に介入するつもりは特になし

でも15、19、20、22巻には参加したいらしい

落ちたところがアレイスターのところだったので高級マンションを

貰ってどっかの学校に通っている

その時アトラスのメンバーも一緒だったので「よし、暗部の組織作ろう」

見たいなノリでアレイスターに頼んだ

4人とも家が近かったらしい（ちなみに死んだ時もたまたま4人でモン○ンをやっていた）

そこでアトラスを作った

主人公がここに來た事は最近知った

死んだタイミングは主人公より先で超電磁砲の原作の約3年前らしい
エーテリオンの制限については日野と同様、一発撃つと3日は動けなくなる

主人公、オリキャラ設定（ネタバレあり）（後書き）

こんな感じで言っただろうと思います

アトラスメンバー2人の設定若干変更しました

7月15日「やる事がねえ」(前書き)

1話です

それではどうぞー

7月15日「やる事がねえ」

「どこだここは・・・」

気付くと見知らぬ部屋にいた

どうやら寮みたいだ

「・・・てことは無事に来れたみたいだな」

とりあえず部屋を見て回っていると、手紙を見つけた

内容は

『コレを読んでるってことは無事に転生出来たみたいだね

良かった良かった失敗しなくて

お金や服、食料や家具とかは大体全部こっちでそろえといたから
問題ないよ

君はその主人公のとある学校に転入してもらうよ

君の部屋はとある少年の隣にしといたからね

今日は街を見て回ってきたら？

転入するのは明日って事になってるから

それじゃ何か連絡があったら君の携帯電話に私の番号とアドレス
入れといたから

さいならー

（神）

』

とある少年とは上条当麻のことだろうと思いながら

俺は自分の携帯を見る

確かに神の番号とアドレスがある

「なんで神が携帯なんて持ってるんだよ・・・」

俺は呆れながら呟いた

「まあ神様だしな・・・一応」

作れてもおかしくないだろうと思いながら携帯の画面を見る

7月15日

「原作に介入できるのは明日か・・・」

時刻はまだ午前中

学校はあと少しで始まるだろう。

今から言っても遅刻だ

・・・が、俺は明日から転入する事になっているのであせる必要はない

神が気を使ってくれたようだ

隣の部屋から不幸だあああああという声が聞こえた

どうやらお隣さんは寝坊したらしい

「さて・・・何するか・・・」

外に行ってもこの時間じゃあな

『学校は?』とか聞かれるのもめんどくさいし

原作が始まるのもまだまだだし

超電磁砲の方も明日だし

やる事がねえ・・・

これなら遅刻する方がマシだった。

「・・・そういえば」

そういえば能力はちゃんと使えるのだろうか・・・

とりあえず周りに被害がでない程度に『バースト』でテレキネシスを使ってみる

すると部屋においてあったテーブルが浮いた

「おお・・・そんなすごい力じゃないけど実際見てみるとすごいな」

俺はテーブルを元の位置に戻し、次は『トランス』を使おうと思ったが・・・

「・・・使う相手がいない・・・」

落ち込んでてもしょうがないので『ライズ』を使ってみる

「なんかあんま変わらないような」

とりあえずベッドを持ち上げてみた

片手で持ち上げられた

「おお！すごい！俺のライズは『ストレングス』か？」

そんなことを考えていたが物凄い遠くにいる鳥や物が見えるので視力も上がっているようだ

どうやらセンスもストレングスも両方使えるらしい

ベッドを戻し他の能力も使ってみる

「被害が出ない程度に使うとなると『有線トランス』や『マテリアル・ハイ』とかの自分で加減できる

程度のがいいか」

というわけで俺は『マテリアル・ハイ』や『有線トランス』、あとなんとなく『ダメQ』なども出して見た

そんなことをやってる内に昼過ぎになりお隣さんの上条さんも帰ってきたようなので

街を見てきたり不良に絡まれたビリビリを助けて追いかけられたりしたが

それはまたそのうち話すとして

そんな事をやってる内に一日が終わった

7月15日「やる事がねえ」(後書き)

読んでくれた方ありがとうございます

駄文ですみません

次回もよろしくおねがいします

7月15日?」「さて・・・出かけるか」(前書き)

やっと原作キャラ出せた

それではどーぞ

7月15日？「さて・・・出かけるか」

「さて・・・そろそろ出掛けても大丈夫だろ」

俺はちょうど隣に住んでる奴も帰ってきたようなので挨拶を済ませた後に街を見て回ろうと思っていた

なぜ今までずっと部屋にいたのかというと

外に出たらたぶん学校はどうした？とかいろいろ聞かれそうだったからだ

なぜ学校に行かないのかというと俺は今日ここに転生して来たばかりで

転入するのも明日ということになっている

なので今までずっとここで能力の練習をしていた

着替えは済ませていたので部屋を出た

「ここか・・・といっても隣だけど」

とりあえず挨拶のためにチャイムをならす

するとお隣さん・・・上条当麻が出てきた

「はい、どちらさまですか？」

「俺は隣に引っ越してきた柴葉（しばは）。まあこれからよろしく。・・・えっと」

「あ、俺は上条当麻。よろしく」

こんな感じで挨拶して終わった

挨拶を終えた俺はそのまま街を見てくることにした

「すごいなここ・・・清掃ロボとか警備ロボとか・・・」

俺は驚いていた

原作でもここは外より数十年も技術の進んだ街だと言っていたが

「俺がいたところとは大違いだ」

俺の育ちは東京で結構都会だった・・・でもここまですごいところではなかったと思う

「・・・ってここも東京か」

学園都市は東京西部に位置している

総人口230万人

その8割が学生だと言うのだから驚きだ

「さてと・・・一通り回ったしそろそろ・・・ん？」

そろそろ帰ろうかとさっき買ったクレープを食べていたら

道の端っこで誰かが不良に襲われているのを見つけた

襲われているのはどうやら常盤台の女子中学生らしい・・・

どうしようか悩んだがこの不良がいるととおりづらいので助ける事にした

「おいおまえらなにやってんだ」

俺は不良たちに話しかけた

すると

「あ？何だデメェは」

と不良の一人がこっちに来た

それに釣られて周りの不良も集まってくる

「1・・・2・・・3・・・7人か・・・」

俺は不良の数を数える

「何だテメエ・・・ナメてつと痛い目見るぞ!」

そういつて不良は手から火の玉を出す

それを無視して俺は持っていたクレープを一瞬で全部口に入れる

「ふいふあふいふえふいふふおふあふおふあふえふあふあ」

「何言ってるのかわかんねえよ!!」

「ゴクリ・・・痛い目見るのはお前らだ」

俺は口に入れたクレープを飲み込んで言い直す

「てっめえ!! なめてんじゃねえぞ!!!!」

不良が火の玉を飛ばしてきたので俺は『暴王^{メルゼス}の月^{ドア} 円盤^{ディスク}ver』を出し火の玉を消し去る

「なっ!?!」

不良は驚いている確かにあの火の玉は『強能力者《レベル3》』以

上はあった

「てめえ！何をした！！」

俺は不良を無視して『暴王の月 円盤ver』を引っ込め『ライズ』を使う

そして不良に蹴りを放つ

「ぐはっ！！」

短い悲鳴と共に不良は吹っ飛び3人ほど巻き込んで壁にめり込んだ

「よし次！・・・て、あれ？」

俺は次の不良を倒そうと不良のほうを向くと

すでに黒こげになって倒れていた

「あんた何者？」

そしてそこにはバチバチと火花をだす常盤台の超電磁方レールガン

御坂美琴が立っていた

「レ・・・超電磁方・・・」

俺はそこで助けた事を物凄く後悔しました

7月15日? 「さて・・・出かけるか」 (後書き)

やっと原作キャラ出せた・・・でも原作のストーリーに入っていくのはまだ先かな

それではまた次回

7月15日? 「死ぬかもしれない・・・」 (前書き)

前書きに書く事がないので

〱 前回のあらすじ〱

柴葉葉は外を散歩していると不良に絡まれている少女を見つけた

助けたら常盤台の超能力者《レベル5》御坂美琴でした

あらすじ下手ですんません

それではど〱ぞ〱

7月15日? 「死ぬかもしれない・・・」

(やばい・・・まさか助けた奴が超電磁砲^{レールガン}だったとは・・・)

俺は焦っていた

俺は不良の一人が放ってきた火の玉しかもレベル高いやつを一瞬で消した

たぶん目をつけられる

「質問に答えなさい。あんた何者?」

「ただの一般人ですが? なにかおかしい事でも?」

(やばい・・・こんな返答をしたらたぶん殺される)

予想通り御坂は電撃の槍を放ってきた

俺はそれを反射的によける

『ライズ』を使っていたので何とかよけられた

だがそれがまずかった

「どこに電撃を簡単に避けたり不良を3人まとめて壁に減り込ませるやつがいるのよ」

「ここにいる!!!」

もういいや・・・

俺は開き直す事にした

「それにさっき強能力者以上はあった炎を簡単に消したやつ。あんな能力見たこと無いわよ」

「それは俺の能力のレベルがあいつより高かったただけだろ？何がおかしいんだ？」

「あの黒い円盤見たいのは何かって聞いてんの！」

そう叫ぶと御坂はさっきよりも強い電撃を放ってきた

今度は『暴王の月』^{メルゼス ドア}で消滅させる

円盤verではないので地面がすこし抉れた

「・・・あんた本当に何者？なにその能力」

いい加減言わないと超電磁砲^{レベルガン}を撃たれそうなので白状する事にした

「『暴王の月』^{メルゼス ドア}レベルは今日来たばかりでまだ測ってないので知らん」

そう答えると御坂は少し考えてから

「ふーん・・・聞いた事ない能力ね・・・よしっ！あんた私と勝負しなさい！」

いきなりそんな事を言ってきた

「『よしっ!』じゃねえよ! 超能力者なんかと戦ったら俺死ぬわ」

そう叫んで俺は『ライズ』を使い全力で逃げた

「ちょっと! 待ちなさいよ!」

という声が聞こえた気がしたが無視した

俺の『ライズ』は使えばたぶん車より早く走れる

御坂に追いつけるはずがない

「に・・・逃げ切った・・・」

そのまま俺は寮に帰り部屋に入る

するとそこには

座標移動窓のないビルへの案内人
ムーヴポイント

結標 むすじめ 淡希 あわき がいしました

「・・・なぜに？」

俺はアレイスターに目をつけられたのかと思ったが

（能力を複数使ったところを見られたのか？・・・いや・・・あれは衛星の監視に引っかけられないように室内でやったはず・・・じゃあなんで？）

思い当たる節がない

なんてことをだらだら考えてる間に俺はアレイスター・クロウリーの所に連れて行かれた・・・

俺は連れて行かれながら思い出した

「あ・・・滞空回線アンダーラインの事忘れてたわ・・・」

それが最後のセリフだった

死んでないからね？・・・念のため・・・

7月15日? 「死ぬかもしれない・・・」 (後書き)

口調とか大丈夫ですかね?

あとなんか無理やりな気がする

なんか違和感あったらいつてくください

それではまた次回

次回アレイスター登場させて次の次くらいには原作介入・・・できるかな・・・

7月15日? 「複数の能力の使用は自重しようかと思ったけど次からは使いまゝ

5話目です・・・てかサブタイ長え!!!

とりあえず前回のあらすじ

結標さん柴葉さんよろしくお願いします 結標ファンの方キャラ崩壊ちよつと注意

本編ではたぶん大丈夫です安心してください(たぶんというのは作者の文才のなさからです口調とかおかしくなっていないか不安・・・まあまだセリフださないけど)

葉「俺らにやらせるなよ作者・・・」

アワキン「まあいいじゃない・・・てちよつとまで!!! なんだアワキンって!!!」

葉「まあまあ」

淡キン「ちよ・・・まだちよつと直ってない・・・まあいいわ」

葉「それじゃ前回のあらすじ」

淡希「始めるわよ・・・あっ!直った!」

葉（何でそんな無駄にうれしそうなんだ？）

く前回のあらすじく

葉「散歩しているとビリビリに会いやつのことでかえったらなぜかアワキンがいた」

淡希「アワキン言うな！……でこいつをアレイスターのところに連れてった」

葉「で終わり」

淡希「早っ！まあいいわ……それでは本編どうぞ」

適当ですんません

あらすじを結標にやらせたのはなんとなくアワキンがやりたかったのとせっかく出番が来たのに今回おそらくセリフがないので出番をやろうと思っただけです

別に好きなキャラとかそう言う訳じゃありません

嫌いではないですけども

あっ・・・石投げないで・・・

7月15日?」「複数の能力の使用は自重しようかと思っただけど次からは使いま

俺は今窓のないビル・・・アレイスターのいる場所にいる

「君は何者だ?」

アレイスターがいきなり俺にこんな事を聞いてきた

たぶん意味はないだろうが適当な事を言って見る

「学園都市に来たばかりのただの高校生だ」

「ただの高校生がなぜ多重能力デュアルスキルを使える・・・いや・・・君はPS
Y能力とっていたね?」

「口調が冥土返し《ヘヴンキャンセラー》みたいになってるぞアレ
イスター」

「なぜ私の名前を知っている?冥土返しまで・・・」

「やべ・・・まあそんな警戒しなくても大丈夫だぞアレイスター。
お前の計画を邪魔する気は無いからな」

「なぜ計画の事を知っている・・・君はいったい何者だ?」

「チートな能力をもった転入生です。そうだ、お前に言いたい事が
あったんだ」

「なんだ?」

俺はアレイスターに言った

「俺を暗部に入れろ。土御門と同じところで頼む。学校が同じだしやりやすい部屋も二つ隣だから。あと滞空回線アンダーラインを俺の部屋に入れな
いでくれ・・・めんどくさいから・・・」

「なぜだ・・・まあいい君を暗部に登録しよう。土御門と同じところ
でいいのだろう？それと滞空回線アンダーラインについては了承できない」

「ちっ！まあいいや・・・俺はもう帰って寝る・・・連絡先は言わ
んでも分かるだろ・・・」

俺は空間移動テレポートでここを出た

「おお・・・一瞬で戻れた・・・シャイナの瞬間移動便利すぎる・・・あっ！暗部にはネメシSQで登録してもらおうと思ってたのに言い忘れてた・・・まあいいや・・・ど・・・せ・・・聞いている・・・だ・・・ろ」

俺はそのまま眠りに落ちた

ちなみにこの時俺は目覚ましをセットするのを忘れていた

なので朝寝坊して遅刻した

隣の上条が「不幸だああああ」と叫んでいなければおそらく昼まで寝ていただろうがそれはまた別の話

で・・・

初日から遅刻って

S I D E ..アレイスター

「暗部に自らは言ってくれるとはね・・・柴葉葉・・・いやネメシSQに入れてほしいと言っていたね・・・計画に利用させてもらう

よ『デュアルスキル多重能力者』」

こんなことがあったなんてことは俺は知るよしもなかった

7月15日？「複数の能力の使用は自重しようかと思ったけど次からは使いまゝ

更新しました・・・今までで一番ひどい気がする

しかも短い・・・てか「あとがき」と「まえがきのゝ前回のあらすじゝ」を合わせたら本編と同じぐらいの長さってどういうことだ
ああああああああ

葉「作者が手抜きという事だ。まさにばふん」

葉は黙ってろ・・・（怒）

でも短かったのはホントすみません

「7月15日・16日」みたいになるのはいやだったんです

葉「これ以上やるとあとがきとまえがきが本編より多くなっちゃうぞー」

だから葉は黙ってなさい

今回は「システムスキャン身体測定」です

柴葉が『暴王の月』でとんでもない結果を・・・出すのやら出さないのやら

暗部に入っただけで思う存分能力使わせられるぜ！・・・まあそんなにやらんけど

それじゃまた次回！

あと銀魂×ひぐらしのクロスもそのうちやりたいと思ってる作者です
気が向いたらやります（禁書メインで更新するのでやるとしたら更新
遅いです。後手抜きです）

それじゃまた次回ー

7月16日「転校してきました柴葉葉です」(前書き)

前はすみませんでした

でも前回は言ったとおり15・16日みたいにしたくなかったんです

葉「いや・・・アレイスターを出すタイミングをかえればよかったんじゃない・・・」

すみません・・・(その手があった)

後悔も反省もしてるんで許してください

結「まあまあ。私は早く出番が来てうれしかったし」

葉「セリフなかったけどな・・・」

結「ずーん・・・」

葉「それとお前が出たのは前々回だ」

結標は走っていった

結標を出すのはこのあらすじが最後だと思います(多分・・・)

なんで結標出したんだろう・・・口調が楽だったからです

葉「ひとりで質問してひとりで回答してる奴ってお前ぐらいじゃない?」

葉くん暗部に入って性格変わりました？

葉「俺は作者には容赦しねえよ？」

ずーん・・・

それじゃどぞ・・・

くとある学校

「初日から遅刻とは・・・いい度胸じゃん」

俺にいきなりこう言ってきたのは黄泉川先生だ

「初日から遅刻だなんて・・・先生は悲しいのです」

そう言ってきたのは小萌先生・・・ホントに先生なのだろうか

そもそも大人なのだろうか

どう見ても小学生・・・喋り方まで

「何か失礼な事を言われた気がします」

鋭い

「地の文にツッコまないでくださいこど・・・小萌先生」

あぶないあぶないセーフ

「今子供先生と言いかけてましたか？」

アウトだった・・・

「言ってませんよ？先生に子供なんていったら大変ですもん」

「そうですか・・・」

なんかちょっと警戒してる

黄泉川先生は後ろで笑いをこらえている

「それじゃ私は自分のクラスに戻るじゃんwwがんばるじゃん転入生w今日は身体検査もあるしww」
システムスキャン

黄泉川先生は自分のクラスへ戻った

まだ笑っていた

「それじゃそろそろ私たちも行きますよ、柴葉ちゃん」

「あいー」

適当に返事してこど・・・小萌先生についていく

「返事はいですよ？柴葉ちゃん」

「はい・・・」

そしてクラスの前に着いた

「それじゃ柴葉ちゃんは少し待っててください」

俺は廊下で待つ……すると

「才！」「才！」

と歓声が聞こえてきた

「入っていいですよ」

と言われたので教室に入る

「今日転入してきました。柴葉葉です。これからよろしくお願いします」

とりあえず挨拶して俺の高校生活が始まった

7月16日「転校してきました柴葉葉です」(後書き)

すみませんでした

前回身体検査システムスキャンやると言って結局小萌先生とのやり取りだけで終わってしまいました・・・

次こそは・・・

まだ原作介入は出来なさそうだ・・・

7月16日? 「身体検査《システムスキャン》」 (前書き)

こんにちはーばふんです

それでは前回のあらすじゝ

遅刻したゝ

小萌先生を地の文でからかったー

クラスの皆に挨拶ー

終わり!!!!!!

葉「適當すぎるだろがあああああああああ

あらすじは適當に!!!!それがばふんクオリティー!!!!

葉「つまりクオリティーひくいと」

それではどーぞー

7月16日? 「身体検査《システムスキャン》」

「それじゃ柴葉ちゃんはあるその席に座ってくださいねー」

俺は指定された席まで歩いていく

ものっそい緊張した

そして俺が席に座ったとたんに上条が来た

「遅れましたアアアア」

「上条ちゃん遅刻ですよ」

「すみません・・・」

なんか服が少し汚れている

まああの不幸体質の事だ

不良にでも絡まれたのだろう

上条の席は俺の隣だった

「あれお前たしか柴葉だよな」

「よく覚えてたな、一回挨拶しただけなのに」

「俺の記憶力なめてんのかお前は・・・つい昨日の事だろうが」

「昨日だっけ？いろいろな事ありすぎて遠い昔のようにも感じるよ・
・・」

俺は窓の外を眺めながら言った

「よく分かんないけど大変だったんだな・・・」

お前ほどじゃないと思う・・・と口に出さずに思った

「柴葉ちゃん柴葉ちゃんはまだ身体検査システムスキャン受けてませんよね？」

上条としやべっていると小萌先生が言ってきた

「受けてませんけど」

「それじゃ付いて来てくださーい」

そして俺は小萌先生についていく

そこにはよく分からない機械があった

「なんすかこれ？」

「これは柴葉ちゃんにどんな能力が発現するかを調べる機械なので
す」

「いや俺もう能力使えますし・・・」

そういつて俺は手に小さな『暴王の月』を出す

「そうだったんですか？そんな記録は載っていなかったのですが」

そんなこんなで測定するために来たのが・・・

「何でプール？」

そう質問すると

「柴葉ちゃんの能力は力が強そうなので念のためです」

と小萌先生は答えてくれた

プールのそこを切ってしまったのか心配だ・・・

そして俺は『思念体』を使いながら『暴王の流星を何発か放つ（連射力も見られるらしいだからノヴァを使った）』

そしてノヴァをとくと結果が放送で流れてきた

『測定完了』

速度『4080m／秒』

連発能力…18発

e t e . . .

総合評価…LEVEL5』

まあこんなもんか・・・

いや強すぎね？だって原作の暴王の月はあるのに速くなかったと思うよ？遅いって言ってたし

俺の暴王の流星・・・すこしオリジナル要素入ってんな・・・

後ろを見ると小萌先生が大きく口をあげながら固まっていた

プールの底を見るとプールの底に切ったような痕があった

おそらくランスが2回目のホーミングするときに切れたのだろう

そんな事を考えていると小萌先生は硬直がとけて喜んでいた

そのあとプールの底を見てまた固まった

これじゃプールが使い物にならないとか

弁償しないととかいろいろぶつぶつ悩んでいた

クラスに戻ると結果を聞かれた

LEVEL5だったと答えると皆驚いていた

上条は呆れていた

そんなこんなで高校生活初日は終わった

詳細？特に何もなかったので無ーーーーーし

「土御門」

俺は土御門に話しかける

「なんだにゃー？」

「俺が暗部^{グループ}に入った事アレイスターに聞いてないのか？」

「ネメシスQっていう多重能力者が入ったってきいたにゃー・・・
お前だったのか？」

いきなり口調が変わった

「ああ。これからよろしく。まあ俺は動かないんだけどな」
と言ったら

「どういことだ？」

「こいことだ」

こいって俺は能力を使いネメシスQを出す

土御門は驚いている

「これは能力で作った分身だ。こいつがアレイスターがお前に言つてたネメシスQ」

「分身を作るなんて能力聞いた事もないぞ？」

「基本的にコイツは俺とリンクしてるからコイツの見たものは俺の中に記憶されるし俺の命令に従って動く。こいプログラム」

「なるほどにゃー」

あれ・・・戻った

「まあだから俺はコイツが消されたら介入するから基本いないぜ？」

すると土御門が質問してきた

能力とは関係ない質問だった

「何でお前は俺のいる組織グループを選んだんだ？アレイスターに自らここに入れろと言ったらいいじゃないか？」

「ここが一番面白そうだったから・・・いや面白くなりそうだったから・・・だな」

土御門はわけが分からないというような顔をしていた

そして俺は帰った

帰りに超電磁砲が今日から始まる事を思い出し急いで帰って出かけた

そのまま銀行強盗に会い人質にされるのはまた別の話

ちなみに序列は2位だった・・・

その気になれば一方通行破れる自信があるんだがなあ・・・

まあそれは一方通行に会った時に考えよう

7月16日? 「身体検査《システムスキャン》」 (後書き)

終わったー

今更ですけどキャラの口調とかおかしくないですかね?

葉についてはその時の気分しだいで地味に変わったり変わんなかったりするんですが・・・

葉(口調のミスをごまかすための言い訳だな)

言い訳じゃないよ!!

やっと次回原作介入できそうだ・・・

番外編もそのうちやりたいです

それではまた次回

7月16日？「原作に介入した・・・あと風紀委員に入った・・・っつか入れ

やっと原作介入です

ここからはたぶん原作沿いです

でもその前に恒例の適当なあらすじ

（前回のあらすじ）

LEVEL5だった・・・

終わり

葉「いや早いな・・・」

これがば（ry

葉「それじゃ本編どーぞー」

台詞とられた

7月16日? 「原作に介入した・・・あと風紀委員に入った・・・っつか入れ

俺は今第7学区の広場でクレープを食べている

ちなみに俺はクレープとかの甘いものが大好きだったりする

女子か! とか言う奴・・・車道の真ん中に立って跳ねられてきなさい『キュア』で治してやるから

「さて・・・今日が超電磁砲が始まるはずだったが・・・」

場所は合っているのだろうか・・・

たしかアニメと漫画じゃ場所が違ったはずだが・・・

まあゲコ太ストラップが貰えたからたぶんあってると思う

そんな事を考えてると行列に御坂たちがいるのが見えた

とりあえずまだ合いたくないので少し離れると

突然銀行のシャッターが爆発した

「あ・・・始まったみたいだな」

そして黒子が

「風紀委員ですよ!」

とか言っていた

それを見ながらぼーっとしていたら

「おい風紀委員！こいつがどうなってもいいのか！！」

いつの間にか俺は人質にされていた

炎を顔に近づけられている

ぶっちゃけ『ライズ』を使えばこいつを喰らっても問題ないし

火傷してもたしか天城弥勒が使ってた能力を使えば炭化してても回復できると思う

でも黒子たちは焦っていた

人質の俺に危害が及ぶのはまずいのだろうか

そんな事を無駄に考えていると

「あーーッ！！あんたあのときの！！」

「？・・・お姉さま。この殿方とお知り合いですの？」

「あれ・・・お前あん時のビリビリ女」

「ビリビリじゃない！！！！なんであの馬鹿もあんたも私をビリビリって呼ぶのよ！！」

「あの馬鹿と言う奴はしらんが俺はお前の名前知らんし・・・名乗られてないから」

「じゃあ何であの時私が超能力者だって知ってたのよ!!!」

「御坂美琴ってレベル5の第三位で有名だし・・・？」

「知ってんじゃないのよ!!!」

バチィと御坂の頭から火花が出た

俺は銀行強盗に捕まっている

今撃たれたら確実に喰らう

「おちつけおちつけ・・・いや・・・やっぱ名乗られてもないのに名前で呼んだら怪しまれるかなーと」

そんな感じで御坂と口喧嘩(?)していると銀行強盗が割り込んできた

「おいてめえら!!!俺を無視してんじゃないやねえ!!!」

俺はとりあえず返す

「ごめんごめん忘れてたよ」

「人質のクセに忘れんなよ!!!」

「うるさいなーっとお!!!」

俺は『ライズ』を使いながら強盗をぶん投げる

「どわあ!!」

銀行強盗は飛んでいき木にぶつかって気絶する

黒子は呆れながら

「そんな簡単に脱出できるならさっさとしてほしかったですわ」

と言ってきた

そのあと黒子は俺が投げた強盗を拘束する

後二人居たがそのうち一人のでかい奴は俺がアッパーで沈めた

あと一人はーっと・・・

居た・・・ってあれ!やばくね!?

見ると佐天が強盗から男の子を守っている

そして強盗は佐天の顔を蹴ろうとした

俺は『ライズ』を使い強盗の近くに一瞬で近づき蹴ろうとした足を掴む

「だいじょうぶか!？」

俺は佐天に問いかける

「え・・・あ・・・はい・・・大丈夫です」

すると強盗は俺の手を振り解き車のほうに逃げ込んでそのまま逃げていこうとする

「逃がすか！！！！」『流星^{ランス}』！！」

俺は強盗が逃げていった車に向かって『暴王^{メルゼス}の流星^{ランス}』を放つ

強盗の車は一瞬で真っ二つになった

運良く爆発はしなかった（してたら強盗をキュアで治してたと思う・
・生きてれば）

御坂達は驚いていた

中に居た強盗は硬直していた

俺は中から強盗を引きずり出す

そしておびえながらこっちを見る強盗にこういつてみた

「お前が真っ二つにならなくてよかったなWWW」

その時の俺はものすごくいい笑顔だったという・・・

アンチスキル
警備員が来て強盗を連れて行った

佐天はさっき助けた男の子の保護者にお礼を言われていた

佐天は

「さっきあの子を助けたのは私じゃなくてあそこにいる人です」

と言って来たので俺は

「お前が居なかったら強盗はあの男の子を連れていっちゃっただろうからあの子を助けられたのはお前のおかげだよ」

そういうと御坂や黒子たちも俺の言うとおりで言っていた

佐天はうれしそうにして俺にお礼を言ってきた

そして御坂は

「そうだ!! あんた私と勝負しなさい!!」

とかさっきまでのいい空気をぶち壊しにしてきやがった

「そうだ!! じゃねえよ!!!! なんで俺がお前と勝負しなきゃいけないんだよ!!!!!!」

と叫んでたら

「そういえばあなた名前はなんですか？」

と黒子が聞いてきた

「今聞くことか？それ・・・まあいいや・・・柴葉葉だ。能力は『暴王の月』レベルは5」

「レベル5！？でもそんな能力聞いた事ありませんわよ！？」

と黒子

「あんた昨日は分からないとか言ってなかったっけ！？」

と御坂

「レベル5だなんてすごいですね」

と佐天あと同じことを初春も言ってきた

「今日測ったばっかだから聞いた事もないのはしゃーないだろ・・・来たのは昨日だし」

と答えておいた

「やっぱあんた私と勝負しなさい！！」

と御坂がまた言ってきた

「お姉さま・・・」

黒子は額に手を当てて呆れていた

「私、二人が戦うところ見てみたいです!!」

佐天が言ってきた

初春はうんうんと頷いていた

「イヤだよ!!!!なんで勝負しなきゃいけないんだよ!!!!」

と叫んでいたら

「柴葉。事件の事情聴取があるから来るじゃん」

「柴葉さん・・・でよろしいんですたっけ？来てもらいますわよ？」

と警備員アンチスキルの格好をした黄泉川先生と黒子に連れて行かれた

「そういうわけだ・・・じゃあな御坂」

そう言って俺は事情聴取に連れて行かれた

どうやってもめんどくさいルートしかないんだな・・・

御坂が「待てコラー!!!!逃げんなー!!!!」とか叫んでた気がするが無視した

連れて行かれる途中携帯を見ると暗部の仕事が入って居たので気付
かれないようにネメシスQを出した

内容は『置き去り《チャイルドエラー》』を使った人体実験をする
研究所の破壊』と書いてあった

その後俺はいろいろな質問をされ何時間かたった後に解放された

帰る途中不良に絡まれている女子高生がいた

「おい姉ちゃん俺たちと遊ばない？」

「やさしくするからさーねえいいでしょ？」

学園都市はなぜこうも最先端がどののと言ってるくせに不良が多い
のだろうか・・・

最先端がこれでは泣けてくる

暗部じゃ売春もされてるみたいだし

「おい馬鹿共、なにやってんだ」

思わず馬鹿呼ばわり

さつき強盗の車を切って強盗を脅したときにSに目覚めてしまったか・・・

「なんだデメエ!!!!」

「誰が馬鹿だこのやろう!!」

なんか不良がうるさいので『ライズ』を使って不良のわき腹に蹴りを入れもう一人の不良を投げ地面に叩きつけた

なおも立ち上がろうとしてくるので『氷碧眼^{デュープフリーズ}』で作った氷の銃を不良の口に突っ込む

たまには違う能力も使ってみたかったです

そして

「おい・・・今すぐここから消えろでなきゃ撃つぞ?」

と脅してみる

不良は

「ハッターだ!! そんな氷の銃なんかでなにが出来っ!!」

俺はその銃を壁に向かって撃つ

あたったところは一瞬で硬い氷になった

「凍るかどこかへ消えるか選べ次に会ったときは・・・うーんどうしてやろうww」

やはりそのときの俺の顔はいい笑顔だったと言う

不良は悲鳴を上げながらどこかへ消えた

俺は襲われていた女子高生に声をかけた

「ふう・・・大丈夫・・・っ」

いきなり肩を掴まれた

「君、ジャッジメント風紀委員に入らないか？」

・・・は？

「え・・・あんたジャッジメント風紀委員だったの？」

「そうだよ？」

よく見るとバッグからジャッジメント風紀委員の腕章らしきものがはみ出ていた

「私は第177支部の支部長だ。名前はみやさき あおは宮咲青葉 君は？」

「柴葉葉」

「柴葉君って確か新しいLEVEL5のか？でもきみが使ってた能力は書庫バンクに載っていた能力とは全然違ったと思うが・・・まあいい！君！風紀委員ジャッジメントに入りなさい」

「何で命令！？しかもなんで俺のこと知ってんの！？」

「私はシステムスキャンの日には必ず誰のLEVELがどれぐらい上がったか毎回確認してる。その方が調査するときとか手間が省けるからな、ちなみに記憶力には自身がある。円周率1000桁以上言える」

それはすごい

というかまずい・・・多重能力者ってことバレたか？

「で・・・入ってくれるか？最近人手不足で困ってるんだ」

とか言ってきた

確かに風紀委員に入れば原作にも介入しやすいだろうが177支部には黒子や御坂がいる

多重能力者であることがバレるかもしれない

どうする！

「沈黙ってことは・・・」

助かったか・・・？

「入ってくれるのか!!!!」

「何でだアアアアアア!!! 入りませんよ風紀委員^{ジャッジメント}なんて!!」

「入ってくれないの?」

なんか涙目で訴えてきた・・・うう・・・断りづらい・・・

「入ってくれないと君が多重能力者ってことバラすぞ?そんなことしたら研究所いきだ」

と思ったら今度は脅迫してきやがった・・・この野郎!!

既にアレイスターにはバレているだろうから研究所に送られるなんてことは無いだろう

それでも言いふらされるのは嫌だ

「わかったわかったわかりましたよ・・・入りますよ入ればいいんでしょう?」

「『入れてください』」

「なんで入ってくれて頼まれたこっちが頼まなきゃいけないんだよ!!!!!!」

「まあまあ細かい事は気にしない」

ムカつく・・・こいつものすごいムカつく・・・

「はぁ・・・分かりましたよ・・・『入れてください』これでいいんでしょう？」

「感情がこもってない・・・もう一回だな」

「いい加減にしろおおおおおおお」

そして俺は強引に風紀委員ジャッジメントに入れられた・・・

7月16日? 「原作に介入した・・・あと風紀委員に入った・・・っつか入れ

そんなわけで超電磁砲介入」

新しいオリキャラ出ました『宮咲青葉』

なんか無駄に頭いいです円周率1000桁って・・・

葉も風紀委員に入って今後超電磁砲にも介入させやすくなりました

次回から大体原作沿いです

それじゃまた次回」

前回のあらすじって必要ですかね?

追記。これから先の話の宮咲の口調が変わっていたけどそっちのほう
うがしっくりくるから口調変えました

つかころろ変わるキャラだったけどもwwさすがに変わりすぎだ
と思ったので(イツからあんな口調のイメージに変わったんだww)

7月17日「風紀委員」(前書き)

こんにちはばふんです

前回のあらすじ

不良に絡まれていた宮咲青葉をたまには違う能力を使いたかったと言う理由で違う能力使って助けたら脅迫されて風紀委員に入れられた

終わり

葉「あれ・・・いつもよりちよつとまとも」

他からすれば短いんじゃない？

葉「どうだろうな・・・」

風紀委員がんば

葉「うっせえ」

それじゃ本編どーぞー

葉「デリートスパイダー使えばよかった・・・今ならまだ間に合うか？」

恐ろしい事考えないで・・・

神「あれは使えないようにしたから大丈夫」

葉「なんで!？」

その方が面白い

それじゃ今度こそ本編どーぞー

葉「どーぞー・・・」

7月17日「風紀委員」

「はあ」

俺は今教室の自分の席で盛大にため息をついている

「どうした柴葉、元気ないぞ。何かあったのか？」

上条が話しかけてきた

「昨日変な女を助けてな・・・脅迫されて風紀委員に入れられた・・・」

俺はまたため息をつく

「そりゃ大変だったな・・・」

上条が哀れみの視線をこっちに向けてくる

なんかムカついたので八つ当たりしてみる

「お前の不幸体質フラグゲッターよりはマシじゃね？」

「不幸体質と書いていまなんて言った？」

なんか怒らせたようだ

だが俺はかまわず八つ当たり

「フラグゲッター」

「俺はそんなに言われるほどもててねえよ!! それどころか年齢
彼女いない暦だよ!!」

すると土御門と青髪ピアスが上条の頭をプレスした

「フラグ一級建築士がなに言ってるにゃーカミヤン・・・」

後ろで青ピがうんうんと頷いている

俺はそこにもう一言付け加えてみた

「こないだコイツ御坂美琴ともフラグ立ててたぞ」

「なんやてー!!!!!! 御坂美琴ってあの常盤台のエースと!?!」

「どういうことにゃー!!!!!! カミヤン!!!!!!」

「まさか常盤台のエースまでカミヤんの被害にあっているという
か」

「ふざけんな!! 俺はビリビリとフラグ立てた覚えなんてねえ!!
! アイツが会うたびに勝負しかけてくるだけだ!!!! 俺は被害者だ
あああ!!!!!!」

俺はさらにもう一言付け加える

「見てみる土御門、青ピ・・・すでに『ビリビリ』『アノバカ』と
あだ名で呼び合っているぞ」

それを聞いたとたん土御門と青ピの後ろからどす黒いオーラが見えた

「それ明らかに俺嫌われてますよね!!!あの馬鹿って言うてるし」

上条があわてて弁解する

だが土御門と青ピはまったく聞いていない

そのまま上条に襲い掛かる

上条の断末魔が聞こえた

「不幸だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアア」

「コラそこの4人!! うるさいぞ!!」

するとどこからか吹寄が現れ土御門、青ピ、上条に頭突きと正拳で
 気絶させる

俺のほうにはキックが飛んできたが俺は『ライズ』を使って避ける

そしたら吹寄は顔面にパンチを当ててきた

それは避け切れなかった

俺は顔面にパンチを喰らい倒れた

（『ライズ』を使っても避けられないとは・・・恐るべし吹寄）

そして俺の意識は途絶えた

その後俺たち4人は職員室で小萌先生にこっぴどく怒られた

青ピはなぜか喜んでいる

青ピ曰く

「小萌先生に怒られるってサイコーじゃん？」

だそうだ・・・変態《青髪ピアス》め・・・

さすがに上条をからかいすぎた

反省はしているだが後悔はしていない

でもさすがにやりすぎたと思う

こんどファミレスで何か奢ってやろう

そして俺は今、風紀委員177支部に居る

授業？ちゃんと受けたよ？

「今日からここに配属されました柴葉葉です。これからよろしく」

挨拶のときはとりあえず礼儀正しくしておく

「あれ？柴葉さんって昨日銀行強盗事件の時にいた人ですか？」

初春が話しかけてきた

「そうだけど？」

「あ、昨日はありがとうございました。おかげで佐天さんは怪我しないで済みました。そういえば私はまだ名乗ってませんでしたね『初春飾利』です」

「初春か。ああ、よろしく」

その後一通り挨拶を済ませた俺は自分の席につく

その後黒子がやってきて

「何であなたがここに居るんですのー！？」

とか言っていた

他の風紀委員の人とも仲良くやっていけそうだ・・・支部長を除いて・・・

「そう言えば柴葉さんは何で風紀委員になったんですか？」

といきなり聞かれたので正直に

「支部長助けたら脅迫された」

と言おうとしたら

『それを言ったら多重能力の事バラすわよ』

とテレパシーで言われた(支部長の能力は『テレパシー』らしい)ので

「コノマチノヘイワヲマモルタメデス」

と言っておいた

そのうち多重能力者であることはばらすつもりだが今バレるのは面白くない

第二の人生計画壊されてたまるものか・・・もう壊れかけてるが

すでに知ってる奴は支部長のほかに2人居る

アレクスターと土御門だ

その後初春と黒子は外に巡回に出かけた

俺は書類整理をやらされた

つか多いな・・・俺の体積の倍ぐらいあるんじゃないか？

俺は『ライズ』を使いながらすばやく終わらせる

『ライズ』って結構いろんな使い道があるな・・・

手のスピードUPや視力UPで早く読んだり書いたりできるし

筋力UPと反射神経UPで戦闘でも使えるし

『ライズ』便利すぎるだろ

そして俺も巡回に行かされた

書類整理は15分ほどで終わった

そして外を歩き回ってる最中にまた不良が誰かに絡んでいた

「またかよ・・・」

どうやら今度はナンパではなく喧嘩を売っているようだった

相手はなんかずいぶんと細い奴だった

どうする

？見捨てる

？ほっとく

？スルーする

って無視するしか選択しないって何？

ほっとくわけにもいかないよな

「おいお前ら！こんなところで喧嘩なんてしてんじゃねえよ！！」

「あ？なんだテメェ！！」

「やんのかコラァ！！」

「準備運動には丁度いい・・・やっちまえ！！」

とかいってナイフやら釘バットやらで殴りかかってきた

俺はそれを蹴りですべて吹っ飛ばした

「な・・・っ！俺のナイフを！！」

そして俺は不良をすべて沈める

そして襲われてた奴に声をかける

「おい、大丈夫・・・」

そこには

白すぎる肌に白い髪、赤い目の

学園都市最強の超能力者・・・アクセラレータ一方通行が立っていた

あれ・・・デジャヴ？前にも不良から助けたらLEVEL5ってあったような・・・

今度こそ死ぬかもしれない・・・そう思った

そして俺はもう不良から他人を助けるなんて真似はしない・・・そう誓った

7月17日「風紀委員」(後書き)

一方通行出しました

今度こそ死ぬかもね？

それじゃまた次回ー

7月17日? 「一方通行に会いました・・・やばい今度こそ俺死ぬかも」 (前書

前回のあらすじ

葉「いきなりか・・・」

前書きに書くことがありますすみません

前回またしても不良から誰かを助けたら今度は一方通行だった・・・

もう不良が集まっても無視して行こうと決めた

そんなわけで本編どうぞ

7月17日? 「一方通行に会いました・・・やばい今度こそ俺死ぬかも」

俺は今、アクセラレータ一方通行の目の前にいた

(あっちゃあゝ・・・今度はアクセラレータ一方通行かよ・・・どんだけ運がないんだ俺)

隣の奴に不幸うつされたか・・・

なんてくだらない事を考えていると一方通行は何も言わずに去って言った・・・が

「おい逃げてんじゃねえよ三下」

なんか勝手に口が動いた・・・なんでだああああああ

すると頭に声が響く

『やほー神だよー』

今君の口借りてるよ?

君と一方通行闘わせたら面白そうだし

大丈夫、暴王の月なら威力はかなり下がるけど一方通行に反射されないから

がんばれ』

（ふざけんなあああああ！！何が目的だこの馬鹿神！！！！！！！！）

俺は神に文句を言おうとするが声がでない

しかし一応神は俺の考えてる事が分かるようだ

返答してきた

『暇潰し☆』

ムカつく返答ありがとうございます

いつか殺す

そして俺の口はまたしても勝手に動き出す

「オラかかってこいや一方通行！第2位の俺が叩きのめしてやるよ
！」

なに言わせてくれてんだアアアアアアアアアア

やばい俺死ぬマジ死ぬ絶対死ぬウウウウウウウウウウウウウウウウ
ウウ

「ヘエ・・・おもしれエなアテメエ・・・この一方通行に喧嘩売るとはよオ」

「グダグダ言っでねえでさっさとかかってこい！その前に周りに被害がでねえとこに移動するぞ」

（違うんです違うんです口が勝手に動くんですウウウウウウウ）

「勝手にしろ、オレはどこでもいいぜエ・・・そこまで移動するまで生きていられたらだがな!!」

そして一方通行はこっちへ突っ込んできた

それと同時に俺の口に自由が戻ってきた

しかしもう遅い

もう後戻りは出来ない

俺は一方通行の攻撃を『ライズ』全開で避ける

肩に少し掠り俺は吹き飛ばされた

「ぐあッ!!」

「オイオイどおした三下ア!! そんなもんかア!?! さっきまでの強気はどうしたア!!」

やばいやばい! 死ぬってこれ死ぬウウウウウウ

俺は『ライズ』を使いながら全速力で回りに被害が出ないところでまでするで逃げる

一方通行が能力をつかって追ってくる

だが『ライズ』の方が若干速いようだ

そのまま俺は何とか河原まで来た

（たぶん今日の夜にここで上条と御坂が闘うんだろうな・・・）

なんてくだらない事を考えていると一方通行が追いついてきた

「ハハハハハハ！！！待てよ三下ア！！！大口叩いたからにはもつと俺を楽しませてみろよ！！！」

「言われなくてもそのつもりだっつーの!! あーもう後戻りできねえ!! 死んだらあの神ぶっ殺す!!!!!!!!!!!!!!」

「何分けのわからねエ事言つてンだ三下ア!!!」

「三下じゃない！ 一下だ！！！」

俺はいまとてつもなく混乱してる

なんだよ一下って・・・序列か？序列なのか！？

「イミわかんねエよ・・・」

くだらなすぎたか・・・一方通行に呆れられた

「今度はこっちが行くぞ」

俺は『思念体』を使う

「んだそりゃア？」

「流星^{ランス}」

俺は『暴王の月』を一方通行に向けて放つ

一方通行は能力を使って反射しようとしたが

どうやら『暴王の月』には反射が通じないようだ

一方通行はそのまま吹っ飛ばされた

だが

「なんだテメエ・・・なんで反射が通じねエ」

だいぶ威力は低くなってしまいうようだ

すぐに起き上がって来た

「そういう能力だからな・・・」

俺はそう返した

「おもしれエ・・・最高におもしれエぞ！！三下ア！！！！」

そして力を使い大量の石や瓦礫をこちらへ飛ばしてきた

俺はすかさず『暴王の渦^{ボルテクス}』を展開した

一方通行が飛ばしてきた瓦礫や石はすべて渦に飲み込まれた

「そんな使い方も出来んのかア！ 最ッ高にもしれエぞテメエ！！」

こっちはすぐく最悪です・・・

俺は一方通行に向かって『暴王の流星』を飛ばす

『暴王の月』は一方通行に向かっていった

一方通行は能力を使って高速で動きそれを避ける

「同じ手が通用すると思ってんじやねエぞ!!」

「だったらコイツはどうだ」

俺はパイロクイーン・サラマンドラを出す

威力はLEVEL5並なので強いだろうが

一方通行には通用しないだろう

だが問題ない

[illegible]

パイロクイーン・サラマンドラは特大の炎を吐き出した

それは一方通行に直撃した

だが一方通行は無傷だ

だが

「テメエ・・・なんで能力を二つも持ってやがる・・・！」

「俺が多重能力者だからだ」

「そんなハズ・・・！？息が・・・！」

俺はP S I能力なら大体使える

さっき使った『パイロクイーン』や『暴王の月』

『マテリアルハイ』や『空間移動』

そして

箱状の空間操作系のP S Y『トリック・ルーム』

どうやらサイズも自由に変えられるらしい

「テメエ・・・！何をした・・・！」

「能力を使っただけだよ？3つぐらい・・・いや・・・4つか・・・」

俺は自分と一方通行の周りに巨大な『トリック・ルーム』をつくり自分の周りを完全密室にした

あとはもう分かるだろう

「パイロクイーンをつかって酸素を奪えばお前は息が出来なくなるって事だ」

「ふざけんな！！それならお前も息が出来なくなるはず・・・グッ！・・・カハッ！」

そろそろ息が苦しくなってきたようだ

「それはコイツを使ったんだ」

俺は『O2』と書かれた缶を出す

酸素だ

俺は逃げてる最中にネメシスQを出しこの缶をとってきて貰った

なぜ持ってたかというのは実験の時に一方通行と闘うことになると思ってたので事前に用意しておいたのだ

「デメエ・・・！ンなもんいつの間に・・・」

「さっき逃げてるときだよ。一方通行」

ちなみに俺は自分の体の周りにマテリアルハイを使っている

トリックルームだと見えてしまうのでマテリアルハイだ

でもまさかあんな小さい缶の中に24時間分の酸素が入ってるとは

さすが学園都市の科学力、恐るべし・・・

「というわけで俺の勝ちかな？ 一方通行」

「ク・・・ツソが・・・ッ！」

そして一方通行は意識を失った

俺はトリックルームを解除しその場にへたりこむ

「何とか勝ったああああ・・・よく勝てたな・・・俺・・・」

一酸化炭素中毒で死ぬ前に一方通行を『キュア』を使い死なない程度まで回復させる

だがしばらくは動けないだろう

もうすっかり暗くなっている

すると遠くの方から上条と御坂が走ってきた

見つかる前に一方通行を見つからない所へどこかし俺は空間移動で一旦177支部に戻る

もちろん中に誰かがいるとまずいので扉の前だ

開けようとする鍵がかかっていたのもう一度空間移動で中に入る

そして荷物を持ち寮まで歩いて帰る

さすがにもう能力使う体力はほとんど残っていない

「全力でノヴァとライズ使いまくったからなー・・・あー、頭いて・・・」

寮に帰った俺はそのままベッドに倒れる

「はあー・・・疲れた・・・」

そして俺はそのまま眠る

もちろん目覚ましはセットしてある

さすがに同じ過ちは犯さない

「・・・明日は虚空^{グラビトン}爆破か・・・」

そう呟き俺はそのまま寝た・・・

7月17日? 「一方通行に会いました・・・やばい今度こそ俺死ぬかも」 (後妻

そんなわけでVS一方通行でした

バトルとか口調とかいろいろ大丈夫ですかね

神様最低ですねwww

主人公チートです

PSI能力についてはあれで大丈夫だと思うんですが大丈夫でしょう
うか

まあ主人公のPSI能力は実際より少し強くなっているので大丈夫
でしょう

それではまた次回

7月17日 行間「とあるマンションの一室で」(前書き)

とくに意味などないです

宮咲が暗部にかかわっているということにしたかったから書いただけ
です

宮咲の立ち位置はぶっちゃけまだ決まってませんが

裏と表の間ぐらいですかね

それではどうぞ

7月17日 行間「とあるマンションの一室で」

ここはとあるマンションの一室

そのこのソファ―に彼女、宮咲青葉は横たわって電話をしている

「やあ、馬k・・・アレイスター」

軽い調子で電話の相手、アレイスターに挨拶をする

『宮咲か・・・何の用だ?』

「いやいや、ちょっと雑談をと思ってな」

『私が誰だか分かっているのか?』

「学園都市の統括理事長、そして魔術師アレイスタークロウリー本人」

彼女は淡々と答える

「まあそれはどうでもいい」

統括理事長に対しても態度はあまり変わらない

『切るぞ?』

「いやいや・・・ちよつとまで」

かんぜんにふざけているような態度だ

しかしコレでも彼女は暗部の住人であり表の治安維持も努めている

『それで何の用だ?』

同じ質問をもう一度繰り返す

「一方通行、負けちゃったけどそっちの計画大丈夫か?」

いきなり聞いてくる

「いや、凄いね彼、柴葉くん、LEVEL5級の能力をいくつも使うなんて。しかもどれも見たことも無いような能力じゃないか?もう妹達シスターズを使った実験なんて必要ないんじゃないのか?」

『なぜ妹達シスターズのことを知っている?』

どうやらアレイスターは彼女が妹達シスターズの事を知っているとは思わなかったらしい

「わたしは何でも知っている。と言ったらうそになるのかな?まあ例えば・・・ドラゴンの正体・・・とか」

『貴様・・・何を知っている』

アレイスターは少し怒った様子で彼女に聞く

「私を消さないと約束するなら教えてあげるが?まあ私を消せると思ったのなら間違いだと思ってくれた方がこちらとしては助かるの

だが」

『貴様・・・まあいい・・・君に今消えられても困る』

「あっはっはっは、と言う事はいつか消すつもりなのか？おもしろい・・・だが、私がこの学園都市を一晩かけずにかけらも残さず消し去る事が出来ることをお忘れなく」

彼女は本気だ

『消せるものならな』

そして電話は切れた

「切られた・・・か、フフツ」

彼女はおかしな様子ですでに切られた携帯を見る

「しまった・・・そろそろ寮の門限じゃないか」

そう言って彼女は部屋を出る

彼女は宮咲青葉

柴葉葉と同じ転生者

能力名『テレパシー』＋魔術

魔術を使っても拒絶反応の起こらない唯一の人物

「さあて・・・君はここでどう生きるのだろうか？PSIの使い手、
柴葉葉クン？」

そして彼女は部屋を後にした

7月17日 行間「とあるマンションの一室で」(後書き)

なんかアレイスターの口調とか大丈夫ですかね(またしても)

今回の設定、実は彼女を出した時点で大体決めていたんですが

大丈夫ですかね？

宮咲も転生者ということになってます

宮咲が来たのはもう何年も前です

でも主人公と生きてた時代は同じという少しややこしい設定です

ちなみに宮咲は原作知識がありますがあまり介入するつもりはありません

今回の話は葉視点ではありません

こういうのもたまにはいいかもしれないです

次回こそは『虚空爆破事件』やりたいですね・・・

それではまた次回！

7月18日「虚空爆破がなんぼのもんじゃああああいってなんだこのサブタイ

ほんとになんなんでしょうねこのサブタイ

葉「考えたお前が言うなよ・・・」

今回ようやく虚空爆破事件に入れました

それじゃ前回のあらすじ

一方通行に勝った

終わり

葉「・・・」

あれ？今日は珍しくツッコまないのな

葉「ほかに書くことあったっけ？」

ないな・・・

それじゃ本編ドーゾー

7月18日「虚空爆破がなんぼのもんじゃああああいってなんだこのサブタ

俺は今、街をふらついている

「どうやって虚空爆破に介入するか・・・」

思いつかない・・・どうやって介入しよう・・・

「おっ？」

上条を見つけた

ちなみに昨日の事（八つ当たり）に関してはすでに解決している

もう謝つといたから大丈夫だろう

たしか上条もセブンスミストに居たよな

「おい上条」

おいお茶みたいになった・・・

どうやら気付いたようだ

そして俺は今までも街をふらついている

上条もやる事がなくてふらついていたらしい

すると上条が話しかけてきた

「そういえばお前、風紀委員入ったんじゃないっけ？」

「今日は非番。おかげでやる事がなくて暇だ・・・」

「手伝いに行つてやればいいのに・・・（呆）」

「めんどくさいからヤダ。昨日いろいろあつてメツチャ疲れてる」

「何があつたんだ？」

「もう不良から他人を助けるような真似は二度としないと決める事になるような事があつた・・・」

「ああ・・・」

上条が「なるほど・・・」と言うような顔をした

上条も御坂を不良から助けようとして目をつけられたんだっけ

とか叫んで不良達が飛んでいった
ロリコン

俺はバッグから腕章を取り出し肩に付け（この間約0・2秒）

「風紀委員だ」

と言った

その後不良を拘束し警備員アンチスキルに通報した

常盤台の水泳部の人（水泳部A）は俺にお礼をいってどこかへ行ってしまった

「お疲れさん」

と上条が肩を叩いた

「おう」

とりあえず返事をしておく

そして不良ロリコンを警備員に引渡し

上条とまた歩き出す

「・・・にしてもなんで俺はこんな毎日不良に会うんだ？これから
ヤンキーは不良体質とでも名乗ろうか？」

と言ったら

「いやそれただの不良じゃねーか」

と上条がツツコんだ

そのあとちっさい女の子が洋服店に案内してくださいと言ってきたのでセブンスミストに向かった

「なにやってんだお前」

セブンスミストに着いた俺たちはお子様パジャマを自分の前に出して変な動きをして鏡の前に立つ御坂にツツコむ

確かに実際に見るとマジで怪しい人にしか見えない

知り合いじゃなかったら即「風紀委員だ」と言っていた

「——ッ!？」

御坂が声にならない悲鳴のようなものを上げこちらを向いた

後ろにパジャマを隠して

「なにやってんだお前? 万引きでもする気かそのパジャマ、警備員

に通報すつぞコノヤロー」

と適当に言ってみた

「な　な　何でアンタ達がこんなところにいんのよ!!　あと万引きなんてするか!!!」

すると御坂は全力で否定してきた

『ピッポ・・・』

「あんたも何通報しようとしてんのよ!!!!!!」

俺が警備員を通報するフリ（半分本気）をしたら御坂が電撃を撃つて来た

それを上条が幻想殺しで防ぐが俺の携帯にすこし当たったのか

携帯がショートした

「携帯がアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

とショックを受けた素振りをしたら

「いや今のはお前が悪い」

とか上条が言ってきた

チクソウ

いいもんね！きつと神様が直してくれるさ！！

「連絡手段がねえ・・・」

そうだった・・・携帯が無いと神と連絡が取れないのだ

「まあまあそんなに落ち込まなくてもいいじゃない」

とか御坂が言ってきた

壊したのはお前だろう・・・

俺は思うだけにしておく

「それであんたたちは何でこんなところにいるのよ」

と御坂が聞いてきた

すると

「おにーちゃん」

とさっきの女の子がこっちに走ってきた

「みてみてこのおよーふく・・・あっ！トキワダイのおねーちゃんだ」

「昨日の鞆の子・・・」

どうやら顔見知りだったらしい・・・まあ俺は原作知識で知ってい

るんだが

「お兄ちゃんってあんたら妹居たの？どっちの？」

と御坂が聞いてきた

「ちがうちがう」

「俺らはこの子が洋服店探してるって言うから案内しただけだ」

「あのね、オシャレなひとはここにくるってテレビでいったの」

と女の子が言う

「そうなんだ」

と御坂が笑顔で返す

ポーカーフェイスがうまいな

「ポーカーフェイスじゃないわよ！」

「ぬっ！読心術^{テレパシー}か！」

「ちがうわよ・・・と言うかホントにそう思ってたの！？」

「お前小萌先生並に鋭いな・・・」

俺は呆れたような顔で御坂を見る

「まあそれはさておき・・・あんた達！私と勝」「断る！！」「同時！？」

御坂がまた勝負を挑んでこようとしたので断った

「お前が俺に勝てるわけないだろ」

と俺が言った

「お前そんなに強いのか？まあ確か第2位って言ってたしな・・・」

「第2位！？てことは私第4位！？ガーン・・・」

御坂が落ち込んだ

「こないだは闘ったら死ぬとか言ってたくせに・・・」

「あん時はまだ序列判明してなかったからな・・・第1位狙ってたのにコンチクソウ」

と言ったら

「お前って結構自信家なの・・・」

と上条が言ってきたので

「俺の能力は相手の能力を取り込んでいくような能力だからいけると思ったんだけど・・・やっぱただ撃っただけじゃ分らないか」

「俺の幻想殺しに似てる気がするのは気のせいかな？」

と上条が聞いきた

「そういえば似てるな・・・でも取り込むと打ち消すじゃ微妙に違うと思う。俺のはそのうち膨張するから危ないんだよな・・・」

とか話していると水着売り場に行っていた初春と佐天が戻ってきた

「何してるんですか？あ！柴葉さんと・・・えーと」

と初春が話しかけてきた

上条のことはやっぱ知らないらしい（当然か・・・御坂が話してない限りは知らないだろう）

上条に風紀委員の同僚であることを伝えたと上条は初春と佐天に自己紹介をした

初春と佐天もそれぞれ自己紹介

「上条当麻だ。こいつとはクラスメイトで・・・」

とか何とか言っているの

「特技はフラグ建築と土下座」

と隣から言う上条は反論し初春は苦笑、佐天は爆笑していた

佐天てこんなキャラだっけ

「で、何でお二人はここにいらっしゃるんですか？」

と初春が聞いてくる

「俺らはこの子が洋服店さ（ry」

俺は初春と佐天に説明した

内容はさっき御坂に話した事と同じなので割愛

「あー！ふーきいいんのおねーちゃんだ」

と女の子が初春に抱きついた

「あら、あなたは昨日の・・・」

となんか話している

まアその後は俺たちが初春たちと別れて白井から電話が来てここに爆弾があることがわかったりとほぼ

原作どおりに進んでいる

俺は風紀委員ということで避難活動の手伝いに参加し

上条が女の子が見つからないと戻ってきて

さっきの子が蛙のぬいぐるみを持ってきた

「おねーちゃん。メガネをかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわ

たしてって」

と言ったとたんぬいぐるみが爆発しようとした

（レールガンで爆弾ごと吹っ飛ばす！）

しかし御坂はコインを落とす

爆弾は爆発・・・しなかった

「え・・・？」

俺が『暴王メルゼスの月ドア』で消し飛ばしたのだ

ぬいぐるみは跡形もない

いや腕だけ残った

「怪我無いかー？」

「ナイス柴葉！」

と上条が言ってきた

「さてと・・・犯人探ししてきますか！」

「クッソ！どういふことだ！！なぜ爆弾が爆発しない！！！」

犯人、介旅初矢は路地裏を歩いていた

「次こそは！次こそは風紀委員を僕の爆弾で」

介旅はそう呟きながら路地裏を進む

「吹っ飛ばっ・・・」

最後まで言い切る前に後ろから何者かに蹴られノーバウンドでゴミ箱に突っ込む

「な・・・なん」

「よお・・・用件は分かってるよな・・・爆弾魔！」

そこに立っていたのは柴葉葉だった

「なっ！！」

俺は目の前にいる爆弾魔を睨み付ける

「何のことだか僕には・・・」

「とぼけんな？ バレバレなんだよ」

俺は犯人にそういった

「僕が犯人である証拠がどこにある？」

とかアホなことを言ってきた犯人にさっき修理してもらった携帯を出す（神がすぐに直してくれた。一秒で直るとは・・・）

「お前の音声は録音済みだ。おとなしく拘束されな」

俺はさっきまで大声で爆弾が爆発しなかった事を悔やんでた犯人にそう言った

「クッ！」

まだ懲りないのかコイツはスプーンを取り出した

すると後ろからなにかが飛んでくる

そして奴のスプーンは綺麗に吹き飛んだ

レールガンだ

「と・・・常盤台の超電磁砲レールガン」

その隙に俺は犯人を押さえつける

『ライズ』を使っていたのでこいつからしてみれば気付いたら地面

に押さえつけられていたようなもんだろう

「おとなしくしろ・・・あまり動くと腕が折れるぞ？」

今回に限っては俺は笑わない

笑えない

「クソ！！いつもこうだ！！何をやっても僕は地面にねじ伏せられる」

押さえつけられている犯人が何か言ってくる

「殺してやる！！！！お前みたいなのが悪いんだ！！！！風紀委員だつて！！！！力のある奴なんてのは皆そうなんだろうが！！！！！！」

何を言っているこいつは

あんな・・・

「あんな小さい子まで巻き込もうとして何を言っている・・・？」

俺は冷たい目でコイツを睨みながら言い放つ

「お前は馬鹿か？そんなくだらない理由で何も関係ない奴まで巻き込んだのか？」

何も関係ない奴を何人も巻き込んで

「お前が恨んでいるのは風紀委員だけじゃないのか？じゃあなんで

あんな子供に爆弾を渡した！！！！お前は人を恨む資格なんざねえんだよ！！！！」

「グッ・・・」

犯人はそれ以上何も言わなかった

俺は犯人を拘束してやって来た警備員に引き渡す

そして虚空爆破事件は解決した

デパートにて

「あの・・・容疑者の少年を確保した模様です」

風紀委員の一人が黒子に報告した

「了解ですの」

「おいーっす」

もちろん俺もいる

「にしても一体何をしたんですの？爆弾を跡形もなく消すなんて・・・しかもデパートの床が削れてるのはどういことですか？」

「それは俺の能力のせいだ。あせってたせいで力加減ミスった。デパートの床修理代とかでないよな・・・」

なんか不安になって来た

「それは大丈夫ですの。爆弾が爆発した方が被害は大きかったですしよし・・・むしろ謝礼金がもらえてもおかしくないですわ？」

よかった・・・

まア謝礼金までとるほど俺は酷くない

くれるというならもうが

「じゃあ俺は帰るわ・・・あとよろしく・・・」

俺は帰ろうとする

だが

「待ってくださいですの。あなたにはまだ仕事が残っていますの」

「俺、今日非番なんだけど・・・」

「運が悪かったですね・・・」

コレは初春

「まあ・・・頑張れ（笑）」

コレは上条・・・てか（笑）ってなんだ

「まあ頑張ってください」

コレは佐天

チクショウ・・・俺今日休みなのに・・・

「まあがんばりたまえ柴葉クン☆」

「なんで支部長がいるんですか・・・」

なんか支部長まで居た

「そりゃあ風紀委員だからだよ柴葉クン」

はあ・・・まあいいか・・・

「がんばってねおにーちゃん」

女の子も応援してきた

「はいよー・・・」

適当に返事を返す

そしてすべて終わったのは2時間ぐらいたった後だった

なんで犯人確保し終わったのにまだやったんだろう・・・疲れた

7月18日「虚空爆破がなんぼのもんじゃああああいってなんだこのサブタ

そんなわけで虚空爆破事件終わりました

まあそれは置いておくとして

かなり今更ですが今週のジャンプに載ってた読み切り『ばんからさんが通る』見ました？

あれ面白かったですね

空知サイコーっすww

葉「かなりどうでもいい方向にいったな」

そいじゃまた次回

7月19日「通知表なんて見せたい奴がいるならそいつは馬鹿か天才・・・いや

7月19日

ようやく禁書の一巻に入りました

それでは前回のあらすじ・・・これ要るのかどうか不安になってきた・・・ぶっちゃけ要らなくネ？

虚空爆破事件に巻き込まれた柴葉と上条はなんやかんやで解決した

終わり

葉「なんやかんやってなんだよ」

なんやかんやだよ

葉「前回のあらすじ知らないんじゃないかね？」

それさっき言った

それじゃ本編どうぞ

7月19日「通知表なんて見せたい奴がいるならそいつは馬鹿か天才……いや

学校の終業式が終わった

明日から夏休み……だが俺は風紀委員で忙しくなりそうだ

「それじゃ先生さよならー」

俺は小萌先生に挨拶する

「はいさようならー」

小萌先生が返してくる

「先生さよなら」

上条も小萌先生に挨拶する

「はいさようならー」

上条にも返す

「また明日」

上条にとって最悪の言葉をつけて

「補修だって、上条」

俺がそういうと上条は不幸だ……と言っていた

そして俺と上条はファミレスに居る

「まあ1学期のサボリが一週間でチャラになるなら別にいいか」

ずいぶんとポジティブな奴だ・・・

「あれ？あれってビリビリじゃね？」

上条が聞いてくる

「・・・・・・・・・・」

そしてその近くの席には黒子が白くなっている

おそらく幻想御手の情報集めだろう

「俺ちょっと助けてくるわ」

「不良をか？やめとけ・・・あいつから助けてもロクな事ないぞ・・・」

俺はとりあえず上条を止める

「大丈夫だって。相手は3人だけだし」

そして上条は行ってしまふ

「そうか・・・」

俺は上条に聞こえないように言った

「なら頑張れ・・・9対1だけど・・・」

とりあえず俺は先に店員さんにお金を払う

すると上条が大量の不良を引き連れて逃げてきた

「だから言っただろうやめておけと」

俺は上条と並走する

「だああああ不幸だああああああ」

まったく仕方がない

俺は上条を担ぎ

「下噛むなよ」

『ライズ』を使って走る

もちろん右手は触れないように肘の近くを掴んでいるので問題ない

「ぎゃああああああああああ速い速いってなんでお前こんな速く走れるの!？」

多重能力者だから

と言わずに思った

「つかなんか変だぞ担ぎ方！コレじゃ落ちるっつーの！！！」

「我慢しろ（笑）」

上条の言葉を受け流し俺はあっという間に橋の上まで来た
すると

「不良助けて善人気取りか」

御坂がやってきた

つか早いな追いつくの

結構な速度出てたと思うんだけど

それを裏付けるように上条は既に虫の息だ

「ふ・・・不幸だ・・・」

と苦しそうに呟いていた

「ほれ、水だ」

俺は上条にペットボトルのポカリを渡す

「サンキュ」

といって上条はポカリを飲む

全部飲みやがった

まあいいか

「つて・・・ビリビリ・・・」

今頃気付いたようだ

「今更か・・・というかビリビリやめろ!!」

といって御坂は電撃を飛ばしてくる

「あぶな!!」

上条は疲れてへたり込んでいるので俺が防いだ

『暴王の月 円盤ver』で

久々に使った気がする

「つか追って来てた不良は？まさか・・・」

上条がおそろおそろ聞いている

「うん。めんどくさいから私が焼いた」

「御坂・・・能力の行使はあまりやりすぎると拘束されるぞ」

「大丈夫よ、手加減はちゃんとしてるから」

「どうか・・・俺たちには容赦なく撃ちまくってくるくせに」

「あんたらは特別でしょうが」

「まあ俺はレベル5だからいいとして・・・上条はレベル0だぜ？」

俺は御坂に言う

すると御坂が上条に向かって電撃を放つ

上条はそれを右手で防ぎ

そのままいろいろやって上条と御坂はバトルを開始した

「あーあ・・・派手にやっちゃって」

俺は『暴王の渦を展開しこっちに攻撃が当たらない様にする

ボルトクス

「柴葉さん見てないで助けてください!!!!!!」

上条がすげえ敬語でこっちに助けを求めてくる

「あと何秒かで御坂の電池切れるだろうからがんばれ」

上条にそういうと上条は「不幸だあああああああ」と言いながら御坂の電撃を防ぐ

その後すぐに御坂が膝をつく

その後御坂がブチ切れて雷雲を呼んだ

そこで俺は思い出す

そういえば今日周辺の電子機器が完全に壊れるんじゃないか

この落雷のせいで

気付いたときにはもう遅い

御坂は本気の落雷を落とす

「不幸だアアアアアアアア」

と上条は叫んだ

俺は呆然としていた

落雷は俺の渦に飲まれ俺には当たらないが家にあるパソコンやテレビ

運悪く今充電中の音楽プレイヤーは全滅だろう

「はあ」

御坂の落雷を防ぎつつ俺はため息をつく

そして上条と御坂はそのまま追いかけっこ

俺はそのまま寮に帰る事にした

「せっかく幻想御手をDLして見たんだがな・・・」

俺は幻想御手を音楽プレイヤーにDLしていた

一応、風紀委員なので仕事はちゃんとやる

今日サボってしまったけども

まあ昨日の残業的な物の振り替えて事にして置いて貰おう

幻想御手のデータを持っていけば許してくれるだろう

「と・・・思ったんだがなあ・・・」

神様が何とかしてくれている事を信じよう

帰ったらうちの電子機器が案の定全滅していた

その上暗くて足元が見えず音楽プレイヤーを踏んづけてしまい

完全に大破した

さすがにここまで壊れてると神様も直すのは無理（その気になれば

出来ない事もないがデータは戻せない）だそうだ

そして俺は冷蔵庫の中身をディープフリーズで完全に凍らせて
ベッドの周りを同じくディープフリーズを使って氷で囲んで

その後そのまま寝た

「明日から夏休みか・・・」

そういえばインデックスが来るのも明日だけ・・・

7月19日「通知表なんて見せたい奴がいるならそいつは馬鹿か天才・・・いや

次回インデックス登場です

木山先生も出せると思います

それではまた次回

今日更新できるかな・・・あ、いや、やっぱ無理かも

7月20日「禁書目録」(前書き)

今日中にといったのですが既に日付は変わっている

まあ24時間たっていないからいいか↑言い訳

前回のあらすじ

電化製品全滅しやした

7月20日「禁書目録」

昨日の落雷で電化製品が完全にぶっ壊れた翌日

「寒ッ!!」

そんな季節とはかけ離れた声を上げて俺は起きた

「さすがにディープフリーズはやりすぎた・・・涼しいというよりむしろ寒い・・・」

そう言っただけ俺は部屋の氷を溶かす

「さて・・・まだ6時半か・・・」

とりあえず朝食を作り食べる

「今日ってそういえばメツチャいろいろある日だった気がする」

禁書目録、幻想御手、魔術師

「数えてみたら意外とすくねえな・・・」

そして俺は食べ終わった朝食を片付ける

「そういや家の電化製品みんな直ってたな。パソコンとか音楽プレイヤーは完全にデータ消えてたけど」

神様グッジョブ!とか思っていると隣から上条の悲鳴が聞こえてきた

「もうインデックス来たのか・・・」

俺は今、上条の部屋に居る

さっき悲鳴が聞こえたので行ってみると鍵が運良く開いていた

入ってみると上条の頭に素っ裸のインデックスが噛み付いていた

んで安全ピンで留めて針のムジロがどうのって話をして俺が挑発して上条がまた噛み付かれて

現在に至る

回想終了

「私の名前はインデックスって言うんだよ」

インデックスが俺に名乗る

「目録って・・・偽名？」

俺はそう返す

「お前、俺とリアクションが同じだな・・・」

「そうか・・・」

「何で残念そうなんだよ」

「時に上条・・・さっきなぜこのインデックスという少女はお前に全裸で噛み付いていたんだ？お前まさかロリコンだったのか？ダメだよ上条？いくらロリコンでも初対面の女の子の服を破壊なんて真似しちゃあ」

俺がそういうとインデックスが顔を赤くした

さっきの事を思い出したらしい

「ちげえよ！！」

「悪いが上条・・・あの状況を見てしまっただけ俺はお前をロリコンと断言するしかない」

「何勝手に断言してんだ！！俺の好みはもっとナイスb（ry）」

上条が自分の好みを語りだした

キャラ崩壊してるぞー

最近からかいすぎたせいか・・・

「落ちて上条、自分をロリコンと認めようとしないうロリコンは皆
そう言うんだ・・・」

「だからちがうつつってんだろがあああああああああああああ
あああああああああ」

さて・・・冗談はこの位にして

「魔術結社ねえ・・・」

俺はインデックスからいろいろと聞いてそう呟いた

「信じられないだろ？」

上条が聞いてきた

信じるも何も俺はどう答えるべきなんだろう

神様に会った事あるしな・・・つかアドレス持ってる

魔術だってたしか土御門が使えたはずだし

まあ信じるってやろうか・・・

「いや・・・信じるよ」

「マジで!?! お前こんな胡散臭いの信じちゃうの!?!」

と上条が叫ぶ

その瞬間インデックスが上条の頭に噛み付いた

「ぎゃああああああああああああああああああ」

上条が悲鳴を上げる

その後、上条は補習

俺は風紀委員という事で支部へ行く

インデックスは俺たちに地獄までついてきてくれる?

と聞いた後、一瞬笑って出て行った

(ネメシス・・・)

俺は小さく呟きネメシスにインデックスの監視をとりあえず命じる

「そいじゃ行きますか・・・」

そして俺は今、「水穂機構病院」と言うところにいる

ほかにいるのは白井、御坂だ

そしてグラビトンの犯人が意識不明と言う情報を聞き

いろいろと説明してもらっていると奥のほうから女の人が見れた

木山春生だ

「暑いなここは・・・」

と木山先生が呟く

「ここは真夏日でも冷房を入れない主義なのか？」

と看護婦の人に聞いている

「申し訳ありませんそれが・・・昨晚の落雷で送電線が断線してしまっています」

と看護婦さんが答えた

すると御坂が戻ってくる

「はあ」

俺はため息をついた

昨晚の落雷と言うのは昨日上条と御坂が喧嘩したときに落ちたものだろう

「どうしたんですの？ため息なんてついて」

コレは白井

「ため息つくときと幸せが一つ逃げていくって言うわよ？」

コレは御坂つつかお前のせいだ

俺は暑いのが苦手だ

「それでは全員そろったところで自己紹介をしておこう。私は木山春生」

そして木山先生から自己紹介を始める

それに続いて

「風紀委員の白井黒子です」

「御坂美琴です」

「柴葉葉です」

なんか久々に名乗った気がする・・・

「ミサカ・・・君が御坂美琴・・・それに柴葉葉か・・・」

「俺（私）のご存知ですか」

俺と御坂が同時に言った

白井がこっちをにらんでくる

「ああ、LEVEL5ともなると有名だからね。第2位と第4位か・
・・・」

木山先生がそう言った

でいろいろと話し

「幻想御手？」

木山先生が聞いてくる

「はい。ネット上で広まっている噂なのですけど」

白井が返す

「それはどういったシステムなんだ？」

「それはまだ・・・」

「形状は？どうやって使う？」

「わか「音楽プレーヤーだ」え・・・？」

白井の代わりに俺が答えた

「「「音楽プレーヤー？」」」

3人の声がそろそろ

「まあ音楽データだけだな・・・昨日見つけてDLしたんだが・・・誰かさんのおかげで充電器を通して中身が完全に消えてしまいましたね・・・」

俺は御坂の方を見る

御坂は目をそらす

「それで一体どういう仕組みなんですか？」

「いやそれは俺もわからん。昨日落雷のせいでデータ消えたし」

「それではどうにもならないな・・・」

と言いながら

木山先生が突然服を脱ぎだした

「何をイキナリストリップしてますのっ！」

白井が慌ててツッコむ

「柴葉は見んな!!」

御坂がこっちに電撃を飛ばしてくる

「危なっ!! 御坂!! ここ病院だぞ!!!」

俺は『暴王の月 円盤ver』で防ぐ

「ほう・・・おもしろい能力だなそれは」

木山先生が上半身下着だけで言ってきた

話しかけられたのでそっちを見ると白井が目の前にテレポートしてきて俺の目をつぶす

「ぎゃああああああ目がああああああああ」

俺は目を押さえて叫ぶ

何とか視力が戻ると木山先生はもう服を着ていた

「続きは場所を変えて聞かせてもらおう」

そして俺たちは場所を移動した

7月20日「禁書目録」(後書き)

さて・・・随分とキリの悪いところで終わってしまいました

ちゃんと明日も更新するんで許して下さい・・・

次回はたぶんステイル戦入れるかなーぐらいだと思います

それじゃまた次回

21日終わったら番外やろうかと思ってます

ちょっと汚いネタなので苦手な人はご遠慮ください

タイトルは「とある街中の黒くて硬くててら光ってて湿ったところが好きな割りに速いせーぶつが巨大化したものってなんかいろいろ混じってる」

タイトル長いな・・・なんかいろいろ混じってるし

まあタイトルどおりです

簡易あらすじ

ある夏休みの真っ只中

柴葉がおきるとベッドの下になにかのうごめく気配があった

そこには巨大なGとよばれる生物が居た

とりあえず殺した後、土御門なら何か知ってるかと土御門のところに行く

そして聞かされた内容は

まああまり期待しないで待っててください

最近支部長の出番ねーなー

7月20日? 「多重能力がバレたようです・・・もうしらん」 (前書き)

中学の合唱コンが近づき練習が忙しくなったため更新が遅くなるかもしれない

それじゃ前回のあらすじ

朝起きると隣から悲鳴が聞こえてきて

なんだと思っていってみると上条がインデックスに噛み付かれていた

そんでなんやかんやで上条をロリコン扱いしてからかって

んでなんやかんやで木山春生にあってなんやかんやで喫茶店に行くことにした

まあそんな感じでどーぞ

7月20日? 「多重能力がバレたようです・・・もうしらん」

俺たちはいま喫茶店に居る

「ご注文はお決まりでしょうか？」

ウェイトレスさんが聞いてきた

「アイスマルクティー」

と御坂

「同じく」

と白井

「アイスコーヒー」

と木山先生

「俺はアイスココア」

ココア好きなんです・・・甘党なんです

「さて、先ほどの話の続きだが」

木山先生が話を始める

「同程度の露出度でもなぜ水着はよくて下着はダメなのか」

あほな事を話し始めた

「「いやそっちではなく」」

俺、御坂、白井が同時にツッコむ

木山先生はアレ？と首をかしげている

「話をまとめますと」

そして御坂が説明を始める

すると

「………!？」

俺の頭に少し痛みが走る

「どうしたんですの？」

白井が俺に聞いてくる

「いや、なんでもない。ちょっと用事思い出した」

インデックスの監視にしていたネメシスQがやられた

(おいおい……神裂ってあいつを倒せるほど強かったか?)

「わりい、俺先に帰るわ」

と白井に言う

「用事ってなんですか？」

・・・いやなんて答えろと・・・

インデックスの命が危なそう？

いや無理

監視がやられた

無理

「・・・えーと・・・」

「答えられませんの？」

やばい・・・なんかメツチャ怒ってる

とにかく理由を考えろ！俺ッ！

どうするどうする

ネメシスを監視につけたせいでインデックスの倒れている場所が変
わってる可能性がある

そうなると上条がそれを発見できない可能性もある

（クソ！ネメシスなら神裂もなんとかなると思ってたけど甘かった
！）

どうする・・・

「とりあえず用事があるんで退散しまーす」

と俺は席をはずす

そしてお金を置き

全速力で逃げる

「待ちなさいですよ！！」

あと10mで空間移動の射程から外れるというところで白井に襟首
をつかまれる

「仕事をサボるのは許しません」

やばい・・・なぜか白井の手が外れない

どうしよう

.....

.....よし

「じゃな！白井！」

俺はやむをえなく空間移動を使った

多重能力者ということが100%バレただろう

バラすのはAIMバーストラへんまで待とうと思っていたのに

そして俺は寮へ帰った

「・・・はい？」

白井は呆然とするしかなかった

N O S I D E

「あれ？黒子、柴葉は？」

御坂が白井に話しかける

「逃げられましたの・・・」

白井が残念そうに言う

「嘘！？黒子から逃げ切るなんて！」

御坂は驚いていた

白井はレベル4の空間移動能力者、同じ空間移動でも持っていない限

り逃げ切れるハズがない

「柴葉さんも空間移動をつかいましたわ・・・」

そして白井が言った一言によって御坂は更に驚いた

「そんなはずないじゃない！！あいつの能力は空間移動の類じゃなかったはず・・・」

「でも確かに使いましたわ」

そこに木山が割って入った

「それは能力を2つ以上もっていると言う事か？」

「・・・なっ！能力は1人一つまでのはず！！」

「ですがそうでもないと柴葉さんが空間移動を使えるはずがないですの」

店に沈黙が流れた

そんな事があったなんてことを知らない柴葉は寮で神裂と対峙していた

SIDE 柴葉

寮に戻った俺が見たのは背中から血を流し倒れているインデックスとそれを見て呆然としている神裂だった

「インデックス!!」

俺はインデックスに向かって叫ぶ

その瞬間神裂が我に返った

「あなたは？」

「柴葉葉、お前がインデックスの言ってた魔術師か？」

「そうですが・・・私は彼女を保護しに来ました」

「保護するのに背中を斬る必要があったか？神裂香織」

「っ!?!なぜ私の名を!」

「知ってるよ。インデックスの歩く協会が壊れてるなんて思わなかったんだろ？」

神裂は沈黙した

「神裂、お前・・・イギリス清教に騙されてるって気付いてるか？」

「・・・何を・・・言っているのですか？」

「なんでもない。とりあえずそこをどけ。インデックスを治療する」

俺は神裂にそこを退くように言う

だが

「そうはいきません」

「そのままだとそいつ死ぬぞ？」

「すぐにステイルが来ます。あなたたちにインデックスを渡すわけにはいきません」

神裂が臨戦態勢に入り七天七刀に手をかける

「待て・・・ここでやるとインデックスを巻き込む。お前の仲間が来るなら問題ないだろう・・・場所を変えるぞ」

ちなみに俺はインデックスをこの位置からこっそり治療していた

この距離と短時間じゃ完全には無理だが上条が来るまでは持つだろう

ちゃんとインデックスが倒れているのは上条と俺の部屋の間だし

「分かりました・・・場所を変えましょう」

そして俺と神裂は以前俺が一方通行と闘った河原まで空間移動した

7月20日? 「多重能力がバレたようです・・・もうしらん」 (後書き)

前回ステイルを出すと言いましたがこっちの方がやりたかったので
神裂出しました

口調とかが大丈夫か心配です

多重能力バレましたねえww

それではまた次回

たぶん明日には更新・・・できるかなあ・・・

7月20日? 「七閃って凄くね?」 (前書き)

神裂VS柴葉です

合唱コンの朝練がめんどくさすぎる・・・

寝不足続きでメツチャ辛いです

前回のあらすじ

バトルスタート

おわりです

めんどいです

葉「いや、ちゃんとやれよ」

どうせ見てる奴なんて居らんわああああ

葉「たぶん居るって、落ち着け! 卑屈になるな!」

ちくしょー!!

葉「しゃーない・・・前回、ネメシスがやられ、行ってみるとインデックスが倒れ

神裂がいた。そしてなんやかんやで河原で戦う事になったというの

が前回だ」

サックス主人公

葉「ギャラは貰う」

無理だ

それじゃどーぞ

7月20日? 「七閃って凄くね?」

「『七閃』」

河原に着いてすぐに神裂は七閃を放ってきた

(おお・・・マジで見るとすげえな・・・)

七本のワイヤーが迫って来るにもかかわらず俺は特に気にしていなかった

俺は飛んでくるワイヤーを『ヴァイジョンズ幻視』で見て『ライズ』ですべて掴む

「なっ!」

神裂が驚いている

「こんなもんか?」

俺は神裂に言い放った

「・・・あなたはいったいなにものなのですか」

神裂が俺に聞いてくる

「知らん」

適当に言い返し俺は神裂に『ライズ』を使って攻撃しに行く

「カハッ・・・！」

神裂は刀の鞘を前に出し防御するが

勢いを殺しきれなかったのかそのまま吹き飛ばされた

だが神裂は吹き飛ばされながらも七閃を放ってくる

俺はそれをすべて避ける

神裂はすぐに体制を建て直して刀の鞘で攻撃してきた

俺はそれを拳で弾いてがらあきになった懷を殴る

「ガッ！」

そして神裂は吹っ飛ばされた

「そんなもんか？神裂香織」

俺は神裂に問う

「・・・あなたを少し甘く見ていました」

そして神裂は言い放つ

「Salvare000（救われぬ者に救いの手を）！」

自分の魔法名を

「おいおい・・・いきなり魔法名言ってくるか」

「『唯閃』」

神裂は一気に距離を詰め俺に唯閃を放ってくる

「ぐっ！」

S I D E 神裂

神裂は勝ったと確信していた

そして同時に罪の意識と自分の力不足を感じている

（どうしてこんな子供を殺さなくてはいけないのか）

やはり力が足りないのか

そう思っていた

だが彼女は聖人である

普通の人間ならば彼女と闘うことなど出来ない

だが

「!？」

柴葉は無傷だった

そしてその手には

光る刀のようなものがあり

自分の七天七刀は・・・折れていた

というより溶けていた

S I D E 柴葉

「阿修羅・解」

俺は阿修羅・解で神裂の唯閃を防いだ

その結果阿修羅・解の熱で神裂の七天七刀は溶けて蒸発してしまった

「使った俺がいうのもなんだけど・・・鉄が蒸発するってどんだけ熱あんだコレ」

威力抑えて小さくしてよかった

ちなみに今は普通の刀ぐらいの長さである

「あなたが言う事じゃありませんね」

神裂が呆れたような顔で言ってくる

「私の負けです・・・」

潔く負けを認めるとは・・・さすが侍

でも侍がその格好はどうかと思う

「これは魔術的な意味があるものなので決していかがわしいものではありません」

神裂が地の文にツツコミを入れる

「地の文にツツコむな。負けを認めたならさっさとイギリスにロリコン神父つれて帰れ」

「ロリコン神父？そうはいきませんね・・・インデックスを保護するまでは帰れません」

「お前んとこの仲間が保護したんじゃないのか？」

「ステイルはやられたそうです。今連絡がありました」

「いつ連絡したんだ」

今、俺は神裂とこんな会話をしているが俺はとある疑問を抱えていた
だれがネメシスQを倒したのか

実際に神裂は結構強かったがネメシスを倒せるかどうかは疑問だった
倒せたとしてもインデックスがどこかへ逃げ切るぐらいの時間稼ぎ

なら出来たはずだ

つまりネメシスは他の誰かにやられたとしか思えない

（一体誰にやられたんだ？誰かにやられたんじゃネメシスの視覚情報も得られないし・・・手がかり無しか・・・）

俺のネメシスはオリジナルと比べて所々違うところがある

例えば俺の能力を使えること

それは多分オリジナルよりも強いだろう

だがその代わりネメシスが得た情報は自分でネメシスを消さなければ得られない

そこは多分オリジナルより劣化している

（なんで強化してあるものと劣化してあるものがあるんだよ・・・まあいい・・・多分害はないだろう）

「そいじゃ俺は帰るわ。お前も刀がないんじゃ何も出来ないだろ。おとなしくイギリスに帰れ」

そして俺は寮に空間移動した

戻ってみると上条が血まみれのインデックスを抱えて出てきた

「柴葉！」

俺に気付いたようでこっちに走ってくる

「上条、インデックスは大丈夫か？」

「これのどこが大丈夫に見えるんだよ！」

上条は相当あせっているらしい

当然か

「俺が何とかする」

「は？」

俺は上条からインデックスを下ろし『キュア』で傷を治す

「お前の能力って回復能力だっけ・・・」

上条が呆れ気味に聞いて来た

もちろん右手の影響が出ないように離れている

「実は多重能力者だったりする」

俺は適当にそういった

「ふーん・・・て、ええっ!？」

なんかすごい驚いてた

そんなことしてるうちにインデックスの傷が治った

「もう大丈夫だ。とりあえず上条の部屋に運ぶぞ」

まだ意識は戻っていないがひとまず大丈夫だ

あとは体力が回復すれば大丈夫だろう

「なんで俺の部屋なんだよ!」

「俺の部屋が汚いからだ」

「嘘だ! こないだ見たときはメツチャ整頓されてたろうが!」

「今は汚い」

「俺の部屋だって汚いっつの」

そんな感じで言い合っていたがこれ以上やっても無駄だと思ったので上条の部屋にレポートしてベッドに寝かした

そして上条のところに戻り

「ベッドに寝かしといたから後はご自由に（笑）」

と見て見た

「何をだよ! 不幸だ・・・」

そして俺は自分の部屋に帰った

7月20日? 「七閃って凄くね?」 (後書き)

神裂VS柴葉でした

神裂、刀どうすんだろうね?

多分どこかで買って上条をぶちのめすでしょう

次回は偏光能力者です

それが終われば番外編です

タイトルがハレグウ、内容が銀魂のパクリとなっているのは気にしないください

学園都市なら実験動物の一つや二つあるだろうと思っていたんです

それじゃまた次回

7月21日「キャラ変わってますよ?」(前書き)

ばふんです

書く事が特にないんで前回のあらすじ

葉「それでいいのか・・・」

知らん

前回のあらすじ

風紀委員の仕事を抜けるために空間移動を使ったら多重能力がバレた主人公は

気を取り直して寮にいた神裂と闘い勝った

その後、寮に帰ると上条がインデックスを背負っていたので回復させる

もう今更隠すのもめんどくさくなった柴葉は多重能力者であることをバラす

インデックスを上条に押し付けて寝る

終わり

葉「めずらしく長いな」

がんばったよ

それではどーぞ

7月21日「キャラ変わってますよ？」

俺は風紀委員177支部の扉の前にいる

そして扉の鍵をIDカードで開け

挨拶しながら扉を開く

「おはようござい、まっ！！！！」

しかし挨拶は

前から飛んできた蹴りと上から落ちてきたタライに遮られた

「いってええええええ！ちよ！折れた！コレ絶対折れた！！」

多分、鼻の骨折れた

だが俺を蹴った人物

固法美偉先輩は何も気にせず俺の前に仁王立ちしている

「昨日、風紀委員の仕事をサボったそうね？」

ちよ・・・固法先輩ってこんな厳しいキャラでしたっけ？

後ろに白井もいる

タライを落としてきたのは恐らく白井だろう

「いや、だからそれには事情が・・・」

「事情ってなんですか？」

白井の奴が聞いてきた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いやだからね？それには答えられないって

いやいや・・・知り合いが死に掛けてる気がしたって言っても信じないだろうし

・・・なんとすると

「言えません」

とりあえず真剣な顔しながら言ってみる

コレなら何とかなるか

「言いなさい（怒）」

誤魔化しきれなかった・・・固法先輩怖い・・・

俺の背中に冷や汗が流れる

すると

「人命救助してたんだよ」

支部長が割り込んできた

「「「は？」」」

「そうでしたの？」

「え、あそうそう」

よく一発で信じたな

まあ助かった

（支部長サックス！！）

とテレパシーで支部長に礼を言う

（コレは貸しにしとくわね？）

となんか恐い笑顔で言ってきた

なんか借りを返すために恐い事要求してきそうだ

「・・・なら仕方ないですの・・・なんか腑に落ちませんけど」

「次はサボるんじゃないわよ」

白井と固法先輩が言った

アレ？・・・そういえば何で支部長が俺が昨日インデックスを助けた事知ってたんだ？

・・・・・・・・まあ気にしないことにしておこう

どうせテレパシーで俺が考えてる事を勝手に聞いたんだろう

とりあえず支部長に握られていた弱みはこないだ白井と御坂が知ったことで解消されたし

少しは楽に暮らせそうだ

元々あまり脅されてなかったが・・・

「というか・・・明らかに鼻の骨折れていたのにもう直ってますね・・・」

薬箱を持ってきた初春が呆れ気味に言ってきた

「やっぱり折れてたのかよ・・・」

俺は少し怒りをまじえながら固法先輩を見る

「治ったならいいじゃない」

恐ろしい事を言ってくる

絶対キャラ変わってますよね

それとも元スキルアウトの性格が100%出てます？

「さすがデュ、むぐっ」

なんか余計な事を言おうとした白井の口を押さえる

（それは言わんでください）

俺は白井にテレパシーで話す

だが

（今いる固法先輩と初春はそのことづくにしていますわよ）

白井はとづくに皆に話していたらしい

少なくともここにいる二人には

（ええゝ勘弁してくれえゝ）

なんか余計にめんどくさくなった

もういいや

広まるなら勝手に広まりやがれ

で

「ダウンロード出来たみたいですね」

「これを聴くだけでレベルアップって、そんな事あるんですかね」

「情報提供者の話ではそういうことらしいですわよ」

初春と白井が幻想護手を調べるためにダウンロードしてなんかいろいろ話してる

（これを使って白井さん以上の能力者になっちゃったら・・・今までの仕返しにあんな事やこんな事を」

えへへと笑いながらそんな事を言っている

そして白井が初春の耳にイヤホンを入れようとしている

その後、俺と白井は取引場所のリストを貰い外に出かける

さて、俺は今、廃ビルの前にいる

そこにはバナナマン日村みたいな奴と不良が3人

そして佐天がいる

日村が殴られているのを見た佐天が助けに入ったが結局一緒に襲われる

とりあえず助けに入った

「そおい!!」

不良の一人にとび蹴りを喰らわせる

「ぶべらッ」

その不良は5mぐらい吹っ飛んで気絶した

「タカティンンンンンンンンンンン」

「てめえ!何者だ!!」

不良が聞いてくる

というかタカちんって名前だったのかあの不良

「風紀委員だ」

俺はそう答える

「柴葉さん!?!」

「とりあえず佐天、どっか逃げろ。あぶねーぞ?こいつらなら5、

6分で片付けられるから」

本当はもっと早くできるが少し長めに言っておく

「言ってくれるじゃねえか」

すると不良の一人がでかい鉄柱をテレキネシスで持ち上げる

そしてこっちに投げつけてきた

「死ね！」

「鉄柱飛ばせる位で調子乗るな」

俺は『日輪・天墜』を鉄柱の上に落とす

出来るだけ小さめに

だが鉄をどろどろに溶かすには十分だった

「なっ！」

不良が驚いたような声を上げる

俺は『ライズ』で瞬時に近づき

「やほー」

「!？」

蹴りを入れる

「グハッ！」

そのまま不良は吹き飛ばされる

「カカカカ、おもしれえ能力だな」

原作どおりの台詞を偏光能力者が言っている

俺はそいつに蹴りを入れた

だが偏光能力者には当たらない

「どこ狙ってんだ？」

と言って偏光能力者は俺に蹴りを入れる

ぶっちゃけあまり痛くない

つかぜんぜん痛くないし

「グッ！」

でも痛がった振りをしておく

ビルまで追い込もうと思う

やりたい事があったんだ

「おいおい、さっきの余裕はどうした？」

不良がナイフを取り出す

そして俺に切りかかってくる

俺はそれ避ける

その後すぐに不良は蹴りを入れる

俺は吹っ飛ばされたようなフリをしてビルの中に飛び込む佐天が驚いたような顔をする

「カカカツ！今のはいい感触だったぜえ？アバラが何本か逝ったか？」

全然逝ってない

こいつ触覚おかしいんじゃない？

「全然ノーダメージ、一本も逝ってねえよ偏光能力者」

「・・・へえ、よく俺の能力が分かったな」

「馬鹿だろ、お前馬鹿だろ」

「分かったところで何が出来る」

誰が馬鹿だとか言わないんだな

俺は走って上の階に行く

それを不良が追ってくる

で最上階

「散々逃げ回った挙句、結局最上階か。そろそろ鬼ごっこにも飽きてきたしな。いー加減決着つけようや」

本当原作どおりに進んだな

「はいはいあと30秒で決着つけてやるよ」

俺は適当に言う

「お前の負けでか？ カカカ」

いい加減笑いを聞くのもいらいらするので

「阿修羅・解」

「は？」

俺は思いつきり長い刀を生成する

そして

ビルを横にぶった斬った

「なあ！」

その後も縦、横、斜めと切り刻む

不良は巻き込まないように

「さーて、お遊びはここまでだぜ？ 偏光能力者」

「それって普通ビルをたたききる前に言うだろ」

白目をむきながらツツコンでくる

ワロタw

そのままビルは崩れた

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ
あ」

不良の悲鳴が上がる

そして不良は気絶する

とりあえず死なれては困るので不良の襟を掴みながら『暴王の渦』
を展開する

SIDE 白井

白井は柴葉が中で不良にやられていると佐天に聞いた

「柴葉さんが!?!」

白井はあせっていた

助けに入っただとしても佐天の言うとおりだとすると自分は役に立てない

そう思っていた

でも入らないと柴葉がやられる

(どうすれば……)

そう思った途端

廃ビルにいくつもの刀で切ったような亀裂が走り

一気に崩れた

佐天、日村、白井の3人は目を見開いて

「「柴葉さん!?!」」

佐天と白井が叫んだ

見ると

そこには黒い渦を展開して無傷で立っている柴葉が居た

S I D E 柴葉

「おお、見事に崩れたな」

渦のおかげで俺は無傷だ

不良は気絶している

なんか髪が全部なくなっていた

まあ俺が切ったんだけど

「柴葉さん！」

すると白井がこっちに走ってくる

「白井、来てたのか？」

「来てたのか？ じゃありませんよ！ 大丈夫ですか？」

佐天も居たようだ

「佐天、逃げてなかったのか？」

「柴葉さんがやられてるのに逃げられませんよ」

日村はすぐ近くでへたりこんでいる

すると警備員がやってくる

で、不良3人を引き渡す

すると不良の一人が変な事を口走る

やっぱり原作どおり

「雑な洗脳・・・だな、これ」

とりあえず警備員に不良を引き渡した俺は支部に戻り寮に帰った

7月21日「キャラ変わってますよ?」(後書き)

柴葉VS偏光能力者です

不良の一人タカティンは適当に考えました

どうでしたか?

柴葉がやりたかった事と言うのはビルを切り倒すことでした

ジュナスが初登場の時、柱をスッパスッパ斬ってたのを思い出して
やってみたくなったらしいです

次回は番外編です

こっから原作で3日はなにもないですし

それではまた次回!

番外編「黒くて硬くててらてら光ってて暗くて狭くて湿ったところが好きな割りに

番外編です

多分こういうネタが嫌いな方も居るでしょう

ゴキブリが嫌いな人は見ない方がいいかもしれません

それでもいい方はどうぞ

番外編「黒くて硬くててら光ってて暗くて狭くて湿ったところが好きな割りに」

それはある日の蒸し暑い朝だった

「暑い・・・」

その蒸し暑さでたまたま早く起きた

するとベッドの下に何かの気配を感じた

「?・・・なんだ?」

見てみるとそこには

「ぎゃああああああああああああああああああああ」

なんかでかいのがいた

明らかに通常サイズじゃない

5〜10cmとか言うレベルじゃない

それは
・
・
・

体長約 1.8 m ぐらいある

巨大なゴキブリ

普通なら殺虫剤かけて終わりだ

だがコイツは殺虫剤で死ぬようには思えない

俺はテレキネシスでそいつをベッドの下から引きずり出し

窓の外に投げ

『流星』で真っ二つにし

『パイロクイーン』で焼き尽くした

俺はコイツが嫌いだ

もうホントに大嫌い

多分俺ほど嫌ってる奴はいないんじゃないかってぐらい嫌い

そして俺はトドメに『暴王の月』で消滅させる

「ハアハア・・・ビックリした・・・なんだアレ、明らかにおかしいだろあのサイズ!!」

かなり驚いているが俺はアイツを見たことがある

現実には見たことがない

だが知っている

とある漫画『銀魂』に出てきた宇宙ゴキブリそのものじゃないか!
スペース

「なんであんなのが学園都市にいるんだよ!!!!!!!!!!!!!!」

おかしい……一体この世界に何があったというんだ

そんな事をえんえんと考えていると

『『ぎゃあああああああああ』』

隣から上条とインデックスの悲鳴が聞こえる

「上条の部屋にも出た……ってことは？」

俺は窓の外を見る

そこには宇宙ゴキブリの大群がいた

「ぎゃあああああああああああああああああ」

俺は本日2度目の悲鳴を上げる

もしかすると土御門ならなんか知ってそうだ

何の根拠もなく土御門のところに行く

なぜ俺は土御門なら知っていると思ったんだろう

まあ案の定知っていた

「あいつらはとある研究員が作った生物だにゃー」

「とある研究員？そいつは今どこにいる」

俺は土御門に聞く

「もういないにゃーお前がつぶしたんだぜい」

「俺が？」

そんな奴を殺した覚えはない

暗部の仕事でいくつかの研究所をつぶしたりしているが

そんな奴を殺した覚えはない

まあ・・・いると知っているならやっているが

「一週間前につぶした研究所があるだろう？」

「そういや潰したな。でもあそこはチャイルドエラーで魔術の実験をするから危険分子と判断したんじゃないか？ゴキブリと何の関係が・・・」

「あそこの地下であの改造ゴキブリどもの女王を研究していたらしい。奴らは女王しか生殖能力を持たない。女王を探して殺虫剤でもかけたらあとは駆除するだけだ」

「その女王は？」

「さっき見つけたにゃー。普通のゴキとサイズは変わらないらしいが背中に『五郎』と書かれていたから簡単に見つけただったぜい」

よく見つかったな・・・

「じゃあ後は駆除するだけと」

「そういうことだにゃー。そんなわけだから柴葉、いってこい」

「へいへい。俺もあんなのに街を徘徊されたくないしな」

「奴らは水辺に集まるらしいから河川敷にでも行けば大量に消せるんじゃないか？」

「そうだな」

そんなわけで街のゴキブリ駆除に出かけた

しばらく歩いていると御坂と白井が3匹ほどの巨大ゴキブリを駆除したところだった

「うげー、なんなのよこいつら」

「気持ち悪いですよー・・・」

二人とも青ざめている

「御坂、白井」

俺は二人に話しかける

「あれ？あんた何してんの？」

「こいつ等の駆除」

「わざわざ率先してやるなんてよく出来るわね」

「あんまり長く徘徊し続けられるのも嫌だしな。御坂たちはなにしてんだ？」

「あんたと同じよ。こいつらの駆除」

「なるほどな。それじゃ俺は行くわ」

「分かった」

そしてまた歩き始める

その途中5匹ぐらいまとめて飛んできたのでテレキネシスで叩き落し日輪・天墜で消し炭にする

日光消毒もできて一石二鳥

「って・・・どんだけ俺ゴキブリ嫌いなんだよ」

自分で思っで自分でツッコむ

なんかんやで河原に着いた

歩いていて分かったが戦える風紀委員は大体駆除に駆り出されている
携帯を見ると行ってこいというメールが支部長と統括理事会から届いていた

「もうとっくにいつてるっつーの」

ここまで来るのに駆除したのは約50匹

歩いてるだけで気分が悪くなった

そして河原に着いたとたん俺は吐き出した

河原には草がなく、いや見えなく

ただ真っ黒いだけだった

どっちかと言うと焦げ茶

うじゃうじゃってレベルじゃない

俺は『パイロクイーン・サラマンドラ』や『暴王の月×8』、『デ
イープフリーズ』ete...『デ

とにかく持てる能力すべてを使ってゴキブリを駆除する

「あーあったまいてえー」

大量の能力をまとめて使ったので凄い頭が痛くなった

吐き気と頭痛が同時に襲う

だが何とかこの河川敷のゴキブリは駆除し終わった

「終わった・・・あとは街中を徘徊してる奴らを消せばいいだけか・・・」

俺はその後も街中を回り駆除し続ける

夜になる頃には学園都市中の能力者が協力した事もあってすべて駆除し終えた

「つ・・・疲れた・・・」

そのまま寮に帰った俺はベッドに倒れこむ

するとまたベッドの下に気配を感じた

「・・・まさか・・・」

見てみると・・・

インデックスと上条が居た

「何で居るんだよ・・・」

「避難してきたんだよ」

インデックスが答える

「もう全部駆除したぞ」

「俺の部屋にまだ1匹残ってるっての」

「まじで？」

俺は上条の部屋に行く

確かに上条のベッドの下に居た

俺はそいつを引きずり出し

窓の外に放り投げ

暴王の月で消し去る

こうして今日、学園都市中を騒がせたゴキブリ事件は終わった

番外編「黒くて硬くててらてら光ってて暗くて狭くて湿ったところが好きな割りに

なんだこの話・・・

なんかふと思いついて書いてみたんですが

実際見ると微妙と言うかなんと言うか

でもなんか書きやすかったです

嫌いな人もいるネタでしょうが見てくださいったかたありがとうございます
いました

これが酷かったからって見放さないでくださいお願いします

もうこんな番外編は書きたくない

本当にそう思いました

だが反省はしていない！！

次回は本編に戻ります

そのうちまた番外編書きたいです

それではまた次回！

7月24日「今日は木山戦とAIMバースト、それから神裂……って多いわい」

まあタイトルどおり原作でいろいろある日ですね8月24日は

神裂はやるかどうか分かりませんが

だって刀折っちゃったもの

つうか溶かしちゃったもの

まあそんなわけで前回のあらすじ

ビルを切り刻んだぜ！

他にもいろんな壊し方はあったろうがPSYRENの5巻読んだら
どうしても切り刻みたくなったんだ

ソナナ話だった

それではどーぞ

7月24日「今日は木山戦とAIMバースト、それから神裂……って多いわい」

今日はなんかいろいろある日だ

一日で3戦もやらなきゃいけないのか……

「まあそんな事はどうでもいい」

俺は今

固法先輩に正座させられている

なぜかって？

いやいや……一応解体する予定だったのとアレイスターのおかげ
であまり問題にならなかったものの

仮にも風紀委員がビルを不良の拘束のために切り刻んだりしたらそ
りゃあまずいだろう

「あなたはまったく……何を考えているの？」

固法先輩……だからキャラ変わってます

恐い……なんか恐い！

「いや……あのですね……友人が襲われててついでですね……」

「だからって不良の拘束のために廃ビルを切り刻む奴がいるかああ

あああああああ」

「すみませんでしたあああああああ」

固法先輩がものすごい怒っているの俺は土下座する

その後ろで白井が呆れ

初春が少し怯え

支部長が笑いをこらえているのか机を叩いてうずくまっている

つか支部長・・・笑いすぎだ・・・

固法先輩はなんか最近キャラが変わりまくっている

もう原作の面影ないんじゃない？ってくらい

まあ・・・俺に対してだけなんだけどね

すごく恐いです

「先輩・・・初春が怯えています」

「知るか・・・あんたがわるい」

だから性格変わってますって

はやく元に戻ってくれえええええええ

「おっすー！何か私に手伝えることとかない！？」

いいタイミングか悪いタイミングか御坂がやってくる

「つて、あんたなにやってんの？」

「見れば分かるだろう・・・昨日、佐天を襲ってた不良を拘束するために半分ノリで廃ビルを切り崩したために固法先輩に怒られっぶ！」

固法先輩の蹴りが飛んできた

なにが悪かったのだろう

「ノリで廃ビル壊したのか！」

ああなるほど・・・そういや言ってなかったわ・・・

やばい・・・俺はここまでだ・・・あとは任せた、御坂、白井、初春・・・

最後に蹴られたときに見えた白いのは幻覚じゃないと信じたっうげ

「見てんじゃないわよ」

固法先輩が俺のみぞおちを踏みつける

「なんで俺の考えてること分かるんすか！？」

俺は口から血を吐きながら問う

先輩・・・いくら俺が多重能力者でその中に治癒力UPの能力が^{ライズ}あるからって容赦なさすぎでしょ・・・

「支部長がテレパシーで教えてくれたわ」

見ると支部長がニヤニヤしている

あんにゃろう

こんなことしてても話が進まないの割愛

「私も事件に首突っ込んじゃったし、何か出来る事ないかなーって」

御坂が初春、白井と自分も手伝いたいという事を話している

「御坂さんがいれば百人力ですよ」

初春がなんか喜んでる

「本当にもうよろしいんですね？」

「何が？」

御坂と白井は原作どおりに話す

俺は現在自分の体再生中

再生と言っても怪我を治しているだけだが・・・

『ライズ』って便利

「で、進んでる？ 捜査のほう」

「それが・・・」

初春説明中

「ふーん・・・テストメント学習装置かあ」

御坂がふむふむとうなずいている

そしてそれに白井と初春が補足説明

そして御坂がそれに質問する

そして

「「共感性」」

ようやく答えにたどり着いた

で、まあ話は進み

ここは病院

「黒子ッ！」

御坂が黒子に呼びかける

随分とあせている

「佐天さんが倒れたって・・・やっぱり幻想御手がらみ？」

「ええどうやらその線のようなのです」

「らしいな・・・」

幻想御手か・・・

やっぱり手、出しちゃったか・・・佐天

俺にはとめる術が思いつかなかった

レベル5しかも多重能力者

それを知ってる佐天を俺が止めようとしても無意味だっただろう

「ちょっといいかい？」

すると蛙顔の医者

冥土帰しが後ろから話しかけてきた

たぶん幻想御手のことだろう

俺たちは冥土帰しについていく

「幻想御手の患者たちの脳波に共通するパターンが見つかったんだよ？」

冥土帰しがなんか説明を始める

俺はレベルは高いが頭が悪い

なので冥土帰しが話している事もよく分からない

レベル5なのはP S I能力が特殊だからだ

アレはほとんどイメージのみで行っている

演算能力なんてほとんど必要ない

イメージは漫画よんでりゃ十分だったから使える

名前しか知らなかったら大変な事になっていたと思う

そんなこんなで説明は進んでいく

「それに登録されているある人物の脳波が植物患者のものと同じなんだね？」

「俺らに聞かれても・・・」

俺は少しふざけてみた

白井と御坂に頭を叩かれた

気を取り直してP C画面を見る

そこには

「登録者名・・・木山春生・・・」

木山春生の名前と写真が載っていた

7月24日「今日は木山戦とAIMバースト、それから神裂・・・って多いわい」

合唱コンの朝練が辛いです

まあだからって更新は怠らないよう頑張ってみます

次回は多分V S 木山ですかね

あと2'，3話で幻想御手事件については終わると思います

主人公実は頭悪かったんです

大体決めていたんですが言うタイミングがなかった

ちなみに作者も頭悪いです

よく1が付かないなというくらいにW

それではまた次回

7月24日? 「多才能力者と多重能力者」 (前書き)

タイトルどおりです

そろそろ支部長に魔術使わせてもいいかな・・・とか思っています

それは2巻とか4巻にやろうかとも思ってます

どうした方がいいと思います?

まあそれは置いといて

前回のあらすじ

犯人がようやく分かった

終わり

少しは楽しませろ!!

葉「いやがんばれよ・・・」

それじゃどーぞ

7月24日？「多才能力者と多重能力者」

木山のところに行った初春と連絡が取れないらしい

俺たちは警備員から木山たちの居場所を探るために連絡を取りに行く
どうやら警備員も木山の研究所にたどり着いたらしいと連絡があった
これで幻想御手のデータも全部なくなってしまっただろう

「私も出るわ。黒子は警備員からの情報を回してちょうだい」

御坂が黒子に言う

もちろん俺も行く

そして俺たちは木山の所へ向かった

タクシーで進んでいると少し離れた高速道路の上が爆発した

「な・・・なんだあ？」

運転手はその方向を見て言う

今更だが空間移動で行けばよかった

その方が手っ取り早い

「早くあそこまで！」

御坂が運転手に無茶な事を言った

もちろん運転手も反対している

「じゃあここでおろしてくれ。おつりはいい」

俺は運転手に金を払う

そして御坂と共に木山のところへ向かう

すると白井から連絡が入る

どうやら木山が複数の能力を使って警備員と交戦しているようだ

御坂は原作ほど驚いた反応はしなかった

まあ俺も多重能力者だし・・・

幻想御手を利用したものだとすぐに分かったようだ

俺たちは木山のところにたどり着いた

「警備員が全滅？」

「ホントに多重能力者らしいな・・・木山春生」

そこには木山が立っていた

「柴葉葉、御坂美琴・・・学園都市のレベル5が二人か・・・」

「おとなしく拘束されろ、木山」

「それは聞けないな・・・私にはやるべき事がある。どうしても私を捕まえたいなら1万の脳を統べる私を止めてみるがいい」

「多重能力者はお前だけじゃないんだよ」

そして木山との戦闘を開始する

木山は複数の能力を同時に使って俺と御坂を攻撃してくる

「驚いたわ、本当に能力を使えるのね、しかも多重能力者」

「その呼称は適切ではないな。私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う。いうなれば多才能力者だ」
マルチスキル

そういつて木山はこっちに向かって地面を切り裂いた

「呼び方なんかどうでもいいのよ。こっちがやる事に変わりはないんだから」

そういつて御坂は木山に向かって電撃を落とす

しかし木山はシールドのようなものでそれを防ぐ

「どうした、複数の能力を同時に行使する事は出来ないと踏んでいたのかね？」

「利かないか・・・というか・・・あんたも戦いなさいよ!!」

俺は実はあまり木山に向かって攻撃していない

俺の能力はどれも殺傷能力が高すぎる

だからあまりうかつに攻撃できない

「俺がやったら強すぎて死んじゃうよ」

「相手は多才能力者だから多分大丈夫よ!」

「大丈夫じゃねえよ!多分!俺の能力なめんなよ!!どれもレベル5級のがそろってるからな!?!」

「ならなおさらあんたが戦ええええええええええ」

御坂が怒ってこっちに電撃を飛ばしてくる

俺はそれを『暴王の月 円盤ver』で防御した

そこで殺傷能力のあまり高くない能力を思い出した

「これなら大丈夫か・・・」

使う能力を決めたたん木山が高速道路を壊した

「ちょ!落ちてる落ちてる!!」

「あんた慌てすぎ・・・」

御坂は柱に磁力を使って張り付いた

木山は風使いで勢いを殺して地面に降り立つ

俺はマテリアルハイで空中に足場を作りそこに乗った

ついでにあと8個ぐらい足場を作った

「これでこの辺りは俺のフィールドだ」

木山は俺と御坂に向けて水の塊を放つ

俺はマテリアルハイの上を行き来して回避する

御坂は木山に向かって電撃を放つ

しかしさっきと同じように防がれる

「拍子抜けだな・・・レベル5とはこの程度のものなのか？」

その台詞を聞いた御坂は怒りながら磁力で瓦礫を飛ばす

しかしそれはライトセーバーのようなものに簡単にあしらわれた

「アリ？」

そのあとすぐ木山は御坂の張り付いていた柱にビームのようなものを撃つ

すると柱の表面が崩れ御坂と一緒に落ちてきた

「大丈夫か？御坂」

「だから・・・あんたも闘いなさいよ・・・」

咳き込みながら俺に文句を言ってくる

「分かってる分かってる」

俺は言うだけ言う

今回のサブタイって確か多才能力者VS多重能力者だったよな・・・

全然戦ってねえぞ！俺っ！

とまあ次元を超えてもしようがない

そんなことを考えていると

「もう止めにしないか？」

木山がそんな事を聞いてきた

「私はある事柄について調べただけなんだ。それが終われば全員解放する」

木山は続ける

「誰も犠牲にはしない・・・」

「ふざけんじゃないわよ！誰も犠牲にはしない？あんたの身勝手な目的にアレだけの人間を巻き込んでおいて、こんな事をしないと成り立たないロクなもんじゃない研究なんて見過ごせるわけないでしょうが！」

すると木山がため息をつく

「レベル5とはいえ所詮は世間知らずのお嬢様か」

「あんたにだけは言われたくない台詞だわ・・・」

「そちらの君はどうだ？」

俺に振ってきた

「まア確かにここは色々とヤバいもん隠してるけど詳しくは知らない・・・」

半分嘘だ

実は結構詳しかったりする

「面白そうな話だけどそれはあんたを捕まえた後でゆっくりと調べさせてもらうわ！！」

御坂は木山に向かって砂鉄の槍を繰り出した

木山は地面から壁を作りそれを防ぐ

「調べる・・・か。それもいいだろう・・・君がかかわっているのも少なくはないしな」

木山は小さくそういった

「だがそれもここから無事帰れたらの話だ」

そう言って木山はジュースの空き缶を放り投げる

グラビトンか・・・

そう思った俺は自分の周りに渦を展開する

そして空き缶は爆発したが俺は無傷

御坂も自分で磁力の壁を作り防いでいた

「なら・・・これならどうだ？」

木山はゴミ箱をテレキネシスで持ち上げて

中の空き缶をすべてぶちまける

御坂はそれを電撃で破壊する

俺は気合バーストで吹き飛ばす

一番手っ取り早く安全だったから

すると木山は隠していた空き缶を御坂の横にとばした

そしてその缶は爆発した

「正面がダメなら捌め手に回るまで・・・もつとてこずると思って
いたが・・・意外に大したことなかったな・・・レベル5」

俺は黒コゲで砂に埋まっている

まあライズ使えばすぐ回復なんだけども

多分、御坂は原作と同じようにうまく回避しているだろう

どうやら俺の火傷も治ってきたようだ

後は腕だけ・・・ってすごすぎるだろこの回復力

まあ影虎さんも結構凄かったしな

「多重能力者・・・君もレベル5級的能力をいくつも持っていたの
だろう？こんなに弱いとは思わなかったよ」

なんか言ってるし

ちょっとカチンときた

「誰が弱いって？」

治癒も大体終わったので俺は起き上がる

「あの爆発を喰らって服が少し焦げただけとは・・・」

「自分で治したんだよ」

「オートリバース自己回復か？」

「少し違う・・・これは治癒力だけじゃなく身体能力や五感も上がるからな」

「なかなか興味深い能力だ・・・」

「そうかい・・・まああんたはもう終わりだけだな」

「なにをいって・・・！？」

御坂が木山の後ろに抱きつく

「馬鹿な！？直撃したはず！」

「あれあれ」

俺は御坂が作った壁の方を指差す

「！？・・・死角からの奇襲をどうやって・・・」

「AIM拡散力場の専門家に説明するのはアレだけど」

御坂は木山に自分の能力の説明をする

そして

「ゼロ距離からの電撃・・・あの馬鹿には効かなかったけどいくらなんでもあんなトンデモ能力まではもってないわよね」

そりゃそーだ。アレはそもそも超能力でも魔術でもない

ジャンル不明

「くっ・・・」

木山が焦って能力を使い御坂を攻撃しようとする

（使う能力の選択誤ったな・・・）

多分違う能力・・・

例えば水の弾みたいなのとか風使い《エアロマスター》とか使えば回避できたかもしれないのに

終わったか・・・1ラウンド

「遅い！」

御坂がゼロ距離から電撃を放つ

そして木山は倒れる

それと同時に御坂の頭に木山の記憶が流れた

俺には見えない

だけど大体覚えている

恐らく木山が教師になってから実験で置き去りを使い捨てのモルモットにしてしまった事などが御坂の頭の中に流れているのだろう

その後、御坂は木山を離す

木山はそのまま倒れる

そして

「観られた・・・のか・・・!？」

そう言って能力を使い電線を持ち上げる

だがもう能力を使える状態ではない

「がっ!」

といううめき声をあげ能力は解除される

「なんであんな事・・・」

御坂は木山に聞く

「あの実験の正体は暴走能力の法則解析用誘爆実験・・・能力者のAIM拡散力場を刺激して暴走の条件を探るものだったんだ・・・あの子達を使い捨てのモルモットにしてね」

「人体・・・実験」

御坂がそう言った途端、木山は火炎放射を御坂に向けて放つがあたらない

「だったらそれこそ警備員に・・・」

「23回」

木山はとある回数を表す数字をいう

「あの子達の回復手段を探るため、そして事故の原因を究明するために樹形図の設計者の使用を申請して却下された回数だ・・・統括理事会がグルなんだ。警備員が動くわけがない」

木山はその数字の意味を言った

「でもそれじゃあんたのやってる事も同じになっちゃ「君に何が分かるっ!!」」

「あんな悲劇、二度と繰り返させはしない!そのためならなんだっとする」

木山は叫んだ

「この街すべてを敵に回しても止まるわけにはいかないんだッ!!」

その瞬間

7月24日? 「多才能力者と多重能力者」 (後書き)

最後の3、4行はいらなかったかもしれない

でも後悔はしていない

次回はAIMバーストです

やつとここまでできたか・・・

一番やりたかった

PSI能力を存分に使用させることが出来るんでWW

それではまた次回

7月24日? 「PSI能力って強くない?」 (前書き)

猫物語【白】 買いました

まだ読んでる最中です

読みながら書いてます

それでは前回のあらすじ

佐天が倒れた

←

木山が犯人

←

戦闘

←

勝利

←

AIMバースト登場

←

第2ラウンドスタート

といった感じです

なんかいちいち文章にするのもめんどげふんげふん

作者のレベルじゃ分かりづらいのでこういう形式で行こうと思いました

本編は普通にやりますよ？

あらすじだけです

まあそもそもあらすじが必要なのかどうかも分からないんですが

だれか答えてくれるとうれしいです（返答次第であらすじが消える
か残るか決まります）

それではどうぞー

7月24日? 「PSI能力って強くない?」

「キイイイヤアアアアアア」

AIMバーストが奇声を上げる

そしてこちらに光弾を撃ってくる

御坂はそれを磁力で作った盾で防ぐ

俺は渦で防ぐ
ポルテクス

「あぶねえな、おい」

御坂はAIMバーストに電撃の槍を放った

その瞬間AIMバーストの体が爆ぜた

だがAIMバーストはそこから再生する

そしてテレキネシスっぽい物を使って石柱を飛ばしてきた

御坂ははしって逃げる

俺はテレキネシスで操りかえしAIMバーストに当てる

やはり爆ぜるだけだ

(今攻撃しても意味ないか・・・)

俺は御坂が木山を安全な場所へ退かそうとしていたので手伝いにいく
木山を退かしたあとA I Mバーストの方を見ると警備員にメツチャ
攻撃されていた

あゝあゝでかくなるだけだと言うのにあんなに攻撃しちゃって・・・

なんだあれ、リボルバー式のバズーカ？

それを見ていると警備員のうち二人がテレキネシスらしきもので飛ばされる

俺はとりあえず助けに行く

にしてもずいぶんおっきくなっちゃって・・・

女の警備員（名前忘れた・・・）が攻撃されそうになっていたがテレキネシスで安全な場所に動かす

少し強すぎた・・・柱に当たり女の警備員は短い悲鳴をあげる

「何ボヤツとしてんだ？死んでもしらねえぞ」

俺がそういうと

「あなた誰！？民間人がこんな所で何してるの！？」

と言って来た

風紀委員ならいても大丈夫だと思ったんだが・・・

あ、腕章つけるの忘れてたわ

「風紀委員だ。ちなみにレベル5兼多重能力者」

「は？いやだからってあんな化け物にあなたみたいな子供がなんとかできるわけが」

その一言が少しムカついたので俺は遠くにいるAIMバーストに日輪・天墜を落とす

「なんとかできるわけあんだろが」

「あなた今何したの？」

「太陽の光を一点に集中させて落とす。ちなみに威力は鉄を一瞬で溶かすどころじゃないぞ。真夏だから威力も絶好調だ」

「・・・」

「とりあえずあんたどっかいってろ。邪魔」

邪魔の一言が胸に刺さったのかorzのポーズになった

そして体制を取り直し

「そうもいかないの・・・あの建物何か分かる？」

と聞いて来た

俺はすかさず答える

「原子力実験炉だろ・・・なんであんなところに作るかねえ」

「人気がないからに決まってるでしょう？」

「あっそ」

適当に答えて俺は言う

「とりあえずここらに倒れてる警備員退かしといて。今回ちょっと本気出すからあぶねえよ？」

そして俺は思念体ノヴァを使う

「なっ・・・！」

さすがにこんな能力は見たことがないのか驚いた声をあげる

「そいじゃちよいと行ってくるわ」

俺は下に降りてAIMバーストに攻撃をする

「毘沙門・叢」

俺がそう言った瞬間空中に無限ともいえるほどの光の刀が配置される
やっぱり原作より強くなってる

そして刀はAIMバーストに向かって一気に落ちる

「キアアアアアア」

AIMバーストは奇声を上げながら刀を壊そうと能力を使う

それに反応して刀は爆ぜて攻撃力は上がる

毘沙門・叢はくだけでも切れ味は変わらないので破壊すれば余計に
危険度が増すだけだ

AIMバーストは体中あちこちが切り刻まれているがすぐに再生した

途中御坂も参戦した

「やば・・・」

AIMバーストが遂に原子力実験炉に到達してしまった

「おいおい、マジかよ・・・」

「キアアアアアアアアアアアア」

AIMバーストは奇声を上げて触手で攻撃してくる

俺はそれを暴王の月で防ぐ

「ちっ！疲れるからあまり使いたくなかったんだがしゃーない」

俺はノヴァの色を黒くする

そして俺は暴王に染まる

ちなみにちゃんと操れています

「なにそれ・・・」

御坂が聞いて来た

「俺の全力」

「最初から使いなさいそういうのは」

俺は御坂の言う事を無視し暴王の月や流星、渦やなんか名称不明な暴王の技を連発する

そしてある一発が届いたときにAIMバーストが再生しなくなった

その隙に御坂が電撃を流してAIMバーストを黒コゲにした

「ふーなんとか止めたってことになるのかしらね」

御坂が一息つこうとする

だが

「気を抜くな！まだ終わっていない！」

いつから居たのか木山が叫んでくる

その瞬間AIMバーストは俺と御坂に触手を叩きつけてくる

俺と御坂はすぐに避ける

「ちょっと！なんでアレ喰らって動けんのよ！」

御坂が木山に問いかける

「アレはAIM拡散力場の塊だ・・・普通の生物の常識は通用しない」

木山が説明する

「体表にいくらダメージを当てても本質には影響しないんだ」

「そんなのどうしろっていうのよ！」

御坂が叫ぶ

「力場の塊を自立させている核のようなものがあるはずだ・・・それを破壊できれば・・・」

その瞬間

俺の頭の中にAIMバーストの中にある幻想御手使用者の負の感情やらなにやらが流れ込んでくる

俺は・・・

「下がってろ・・・木山・・・巻き込まれるぞ」

木山に言った

ちなみにもうノヴァは黒くなっていない

「かまわない・・・アレを生み出した責任は私にある。私はどうなっても」

「あんたはよくても教え子たちはどうすんのよ。仮に回復してもそのときにあんたが居なきゃ意味がないわ」

「あんなやり方をしないなら俺たちも協力してやるよ」

俺と御坂が木山に言う

「それと・・・あいつに巻き込まれるんじゃないくて・・・」

俺たちは同時に言った

「俺（私）が巻きこんじゃうって言ってんだよ（のよ）」

そして御坂は電撃の槍

俺は流星を放つ

A I M バーストはバリアのようなもので防ぐが俺の能力にそんなも

のは通用しない

貫いてA I Mバーストの身体に穴をあける

イクスプロジア
「爆塵者」

俺はA I Mバーストの体の一部を爆破する

すると核の一部が見えた

だがA I Mバーストは抵抗して氷の塊を飛ばしてくる

俺は氷碧眼でその氷ごとA I Mバーストの体を凍らせる
ディープフリーズ

「氷に対して氷って・・・」

御坂が突っ込む

「目には目を歯には歯をという言葉を知らないのか？」

「だからってそんなことしなくても」

するとA I Mバーストは今度は巨大な炎を飛ばしてくる

どうみてもレベル4ぐらいはあるが

俺はパイロクイーン・サラマンドラで対抗してその炎ごとA I Mバーストの体を吹き飛ばす

「A I M拡散力場の集合体ねえ・・・悪いけど努力しないで諦めて

ズルしてぶっ倒れて迷惑かけるような奴らに負ける気はしないし同情する気もないわ」

俺は奴らに向かって言う

「だけど俺の知り合いにあほな奴がいてな。敵だった奴でもピンチになってりゃ助けるなんて馬鹿でさァ・・・そいつは馬鹿だけど俺はぶっちゃけ憧れてんだわ・・・ただのレベル0だけでもそいつは胸張って生きてる。不幸だとか言ってもなんやかんやで楽しそうに生きてる」

そいつが誰なのかは知ってる奴は大体想像付くだろう

「俺はそんな善人にはなれねえがそれでも少しぐらいなら助けられる・・・だから」

最後に一言御坂と同時に言う

「「こんなところで苦しんでないとつとと帰れ（帰りなさい）」」

そして暴王の流星と超電磁砲がAIMバーストの核をつらぬく

そしてAIMバーストは消え去る

最後に聞こえた泣き声は苦しみとは少し違った気がする

とりあえず戦いは終わったみたいなことでも言えばオチはつくのだろうか

まあそんなこという前に御坂は倒れて俺は頭を抑えながらうずくまる

「ど・・・どうしたんだ？」

木山が問いかける

「電池切れ」

御坂はそう答える

「能力の使いすぎ・・・やっぱノヴァは疲れる・・・」

俺はついでに鼻血も出しながら答える

「どうすんの？今の私たちにはあんたを止める力残ってないけど・・・」

「お前と一緒にすんな。俺はちよつと思考停止すれば5分ぐらいで回復する」

「5分あれば十分逃げられると思うけど？」

そんなやり取りをしていると警備員がやってくる

謎の巨大生物ってのはどこだ？とかいいながら

「来るのおせエヨ・・・」

俺は警備員に聞こえないような声で呟く

木山はさっきの質問に少し考えた後

「・・・いや、ネットワークを失った今警備員から逃れる術は私にはないからな」

そう答えた

「だがあの子達を諦めたわけじゃない。もう一度最初からやり直さ。どこだろうと私の頭脳はここにあるのだから・・・」

ただしと最後に付け加える

「今後も手段を選ぶつもりはないぞ？ 気に入らなければそのときはまた邪魔しに来たまえ」

あんだねえ
・
・
・

と御坂は呆れていた

そして木山を警備員に引き渡してこの事件は解決した

そのあと白井がタクシーでやってきて

「おねえさまあああああああああああああああああ
あああああああああ」

とものすごい声を上げながら御坂に抱きつき動けない御坂にイタズラをする

御坂が助けてみたい顔してこっちを向いてきたが

なんかとても未成年には見せられない動きをしていて俺は目をそらすしかなかった・・・

そのあと病院から連絡がきたようで

幻想御手の使用者が意識を取り戻したらしい

初春はすぐに病院へ向かう

せつかなのに邪魔するのも悪いので俺は一旦帰る事にした

今夜は神裂が来るはずだけど・・・来るのか？

こないだ刀折っちゃったしな

そんな事を考えながら寮に帰る

7月24日? 「PSI能力って強くない?」 (後書き)

今回はVS神裂の第2ラウンドです

神裂の刀はこの小説では原作と違う設定となります

多分、次回で説明できる気はしないので今のうちに

名称なんかは決めてません

神裂の刀(七天七刀ではない)

前みたいに高温で溶けないように魔術で補強してある

素材は鉄だが色々と魔術を使ったりしているので阿修羅・解でも溶けないらしい

刀の峰の部分に魔術の文字が彫られている(漢字)

その効果により耐久性と耐熱性、切れ味などが極限まで高められている

そこに聖人の力が加えられているのでメツチャ強い

という感じですがいかがでしょうか

ちなみに上条戦の時に触れられても壊れないようにもう一本刀を用意しています

なんらかの魔術を使って入れ替えができるようになってる

主人公のせいで見事に原作崩壊です

まあ刀だけなんですけども

それではまた次回

7月24日? 「心鬼紅骨・・・てどっかで聞いた事あるようになって何でお前が

心鬼紅骨しんぎべにぼねを出してみたかったんです

でもアレはPSIじゃないし・・・そうだ! 神裂の刀が丁度折れて
たし神裂に持たせよう!

というわけで神裂の刀は雨宮が貰った心鬼紅骨になりました

少し設定は変わっています

前回言った設定はある程度なかったことにしてください

ほぼ原作と同じです

ただし原作ではPSI能力者が作ったとされていますがこちらは魔
術師が作っています

強度なんかも阿修羅・解では傷つきません

まあそんな感じですよ

それでは前回のあらすじ

V S A I M
バースト

勝利 ←

←

まだ神裂戦あんじゃないか？

←

スタミナが・・・

←

がんばろう

みたいな感じです

まあ戦闘が終わって数時間が経過しているのもう全快ですね

それではどーぞ

7月24日? 「心鬼紅骨・・・てどっかで聞いた事あるようになって何でお前が

「さて・・・どこだろうな・・・」

俺は今、マテリアルハイで足場を作り上空数十mという所から上条と神裂が戦う場所を探している

「・・・というかそもそも神裂戦えるのか? 刀ないだろ・・・まあ聖人の力なら刀なんざなくても十分だろうが・・・」

そんなことを呟いていると少し遠くのほうで人の気配が完全になくなった

人払い

「あそこか・・・」

俺はマテリアルハイで足場を作ってそこまで走る

空間移動を使うととてつもなく疲れる（今日はただでさえAIMバーストと戦った後でもあるのだ）のでマテリアルハイだ

そして俺は神裂と上条の間に

「ひゅーるるるるるる・・・どーん」

アゲハのモノマネをしながら降りる

一度やってみたかった

みると上条は既にぼろぼろだった

「柴葉・・・！？」

「・・・！ あなたは・・・」

上条と神裂が驚いたようにこちらを見る

「不利な方につく・・・というわけだ神裂、逃げるなら今のうちだ」

俺は上条の前に立ち神裂の方を向いて言った

「あの時と一緒にしてもらっては困りますね・・・」

「・・・あれ？お前その刀・・・」

なんだろう・・・すごい見覚えがあるよ・・・

確かアレって・・・

うん、絶対見たことある

「心鬼紅骨・・・私の新しい刀です」

「やっぱりか・・・」

PSIRENで雨宮がエルモアから貰ってた刀

でも少し大きさが違うような気がするが

原作でも結構でかかったしどうなんだろう

「この刀を知って・・・一体あなた何者なのですか？」

「前に戦ったとき名乗らなかったっけ？上条、とりあえず邪魔だから逃げろ」

俺は神裂の問いを受け流し上条に逃げるように言う

「なっ！そんなことできるわけないだろ！こいつの強さはヤバイ！」

「問題ない。俺にとっちゃただの雑魚・・・うおあ！」

雑魚発現がまずかったのか神裂が魔法名を名乗って斬りかかって来る

俺は慌てて阿修羅・解をだし防ぐ

心鬼紅骨、阿修羅・解でも傷つかないとは凄いな・・・

「『七閃』」

すると神裂は七閃を放ってきた

俺はそれを『ライズ』で避ける

「あぶね・・・確かに前より強くなってる・・・」

一体どんな事したら短期間でこんなに強くなれるのだろう

「あの時とは違うといったでしょう・・・それにしても、その少年を掴んだままここまで動けるなんて・・・」

ちなみに俺はさっきからずっと上条の襟首を掴んでいる

なんかものすごく息苦しそうだ

「上条、邪魔だから帰れ」

「わがっだ・・・」

苦しそうな声で答える

「確かにお前なら大丈夫だろう・・・でも一応言っておく、絶対戻って来い」

と上条が言ってくる

こんなキャラだっけ？

まあいい

そして上条はどこかへ消える

「さて神裂・・・これで俺はようやく本気が出せるわけだ・・・」

そう言うのと神裂はいきなり攻撃してくる

「『唯閃』」

俺はそれをまた阿修羅・解で防ぐ

そして

「ノヴァ思念体・・・星空間」

星空間を展開し神裂ごと包む

「なっ！」

「さてと・・・もうお前はロクに動く事も出来ない・・・降参する
なら今のうちだ」

そういうが神裂は

「そういうわけにはいきません」

と答える

「そうかい」

そして俺は神裂にドラゴンテイルを横薙ぎに振るう

神裂はそれを心鬼紅骨で防ごうとするが体が重くてうまく動けない
のか簡単に吹き飛ばされる

「倒れる前に説明しとくわ」

俺は星空間の説明をする

「この空間では俺が敵とみなしたものは能力の50%も引き出せない。逆に俺は能力を何倍もの力で使える。お前に勝ち目はないよ・・・諦めてイギリスに帰れ」

「そうはいかないですよ・・・私はインデックスを保護しなければ帰れません」

「そうか・・・」

そう言うのならばしかたがない

俺は神裂の後ろに一瞬で回り

後頭部に手刀を当てて気絶させる

「・・・ぐっ！」

短い声を上げて神裂は倒れた

そして俺は星空間を解く

するとステイルが現れた

「神裂を倒すとは・・・君は一体何者だい？」

ステイルが聞いてくる

「ただの一般人だ。お前も戦るってんなら相手になるけど？」

俺はステイルに少し殺気を交えて言う

すると

「・・・いや、やめとくよ。本気の神裂を倒した奴に勝てるわけない」

「そうか・・・なら帰れ。ホレ」

俺は神裂をステイルに向かって投げる

ステイルはそれを受け止める

「それじゃまた3日後に・・・」

と聞こえないように呟き俺は空間移動で寮へ帰る

そして自分の部屋のベッドにぶっ倒れる

「あー・・・疲れた・・・」

そしてそのまま寝た

しばらくは何もないだろうから・・・暇でも持て余そう

7月24日? 「心鬼紅骨・・・てどっかで聞いた事あるようになって何でお前が

そんなわけで神裂第2ラウンドでした

神裂の刀はどうしようか本当に困ったのですが最終的には心鬼紅骨になりました

今回は柴葉が武器調達です

まあ武器といっても本編で使うことはほとんどないでしょう

雑貨家業デパートに行かせたかっただけです

それではまた次回く

7月25日「武器？いらなくネ？」（前書き）

なんか書きたかっただけです

一応、武器持たせたかったんで

前回のあらすじ

神裂に2連勝じゃあアア

これだけですネ・・・

葉「適当だな・・・神裂に心鬼紅骨なんて持たせやがって・・・」

いいじゃないカ

葉「おまえ見てないよな・・・」

まあそうだけど・・・

それじゃどぞ

7月25日「武器？いらなくネ？」

「武器？」

いきなり土御門が言ってきた

「にゃー一応持っておいた方がいいぜい。たしか能力の使用を妨げるようなのを最近スキルアウトが使い始めたからにゃー」

キャパシティダウンとかAIMジャマーのことか・・・

多分俺には効果ないと思うんだけど・・・まあいいや

「分かった。で、どこにあるんだ？デパート雑貨家業って」

俺は土御門に聞く

すると土御門は俺に場所を教えてくれた

「ついでに潰してきてくれにゃー。仕事だ、俺が今教えた雑貨家業を潰してこい」

いきなり口調を変えるのはやめてほしい

「・・・というかなんで？あそこって暗部が武器を買うために必要なんじゃない？」

「まあいろいろ事情があるらしいにゃー」

「わかった。じゃあ金はいらないか」

「ああ」

という事なんで俺は武器調達に行く事にする

で、道中スキルアウトに絡まれました・・・と

「へっへっへ」

「クククク」

気持ち悪い笑いしやがって

「なんか用か？」

「特にねえよ。ただの能力者狩りだ」

「いや意味わかんねえし・・・能力者狩りって」

「やっちまえ」

「「オオオオオオオオオ」」

誰かがそういった瞬間スキルアウトがこっちへ殴りかかってくる

俺は殺さないように電磁^{ショッカー} nを使う

「ぐあっ」

ちっ！はずしたか・・・

一人しか倒せなかった

「ククク・・・」

「なに笑って・・・！？」

すると何か甲高い音が流れた

「キャパシティダウンか・・・」

「よく知ってるじゃねえか・・・これでお前は能力を使えっぶ」

俺はスキルアウトの一人の顔面をぶん殴る

「能力・・・ねえwww」

意外と効果あるんだな・・・あれ・・・

俺もうまく能力が使えないようだ・・・

ライズも30%も出せてない

まあスキルアウトにやじゅーぶんか

「能力が使えないとか俺には関係ないんだ・・・よっ！」

もう一人ぶん殴る

すると

「てめえ・・・調子乗るなよ・・・」

一人のスキルアウトが銃を突きつけてきた

「・・・あーりやりゃー大ピンチ」

さすがに拳銃はまずいかなっと・・・

「死ね・・・」

スキルアウトが引き金を引こうとする

その瞬間

「ぐあっ！」

誰かにスキルアウトが殴られる

そこには

「たく・・・一人相手に群がりやがって」

黒妻綿流が立っていた

いや登場時期おかしくね？

もうちょい先だと思っただけだな

上着脱いでるし・・・

なぜ脱ぐ・・・

背中には蜘蛛の刺青が入っている

しかもSって入ってるし

「幻影旅団の方ですか？」

やってみたかったので一言

「幻影旅団って何だよ・・・」

呆れ顔でツッコまれた

「じゃあ地雷亜さん？」

もひとつ言ってみたかったこと

「だから誰だよ！」

大声で突っ込まれた

「知らないならいいや・・・」

ちなみに俺たちはさっきからずっとスキルアウトたちをボコしてる

そして最後の一人を吹っ飛ばした途端

後ろから肩を撃たれた

いて・・・

「おい！大丈夫か！？」

「問題ない」

撃ってきた奴の頭を踏み潰してスキルアウトは全滅した

「あーいつてー・・・」

撃たれた肩イッテェ・・・

俺はライズで治癒力を底上げし肩を回復させる

10分ほどで治った

「お前の体どーなってんだ？」

黒妻が突っ込む

「まあ異常なんだよ色々・・・」

まだキャパシティダウンは流れてるしたまに電磁、nも使っていたので能力で治したとは思わなかったろう

とりあえず俺はキャパシティダウンを蹴りで破壊する

「だからホントどーなってんだよ・・・蹴りで車が壊れるか？」

また突っ込んできた

「はっはっは」

「助けなくても大丈夫だったかな」

「いやさすがに頭撃たれたら死ぬと思う」

「『思う』だけで確証はないんだな・・・まあいいや・・・またそのうち会うことがあったら会おうや」

「ああ」

そして俺は黒妻と別れて武器を買いに行く

ようやく雑貨家業に着いた

ここまで来るのに何回スキルアウトに絡まれたんだ俺

絡まれてる奴も助けたりしてた分余計に疲れた

「しかもどいつもこいつもキャパシティダウンやらAIMジャマーやら使ってきやがるし……」

大抵は電磁、nのみで戦っていたがたまに他のも使っていた

まあそれは置いておこう

俺は雑貨家業に入る

「いらっしやい」

なんか奥に中学生ぐらいの女の子が下着だけでつるされている

売春？

「どのようなご用件で？」

俺は無視して土御門に電話をかける

「こいつ潰しちゃっていいんだよね？」

『お前……潰す対象の前でそんな電話するか？』

俺がその会話をした途端に雑貨家業がこちらに銃を向け撃ってくる

俺は『弱者の^{チキンソウル}パラダイム』で弾丸を天上にはらい飛ばし顔面にヤクザキックを喰らわせる

……つか俺本当に蹴り好きだな……

「武器くれやww」

「ふぁふいつふぁー」

多分アイサーとでも言ったのだろう

俺は奥にある武器をネメシスの時空間に収納する

こんな事も出来たのか・・・便利すぎる

「土御門、終わったぞ。後、女の構成員連れてきてくんない？なんか強制売春みたいなのやってさ。一応助けといたほうがいいかなと思いやして」

『お前人に口調変わりすぎだろとか言ってるが・・・お前も結構変わるな・・・分かった女の構成員な』

「あと服ね？一着でいい」

一人しかいないし

俺はつるされている女のロープを斬る

ついでにYシャツを脱いで渡す

「もうすぐ人が来るからそれまでそれ着とけ」

「あ・・・」

なんか言いたそうにしてる

「なんだ？」

「ありがとう・・・」

「どいたしまして・・・と、こいつは殺しといた方がいいんかね」

俺は倒れている店員の方を向く

「うっ・・・くそ」

すると店員は起き上がってくる

俺は馬乗りになり銃を目に突き付けた

突きつけたというより突っ込んだ

眼球が奥に押しこまれこいつが苦しそうな悲鳴を上げる

「まあ本当はこんな事したくないんだけど・・・仕事だしな・・・」

「ひい！許してくれ！」

「あー・・・許すというかなんと言うか・・・まあいいや」

俺はこいつの頭をぶん殴り気絶させる

そしてデリートスパイダーで記憶を完全に消して

「一回だけチャンスやるから出直せ・・・といってももう何も覚えてないか」

ついでに押し込んだせいでつぶれている目を治した

甘いなー俺

すると土御門と女の構成員が一人やってくる

「おっす土御門。こいつ生かしてあるから一応、殺さないでおいでくんね？大丈夫、記憶は消してあるから。今日は気分的に殺したくねえんだよ」

適当にごまかす

本当はその方がおもしろそうだから

ガッシュに出てくるゼオンみたいな感じ？

「・・・分かったにゃー。記憶を消してあるなら問題ないだろうにゃー」

「というか高校生のうちから前科一犯ってどうなんよw」

「暗部に入った時点でもう遅い・・・というかお前から入ったんだろう？手を血に染める覚悟ぐらい持つとけ」

「持ってるよ。言ったら、今日は気分的に殺りづらいと」

そんな会話をしていたらさっきの女の子が話しかけてくる

「あの・・・Yシャツありがとう・・・」

「ああ、どいたしまして。んでお前これからどうするよ」

「さすがにもう表には戻れないだろうからグループに入れるのかな
さそうだにゃー」

「そだな・・・一応能力とレベルとか聞いといった方がいいか？」

「えっと・・・能力は氷結能力のレベル4です・・・」

・・・どうりアクション取ればいいんだろう

なんか随分と普通なのか珍しいのか微妙なのが来たな・・・

つかこれで原作は見事にぶっ壊れましたな

少なくともSS1巻とか15・19巻は

「氷結能力か・・・名前は？」

「杉原百合です・・・」

まあこんな感じで自己紹介した後

彼女はグループに入った

その後俺は家に帰り寝た

7月25日「武器? いらなくネ?」 (後書き)

・・・なんだこれ

黒妻出してよかったのかどうか今だに微妙な気持ちですね

まあいいや

とりあえずオリキャラ3人目です

こいつは転生者じゃありません

ただの中学生です

ちなみにチャイルドエラー

出番はしばらくありません

次回はどうすっかな

それではまた

7月26日「風紀委員の仕事」(前書き)

次回まで日常編(短えww)だと思います

今回は前回が暗部だったので今度は風紀委員です

それでは前回のあらすじ

武器を買いに行く

←

スキルアウトに絡まれる

←

黒妻と一緒にボコす

←

雑貨家業に着く

←

ボコす

←

終わり

的な感じ？

それじゃどうぞ

7月26日「風紀委員の仕事」

177支部にて

「あっぢい」

俺はぶっ倒れかけていた

「大丈夫ですか？柴葉さん」

初春が聞いてくる

全然大丈夫じゃない

だって今日の気温39度だぜ・・・

しかも支部の冷房が昨日なぜか壊れ・・・

ふざけんな・・・俺を殺す気か

「大丈夫・・・と言いたいが全然大丈夫じゃない・・・てか初春や白井はよくへーきだな・・・」

「なればどーってことないですわ」

「平気じゃないですよ・・・」

よく見ると初春は全然大丈夫そうじゃない

ぐだーっとしてる

説明もめんどいわ

気付かなかったのは俺も今日の暑さでぶっ倒れかけているからだろう

「なあ白井・・・」

「なんですの？」

「俺が多重能力者ってこと何人ぐらい知ってんの？」

俺は白井に聞く

「177支部の方は大体知ってますわよ？」

予想外の答え・・・と言うほどでもない

「マジで・・・じゃあ能力使っていい？氷結系の」

「そんなのがあるなら早くして欲しかったです」

初春がこっちを見て言ってきた

よし

「ディープフリーズ
『氷碧眼』」

部屋を冷やすぐらいまで手加減する

すると

「すずしい」

支部の人たちは涼しそうにしているが

俺はなんか無駄に体力を使い

ダウン

「疲れた・・・」

とりあえず部屋は冷えた

そんで一時間ぐらいたった頃

「よっしこれで最後」

最後の一枚の書類が終わった

次は見回り・・・最悪の気分

「あっちい・・・」

外はとてつもなく暑い

さっきまで涼しい部屋に居ただけに辛い

「ん？」

すると女の子が不良の集団に路地裏へ連れて行かれるのが見えた

助けるか助けないか

・・・あれって原作キャラじゃないよな・・・

「しゃーない・・・」

とりあえず助けに行く

「おいなにやってんだ」

行ってみるとそこには不良が

「123456・・・13人って・・・お前ら女一人相手にすんの
にそんなに必要なのか？」

たくさんいた

「大丈夫か？」

俺は女の子に問いかける

「は、はい大丈夫です・・・」

「おし。そんな不良狩りに行きますか」

俺がそういうと不良達がいつせいかかってくる

「死ねエエ」

「ぶちのめしてやらあ」

「ひやはは」

なんかアホばっか

俺は不良が自分の半径10mに近づく前に日輪・天墜を落とす

その瞬間不良が固まった

「死にたいんなら近づいて来い・・・もう一発落とす」

そういった瞬間に不良は一斉に逃げた

「」「」「ぎゃあああああああああああああ」「」「」

「化け物お！」

「死ぬうううう」

「助けてえええ」

うるせ・・・

まあいいや

「そいじゃーな」

「あ・・・えと・・・ありがとうございました」

女の子がお礼を言ってくるので適当に返し

支部に帰る

「つかれた・・・」

支部に帰るまでに不良を迎撃した回数・・・8回

最近遭遇率が下がった分昨日今日で一気に遭遇したな

なんだこの不良を引き寄せる体質

馬鹿神のせいか・・・

そう思ったら

『私のせいじゃないよ!』

「うわっ!びっくりした・・・」

いきなり神に怒鳴られた

まあいい

俺は支部の扉を開ける

「あ、大丈夫ですか？」

いきなり初春が聞いて来た

「ん？大丈夫だけどなんで？」

「さっきから警備員に不良を検挙したという連絡がたくさんありまして、それを拘束したのが柴葉さんだって言ってたから・・・さすがにあんな回数絡まれたと聞いたら心配で」

「あー大丈夫だからしんぱいすんな」

「そうですか」

さて・・・そろそろ帰りますか

すると

「明日プールでも行かない!？」

支部長が風紀委員達に聞いてくる

「」「なんで?」「」

全員が同じ返答

「友達がプライベートプール借りっぱなしで明後日返すんだけど明日は使えないらしいからよかったら貸すよって言ってた」

そんなわけで明日はプールに行く事になった

ついでに友達も誘って来いとのこと

上条と土御門でも呼んでやるか・・・

って上条は怪我してっから無理か

土御門と青髪あたりでも呼びますか・・・

青髪と土御門たぶんテンション上がるだろうな・・・

青髪を見た女性陣の反応が見てみたいww

・ ちなみに風紀委員177支部にも男性陣は居ますよ？少ないけど・・・

7月26日「風紀委員の仕事」(後書き)

てなわけで次回はプールです

上条は怪我はしてますが眠ってはいません

でもプールには入れないでしょうね

次回の次はやっと一巻が終わるか終わらないかぐらいですかね

それではまた次回

ちなみに支部長が言ってた友達と言うのは暗部関係です

7月27日「プールにて・・・」(前書き)

前回言ったとおりプールネタです

前回のあらすじ

暑い・・・

←

見回り

←

終わった

←

支部長がプール行こうと言い出す

←

青髪と土御門も呼ぶか・・・一応、上条も

←

終わり

こんな感じ

葉「毎回思ったけどあらすじこれでいいの？」

いいんじゃない？

それじゃどぞ

7月27日「プールにて・・・」

「・・・と言うわけだ・・・どうだ土御門、青ピ」

俺は土御門と青ピをプールに誘う

青ピは「どうだ、つ」あたりでもう「行く!」と凄い返事をしてきた

土御門も

「女の子の水着が集まるところに行かないわけないにゃー!」

とのことだ・・・変態どもめ・・・

上条も誘ってみたがああ怪我では無理だったようだ

吹寄も誘っては見たがダメだった

青ピの暴走をとめるのは俺の役目ですかい・・・誘ったの俺だけど

そんなわけで3人で行く事になった

「ウイース」

俺は既に集合場所に集まっていた御坂、白井、初春、佐天に話しかける

支部長はまだ来ていないようだ

まあまだ集合時間の15分前だし

「遅いわよー」

「遅いですよー」

御坂と白井が言ってくる

「いやまだ集合時間にもなってないじゃん・・・」

「10分前集合って言葉しらないの?」

「いやまだ15分前だからな!」?

「そっちの二人は?友達?」

御坂が後ろの奴について聞いてくる

「まあ・・・友達?」

「何で疑問系なんだにゃー」

土御門が突っ込む

「きゃっほおおおおこんなかわいいggもArk」

青ピがなにか余計なことを言おうとしたので黙らせる

「「うちの馬鹿があほな事いいだして悪かった（にゃー）」

一応謝罪

「あ、はは・・・随分個性的なんですね・・・」

佐天が呆れている

「この金髪が土御門で青い髪した変態が・・・青髪ピアス」

「名前は!？」

「こいつの監視に上条も呼ぼうと思ってたんだけど・・・あいつこの間怪我してな・・・今プールに入れるような状態じゃないし」

「上条・・・ってあのセブンスミストに居た人ですか？」

初春が言う

「よく覚えてたな・・・」

「私、記憶力には自身あるんです」

初春が自慢げに言ってくる

「ふうん・・・まあつれてこなくて正解だったか・・・御坂が居るんじゃない」

「どういう意味よ！」

「いやお前上条見るたびに喧嘩売ってるし……しかも超電磁砲まで容赦なく……」

「ぐっ……」

さすがに反論できないようだ

「御坂さん……」

「おねえさま……」

初春と白井が呆れている

そんなことをしていると支部長が来た

「ごめんごめんみんな集まってたか！」

「まだ10分あるから大丈夫っすよ」

「そうか、なら大丈夫だな。つとどうやら他の風紀委員も来たみたい」

遠くの方に何人が見えた

「よお宮咲、久しぶりだにゃー」

土御門が支部長に話しかけるって

「知り合いか？」

そう聞いたら支部長が

(暗部でね☆)

と言ってきた……って

「えええええええええええええええええええええええ」

俺は驚いて声を上げる

御坂達がなんだなんだとこっちをみる

「くすくす」

支部長が笑っている

俺はなんでもないと御坂たちに言った後

（どういふ事ですか？支部長……）

テレパシーで話しかける

（私も暗部でいろいろやってね・・・グループの一員でもあるが基本はフリーだ）

原作にこんな奴いたか・・・？

（それは私が君と同じだからだよW）

爆弾発言

ちょっと待て・・・それをここで言うか

あまりのことに俺は呆れる

ここでもばらすか普通・・・

（あんたも転生者とも言うつもりですか？）

（その通りだよ柴葉君？）

見事に暴露してくれた

どんなリアクションすればいいのか分からない

（ちなみに神から私が貰ったのは魔術の使用による拒絶反応が起こらない体と13000冊を軽くこえる程度の魔道書の知識だよ。ちなみに他の物語の魔道書の知識もあるからそういうのも使えるよ）

（なんつーチート）

（PSI能力の方がチートだろう・・・日輪・天墜とか生命セフィの木ロトとか暴王とか）

それを言われると反論できない

そんな会話をテレパシーでしていると行く面子が全員そろった

そして俺たちはプールに向かう

「「ぶふお！」」

青ピと土御門が白井の水着と固法先輩の水着を見て鼻血を吹き出す

「なにやってんだお前ら・・・」

「こ・・・ここは天国か・・・」

これは土御門

「柴葉^{かみ}さまありがとう！」

これは青ピ

このとき俺は連れてこなければよかったと本気で思った

せめて上条が居てくれりゃーなー

なんか皆がこっちを軽蔑の目で見てくる

俺は土御門と青ピを起こしてプールに向かう

すでに御坂、支部長、初春、佐天は入っていた

早っ！

そこに俺、土御門（気絶中）青ピ（気絶中）が行く

先に二人を放り込む

すると

「ぶはっ！なんやなんや！」

「ちょ！おぼれる！」

起きたようだ

「気絶中の人間をプールに放り込む奴がおるかあああああ！」

青ピが突っ込む

珍しい事もあるもんだ

「まあまあ（笑）」

その後、白井、固法先輩もやってくる

そのほかの風紀委員の方々とその友人も来たので軽く準備運動をしてプールに入る

青ピが変な動きをしそうになったのでテレキネシスで水球プール（

人一人分）を作って閉じ込める

「ちょ！息が出来へん！がぼぼぼ」

「変なことしてたら御坂に殺されるぞ青ピ」

俺は青ピに忠告

「その前に溺れ死ごぼぼぼ」

俺は死ぬ前に解除して落とす

「あぼお！」

という悲鳴を上げた後はおとなしく遊んでいた

「ねえ」

すると御坂が話しかけてくる

「ん？なんだ？」

「さっきの水球プールってどんぐらいの大きさまで作れるの？」

予想外のことを聞いてくる

一応答える

「このプールの水全部使えば全員入れるぐらいの大きさに出来るぞ？」

すると

きている方々全員がやってみたいと言いつ出したのでやってみる事に
した

そして人ごとプールの水を持ち上げて球状にする

「おおおお」

「すげえ」

などなどいろんな感想がきた

喜んでもらえて何よりだ

これってPSYRENの原作でも祭先生がやってたな

結構おもしろし

そんなことをしている内にそろそろ完全下校時刻なので全員帰る

帰ったらインデックス戦か・・・

多分、小萌先生の部屋ではなく上条の部屋でやる事になるだろう

記憶はなんとか守りたいが・・・

まあなんとかなるだろう

そして俺は寮へ戻る

7月27日「プールにて・・・」(後書き)

今回はプールネタです

原作で何もなかった25～27までは日常編にしました

日常編で書きたいことがいくつかあったので

まだあるんですけどそれはそのうち

次回はVSインデックスです

上条の記憶をどうするか悩んでいます

そいじゃまた次回

7月27日? 「首輪」 (前書き)

禁書目録編クライマックス

前回のあらすじ

プール行って来ました

こんな感じですね

それではどうぞ

葉「今日の前書き短いな・・・」

7月27日？「首輪」

「おーっす上条、怪我の具合はどうだ？」

寮に帰った俺は上条の様子を聞く

「柴葉か。大丈夫そうだ。プールどうだった？」

上条が聞いてきた

「青ピが変態を発揮した」

そう言ったら上条が爆笑した

「はははははは！そりゃ大変だったな」

「水球プールに閉じ込めたらおぼれそうになってたぞ？」

俺がそういうと

「それおぼれてたんじゃね？」

呆れた

「それで、インデックスは今日中に保護するとか言ってたけどまだ魔術師来てないよな？」

「ああ、まだ来てない」

「インデックスは大丈夫そうか？」

「私は大丈夫なんだよ？」

インデックスが答える

「よかった」

そんな会話をしていると扉が開いた

制限時間

「インデックスを保護しに来ました」

「おとなしく渡してくれれば危害は加えないよ」

ステイルが脅すように言ってくる

「どっちがだよ・・・お前、俺ら二人に勝てる力あんのか？」

俺はステイルに脅しをかけるが

「君はともかくそっちの少年は手負いだしね・・・この間のように
は行かないよ？君も二人掛りなら勝てるだろうし」

二人掛りって・・・魔術師としてのプライドはないのか

いや・・・よく見ると歯を食いしばっている

プライドを捨ててまでインデックスを助けたいわけか・・・

そのために俺を倒したいのか
なるほどな

でも

「二人掛りで勝てると思うなよ？ 勝ちたいならイギリス清教全員で来てみなよ。それでも足りないならローマ正教、ロシア政教とかもつれてきていいよ？」

そう言ったら

「お前なんでそんな詳しいの？」

と上条が言ってきたので

「企業秘密（笑）」

とS笑いを浮かべていった

そんな事をしていると

「まって」

インデックスが間に入ってきた

「これ以上この人たちを傷つけないで！」

原作どおりか・・・

少なくとも俺は無傷で勝てると思う

ノヴァ
暴王状態で挑めば誰であろうと傷一つ付けられないだろう

能力測定って意外と的外れ？

第2位どまりです

まあでも実際、一方通行と戦った時もパイロクイーンやトリックル
ームが無いとキツかったし

少なくとも負けはしないが勝てもしなかったと思う

だっってお互い攻撃が効かないんじゃないんじや埒が明かん

こっちは渦を展開してるから相手も突っ込めないし

あっちは能力で避けるから当たらないし

第2位は納得いかないが一方通行より暴王が上とも言いがたいし

そんな事を考えてたらインデックスが倒れた

それをステイルが支える

そして

「今夜午前零時」

そう言った

「その時刻にすべて終わらせるよう術式を組み上げる」

すると

「・・・まっ・・・待てよ！待ってくれ！それがあんたたちの出した結論かも知れねえけど」

上条が説得しようとする

「科学ならまだわからねえ！」

そして色々な説明をするが

ステイルに一蹴される

「見ろ！今のこの子を目の前にして同じ台詞が言えるか？」

ちょっと試したい事があるから待ってろなんて言えるのか？

そう言って来た

その言葉に上条は黙る

さらにステイルは懷から十字架を取り出し上条に見せる

「これはインデックスの記憶を殺すのに必要な道具だ。君の右手が触れれば魔女狩りの王と同様、それだけで力を失うハズだ」

そしてそう言った

「どうした・・・やってみろ！異能者！」

その言葉に上条は右手で十字架に触れようとするが

途中で手を引いた

「・・・」

さて・・・どうすっかな・・・

よし

だが俺はそれを見て

十字架に向けて暴王の流星を放った

そして十字架は半分を残して消滅した

その瞬間

「・・・ぐっ！」

ステイルが俺の胸倉を掴み壁に叩きつける

「なんてことをしてくれた！」

そう怒りながらステイルは叫ぶ

後ろでは神裂が怒りの表情でこちらを見ている

上条は口を開けて驚いている

俺はほとんど無表情でお前アホかみたいな顔している

というかマジでアホかって思っている

俺はそれを

「お前らアホか？小学校からやり直して来い」

口に出した

「貴様っ・・・！」

ステイルは齒を食いしぼりながらこちらをにらみつける

だが

「お前らほんとにアホな。脳の15%も使ってたった1年しか生きられないわけないだろ？人間ってのはなあ元々脳の30%も使っていないんだぜ？よく考えてみる！インデックスが最初に記憶を消したのはいつだ！？もしも15%で1年なら7歳の時にとくに死んでるわ！！！！1年で15%も人間が使うか？世の中にはなあ！完全記憶能力者なんて探せばいくらでも居るんだよ！いや・・・いくらでもと言うほどではないかもしれないけどな！そのどいつもこいつもが1年ごとに記憶を消すなんて馬鹿なことをやってると思うのか！？はっ！アホらしい・・・みんなそろって天寿まっとうしてるっつの！！！！」

なげえな俺の説教WWW

まだ続けるはずだったがステイルが口を挟む

「ならなんでインデックスはこんなに苦しんでいるんだ！」

簡単な事だと俺は続ける

「お前さ、もし動物を飼うとする。そいつがものすごく危ないライオンとかだったとして・・・そいつを野放しにして飼うか？」

そう言ったら上条がようやく気付いたみたいな顔をする

「普通は首輪とか付けるだろ？もしくはオリの中にずっと閉じ込めるとか・・・10万3000冊ってのは野放しに出来るほど安全なものなのか？違うだろ・・・インデックスは首輪みたいなのが付けられてんだ！だから15%の要領で1年しか生きられないんだよ！というかそもそも前提がおかしいんだよ！脳にある一つの部屋が本で満タンになったからってなんで別の部屋を消すんだよ！意味ねえだろうが！」

そこまで言っただろうやく分かったようだ

神裂は膝から崩れ落ちた

ステイルは俺の胸倉から手を離して呆然としている

「・・・だったら・・・僕たちはいままで何のために・・・」

「まあまあ落ち着け。上条なら多分何とかできっから」

俺がそういうと

「いや俺かよ・・・」

上条が呆れながらこっちをみる

「こいつが・・・？」

ステイルが聞いてくる

「首輪の場所は大体検討付いてるけども・・・」

まあ口の中だろう

原作で知っている

でも時間もあるのですこし上条とステイルで遊ぶ

「もし場所が違ったら上条には大変な仕事をしてもらう事になる」

「「?」・・・どういうことだ?」

上条とステイルが聞いてくる

神裂は黙って聞いている

「まあつまりだな・・・インデックスの首輪は恐らく本人も気付かないようなところにあるのだろう。だが・・・俺が今、思っている

場所ではなかった場合・・・上条にはある所に触れてもらわねばならない」

「そのあるところって？」

「直接言ったらこの小説が18禁になるから分かりづらいように言おう」

ゴクリと3人が唾を飲む

「まあ神裂とインデックスを除く俺たちの急所があるところとも言っておこう・・・」

その瞬間ステイルが鼻血を噴出しながら倒れた

ズシーンと言うすごい音がした

上条は顔を真っ赤にしてフリーズ

神裂は一瞬フリーズしたがすぐに我に返って

「なんてことを言っているのですかあなたは!!!!」

と顔を真っ赤にしながら言ってくる

「落ち着け・・・俺が思っているところが違った場合だコレは」

「そうなのか?・・・でお前が思うところってどこだ?」

いつの間にか復活している上条が聞いてくる

まだ少し顔が赤いが

とりあえずまじめな空気を戻そうと（壊したの俺だけどw）俺はまじめに答える

「口の中」

「口の中・・・か・・・確かにインデックスでも気づかないだろうな」

上条が納得したように言った

「でもどうやって外すんだ？その首輪っての」

まだ混乱しているのかこの馬鹿は

「お前、自分の右手の力忘れたのか？」

「あーなるほど」

ようやく分かったようだ

そして上条はインデックスに近づき

「我慢してくれよ・・・インデックス」

そういつてインデックスの口に右手を入れる

すると

上条が何かに弾かれたように後ろに吹っ飛ぶ

『告―警告―index―Librorum―prohibitio
rum―禁書目録の『首輪』第一から第三までの全結解の貫通を確
認』

ほとんど機械のような声でインデックスはゆらりと起き上がりそう
言った

瞳には魔方阵が刻まれている

『10万3000冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先
します』

インデックスは冷たくそう言った

7月27日? 「首輪」 (後書き)

ようやく次回で1巻の内容が終わりそうだ

それではまた次回

葉「後書きも短い・・・だと!？」

疲れたんです・・・

7月28日「竜王の殺息」(前書き)

一巻の内容もようやくクライマックスです

一応日付は変わっているので28日です

原作より早く終わっているはずとかそんな批判はききません！

それじゃ前回のあらすじ

ステイルを軽く弄くってそんでなんやかんやでインデックスが暴走しました

まあこんな感じ

それじゃどーぞ(あらすじに関する批判は認めません！)

7月28日「竜王の殺息」

『警告―第3章 第3節 首輪の自己再生は不可能 対侵入者用の
ローカルウェポン
特定魔術 『聖ジョージの聖域』を発動します』

インデックスが機械のような冷たい声で言い放つ

するとインデックスの前の空間に亀裂が走る

そして

『竜王の殺息』が放たれた

そこでステイルが目を覚ます

「竜王の殺息！？ なっ・・・どうということだ！」

「あの子に魔術が使えるはずが！」

ステイルと神裂が言う

「見ての通りだ。インデックスは魔術を使ってる」

俺は二人に説明した

「僕たちは協会に騙されていたのか」

ステイルが呟く

「まあそうだろうな・・・でもインデックスの為でもあるんじゃないか？野放しにすればインデックスを危険視するものもいるだろう・・・そうになったらインデックスがどんな扱いを受けるか分かるだろう？」

俺は二人に説明する

ちなみに18巻から説明は持ってきました

あれ・・・19だっけ？まあいいや

「・・・つまりインデックスを危険だと思わせないように確実に協会から逃げないようにした・・・と」

神裂がそう言った

さすがに物分りがいいな

「そういうことだと思うぜ？」

さていい加減上条に手を貸さないと

見てみると上条の右手の処理が間に合わず右手が弾かれた

「やばっ！」

俺はトリックルームで上条を囲みさらにその上から斜めに超高密度のマテリアルハイを設置する

「助かったぜ！柴葉！」

「おう」

でもさすがに持たなそうだな・・・

そしてマテリアルハイが破られる

その瞬間

「Salvare000（救われぬものに救いの手を）！！」

神裂が魔法名を名乗り攻撃する

その衝撃でインデックスの体制が崩れ上を向く

そして竜王の殺息が天井を貫いた

・・・ってちょっと待て・・・原作だと小萌先生のアパートでしかも上の階だったからよかったけど

ここって学生寮・・・つまり

「なんだなんだ！？」

「なにがあったんだっておわあああ」

上に人がいる

あとでデリートスパイダーだな・・・

全員分・・・

上条じゃないけど不幸だ・・・

そんな事を考えていると

「気をつけて！それは竜王の殺息、伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です」

神裂が叫んだ

「余波の光の羽が当たっただけでも危険です！早くインデックスの元へ！」

するとインデックスが

『新たな敵兵を確認 戦闘思考の変更 戦場の検索を開始 現状上条当麻の破壊を最優先します』

恐い事をいいよった

インデックスは上条に向かって竜王の殺息を放つ

そこに

イノケン
「魔女狩りの王！」
ティウス

魔女狩りの王が割って入った

ナイスステイル！

「行け！能力者！！」

上条はインデックスの元へ走る

俺も上条の記憶は消したくないので行く

上条はインデックスのすぐ前までたどり着き結解のようなものに触れる

そして

上条の右手がインデックスの頭に触れた

『首輪

致命的なハカイ

こく

最

終　消　』

ブツンという電源の切れるような音がした

上条はインデックスの元に駆け寄り

「インデックス！」

と彼女の名前を呼ぶ

すると二人の上に一枚の羽根が落ちてくる

上条は右手で消そうとするが

失敗

そしてインデックスの上にかぶさるようにしてインデックスを守ろうとする

「やばっ！」

俺は反射的に右手を出してしまう

そして

右手が吹き飛ぶ前に弱者のチキンソウルパラダイムで払う

「セーフ！」

これ以上羽がこないよう自分と上条の上にマテリアルハイで壁を作る
そしてその下をしゃがみながら進む

低い位置に作りすぎた

羽根からは守れたが動きづらかった

「さて・・・どうするよ上条・・・」

俺は穴のあいた天井を指差す

そこには寮の上の階に住んでいた人たちが居た

「・・・不幸だ・・・」

翌朝っつーか朝

ステイルから手紙が来た

内容は原作どおりなんで割愛

書くのめんどいよ

なげーよ

とりあえず現状報告

天井については神さまに言って直してもらいました

ついでに上の階に住んでた人の記憶も変えてくれたらしい

その代わりこれから毎朝祈るようにと命令された

下界の人々の祈りと信仰で自分の小遣いとかが決まるらしい

上条にはそのせいで転生者とバラスはめになったが秘密にしてくれ
るらしい

上条の記憶も神様なら変えられると思っていたのだが幻想殺しは無

理だった

ここが小説の世界とは言っていない

自分が転生してきたと言う事だけだ

バラしたくなかった・・・でもしょうがないじゃない！天井ふっ飛ばしちゃったんだし！

仕方がないのもうその辺は諦めた

上条ならバラさないだろう

その代わりインデックスの御飯代は俺が受け持つ事になった

それもしょうがない

レベル5だから金も結構あるし

それでも上条の記憶を守ったのはなんか損した気がするがいいか

原作と大分外れてしまったために『樹形図の設計者』がちやんと壊れたかどうかが不安になったが

どうやらちゃんと壊れてくれたらしい

神が調整してくれたとのことだ

さて・・・明日から毎日祈らなければいけないのか

そのせいで俺の部屋にはキリストの像が置いてある

ちなみに十字架には掛けられていない

なんか自由の女神みたいなポーズしてる

神曰く

『キリストは私の父なんだけど自分が処刑されているものを信仰されるとうまくくらしいよ

一応自分を信仰してるから我慢してるけどって言ってた』

との事だ

キリスト像と言えば十字架に掛けられてるのが普通だと思ってたけどよくよく考えて見ればそうだよな

自分が処刑されてるところを像にして信仰されても嫌だよな

まあ仕方がないので毎朝祈るしかないか

忘れたら一回につき雷を落とすらしい

死なない程度に

恐ろしい・・・

さて・・・転生物のタブーを今回犯してしまった気がするが・・・
まあいいや

そして禁書目録編は終了した

次はなんだ？

黒妻出たしスキルアウトか？

7月28日「竜王の殺息」(後書き)

やっと1巻分完結ウウウウウウウウウ

ここまで読んでくださった方々ありがとうございました

これからよろしくおねがいします

次回から〇月〇日というのをやめようかと思ってます

今更ですがね

2巻以降は時系列とかが色々把握しづらいんです

丁度一卷も終わったので丁度いいかと

今回は多分、超電磁砲のスキルアウト編だと思います

それが終わったらポルターガイスト編ですかね

その後ようやく2巻です

それではまた次回

「スキルアウト？」（前書き）

こんにちはばふんです

今回から超電磁砲の話を少し進めます

スキルアウトやらテレスティーナやらなにやら

それでは前回のあらすじ

なんとかインデックスの暴走を止めた

←

天井がああああ

←

神に直してもらった

←

ついでに転生者とバラす羽目に

←

しかたない

とまあこんな感じ？

それじゃどーぞ

「スキルアウト？」

「能力者狩り？」

最近、スキルアウトによる能力者狩りが多発しているらしい

てかこの間、俺も被害にあったし・・・

簡単に潰せたけど

「ええ、ビッグスパイダーという組織の仕業らしく・・・こないだは婚后光子が被害にあったそうですわ」

原作ってかアニメ通り

まあ面白そうだし介入しよう

「婚后って常盤台のレベル4だっけ？」

支部長が白井に聞いた

「そうですの」

「スキルアウトねえ・・・そういや俺もこないだ絡まれたな」

「そうなんですの？」

「ああ、能力がうまく使えなくなる変な道具使いやがったんで・・・どーしょーかみたいなこと考えてたら幻影旅団の人が来て・・・」

こう言ったら白井が呆れ気味に

「幻影旅団ってなんですか・・・？」

と聞いて来た

「知らないならいいや。まあ最初の方は能力使えなくてもたいした問題じゃなかったんだが・・・頭に銃を突きつけられてな。そこに蜘蛛の刺青をした奴が来て」

「婚后さんと同じですか」

「一緒になってぼっこぼこにしてやった」

S 笑いを浮かべながら俺はそういう

「違いました・・・というか意識は失わなかったんですの？」

「まあ確かにひどい頭痛がしたけど俺には問題なかったな・・・俺の能力は使いすぎると頭痛くなるから」

「そーいや婚后はアニメで気を失ってたな」

「そんなに酷かったか？あの頭痛」

「ビッグスパイダーは最近違法の武器を使い始めましたからね・・・」

「

初春が言う

「能力者も対抗するのは難しいと？」

「そういうことですよ」

「そういえばビッグスパイダーのリーダー黒妻綿流は背中に蜘蛛の刺青をしてるらしいです」

初春が情報を言った

「蜘蛛の刺青ねえ・・・そういや俺や婚后を助けたやつも蜘蛛の刺青してたな」

「仲間同士の仲間割れかしら」

御坂・・・お前いたのか

「最初から居たわよ！」

御坂が電撃を飛ばしてくる

「地の文に突っ込むな。あと電撃飛ばすな。支部のパソコンが壊れただろうが！」

全滅だ

「うっ！」

「お姉さま・・・」

白井

「御坂さん」

初春

「とりあえず弁償？」

支部長・・・なんでニヤニヤしてんだよ

まあ置いておこう

奴らのアジトは第十学区の通称ストレンジと呼ばれるところにあるらしい

なんやかんやで行く事になり

今はそこでスキルアウトに絡まれている

原作より人数ふえとる

「姉ちゃんたち何してんの？」

「オイオイ風紀委員かよ」

俺は眼中になしということか？

というか

「ウゼエ・・・」

といったら

「ンだてメエ！！」

「調子乗ってんじゃねえぞ！！」

こっちに二人ぐらい襲い掛かってくる

「はぁ・・・」

俺はマテリアルハイを自分の前に作る

二人のスキルアウトが顔面からぶつかった

「うぼっ」

「ぶべー！」

ずるずるという音をたてながら地面に落ちた

「次は誰が来んの？はげ？のっぽ？それとも馬鹿？」

適当に名前を付ける

するとスキルアウトが切れた

「なめんなこらあああああ」

その後

「待ちな」

後ろから声が聞こえる

「女の子にちよっかい出すのはいただけねえな」

牛乳を飲みながらそういつてくる

「おっす久しぶり」

「あれ？お前あん時の」

「柴葉葉。さて・・・こいつらどうするよ」

俺と黒妻がそんな会話をしていると

不良が間に入ってくる

「ああ？なんだテメエは」

めんどくさいんで

「あんた・・・容赦ないわね」

「あんなの当てたら死んでしまいますわ・・・」

御坂と白井が言ってくる

「俺が出なくても良かったじゃねえか」

黒妻も言ってくる

「来なけりゃ良かったじゃんw」

そんでは原作どおりに屋上で会話している

黒妻が話し終えると

「でも・・・スキルアウトはスキルアウトでしょ？」

と御坂が言う

ひでーなお前・・・

「ハハハ、手厳しいな」

黒妻が笑いながら言って

「で・・・お前らは何しにここへ来たんだ？」

と聞いて来た

すると白井が思い出したように

「そうですね。私たちビッグスパイダーという組織を追って」

そういうと

「その名前……ここじゃあまりださない方がいいぜ？」

そう忠告してきた

「では黒妻綿流という名前に心当たりは……」

「しらねえな。じゃ……気をつけてかえんなよ？」

そういつて黒妻はどこかに行く

でなんやかんやで他もあたる事にした

道中なんとか能力者狩りに出くわしたので

能力を使わずにフルボッコにしてみた

ごめんなさい嘘です

『ライズ』使いました

で今俺たちはビッグスパイダーのアジトに居る

「な・・・なんだこりゃ」

ボッコボコにしたビッグスパイダーのメンバーを放り投げたら他の奴の一人がそういった

俺たちは

「「風紀委員だ（ですの）」」

とビッグスパイダーに向かって言う

すると

「なんだ？」

「ガキがふざけてんじゃねえぞ」

と不良たちがざわめく

うるせえな

すると奥から偽黒妻が現れる

「ああ？風紀委員だ？なんのようだ・・・」

偽黒妻が聞いてくる

「黒妻綿流ですわね？能力者を対象とした暴行事件の首謀者として拘束します！」

「ほう・・・拘束ねえ・・・悪いがおままごとにつき合ってる暇はねえんだ」

そういうと御坂が臨戦態勢に入ろうとする

それを白井が止める

「こんな奴らわたくし一人で十分ですの」

すると

「ほう・・・十分かどうか・・・俺らの実力見てからにしろよなあ！」

そう言ったとたん甲高い音が流れる

キャパシティダウン

御坂と白井は頭を抑える

「どうした？」

偽黒妻が聞いてくる

「くっ！」

白井はテレポートしようとするが

「飛べない!？」

できなかった

「どうしたお譲ちゃん・・・一人で十分じゃなかったのか!？」

偽黒妻が白井に蹴りを放つ

「黒子!このっ・・・!」

御坂が電撃を放つが威力もコントロールもままならない

「キャパシティダウンってめんどくせーの使いやがって」

俺がそういうと

「へえ・・・知ってんのか?こいつは音が演算能力を下げる機械でな・・・まあ俺たちにはただの甲高い音にしか聞こえねえけどな」

と偽黒妻が自慢げに言ってくる

「こんなもの・・・ッ・・・一体どこで・・・!」

「黒妻さん許してくださいって言えば許してやるけどな」
すると

「へえ・・・今は黒妻って言うのか」

黒妻がやってきた

「あいつです！黒妻さん！」

とスキルアウト達が騒ぐ

だが

「黒妻・・・さん」

偽黒妻は聞いていない

驚きながらあっちを見ている

「おい柴葉だっけ？お前さっさとコレ止めたらどうだ？」

黒妻がキャパシティダウンを指差す

「そだな」

「あなた止められたんですの！？」

「平気で動いてる時点で分かるだろ」

「アンタねえ・・・」

「怪我したんならあとで治してやるから」

そういつて俺は車に蹴りを入れる

すると車が3バウンドして吹っ飛んだ

「「「「「なあ!？」」「」「」「」

「おまえ相変わらず規格外な・・・」

黒妻が呆れながら言ってくる

「よう本物の黒妻さん」

俺がそういうと

「知ってたか」

と黒妻が言ってくる

「どういことですか?」

と白井が聞くが

「おい大丈夫か?そっちも」

と御坂と白井に聞く

「え・・・ええ」

と白井は答える

「コレ持ってきてくれ」

と言って黒妻は御坂に牛乳を渡す

そして

「蛇谷・・・久しぶりだな」

と言った後

いくらか会話した後に蛇谷がスキルアウトたちに命令する

そしてスキルアウトたちが武器を構えた

そして一斉に襲い掛かる

近くにいた俺にまでかかってくるが

「固定解除」

実は自分の周りにマテリアルハイを設置していたので不良たちがまとめてつぶれた

「「ぐえっ!」「」」

「おーい大丈夫かー?」

どうやらあっちも終わったようだ

蛇谷はそこから一気に逃げた

ほかの生き残りも一緒に逃げる

「貴方が本物の黒妻ですね？」

白井が黒妻に聞く

「昔はそう呼ばれてたな・・・」

「あいつは黒妻じゃないの？」

御坂が聞く

「昔は蛇谷って言ったんだけどな・・・今は黒妻って言ってるらしい」

そして黒妻は御坂から牛乳を受け取り牛乳を飲む

そして

「やっぱり牛乳は「ムサシノ牛乳」

そう言おうとした途端誰かが割ってはいる

「「へ？」」

御坂と白井が声を上げる

「固法先輩！」

すると

「スキルアウト？」（後書き）

スキルアウト編

文才ほしい・・・

なんか酷くてすみません

やっぱり難しいです

次回で終わると思います

その次はテレスティーナ編

それじゃまた次回

「ビッグスパイダーが何ぼのもんじゃあああああいつて2回目!？」
(前事

今になってスキルアウト編をやった事を後悔してます

だってしょうがないじゃん!旅団の方ですかやりたかったんだもん!

葉「やらなきゃよかっただろうが・・・」

風紀委員の立場上しやーないだろう!

前回のあらすじはお休みします

葉「おい!」

「ビッグスパイダーが何ぼのもんじゃあああああいつて2回目!?!」

黒妻と固法先輩が知り合いだったらしい

「マジで?」

「あんた驚くの遅い!」

「そういう性格だから」

あっちでは黒妻と固法先輩が話している

つと黒妻がどっかいった

「とりあえず今日は帰るわ」

んで帰り道

「へっへっへ」

「ククク」

どうやら能力者狩りのようだ

てかさっき潰したはずなんだけどな

残党?

そんなことを考えてたら襲ってきたのでライズで撃退

そして俺は一回寮に帰った

翌日

学園都市第十学区、通称ストレンジの一斉摘発を行うらしいという情報を初春が手に入れた

とまあ支部であったことはこれだけ

俺は第十学区のビルの屋上に居る

「やつほー固法先輩」

俺は屋上で多分景色を眺めていた先輩に話しかける

「柴葉君・・・」

どうやら気付いたようだ

「みんなが心配してましたよ？少しは顔見せたらどうですか」

「・・・」

「まあ先輩が元スキルアウトでも俺は気にしませんよ。もしそこに戻るとしてもね。居場所ってのは人それぞれだし・・・それに・・・」

俺はもっと深い闇の中にいるし

「それに先輩がいないと仕事が終わらないんですよ!!!!」

ごまかしもかねて全力でそういつたら先輩がずっとこけた

でもあれ？話が変わったような・・・

「・・・仕事？」

「はい・・・書類仕事如山みたいになってまして」

とこんな事をやってたら御坂がやってきた

「やっぱりここだったんですね・・・ってなんで柴葉もいんの？」

「御坂と同じような目的」

「ふうん・・・まあいいわ・・・」

そう言って

「固法先輩、こんな所で何してるんですか」

御坂は問う

「ひょっとして・・・明日の一斉摘発のこと黒妻に知らせに来たんですか？」

「・・・」

「ここは固法先輩の居る所じゃないと思います！」

・・・酷い言い方するな御坂・・・

でも

「そうね・・・ここは私の居場所じゃない」

そう言った

「でもね・・・それを私に教えてくれたのは黒妻なの・・・」

そして固法先輩は自分の過去を話した

「そして・・・今の私が居る」

「でも・・・だからって・・・！先輩は風紀委員じゃないですか！犯罪者を逃がすなんておかしいじゃないですか！」

お前も部類で言えば犯罪者だと思うぞ？

暴行、場合によっては殺人未遂

不良に襲われた場合は自己防衛で済むが上条にしてるのは上記の通りだ

コレを言ったら御坂は何も言えなくなるだろう

でも言わないことにしてやろう

「それって・・・」

「まあ間違ってるよな」

御坂が続けようとする黒妻が割り込んでくる

そして御坂と固法先輩が振り返る

「先輩・・・」

今のは固法先輩です

ややこしい気がするんで一応

「アレから2年か・・・」

そして黒妻が2年前のことを話す

「この景色も、もう2度と見ることは無いと思ったんだけどなあ・・・
お前にも、合わないほうがいいと思ってた・・・会えばまた・・・」

「また一人で乗り込むつもりですか・・・あのときみたいに」

と原作どおりに話している

「御坂・・・さっきお前犯罪者がどうのっていったけどお前が上条にしてる事も犯罪だからな？」

俺は空気を読まないで言ってみた

すると

「な！あんたなに言ってるのよ！」

「いやだって・・・お前あれ暴行、悪くて殺人未遂だぞ？」

「だってあいつがムカつくから悪いんじゃない！」

「その動機、スキルアウトなんかよりずっと性質タチ悪いぞ？」

「ぐっ！」

まあそんな話をしているとどうやらあっちも終わったらしい

黒妻はどこかへ去っていく

途中、固法先輩もついていくといったがダメだった

翌朝

警備員による一斉摘発が始まるようだ

俺たちは第十学区に居る

そして固法先輩に腕章をつける

「うん！ やっぱりこうでなくちゃ！」

どうやら白井がレポートで腕章を持ってきたらしい

俺たちはそのままアジトに向かう

道中何度か警備員を見た

そして

アジトについた

「待ちなさい！」

固法先輩がそう言うと思妻がこっちに振り返る

「美偉・・・」

そして風紀委員の腕章を見て

「フッ・・・かっこいいじゃねえか」

そういった

それを聞いた固法先輩も軽く笑う

そして

「蛇谷クン？あなた随分下衆に成り下がったわね」

「うるせえ！俺たちを裏切ったお前に何が分かる！」

蛇谷が叫ぶ

そして奴らが武器を構えるが白井にダーツで貫かれる

キャパシティダウンは昨日破壊済みだが新しいのを貰ったらしいが

御坂に壊されるってアレ？

俺、出番なくね？

と思ってたが

「よう・・・多重能力者・・・いや、P S I能力者」

なんか話しかけられた

と言うか

「なんでお前知ってるんだ・・・？」

「まあいいさ・・・ククク」

「お前・・・ビッグスパイダーのメンバーじゃないな？暗部の人間か・・・？」

まったく・・・俺がここに来てから原作ぶち壊した・・・

こいつも転生者だったりすんのか？

そいつは厄介だ

「まあな・・・アトラスってチームだ・・・転生者はお前だけじゃない・・・」

やっぱりか・・・めんどくさい

つかあの馬鹿神！どんだけ仕事まじめにやってないんだよ！！！！！！！！！！

「しゃーない」

俺は転生者に向かってイクスプロジアを放つ

だが

「不味い炎だな・・・オイ」

「炎を喰った？お前・・・能力は滅竜魔法ドラゴンスレイヤーとか言うなよ？」

「よく分かったな」

「まる分かりだ」

「まあ今回は争うつもりはない。ただの挨拶だ・・・争うのは暗部抗争の時にな・・・」

「・・・分かったよ・・・」

つか今の話アレイスターに絶対聞かれたな・・・

ちくせう・・・困ったな

「P S I能力か・・・面白い・・・アトラスの奴らは皆フェアリーテイルが好きでね・・・」

「なんでそっちに行かなかったの!？」

「禁書も好きだったんだ・・・じゃあな」

突然地面に穴があいた

多分他にもいたんだろう

精霊魔道師か？

なんでアトラスなんてチーム名にしたんだろう

ファントムとかオラシオンセイスにすれば良かったのに

っと・・・どうやら終わったようだ

蛇谷以外は皆倒れている

「で・・・どうするよ」

黒妻が蛇谷に問う

「く・・・ははは・・・コレで勝ったと思うなよ・・・コレを見ろ
お！！！！」

そこにはダイナマイトが腹に巻かれていた

「「ダイナマイト!?!」」

御坂と白井が驚く

そして

「いつの時代の方ですの・・・」

呆れる

「これ以上近づいてみろ！みんなドカーンだ！」

トリックルームで囲んで中で爆発させようかと思ったがやめておいた
「ど．．．どうだ！びびったか！」

ホントいつの時代の不良だよ

クニミツがやってたときでもそれは古いって言われてたぐらいだぞ？

「あーあ．．．めんどくせえ．．．」

黒妻がジャケットを脱ぐ

やっぱりあの背中の蜘蛛は旅団の刺青にしか見えない．．．

「やっぱり幻影旅団のメンバーだろ．．．」

「だよな．．．」

「お前なんているんだよ．．．」

横にさっきの転生者が居た

「名前言うの忘れてた．．．日野夏流だ」

変な名前だ．．．というかこいつ完全にギャグキャラだろ．．．

「じゃあな」

そういつてまた消えた

「なんだったんだ・・・」

俺はもう一度黒妻の方を見る

「しょうがなかった・・・しょうがなかったんだよ！」

あちゃあ終わってるし

「俺たちの居場所はここしかねえ・・・ビッグスパイダーをまとめるには・・・俺が黒妻じゃなきゃ駄目だったんだ・・・」

蛇谷はナイフを取り出す

「だから・・・今更テメエなんかいらねえんだあああああ」

と叫んでナイフを突き出す

だが

黒妻のクロスカウンターが命中して蛇谷は倒れる

「蛇谷・・・居場所ってのは・・・自分が自分でいられるところのことを言うんだよ！」

スキルアウト達が警備員に次々と連れて行かれる

「はぁー終わった終わった」

黒妻はそういった後

「ほら」

と言って固法先輩の前に手を出し

「美偉」

と名前をよぶ

先輩は一度戸惑ったようなしぐさをした後

「黒妻綿流、暴行障害の容疑で拘束します」

と言って黒妻に手錠をかける

黒妻はふと笑った後

「似合ってるぜ」

と言った

そして

「でもよお・・・そのジャケットもう胸キツくねえか？」

と聞く

「そりゃ毎日アレ飲んでましたから」

「やっぱ牛乳は・・・」

そして

「「ムサシノ牛乳」」

と同時に言った

そしてスキルアウト編は終わった

「ビッグスパイダーが何ぼのもんじゃあああああいつて2回目!?!」

(後書

スキルアウト編

前半…書き辛っ!!

後半…書きやすかった・・・

てな感じです

オリジナルの組織作っちゃいました

転生者4人で構成されてます

大体フェアリーテイルに出てくる魔法を超能力として使ってきます

結構主人公に匹敵するぐらい強いですね

レベルは4ということになってますが実質5です

アトラスと言う名前に特に由来はありません

なんかたまたま思っただけです

気にしないで

主人公が出した組織名の例えが

ファントム

オラシオンセイス

なのは禁書のチーム名的に後呂がいい気がしたからです（でも出来れば4文字にしたかった）

まあ当分出番はありません

でも出来る限り続けるつもりなので（出来れば現在出てる23巻まで行きたいな）

とか無茶なこと考えてます

このペースで行ったら何年先やら

まあ多分物語でやってなくても影で暗部同士の抗争はあったろうし

その時に出そうか程度に思ってます

多分たまに出番あります

それではまた次回

原作名とタグにフェアリーテイルって追加したほうがいいですかね

「花火大会」 (前書き)

今回からテレスティーナです

前回のあらすじ

能力者狩り解決ウウウウウウウウ

意味不ww

それじゃどーぞ

「花火大会」

俺は今、警備員と風紀委員の合同会議に参加している

なんだか随分でかい会場だな・・・大げさすぎじゃね？

・・・とか言っているが

「zzz・・・」

俺は寝ていた

「おき・・・の」

声が聞こえる

「「起きろっ！」」

両隣に座っている白井と固法先輩に頭を叩かれた

「へぼゅ！」

変な声を上げて俺は起きる

「なに合同会議中に寝てますの！」

「次寝たらスタンガン喰らわすわよ！」

二人が小さい声で叫ぶ

「お・・・おお・・・」

俺は呻くしか出来なかった

だって

片方は手にメリケンサック持ってたし

もう片方はダーツを指と指の間に2cmぐらい出してたし

殺す気か・・・

俺は涙目になりながら血の流れる頭をライズで治す

「いって・・・アンタら容赦無いにも程があると思うんですけど・・・」

「会議中に寝る貴方が悪いのです」

「白井さんの言う通りよ」

クソッ！言い返せない！

でもさー今話してんのって木原だぜ？

俺はこの世界に来た時から木原と名のつく者は信用しないと決めています

「どういう理屈ですの・・・」

白井が呆れて言ってきた

つか地の文につっこむのやめれ

「・・・て言うか地震ぐらいでここまで騒ぐ事か？自然災害じゃん」

「貴方・・・今までの話聞いてましたの？」

「ううん、聞いてない」

はいすみませんさっき言ったの嘘です

ホントは最初から寝てました！

だって昨日、暗部の方で仕事入っちゃって

それが中々厄介でね・・・

置き去りで魔術の実験してる施設を潰せという仕事だったんだけど

まさか置き去りが魔術で対抗してくるとは思わなかったわ・・・

もうネメシス引っ込めて俺本人が行く事になってそれが夜中まで続いてな・・・

まあ何とか潰す事は出来たけどな

ちなみに俺は・・・まさかあの仕事の原因であんな事件が起こるとは

あの時・・・もちろん今も

思っではいなかったのである

詳しくは番外編で

「なんのことを話してるんですの・・・」

また呆れ気味で聞いてくる

だから地の文にツッコむな！

で

「やっと終わった・・・」

眠い・・・とてつもなく眠い・・・

他の風紀委員もぞろぞろと部屋を出て行く

さて俺も帰るか

そして俺が出口を出ようとした途端

「ちょっと待っじゃん」

誰かに呼び止められた

このしゃべり方はまさか……

「よ……黄泉川先生……」

「合同会議の途中で居眠りとは……いい度胸じゃん」

やばい……怒ってる

「あ……実はですね……色々ありまして」

「色々って何があったじゃん？」

この声色は信用してないな……

「この後もミーティングが警備員にはあるはずですよ？早く行っ
た方がいいんじゃないですか？」

俺はごまかすが

「大丈夫じゃん。1時間の休憩があるからその間にこってり絞って
やるじゃん」

サヨウナラ俺！楽しい人生でした！！3度目があるとうれしいです
！！！！

そんなことを考える余裕も無く俺は連れて行かれた

「ア~~~~~」

「お・・・オワタ・・・」

本当に1時間説教が続いた

酷いや！

ん？

「花火大会・・・ねえ・・・」

掲示板に花火大会のポスターが貼ってあった

開始は3時間後

結構後だ

「暇だしな・・・行ってみるか」

眠気は説教されている内に飛んだ

黄泉川先生の説教は長い上になぜか眠気を吹き飛ばすという無駄な効果がある

長い上に眠れない

しかも記憶にしっかり刷り込まれるという

嫌な説教だ

とりあえず俺は寮にかえる

「上条とインデックスも呼んでやるか」

上条はともかくインデックスは多分喜ぶだろう

ロリコンじゃないぞ

俺は地味にいい人です

「テレスティーナはボッコボコにするつもりだけだな」

お前やっぱロリコン？

「おい地の文の俺！誰がロリコンだ！」

なんやかんやで寮についた

「ヤホー上条」

「なんだそのしゃべり方・・・」

ボケだ

「こんばんわさいば」

インデックスが挨拶してくる

「コレ行ってみない？」

俺は花火大会のポスターを見せる

「花火大会ね・・・インデックスはどうする？」

「行く！花火ってたまやで火花で場所取りがコーヒー牛乳のアレだよね！」

なんだそれは・・・

意味わかんねえよ・・・

つかタイトルポルターガイストがどうのって話なのに全然名前出てねえな・・・

そんなこんなで俺たちは会場に向かう

土御門も誘ってみようと思ったが留守だった

会場

「屋台なんだよとうま!!」

「よっしゃああ」

テンションたけえ・・・

「さて・・・行くか!」

俺たち3人は屋台に全力疾走する

で

「なんであんた達がいる訳？」

なんでビリビリが

まあ原作どおりという事か

「なんでお前がいるんだよ・・・不幸だ・・・」

はい「不幸だ」いただきました」

とまあ冗談は置いておこう

「柴葉さんじゃないですか」

「こんばんわですの」

初春と白井も挨拶してくる

「あれ？そいつは？」

名前は知っているが一応聞いておく

「この方は初春の学校に転入してきた春上衿衣さんですの」

「転入ってこの時期にか？」

上条が白井に聞く

「上条・・・お前ほとんど初対面なのによくそんななれなれしく喋れるな・・・」

「確かにそうですよね・・・」

佐天が同感

「あと私のルームメイトでもあるんですよ」

初春がなんか自慢げに言って来た

「へえ・・・よかったじゃん」

なんか自慢げに言って来たので一応よかったじゃんといっておく

「はい！」

まだ花火の打ち上げには時間があるようなので屋台を回る事にした

射的屋

「「「・・・」」」

俺は射的が得意というほどでもないがライズを使えば楽勝だ

コルク弾には能力が通らないようにしてあり不正が出来ないように
なっている

なので能力の使用は普通ならば不可能

だが・・・身体強化ライズならば関係ない！

不正？ばれなきゃいいんだよw

俺のライズはA I M拡散力場出ないし

だからリボンみたいなことも出来る

コルク弾は最初は商品には当たらない

そのとき親方の顔が一瞬『どこ狙ってやがる』みたいな顔になった
がすぐに青ざめる

コルク弾が跳ね返ったのだ

そしてそのコルク弾はあちこちを飛び回り

一発で4つ程の景品を落とした

その気になればもう少し落とせるがやめておく

「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオ」」」

その瞬間大きな歓声上がるが気にしない

2発、3発と撃つ

全部で5発

手に入った景品は24個

親方はorzというポーズでその場に倒れる

俺は景品を8人で山分けする

「さて・・・次行くか」

俺はS笑いを浮かべている

他7人は苦笑い

「お前って実はドSだよな・・・」

上条に言われた

まあいいか

「たーーーーまやーーーーー」

俺たち佐天が教えてくれた場所で花火を見ている

一発、二発ではない数の花火がどんどん打ちあがる

一瞬出てきてまた消える

「綺麗なんだよとうま」

「そうだな」

上条やインデックスも楽しそうだ

さっき買ったたこ焼き（10パック）とイカ焼き（10パック）チ
ヨコバナナ（略）

をインデックスが食べている

つか早っ！

今説明したばかりなのに既にたこ焼きはインデックスの胃袋のブラックホール中に
消えていた

ちなみに払ったのは俺だ

神様が来たときに100億ほど銀行に用意しておいてくれたので金
銭には余裕がある

つかありすぎだ

国家予算？

程でもないか・・・

それでも一生遊んで暮らせる金だ

「ん？」

すると春上がどこかへ向かう

それを初春と佐天が追いかける

「なんかあったのか？」

と上条

まあ多分アレだろう

俺はとりあえずついていく

「柴葉？」

上条もついてくる

一緒にインデックスも

そして追いついた途端

ポルターガイスト
地震が起こった

「なあ！！！」

「デカッ！」

まさかここまででかいとは

すると鉄柱が春上に向かって倒れる

上条が慌てて走ろうとするがうまく動けない

やばい

と思ったときにはもう遅い

と思ったが

「間一髪ね・・・」

ピンク色のグロイデザイン（少なくとも俺にはそう見えた）の駆動
スリッ
鎧が鉄柱を支えていた

「もう大丈夫よ」

中にはテレスティーナが乗っていた

「花火大会」(後書き)

とりあえずこの辺で一旦終了と

テスト2週間前に入った為更新を停止するかもしれませんがご了承ください

まあ合唱コンの時みたいに平気で更新するかもしれませんが

葉「勉強しろよ・・・受けむぐっ」

はいはい余計なことは言わな〜い

まあ実際ヤバいんですけどねww

まあでも遅くなることはあると思います

期末テストが近いんです

まあそれは置いておこう

葉「お前小説書いてる余裕なんてないだろ絶対」

知ったこっちゃ無いぜ！

葉「落ちても知らないぞ・・・」

冬休み入ったらしばらく更新停止します

それまでに3巻か4巻・・・出来れば5巻までは終わらせたい

まあ気長に行きますか

それではまた次回)

(今回のあとがきには何もツッコまないで頂けるとうれしいです)

「やっちゃったZE☆」(前書き)

やっちゃったZE☆

それでは前回のあらすじ

テレスティーナが春上を助けた

終わり

今回に限ってまったくやる気が出ない今日この頃・・・

なんだこのまえがき

そいじゃどぞ

「やっちゃったZ E ☆」

今、地震が起こった箇所をMARの人が調べている

テレスティーナはどっかにこのことを報告している

「なんだったんだ一体・・・」

上条が呟く

「ポルターガイストって知ってる？」

「ポルターガイスト？」

「最近地震が多いだろ？なんかAIMへの人為的干渉が原因とか・・・」

「ふーん・・・ってアレ？インデックスは？」

そういえばいない

「おーいインデックス」

上条が呼ぶ

猫か・・・

「ううううう・・・」

居た・・・

なんか涙流してる

見ると地面に買ったチョコバナナがぶちまけられていた

「あー・・・」

「インデックス・・・また買ってやるから」

「ホント!？」

一瞬で元気を取り戻しやがった

さて

「なんか木原さんと白井たちが話してるからちょっと言ってくるわ」

俺は上条に言う

「ロリコン？」

なんてことを聞いてきやがる

「んな訳ないだろ・・・仕事だよ。多分」

「いってらっさい」

上条ってこんなキャラだっけ？

まあいいや

俺は白井とテレスティーナの所へ向かう

テレスティーナに名前を聞かれたので答える

「177支部の御手洗こうすべっ！」

「なに偽名を名乗ってんのよ！」

頭を白井と御坂に殴られた

「ノリで・・・本名は柴葉葉です」

「柴葉葉・・・レベル5の？」

「あい・・・」

「177支部には随分優秀な人材がそろっている見たいね」

さっき白井にもいっていたらしい台詞を繰り返す

「でも偽名を名乗ったのはどうしてかしら？」

なんでそれを聞くのやら

まあいいや

「率直に言おうと貴方の事が信用できません」

笑顔で率直にきっぱりと言う

「ちよっ！そんな率直に言わんでも・・・」

御坂がなんか言ってくるが無視

だがテレスティーナは平然とした様子で聞いてくる

「へえ・・・なぜかしら？」

「俺は木原とつく人間は信用しない事になっています」

俺はさらにきっぱりと言う

「その理由を聞いているのよ？」

仕方ない

理由を話そう

「木原一族の研究対象にはされたくないんですよ」

笑顔でそう言った

「木原一族？」

「たしか学園都市の一部じゃ有名な研究者の多い一族で『実験に際し一切のブレーキを掛けず、実験体の限界を無視して壊す』を信条にしてるんでしたっけ？随分迷惑な家訓ですねえ・・・」

本性を知っている俺だから俺はここまで冷徹に言えるんだろう

俺は続ける

「木原幻生・・・あの辺は最悪だ。置き去りを使って人体実験・・・随分な外道ですね」

「!？」

その一言に御坂の顔色が変わる

「木原数多・・・狛犬部隊のリーダーでしたっけ？」

「なんでそれを知っているのかしら・・・？」

おお・・・焦ってる焦ってる

「暗部に入ったら嫌でも入ってきますよ。まあアンタは知りませんけどね・・・信用できるまで何かやらかしたりしないでくださいね？暴王に飲み込まれたくなければ・・・」

俺はそう言って上条の方へ向かう

「ちょ・・・ちょっと待ちなさい！」

すると御坂に引き止められた

「暗部って・・・何？」

何を聞いてくるのやら

「知らない方がいい事もある・・・ってね」

今度こそ俺は上条の方へ向かう

やっべ・・・やりすぎた・・・

翌日

俺は目を覚ました後キリスト像に祈りをささげ（やりたくないけども）

朝食を食べて昨日の事を後悔する

さすがにあそこまで言うのは失敗だったかも

「猟犬部隊に狙われるのは厄介だな・・・」

別に戦えないわけじゃないが

一方通行の黒い翼が目覚めてくれなくなると厄介だ

計画の邪魔と言われて挙句の果てに殺されるかもしれない

・・・無いか

そもそも黒い翼に関してはアレイスターもそのうち目覚めさせるつもりだったろうし

やってしまったものは仕方が無い

とりあえず支部へ行こう

「こんにちは」

俺は挨拶して支部に入る

すると御坂と白井が春上について調べていた

ついでに

猟犬部隊について調べようとしていた

さすがにセキュリティは固いだろうが

(トリックルーム! 電磁・n $\beta \Rightarrow \alpha$ 《アップロード》)

ハッキングはさすがにヤバイだろうと思いパソコンのハードディスク

ク内にトリックルームを設置して電撃を流す

名前を知ってて調べようとした時点でアウトだろうし

「パソコンがアアアア」

もちろんパソコンは死亡

白井と御坂が絶叫した

「おっす」

俺は何も無かったかのように挨拶する

「・・・おはよ・・・」

なんか落ち込んでいる

そりゃそうか

「パソコン壊したのは貴方ですよ？」

白井がそう聞いて来たので

「そんなわけないだろう」

と暗部には関わるなという目を向けながら言う

「・・・そうですの」

どうやら通じたようだ

さて・・・

見ると机が書類の山になっていた

「ナンノイヤガラセデスカコレハ」

「昨日、合同会議で居眠りをした罰ですの」

ちくせう

ひどい・・・

Orz

気を取り直して俺は机に着く

「ちくしょおおおおおおお」

叫び声を上げながら俺は書類仕事に取り掛かる

そしてようやく半分程度のところで

「いや早いな・・・」

御坂・・・つつこむな

ゴホン・・・そしてようやく半分程度のところで固法先輩に連絡が入った

自然公園で大規模なポルターガイストが起こったようだ

「自然公園って・・・初春達が居るところじゃないですか！」

「「えっ!?!」」

佐天の言葉に皆が驚きの声を上げた

「やっちゃったZE☆」(後書き)

塾があるんで一旦終了です

たぶん帰った後もう一本更新します

それじゃまた

「ノータイトルってオイ作者ああああ!!!!!!」(前書き)

タイトルに書く事がねええええええええええええ

前回、中途半端に終わらせたからか

全然タイトルが思いつかない

てなわけでノータイトル

葉「もっと頑張りなさいよ!!!!」

お母さんみたいな口調を使うな気持ち悪い!

葉「気持ち悪い言うな!」

前回のあらすじ

ポルターガイストがどーのこーの

葉「最早あらすじじゃねえ!!!!」

それじゃどうずうを

葉「ちゃんとしゃべれ・・・」

「ノータイトルってオイ作者ああああ!!!!!!」

俺たちは今、初春と春上のいる病院に来ている

「初春さん!」

御坂が初春を呼ぶ

「皆さん」

どうやら気付いたようだ

「大丈夫? 怪我は?」

佐天が初春の怪我の様子を聞く

どうやら擦り剥いただけのようだ

「それにしても立て続けに2度もポルターガイストに遭うなんてア
ンタも春上さんもどんだけ・・・」

不幸なんだってか?

上条とどっちが不幸なんだろう・・・

「ってそういえば春上さんは?」

と佐天が聞く

先に搬送されたけども気を失ったとか

その言葉にみんなが安堵する

「ポルターガイストの直前、春上さんなにか変わったことはありませんでした?」

「え?」

「ですからあの時の花火大会のような」

「あの・・・一体なんの・・・」

「私が調べたところ・・・春上さんはレベル2ながらもちょっと特殊なテレパスのようです。もしあの時のような不審な挙動があったとしたら・・・」

「もしかして春上さんを疑ってるんですか?」

「そ・・・そういうわけでは」

「ひどいです」

初春と白井が喧嘩を始めた

あーとめるのはめんどくさいぞ

と言う訳でほっておく

どうせ原作どおりにテレスティーナが来るんだろう

「あの初春さん・・・黒子は・・・」

と御坂がフォローしようとした所で

「テレパスがAIM拡散力場の干渉者になる可能性は無くはないわ」

テレスティーナがやってきた

「テレスティーナさん？」

白井が驚く

「あの・・・」

初春が何か言おうとする

「ただし・・・」

だがテレスティーナが遮る

他人の会話を遮るのが好きなのだろうか

冗談

「それには少なくともレベル4以上の実力が必要だし・・・よほど希少な能力と言わざるを得ない」

フォローに入った

「ですからその可能性はほとんど無いと思うけど・・・念の為調べ
ておきましょうか」

あんたが調べんのかよ・・・

「お友達の名前は？」

「春上衿衣さんですの」

白井が答えた

「白井さん！」

「潔白を証明するためだと思いなさい

と言うと初春は反論できずに黙る

つか完全に俺空気・・・帰っていい？

そして俺たちは検査の為にテレスティーナと研究所へ向かう

道中

「そう言えば貴方多重能力者でしたわね」

白井がそう聞いて来た

「そうだけど？もう忘れたのかお前は」

「テレパシーも使えますの？」

「使えるな・・・有線でも無線でもとバリエーションは豊富だな」

「じゃあ干渉者の容疑は貴方にもかかる訳ですわね」

墓穴った・・・

「なんで俺が干渉者になるの・・・」

「一応、検査は受けてくださいですの」

「えー・・・」

俺は病院が嫌いだ

長く待たされるし

検査も長いし

終わったあとに検査結果が出るのも遅いし

「はああ~~~~~」

俺は盛大にため息をつく

「貴方をそのまま逮捕してもいいんですわよ？」

「分かった分かった」

で研究所にて

俺は今、検査を受けている

結果

「レベル5」

だが干渉者にはなり得ないらしい

AIM拡散力場が出ていないとの事だ

研究者たちも頭を抱えていた

さすがに一人で二つもレベル5はマズいんで登録するのはやめても
らった

いざとなったらアレイスターに何とかしてもらおう

そういえばこないだやってきたアトラスの奴のレベルはなんなのだ
ろう

エーテリオンとか使って来そうだし

多分実質レベル5とかだろう

バンクにはレベル4の属性使い《エレメントマスター》（なんだそりゃ）とか載ってたな

てことは滅竜魔法全部使えるって事か・・・

さすがに厄介だ

にしてもP S I能力ってやっぱA I M拡散力場は出ないんだな

とりあえず俺は検査した部屋から出て御坂たちの所へ向かう

迷ったぜ・・・

広えーよここ・・・

「さてどうするか・・・」

とりあえずふらついてみることにした

すると

「ん？」

アレは・・・

「よお・・・久しぶりだな。P S I能力者」

「日野夏流・・・」

転生者の日野夏流がいた

「何で居るんだよ・・・」

「まあ色々あってな・・・属性使いとかいう能力は珍しいんだと」

「珍しいどころかお前の他には居ないだろ・・・」

「まあ滅竜魔法なんてこの世界にはないしな」

「属性使い・・・って事は・・・」

「ああ、滅竜魔法は全部使える。あとエーテリオンもフルパワーで一日一回までなら」

「さすがにそれは制限付きか・・・」

そりゃそうだろう

エーテリオンは一発でk m単位が吹き飛ばような威力だ

それを何発も撃てちゃマズイ

「柴葉ねえ・・・そう言えば俺のチームにも同じ苗字の奴居たな・・・」

「は？」

「柴葉春樹って奴だ」

「・・・嘘だろ・・・」

このときの俺は驚いたシリアスな顔ではなく呆れ果てたみたいな顔をしていたのだろう

柴葉春樹

それは俺がこの世界に転生する前に

俺がまだ小さかった頃

まだ5歳だった頃

とてつもなくあほな理由で出て行った兄貴だった

「ノータイトルってオイ作者あああ!!!!!!」(後書き)

オリキャラ紹介にひのなつる日野夏流更新しました

主人公兄貴いたんです

ほんとにあほな理由です

マジでWW

今のうちに言っておきます

あほな理由過ぎるからってツツコまないでください

シリアスなんかじゃありません

完全なるギャグです

そんな理由で出て行きました

ちなみにとある読み切りの影響を受けていますがスルーで

柴葉の兄貴はジェラルル(ジークハルト兼ジークレイン)の宇宙魔法使います

自分はジークハルトが一番好きです

フェアリーテイルじゃありませんけども

それじゃまた次回

「能力体結晶投与実験ってなげな・・・」(前書き)

前回到引き続き書くことないんで

前回のあらすじ

兄貴がアトラスのメンバーだった

それじゃどーぞ

「能力体結晶投与実験ってなげえな・・・」

兄貴が出て行ったのは10年前

俺が丁度5歳の時だった

「ごめんな・・・葉」

その時の兄貴は18歳

13歳も離れていた

「行かないでよ兄ちゃん！」

「ごめん・・・でも俺」

この時の俺はあまりにも幼くて

兄貴がどれ程馬鹿だったのか理解出来ていなかった

「別にそんなのにならなくていいじゃないか！」

「ごめん・・・でも」

‘どうしても魔法使いになりたいんだ・・・’

それが兄貴の出て行った理由だった

「にいちやあああああああん」

ハリーポッターを読んで本気で憧れたらしい

最強のアホだ

おかしいだろう？成績はオール5だったハズなのに

回想終了

「ふうん・・・お前の兄貴って」

回想が終わったあと日野は一閃開けてきっぱり言った

「アホだな」

「ああ、アホだ。真性のアホだ」

即効同意

「お前も大変なんだな・・・」

「もうホント死ねよマジで死ねよ死んでくれよあの馬鹿兄！」

俺は息継ぎせずに一息で一氣に言う

なんでだろう・・・漫画ならギャグパートみたいな感じになるはずなのにシリアスぽくなってしまった

「落ちて着け柴葉。もう死んでるぞ！」

「いきかえってん転生じゃねえかあああああああ！」

全力ツツコミ

「まあそうだけでも！一回は死んでいる！とにかく落ちて着け柴葉！」

「ハアハア・・・ってお前一応敵だよな・・・」

今更の疑問

「15巻とかじゃ敵になるだろうがそれまでは敵対する理由もないし」

「15巻ねえ・・・何ヶ月先だっけ」

「原作じゃかなり先だった気がしたがこっちの世界に來た時点では数ヶ月だぜ？」

「どんだけ進むの遅いんだよあの話・・・」

「知らんがな」

「というか暗部が抗争を始めた理由ってなんだっけ」

「なんだっけ・・・」

「オイオイ・・・」

口調が似ているためか分かりづらい

でも気にしたら負け

「じゃあ俺はそろそろ戻るわ」

日野が帰ることを告げる

「といひかなんでお前ここにいるんだ？」

「迷子だ！」

きっぱりとそう言った

「迷子！？アホかお前は！うちの兄貴並じゃねえか！」

「いや春樹よりはマシだろう・・・」

「名前で呼んでるんだな」

「うちのチームは皆そうだ」

じゃあな

そう言ってどこかへ消えた

「・・・にしても兄貴も死んだのか・・・」

つかあの神ほんとに何やってんだ

仕事しろよ!!!!

居眠りなんてしてんじゃねえよおおお!!

「居眠りしてたのは貴方ですよ」

いきなり後ろからドロップキックが飛んできた

「あべしっ！」

俺はライズもなにも使っていなかったのものでそのまま床にキスする羽目になった

「イッテ・・・何すんだ！」

後ろには白井が立っていた

「今までどこ行ってたんですの？」

「迷ってた」

「はぁ・・・まったく・・・春上さんの検査が終わったようですよ。結果もそろそろでますし行きますわよ？」

白井・・・いくらなんでも蹴りはないと思うぞ

ちくせう

「ちなみに貴方はどうでしたの？」

「無罪だ」

「そうなんですか？」

「レベルは高いがA I M拡散力場が出ていないから干渉者にはなりえないとのことだ」

とこんな会話をしていると

「早く行くわよ」

と言われテレスティーナについていく

「安心して。彼女は干渉者ではないわ」

テレスティーナが春上の検査結果を伝える

その言葉にみんなが安堵するが

「でも書庫に登録されたデータでは例外的にレベル以上の能力を発揮すると・・・」

「白井さん！まだそんな事を！」

ということもあつたが

結局、干渉者ではないとのことだった

その後、春上の病室へ向かった

「春上さん」

初春が呼びかける

すると春上が目を覚ました

にしても疲れた

早く帰って寝たい

すると

「その子・・・あの時の」

御坂が春上の見せたペンダントの中を見てそう呟いた

おう・・・いつの間にかそこまで進んでしまっていたか

「絆利ちゃんを知ってるの？」

「えっと・・・」

「私もね・・・」

春上が続ける

「置き去りなの・・・」

そう言った

その後、春上が自分の過去を話す

昔、同じ施設で育ったのだそうだ

とても仲が良かったらしい

だが別の施設に移されてそれっきりらしい

でも最近「助けて」という声が聞こえるのだそうだ

その後俺は一足先に寮へ帰った

「疲れた・・・」

寮に帰った俺はそう眩きベッドに倒れこむ

「なんでこんな疲れてんだ・・・？俺・・・」

そしてそのまま寝た

翌日

177支部では初春がなんか黒いオーラを出していた

「要りません」

白井が渡したコーヒーをそういつて突っぱねる初春

そういえば前世で見たときはコレをウザ春といていたな

でもここで言ったらやばいんでやめとく

「初春ゝなんか黒いオーラ出てるぞゝ」

と俺が茶化しても

「出てません」

と簡単に切り捨てられた

「支部長・・・どうすりゃいいと思うよ」

「君は他の目上の人には敬語を使うくせに私には使わないんだな」

「アンタに使う敬語はない」

「酷い事を言うな・・・」

『アトラスって知ってますか？』

俺はテレパシーで話しかける

『アトラスねえ・・・暗部のチームの一つだけ？原作にはなかったチームだけど・・・弱小組織か・・・転生者の集まりか』

『勘がいいな・・・』

『そりゃあねえ・・・』

『あそこについてなんか調べられない？なんか全然データがないんだけど』

『君に調べられないなら無理じゃないか？』

『あつそ』

まあいいか・・・そのうち分かるだろう

その夜・・・

俺は木山の居るらしい施設の前に居る

すると

「よし！これで変装も完璧！」

御坂もいた

お祭のお面をかぶっている

「全然完璧じゃねえよ・・・」

「んなあ！あんた何でここに居んのよ！！！！」

「お前と大体同じ目的さ」

原作介入したいだけっす

「仕方ない・・・ついてらっしゃい」

「お前なあ・・・」

そして俺と御坂は施設に入る

電気は通っていなかった

そしてしばらく歩いていると実験を行った場所に着いた

しかし何も残っていなかった（ドラクエ?）

すると少し離れた場所に木山を見つけた

「あいつはっ!」

御坂は木山の所へ向かう

そしてとある部屋に入る

「!?!?・・・君たちか」

「やっぱり・・・木山春生!今回もアンタの仕業なの!?!」

御坂が木山に問う

「だったらどうする・・・」

木山がそう答える

「許すわけないでしょ!!」

そう叫んで御坂は電撃を流す

「ちょ! あぶなっ!」

俺は自分の周りにトリックルームを展開して防いだ

その結果施設の電気が全部点き警報が鳴る

「御坂アアア何してくれてんだアアアアア」

「ええっ!? 私のせい!?!」

「君以外に誰が居る・・・仕方ない」

俺たちは木山の車に乗って移動している

御坂が木山に怒り気味に質問しているが俺はめんどいのでスルーするとどっかの病院にたどり着いた

「つてここいつも上条が入院してるところじゃん」

「そうなの?」

そのまま俺たちは職員玄関から入る

そしてとある病室に着く

そこには何人もの置き去りが倒れていた

「これは・・・」

「私の記憶を除いた君なら知っているだろう・・・私の教え子たちだ」

木山がそう言う

「やっぱりポルターガイストを起こしていたのはあんたなのね!」

御坂が木山に言う

「そうだ」

木山はごまかしもせずそう答える

御坂はその言葉に電撃を放とうとするが冥土歸しに止められる

あの時の実験は能力体結晶の投与実験だったようだ

「体晶って確か・・・」

俺は聞こえないように小さく呟く

滝壺が使ってたやつだよな

あれってとっくに完成してんじゃね・・・？

まあいいや

「そんなイカれた実験のせいでこの子達はこんなにされたって言うの！？」

御坂が怒る

無理もないか

俺のキュアで治せるかなー

でもそんなことしたら木原が逮捕されなくて後々にまた眠らせよう
としそうだし

やめて置こう

木山はワクチンを作ろうとしているらしいがワクチンを作るためには
ファーストサンプルが必要らしい

「もし見つからなかったら？」

御坂が木山に聞く

「この子達を・・・覚醒させる」

その言葉に御坂が反論すると

またしても御坂の言葉を途中でさえぎってテレスティーナがやってきた

コイツしょっちゅう人の話を途中で遮るよな・・・

その後テレスティーナは置き去りを助けるために連れて行くと言った

「令状も用意しましたが自発的に引き渡してくれる事を望みます」

「本物のようだね」

木山は連れて行かれるのを止めようとするが御坂が止めようとする

「何の真似だ・・・」

木山が聞くが御坂は通そうとしない

そしてその後もテレスティーナは置き去りを連れて行こうとするので

「待てよ・・・」

俺は止める事にした

まあただの威嚇みたいな物だ

このほうが後で面白くなりそうだ

「テレスティーナ・・・言っただろう？俺はアンタが信用できない。だから置き去りは渡せない」

「何を言っているのかしら？」

「駆動鎧を周りに配置してやってくる奴が信用できるわけないだろう」

「言ったでしょう？私の施設ならあなた方の入手できない情報も入手できる。もしかするとあなた方の言うファーストサンプルも手に入る可能性が……」

「そりゃあアンタなら持つてるだろうよ……テレスティーナ・木原・ライフライン……木原幻生の孫娘さんよお！！」

俺はテレスティーナに向かって威嚇する

「……確かに私は木原幻生の孫娘よ」

「「なっ！」」

御坂と木山がその言葉に顔色を変える

「でも私は祖父のような事はしない……その子達も必ず助けるわ」

「能力体結晶は持ってないのか？」

「持っていないわ」

「……分かったその言葉信じてやる」

これ以上やっても話が進まない

この辺でやめにして置こう

「嬉しいわ」

「ただし・・・」

一応条件は出しておこう

「ちょっとした何かしたらお前の命貰うぞ」

「それは私を殺すという意味かしら？」

「やれないと思うなよ？こっちはとっくに学園都市の闇を見てんだよ・・・」

「・・・運び出せ」

テレスティーナはその後何も聞かずに置き去りを連れて行くように後ろに居る駆動鎧に命令する

木原はまだ信用出来ないという顔をしているが令状がある以上何もいえない

御坂はどうすればいいか迷っている

さて・・・これようやく話が進む・・・

SIDE OUT

ここはどこかのマンションの一室ってまたか

「ドラクエやりて・・・」

そう呟いた少年は黒に緑がわずかにかった髪の色に黒に青がかかった瞳をした少年

「何言ってるんの春樹^{はるき}・・・」

そう言ったのは紺色の髪にをした少年

「だからドラクエやりたいって」

「いやだから何言ってるんだ？って聞いてんの」

「だからドラクエやりたいって言ってんでしょうがまったくこれだから冬古^{ふゆこ}は・・・てか夏流^{なつり}は？」

「ちょっと出かけてくるってさ」

冬古はそう答える

「にしてもまじでドラクエやりた・・・」

「いつまで言ってるの・・・いい加減凍らすぞこの野郎・・・」

「すみませんでしたっ」と

「ムカつく・・・こいつ本当にムカつく」

「そーういやさあ・・・こないだ新しく増えたレベル5」

「そーういえばお前と同じ苗字だったな」

「俺の弟っぽい・・・あの神・・・何やってんの・・・何兄弟そろって殺しちゃってんの？」

「はははははははははは」

「笑うな！」

笑ったのは冬古ではなく

「いいじゃねえか別にwwコレは俺の性格上しょうがないのだよw」

「しゃべり方かえるのウザいからやめろよ・・・秋良^{あきら}」

「うるさいwはははは」

笑い上戸らしい

髪の色は茶色、瞳の色は金

「まあいいか・・・もう慣れた」

彼らは暗部の住人

チーム名・・・アトラス

「能力体結晶投与実験ってなげな・・・」(後書き)

今回なんか酷かった気がする・・・

アトラスメンバーの名前全員出しました

春夏秋冬でつけてます(見りゃ分かるか)

チームメンバーは全員名前で呼び合っています

前世から知り合いなんで

次回かその次ぐらいでテレスティーナ編は終了です

次回もよろしくおねがいします

「だから言ったのに・・・」(前書き)

ぶっちゃけ言うと・・・アニメのストーリーに介入させるのって文章書くのが難しい！

アニメを見ながら書いているんです

今23話見えています

そのせいで今回の話を書くのが困難に・・・

今更後悔しても遅いので頑張ります

今回で終わるか・・・テレスティーナ編

それでは前回のあらすじ

能力体結晶投与実験がどうのって話だったと思う

それじゃどうぞー

「だから言ったのに・・・」

177支部では初春が泣いていた

どうやらテレステイナーの奴が本性を表したらしい

え？話が飛んでる？

何の事だい？

「だからアイツは信用できないって言ったのに」

俺は誰にも聞こえないように言う

ついでに固法先輩が調べた結果テレステイナーが能力体結晶の最初の被験者だと分かった

たしかこの後、御坂がテレステイナーなところに乗り込むんだっけ

面白そうだからついていってみよう

と思ったら丁度御坂が出て行くところだった

さて・・・行ってみますかね

MARの研究所に御坂はいた

一緒にテレスティーナも居る

うわぁ・・・本性黒い

そろそろ介入しますか・・・

と思ったらキャパシティダウンが流れた

うるさっ!!

御坂が苦しそうに倒れこむ

「ぐっ・・・これは・・・キャパシティダウン!?!」

あーうつせえ・・・

俺はキャパシティダウンを使って勝った気になって高笑いしている
テレスティーナの前に出る

「やっと・・・本性表したか・・・っ」

俺はついでに苦しそうな真似

勝気になった奴をボッコボコにするのが好きなドSなんです

「!?!?・・・アンタ・・・どうしてここに・・・」

「あゝ? テメエも来てたのか・・・ 散々生意気な事言ってたよなあ
! 変な事したら殺すとか何とか! やれるもんならやってみろよお!
キャパシティダウンがある以上お前には何も出来ねえだろうがなあ
!!」

うつわゝ性格わっる

「何も出来ない・・・ねえ・・・」

俺は暴王の月を出す

「無理して使わなくてもいいんだぜえ!?!」

ホント性格ワリイな・・・

「ぐっ!」

俺は暴王の月を何もせずに壊す

わざとじゃない

キャパシティダウンは一応効くのだ

「あーやっぱこの騒音はイメージの阻害になるな・・・」

そういうことだ

黒板やガラスを引つかく音が嫌いなと同じだ

鬱陶しい

「ギャハハハハハ！」

笑ってんじゃねえよホントにイライラする

本気で殺すぞ

「御坂・・・こいつ殺っちゃっていい？」

「さすが・・・に・・・殺人はマズイ・・・ての！」

御坂が電撃を出しながら突っ込む

こんなときにまで突っ込まんでも

仕方がない

ここは撤退しますか

「逃げるぞ御坂」

「はぁ！？アンタ何言って・・・ぐっ！」

御坂が苦しむ

つか婚后出番なくなりそうだ

まあいいか

「逃げ切れると思ってんのか!？」

テレスティーナがでかいライフルっぽい物を構えこっちに向ける

「オラァ！」

俺はそれを氷碧眼で凍らせる

「じゃあな! 木原^{バーカ}!!!!」

俺は動けない御坂を担ぎながら支部まで逃げる

「ちょっとアンタ・・・!そこまで動けるなら・・・戦いなさいよ
!」

「無茶言うな・・・こっちだって結構手一杯だっつーの」

本当は余裕あるけどね

あまり原作は壊したくないんだ(今更)

「だから逃げるぞっと」

ライズを使って全力疾走

ある程度はなれた後、即瞬間移動して逃げた

「ちっ・・・逃げられたか」

最後にそんなのが聞こえた

道中

「だから言っただろ？アイツは信用出来ないって」

「・・・っというかさっさと降ろしなさいよ!!」

俺は御坂を担ぎっぱなしだ

つか忘れてた

ちなみに公道です

視線が痛い

「ごめんごめん、忘れてた」

「忘れるな!」

バチィと電撃を出すはまだキャパシテイダウンの影響が残っている

のか俺には当たらない

俺は御坂を降ろす

「さて・・・仲間を集めて木原戦といこうや」

「・・・アレは私に責任がある・・・私が止める」

「アホかお前は・・・俺が居なかったらお前今頃実験体にされてたぞ？」

まあそんなこととして御坂が死んだらテレスティーナはアレイスターに始末される気がするが・・・

レベル5は8人しかないし

アレイスターにとっては計画に必要なもんだし

「巻き込むなんて思うな・・・そもそも首突っ込んだのはお前だ。巻き込まれたとも思いな」

「・・・」

そのまま支部まで戻る

「おーっす戻ったぞ」

俺は支部の扉を開け御坂と共に部屋へ入る

なんか大げさになった気もするが

「柴葉さん何処行ってたんですか!？」

「御坂が居なくなってたから多分テレスティーナのところにいったんだろうと思って行ってみたら予想通りだった」

「お姉さま! お怪我は!」

「大丈夫・・・それより・・・」

御坂は一息置いてから言う

「皆・・・あの子たちを助けるために力を貸して!」

その言葉に支部の皆は

「むしろそれを頼むのは私たちの方ですわ?」

「勝手に自分が巻き込んだなんて思わないでください!」

などなど色々

やっぱり婚後の出番奪っちゃったな・・・

だって台詞書くのめんどくさいだもの

（作者の本音を地の文に出すな！）

まあ次元を超えたギャグは置いといて・・・

俺たちは腹ごしらえをしてテレスティーナの所へ向かう

さて・・・決戦開始ってか？

御坂が逃げているMARRのトラックをぶち壊す

その後木山と一言かわし

駆動鎧と戦うことになった

「多いな」

原作なら婚后がやってくれたんだけどねえ・・・

「御坂・・・先に行ってろ」

俺は御坂に先に行くように言ってアングリーゴーリーを出す

「アンタ・・・」

「ここは俺が片付ける」

「それ気持ち悪っ!!」

「あ、いやそっちか・・・」

どうやらアングリーゴーリーのことを言っていたようだ

俺はやっぱりアングリーゴーリーを引っ込めた

御坂が居ないなら殺しても大丈夫かな・・・いや・・・やめておこう

殺さない程度に潰す

「生命の樹・・・峻巖^{ゲッラ}」

俺は生命の樹を出して駆動鎧を全て潰す

「さて・・・御坂の方に助っ人しますか」

「私も残ったのですけれど・・・必要なかったようです・・・」

白井・・・居たのか

「居たのか・・・行くぞ」

俺は御坂を追いかける

なんとか御坂に追いつく

丁度白井の名を呼んだ所だった

「お姉さま!」

「コレが私の全力だあああああああ」

と叫んで特大超電磁方を放つ

うわースゲー迫力

「なあああああにiiiiiiiiiiii」

それに比べてテレスティーナは何処の悪役だよ

なあああああああにiiiiiiiiiiってWWW

その後木山が礼を言おうとするが御坂が子供を助けた後に言えとい
って

俺たちは子供たちの所へ向かう

「見つけた・・・」

はい色々割愛く

え？テレスティーナはまだですよ

とどうやらきたようだ

キャパシティダウンが流れ御坂と白井が殴られる

テレスティーナが高笑いしている

うっさいな・・・

初春がキャパシティダウンですね！！と叫ぶ

どうやら佐天に向けて言っているようだ

初春が殴られる

「だったらやってみろって・・・やれるもんならなあ」

「なんでよ・・・アンタだって犠牲者じゃない・・・おじいさんの実験台になって・・・能力を暴走させられて・・・なんで・・・」

「犠牲じゃねえよ？権利を得たのさ・・・私から生まれたこの種を花開かせて」

ファーストサンプルか

「レベル6を生み出す権利をなあ!!」

はあ・・・

「春上でレベル6を作る気か?・・・まったく・・・くだらねえ・・・」

俺はテレスティーナに言い放つ

こっからは・・・俺の時間だ

「貴様!なぜキャパシティダウンの中で動ける!!」

「能力が使えなくなるだけだろ?動けはするさ」

「そんな筈がっ・・・!?!」

今、テレスティーナの言葉が途中で止まったのは俺が木原の駆動鎧の腕部分を引きちぎったからだ

「「なっ!」」

テレスティーナだけじゃなくそこに居た奴全員が声を上げる

「駆動鎧が!・・・クソが・・・調子に乗ってんじゃねえええええ」

テレスティーナが俺を持っていた槍のようなもので振り払う

そしてその槍の先端部分が開く

そして

「コイツはそこにぶっ倒れてるレベル5のレールガンを元に作ったレールガンだ!! そいつのよりも強力だあ!!」

そういつてレールガンチャージする

「めんどくせえな・・・」

すると唐突にキャパシティダウンが止まる

佐
天
か
・
・
・

コレでようやく本気が出せる

「そんなパチモンレーガンで調子にのんな・・・強力？何言ってるんだ・・・テメエのレーガンじゃ俺たちは壊せやしねえよ・・・」

「死ねええええええええええ！！」

テレスティーナがレールガンを放つ

俺は暴王の月を出した

「何っ!？」

「言っただろ？パチモンじゃ壊せない・・・」

暴王の月はレールガンを吸収していく

そして全て吸収し終えた後、膨張しそして

「なあ!？」

「お前の負けだよ・・・命までは奪わないでやるけどさあ・・・こ
うなったらトメラレナイから死んでも恨むなよ？」

矛盾した事を俺はテレスティーナに言い放つ

膨張した暴王の月の球体から枝が伸びる

そしてその枝は

「ぐぶっ・・・」

テレスティーナの駆動鎧ごとテレスティーナの腹部を貫いた

貫いた後、暴王の月は唐突に砕け散る

「がはっ!」

と血を吐きテレスティーナは倒れた

「あー・・・死んでないよな・・・」

さすがに死んだかとも思い御坂に聞く

「いや私に聞かれても

「一応治療しとくか・・・」

俺はテレスティーナの方へ向かう

「よう・・・最初に会ったとき言ったよな。何かやらかしたら暴王に飲み込まれると」

言葉どおりテレスティーナは暴王に腹を貫かれた

「死なないだけマシだったな」

俺は黒い笑みを浮かべる

既にテレスティーナに意識はない

だが一応生きてはいるようだ

俺はテレスティーナの駆動鎧を踏み砕く

一瞬、テレスティーナの顔がゆがむ

踏みつけたからな

しかし駆動鎧は無事に粉々になってくれたようだ

もしまっていないければ後2～3発踏む所だった

傷は深い

10cmぐらいの大穴が腹にあいている

よく生きてるな

『一応生かshといてやるよ・・・牢屋に入って出直して来い。ただ・・・次はないぞ』

俺はキュアで治療しながら有線トランスでこの言葉を脳に刻み付ける

恐らく一生忘れる事はないだろう

そして俺はファーストサンプルを掴み木山のところへ行く

暴王はPSIに反応して動くので能力体結晶が無事かどうか不安だったが大丈夫のようだ

その辺は制御できた

トメラレナイ？何のことだ

その後、木山はファーストサンプルを元にワクチンを作る

そして

子供たちは目覚めた

(どうにか終わったか・・・次は姫神か・・・アウレオルス倒せるか？アレって結構強いと思うんだけど)

てか禁書に出てきた能力の中でも最強の部類だろう

上条はたまたま相性が良かった・・・とも言えないけど勝ち目はあったから勝てたけど

上条みたいな例外的な能力を持たない限り一方通行でも勝てないんじゃないか？

『能力を解除せよ』とか言われたらおしまいだと思う

いや思うだけでいいんだっけ

頭に浮かんだ事が現実反映されるだけだし

それでもアウレオルスが一方通行は能力が使えないと思えば使えなくなるんだよな

最強じゃん

とか次のことを考えていたら木山が礼を言ってきた

「別にいいさ・・・」

と適当に答える

これでテレスティーナ編は終わった

「だから言ったのに・・・」(後書き)

テレスティーナ編終わったああああああああああ

あと2話ぐらいやるかなーとか思ってたけどやりませんでしたね

にしても随分と酷い出来な気がします

でも作者は基本めんどくさがりやなんで誤字とか脱字じゃないかぎり直さんと思います

次回から日付復活するかもしれんです

次回から吸血殺し編です

とその前に番外編でも入れようかと思ってますがやるかどうかは分からんです

それじゃまた次回

8月8日「あれ・・・日付復活してる・・・」(前書き)

タイトル通り原作の日付は分かる範囲で復活させます

今回から吸血殺し編ですがアウレオルスダミーは出せません

アニメでしか見てないんです

なぜか原作が7巻く22巻とSSしか無い・・・

葉「それはお前が買っていないだけだろう・・・」

すまん

ついでに小遣いが足りず1巻く6巻も買えない

漫画でも吸血殺しはやらないし・・・

ガンガン編集部なんで飛ばしたああああ

あんなにカットして困るのはそっちだぞおおおお

とまあ愚痴はここまですて

前回のあらすじ

テレスティーナ撃退したぞおおおおおお

終わり

8月8日「あれ・・・日付復活してる・・・」

いきなりだが・・・俺は今なんか騒いでる上条たちの前に居る

とはいえあつちはまだ気付いていない

「多分インデックスがアイス食べたいとか騒いでんだろうな・・・」

」

とりあえず話しかけて見るか

見たいなこと考えてたら土御門と青ピが来たんで一緒になって上条とインデックスをからかってたらインデックスが理不尽にも上条に切れた

そんでアイス屋に行った所

閉まってました

うん・・・原作どおり

で現在マツク的なところに居る

名前が違うだけでシンボルマークもほとんど変わらない

「シェイク、シェイク、シェイクがみつっ♪」

インデックステンションたけえ・・・

「悪いなカミヤん」

「ゴチになります」

と青ピと土御門

「なぜ俺がおごる羽目に・・・」

さすがに上条がかわいそうな気がしたし下手に俺がおごってなんて
いったら転生者のことで脅されて俺が払う羽目になる

別にそれでもいいがなんか奢るのは気分的に嫌だから俺は自分の分
は自分で払う事にする

「とうまゝこっち座れるよ」

インデックスが上条を呼ぶ

「よく空いてたな」

と上条

で・・・インデックスの見つけた席には

巫女さんがぶっ倒れていた

・・・姫神だな・・・

「どしたの？」

適当に聞いた

「・・・食い倒れた」

で・・・ジャンケンで誰かが話を聞くことになり

「」「最初はグー！ジャンケンホイ！！あいこでホイ！！」「」「」

「」「よっしゃああああ」「」

「ちくしょおおおお」

ちなみに負けたのは上条です

・・・すみません嘘つきました

俺です

ちくせう・・・

「なんで食い倒れたの・・・？」

と聞く

「ハンバーガー・・・お徳用のクーポンが沢山あったから・・・」

「ふむふむ」

「とりあえず30個ほど頼んでみたり・・・」

「悪い・・・俺にはどうすることも出来んわ・・・後はがんばれ」

俺は即座に姫神から離れ上条たちの方へ行く

「ちょっ！柴葉！？まだ何も聞いてないぞ！」

「諦めるんじゃないにゃー！柴葉！！」

「もうちょいガンバレやー！」

ちっ・・・仕方ない・・・

俺は姫神のところへ戻る

「それで・・・？」

「全財産・・・五百円・・・帰りの電車賃・・・600円・・・買
いすぎ・・・無計画・・・ヤケ食い」

「そうか・・・次の次の駅まで歩けば何とかなるんじゃないか？」

捨てた・・・

後は頑張れ

「ちょ！柴葉！？それは酷くないかにゃー！？」

「酷くない酷くない」

大丈夫だ

どうせあとで塾の人が来るし

「と言うか100円ぐらい誰かに借りるとか出来ないのか？」

上条・・・余計なことを・・・

「おお、その手があった」

姫神が顔を上げる

「おお！べっぴんさん！」

「ぱしゃっと」

土御門と青ピが騒ぐ

青ピは写メ撮ってるし・・・

「・・・」

姫神が上条を見る

「な、何故、こっちをみる？てか期待の眼差し向けるんじゃないか？」

「百円、無理？」

「え？無理、貸せないものは貸せない！」

酷いな上条

「チッ！たかが百円も貸せないなんて」

「たかが百円も持っていないのはどこの馬鹿だ！！」

上条落ち着け

「こんな美人の巫女さんを前にその返事、成長したにゃーカミやん
！」

土御門がこんな事を言うから・・・

「美人に免じてあと百円」

と姫神が言う

だが上条は断る

で

「百円」

土御門に

「にゃあああ！こっち来た！！」

「百円」

青ピに

「こっちにも!？」

「写真撮られた」

「有料!？」

まあもちろんこっちにも

「百・・・」

来るだろうと思い空間移動で逃げた

ちなみに近くの席の影に隠れている

「ああっ! 柴葉のやつ逃げやがった・・・」

「なんやてー!？」

とか何とか騒いでいる

そのあと姫神が魔法使いとかなんとか言ってインデックスがキレた
んでなんかスーツ着た見るからにカタギじゃない人たちが来て姫神
に百円を渡す

塾の先生だそうだ

そして姫神が帰ったあと

「なんだったんだ一体・・・」

俺は上条の所に戻った

「デメエ!!!どこ行ってやがった!!!」

「あそこのテーブルに隠れてた」

とか何とか喧嘩のようなやりとりをした後、俺たちはマックを出た
ちなみに土御門と青ピは爆笑していた

で帰り道インデックスが猫を見つけ飼いたいと騒いだあと魔方陣が
どうのって言ってどっか行った

たぶん人払いだな

予想通りというかなんと言うか・・・

ステイルがやって来た

「久しぶりだね・・・上条当麻、柴葉葉」

「ステイル・・・」

上条の反応→

警戒している

「イギリスへ帰れw」

俺→

「いきなり酷くないか？」

上条が突っ込む

「はぁ・・・で？なんの用だ？」

「いちいち笑うな・・・ぶっ殺すぞ？」

ありゃ？S笑いを解除するのを忘れていたのか？

ステイルは炎剣を放ってきた

「上条、GO！」

「ええ!？」

俺は上条を盾にする

上条は慌てて幻想殺しで防いだ

「てめえ！なにすんだ！」

「盾にしたくらいでうるさいぞ上条」

「お前にとって友達は盾なのか！？」

「うん」

俺はきっぱりといった

「ちくしょおおおおおおお！・・・不幸だ・・・」

「んで何の用だ？またインデックスか？ロリコン神父」

俺はステイルに問う

毒舌と一緒に

「内緒話だけど？それと僕はロリコンじゃない」

「内緒話ねえ・・・ステイル（ロリコン）の話なら幼女をさらって来いとか」

「だから僕はロリコンじゃない！！受け取るんだ」

そう言ってステイルは封筒を出し中から書類っぽいものを出す

うわー浮いてるよ・・・手品？

ステイル（ロリコン）は今回の仕事についての説明をする

「と言うわけだから手伝え」

「命令するなステイル（ロリコン）」

「いい加減そのステイル（ロリコン）というのをやめてくれないか？」

仕方ない・・・やめてやろうかステイル（ロリコン）

あとで報酬を請求出来なくなったら困る

「で？吸血鬼がどうのつてのを手伝えと？」

「そういうことだ。拒否権はないよ？君たちが従わなければインデックスは回収ということになるだろうから」

「マジで？」

まあ原作をこれ以上壊すのも気が引けるので

「分かった・・・でも下手な動きをしたら」

「殺すって？大丈夫だよ。君たちが三沢塾にいる間にインデックス

を回収なんて真似はしないから」

「よく分かったな・・・俺の考えてる事」

「顔に出てたよ」

マジで？

「ああ」

上条までうなずくか・・・

俺って顔に出やすいタイプ？

「分かった・・・俺も行く」

上条も答える

とりあえず一旦寮に戻る事になった

夕方から三沢塾に乗り込んできました

8月8日「あれ・・・日付復活してる・・・」(後書き)

更新ちよっと遅くなりました(?)

とりあえず2〜3話ぐらいで終わりそうな吸血殺し編

ぶっちゃけむつかしい

それじゃまた次回

今日中に出来るかな・・・

明日には・・・まあ出来てるだろう

8月8日? 「三沢塾に行ってきます」 (前書き)

吸血殺し編の2話目です

それじゃ特に書くこともないので前回のあらすじ

ステイルからかいまくったぜ!

終わり

適当なのは仕様です

そいじゃどーぞ

早く春樹に五重魔方陣とか使わせてみたいです

8月8日? 「三沢塾に行ってきます」

「何してんだお前・・・」

寮を出たらステイルがルーンのカードを壁に貼り付けていた

しかも俺の部屋の前・・・

迷惑だからやめてほしい

「あの子の護衛に魔女狩りの王を置いておこうと思ってね」

「ふーん・・・お前インデックスのことすきなのか?」

と言ってみたらステイルが噴出した

「なななな何を言っているんだ君は! アアアアレは保護する対象であっててて」

めっさ動揺しとるし・・・

「やっぱロリコンか・・・」

小さな声でそう呟いたら

「ロリコンじゃない!!」

と反論してきた

「めっちゃ動揺してたくせに何を言うかWWW」

めっちゃ笑顔な俺

やべWWW楽しくなってきた

「ローリコンローリコン」

とからかっていたら

魔女狩りの王を出してきやがった

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

俺は慌ポルテクスてて渦を展開して逃げる

「なんだなんだ!？」

その悲鳴を聞いて上条が出てくる

出てきた上条もちろんとぼっちりを喰らいそうになった

「うおおおお」

危ポルテクスうく渦に触れて体が等分される所だったが幻想殺しで俺の渦を消ポルテクスす

「なにやってんだ!？」

「ステイルからかってたら魔女狩りの王出された」

「完全にお前が悪いじゃねえかああああ」

まあさすがに言い過ぎたか

上条に怒られた

「ワリイ言い過ぎた」

適当に謝る

「君とはいつか決着をつけないといけないようだね・・・」

ステイルめっちゃ怒ってる

まあいいや

「いやいやお前には無理だろう」

そう言ったら炎剣放たれた

「あぶねっ！」

俺は弱者のパラダイムで弾く

上条に当たりそうになった

上条は慌てて右手を出して防ぐ

「いい加減にしろオオオオオオオオオオオオ」

上条がキレた

「「アウト！」」

そして俺とステイルにゲンコツを放ってきた

地味に痛い・・・

上条に怒られたんで喧嘩はここまでにして三沢塾に向かうことにする

「結構でかいな・・・」

時間短縮

三沢塾にやってきました

早速中に入る

「→何これ・・・」

なんでしようねえ・・・

「誰も気付かないな・・・俺や上条はともかくステイルは明らかに不審者だろ・・・」

「結解がはってあるんだ。コインの裏と表みたいなものさ。表の住人は裏の住人……つまり僕たちには気付かないようになっていたみたいだね」

ステイルが説明した

「俺の幻想殺しで消えないよな……」

上条がステイルに聞く

「それはない。この結解は核を破壊しない限り壊れないだろう」

「ふーん」

上条がうなずく

「まあ俺たちには都合がいいか」

あ、これ俺ね→

一人称が同じだとややこしい

すると少し離れたところに何かを見つけた

「なんだアレ……」

と上条

俺たちはそこに近づく

「・・・ロボット？ じゃないよな・・・」

上条が言う

「何をしている？ ここには何もない」

「え？」

「まあ確かに君たち一般人には珍しいかもね」

「俺はそうでもないぞ？」

俺は返事した

ステイルは無視して続ける

よーしあとでぶっ殺す

「これは・・・ただの死体だよ」

「死・・・体・・・？」

上条動揺しまくってんな

「お前はなんで動揺してないんだよ・・・」

「一回死んでるからな・・・」

と返答すると

上条は

「なるほど・・・」

ステイルは

「？」

？マーク

転生者って知ってんのは上条だけだしな

ステイルは記憶改変させていただきました」

上条は右手のせいで出来んからバラすしかなかったんだ

「恐らくローマ正教の十三騎士団だろう・・・この様子じゃ全滅みたいだね」

「なんでだれも騒ぎ立てないんだ？」

すると生徒の女の子が死体の前を通り過ぎる

すると足元に血がつく事もなく何事もなかったように通り過ぎる

「なんだ今の？」

「表と裏だね・・・と言うかさっき説明したろう」

「そうだな」

「行くぞ」

階段の途中で上条が携帯電話を取り出した

「何をしているんだ？」

「コインの裏から表につながるかなって」

「早くしろ」

そして上条はインデックスに電話をかける

ラザニアとプリンを食われたらしい

ドンマイ上条

「あ、そうだ。電話って1分以上会話すると寿命が1年ずつ減るらしいぞ？」

と上条が言ったらインデックスが慌てて電話を切った

ステイルはなんか妬いていた

「ローリコンローリコン」

「うるさいよ・・・」

なんやかんやで食堂についた

すると生徒たちが一斉にこっちを見た

そして

『始点の翼は輝く光 輝く光は罪を暴く純白 純白は純化の証
は行動の結果 結果は未来 未来は時間・・・』

一斉に魔術の詠唱を始めた

「うわっ！気持ち悪っ！！」

無表情で一斉に同じことを言う奴らって気持ち悪いな・・・

「表の住人を裏に立たせているんだろう・・・」

ということだった

「よし幻想殺し！君の出番だ！！」

「がんばれ上条！」

そういつて俺とステイルは上条を残し逃げた

「おいてめえら！置いてくな！！」

と言って上条が追ってくる

「おいおい・・・一分どころか十秒も持ってねえじゃねえか・・・」

と言ったら

「だれが一分持たせるって言った！！」

「ステイル」

「あのやろう・・・」

てなやり取りをしていたらステイルに追いついた

そして階段にたどりつく

すると上と下から同時に光の弾が追ってきた

「おいおい東方ですかコノヤロー・・・」

こんなこと言っても上条とステイルにはわからんだろう

「一つ秘策があるんだが・・・」

ステイルが言ってきた

「そんなもんあるなら最初から使え!!」

と上条が言うと

「そうかい・・・」

と言って俺と上条を下に突き落とす

「うわわわ」

そして

「なにすんだてめえ!!」

と上条が文句を言ったら

「バッドラック!」

といって逃げていった

「あんにゃろー」

とりあえず逃げる

するとたどり着いた先にめがねと三つ編みの女の子が立っていた

そいつはいきなり魔術を発動しようとする

身体に亀裂が入る

「オイ！」

それでもそいつは魔術の詠唱を続けるが途中で倒れた

すると光が一箇所集まってまたバラける

そして全て地面に落ちて消えた

「これは一体・・・」

そう上条が呟くと

背後から姫神が現れた

8月8日? 「三沢塾に行ってきます」 (後書き)

眠いんでこの辺で終了させていただきます

それじゃまた次回ゝ

葉「あとがき短っ!」

8月8日？「アウレオルスがああああ」

「手当てすれば平気」

姫神が言う

「でも・・・」

「皮膚を剥がされて毛細血管が傷ついているだけ」

「お前・・・医者でもないのに」

「血の流れについてなら私は人より詳しい。手伝って」

そう言って姫神は倒れた女の子の服を脱がす

上条が慌てて顔を剃らすが姫神に止められる

今更だけど俺の能力使えば1分とかからず直せた気がする

でもそうしたら姫神の出番が減ってかわいそうだからやめとこう

ただでさえ少ないんだから・・・

「今なにか失礼なこと考えた？」

姫神が少し怒った顔をしながら聞く

「地の文につっこむな・・・まったくここの住人はどいつもこいつ

も・・・」

「何の話だよ・・・」

上条が呆れる

「出番増えるといいな・・・」

俺は誰にも聞こえないように呟く

この小説ってオリキャラ結構いるのに出番すくねえよな・・・

「とりあえずおしまい」

治療が終わったようだ

「てか・・・お前すげえ腕だな・・・もしかして無免許の名医さんとか」

「医者じゃない」

「え？それじゃ・・・」

「私魔法使い」

「えっと・・・どの辺が」

「それなら持つてる」

そういつて姫神は胸に手を入れる

上条が顔を赤くして目をそらす

そして中から出てきたのは

「魔法のステッキ」

警棒じゃねえか・・・

「新素材」

「ふざけんな！」

どこのコント？

ショートコント・・・魔法使い

みたいな？

「「今何か失礼な事考えた？」」

同時に聞いてきやがった

息ぴったりじゃねえか

マジでコンビ組んでみたら？

「カンガエテナイヨ」

「めっちゃ棒読みじゃねえか・・・」

しまった

「と・・・そうだ。救急車よばねえと」

上条が言う

「それはいい」

姫神が（r y

「略すな・・・」

だから地の文に（r y

とこの辺でふざけるのはやめとこう

その後、姫神がここにいる理由を話す

「だから約束した。殺す為でなく。助ける為にこの力を使うって」

吸血鬼は普通の人間となにも変わらない

誰かのために笑い行動できる

姫神の血はそんな人たちを呼び寄せ殺してしまうのだそうだ

学園都市なら取り除く方法もあるだろうと思ったが

そんなものは無かった

だがアウレオルスはこの力で助けた人がある

だから姫神は誰かを助けるためにこの力を使いたい

だからここにいます

(なるほどな・・・)

「そんなの駄目だ・・・もしそいつがお前の言うとおりの人間だとしたら、これ以上間違えさせる事なんてできない。このまま済ませちまったら、本当に取り返しのない事になっちまう」

上条がそう言った時

アウレオルスが廊下の奥から現れる

「ヒーモヒモヒモヒーモヒモー♪」

「はっ!？」

俺は公園で目が覚めた

なんて嫌な夢だ・・・

アウレオルのキャラが完全に変わってやがった

なんでマスクをかぶった某ホームレス・・・？

でもなんで公園なんか・・・

なんか忘れてるような・・・

見ると上条も隣にいた

スタイルもいる

あー・・・てことは上条たちは三沢塾に乗り込んできたわけか

でもなんで俺も？

俺も乗り込んだんだっけ

「ここは・・・」

「君がここに居るという事は日本には違いないだろう」

何か重要なことを忘れているような・・・違うかい？

ステイルはそう言った

「まあ思い出す必要もない程度のことなんだろうさ」

「そう、なのかな・・・」

上条は頭を右手でかく

そして何かを思い出す

「上条ちよいと右手かせ」

俺は上条の右手を借りて頭に当てる

よし、思い出した

三沢塾に突入した事

姫神に遭った事

そしてアウレオルスに遭遇して原作どおりの会話をした事

夢で見たのはこれが変わった奴か

声優関係でキャラ崩壊してたな夢の中のアウレオルス

「お前の疑問をさっくり解消するおまじないを教えてやる」

「東洋の呪いは神裂の専門なんだ。彼女に聞くよ」

「いいから目を瞑って舌を出せ」

ステイルは意味が分からないというような顔をする

「べーって出してみろ」

ステイルはしぶしぶ舌を出す

その瞬間、上条がステイルのアゴを殴る

「よくも人様を囷に使って逃げ延びやがったな!!」

「そおい!!」

ついでに俺も上からかかと落とし

やべ・・・舌から血い出とる

俺はキュアで舌を治す

あぶねえあぶねえ・・・危うく殺すところだったぜ

「柴葉・・・お前、殺人未遂」

上条が言ってきた

「治したんだからいいだろ？」

そう言ったら

「いいわけないだろう」

ステイルが血のついた口を拭きながらルーンのカードを取り出し

「死ねえ!!」

炎剣を放つ

「うおっと」

俺は渦で防ぐ

ボルテクス

「あぶねえな・・・こんなところで喧嘩してる場合じゃないだろステイル」

俺がそういったらステイルがキレた

がなんとか怒りを抑え

「そうだな・・・君を殺すのは吸血殺しを救出してからにするよ（怒）」

と言って来た

でもなんかめっちゃいらだってる

やりすぎだったかWW

俺たちは三沢塾へ戻る

すると何人もの甲冑を着た奴等がいた

「あいつら・・・入り口に居た・・・」

そういや入り口で死んでた奴と同じ甲冑だ

てことは

「十三騎士団の生き残りか・・・」

先に言われた

ステイル（ロリコン）め

「だからそれはやめろといっているだろう」

そんなやりとりをしていると

「攻撃を開始する！！」

甲冑の奴の一人がそう叫ぶ

そして剣先が光る

「ヨハネ黙示録 第八章 第七節より抜粋！第一の御使い、その手に持つ滅びの管楽器の音を此処に再現せよ！」

そう言ったと同時に剣がより強く光る

パーパラッパーと言うのはギャグか？

「あいつら何する気だ！！」

「聖呪爆撃・・・！」

「爆撃って中にはまだ人がいんのに・・・」

すると空に雷雲のようなものが現れ空から落雷が落ちる

うわー凄い威力

ビルが倒壊してんじゃん

すると一瞬倒壊が止まりビルがテープの巻き戻しのように元に戻る

黄金練成ってマジでチートだろ

「アレが黄金練成・・・アウレオルスの本当の実力・・・！」

ステイルが絶望的な顔でそういった

オイオイ・・・チートな俺でも勝てるかわからんぞ？

すると地面にインデックスのフードが落ちていた

中から三毛猫が現れる

「スフィinks!!・・・まさか・・・インデックスも!?!」

上条がそう言った

8月8日? 「アウレオルスがああああ」 (後書き)

まずは一言

ふざけてすみませんでしたああああああ

アウレオルスの口調めんどくさいんです

ヒーモヒモヒモヒーモヒモー♪

誰のネタだか分かりますよね

なんかやりたかったんです

でも無理に入れたら変になる

そうだ! 夢オチにしてみよう!!

と言うことでこうなりました

この小説は大事なところで真面目にやらないんで注意してね☆

葉「おせエヨ」

あっはっは

それじゃまた次回

8月8日? 「アレ・・・2、3話で終わらせる予定だったのになぁ・・・ふざけ

ホントにふざけすぎた・・・

アウレオルスを星にしたり

ステイルをいじめたり

なんかその他色々・・・

どうでもいいことをやりすぎた結果がこれだよ・・・

吸血殺し・・・2、3話で終わらせるハズだったんだけどなぁ・・・
もう4話だよ

まあいいか! 楽しかったし

多分今回で終わればいいなぁ・・・

それじゃ前回のあらすじ

アウレオルスがあああ

終わり

葉 「ってこれ前回のサブタイじゃねえかあああああああああ」

つまり前回を見ろといっているのだよ

葉「じゃああらすじやんなよ」

どうせ見てる奴なんて居ないだろうからやめたいんだけど

ここまで来ちゃうと読者にやめていいか答えを聞かないとやめられないんだよ

葉「見てる方々に判断を押し付けてんじゃねえよ・・・」

さて・・・それじゃどうぞ・・・

葉「テンション低ッ!!」

8月8日? 「アレ・・・2、3話で終わらせる予定だったのになぁ・・・ふざ

アレオールの居場所はステイルが既に突き止めているらしい

俺たちはステイルについていく

後ろから見ていると・・・

ステイルの血管が今にも切れそうなんだが・・・

まあいいや

あータツオのバースト銃ほっすい

そんなくだらないことを考えていたらステイルが急に止まる

上条は避けきれずにぶつかる

「なんだよ!」

「なるほど・・・そういうことか」

「?」

「三年も潜伏していれば世情にも疎くなるものだ・・・」

そして俺たちはアウレオールのいる部屋につく

「姫神!!」

上条が叫ぶ

そしてインデックスを見つけ

「!・・・インデックス!!」

また叫ぶ

のどつぶれるぞ

「のんきだなお前は・・・」

上条だから地の文に突っ込むな

シリアスが壊れるだろうが

「壊したのはお前だ」

するとステイルが

「残念だが君は目的を成し遂げる事はできないよ」

原作の流れに戻す

よかった」

「壊したのはお前な？」

だから上条お前シリアスを壊すのやめんさい

「ふん、今更ながら我が真意に気づいたか、ならばその体勢を前に己が無力に嘆き、嫉妬に身を焦がすがいい」

「上手く行くなら焦がし甲斐もあるんだがねえ・・・繰り返すが君に彼女を救う事は出来ない、インデックスを救う事はね」

おお・・・お二人さんナイス

「インデックスを？」

「貴様はしくじったと言うだけの事だ・・・だが私は」

そしてアウレオルスはインデックスのことを話す

「コイツ・・・インデックスを知っていた？」

「そう・・・彼もインデックスのパートナーだったのさ・・・今年は君、去年は僕、そして3年前が彼・・・アウレオルス・イザードと言うわけさ」

「これまで禁書目録は一年毎に記憶を消さなければ生きていけなかった・・・これは必定であり、人の身では抗えぬ宿命・・・しかし」

「逆に言えば人ならぬ身を使えば済む」

ステイルがアウレオルスより先に言う

「吸血鬼とは無限の命を持つモノ、無限の記憶を人と同じ脳に蓄え続けるモノ。あるのだよ、吸血鬼には、どれだけ多くの記憶を取り入れても、決して自我を見失わぬ術が！」

ねえ・・・魔術師ってみんな頭悪いの？

アウレオルスの力なら絶対インデックスの魔術を解除できたと思うのだが・・・

俺はそんなことを考えていた

「念の為に聞くけど、その方法が人の身には無効だとしたら？」

「当然。禁書目録を人の身から外すまで」

「インデックスを吸血鬼にすると？」

俺が口を開く

「必然。それでも禁書目録が救われる事には変わりはない！貴様にもそれは分かるはず、正しく一年毎に眠り狂う、この子の最期をみたであろう貴様には！」

「ぶふうWWW」

やばい・・・つい笑っちゃった

「貴様・・・何がおかしい」

「いや魔術師って皆算数もできないんだなとWWW」

やばい・・・笑いが止まらない

「どういことだ・・・」

「脳の15%で一年分も使うはずないだろう？そもそも記憶ってのはいくつかの部屋に分かれてるんだ・・・入れ物が違うんだよ。知識のために思い出を削る必要はないわけ」

むしろ思い出を消しても意味がない

仮に15%で一年だとしても入れ物が違うなら破裂するのは知識記憶

思い出のエピソード記憶を消しても知識の方が圧迫されてるなら結局死ぬさ

「でもそれは魔術側の言う事が事実だった場合だ・・・嘘なんだよ・・・全部」

「なっ・・・」

アウレオルスが驚いた顔をする

「1年ごとに記憶を消さなきゃならない魔術が施されてたわけさ・・・でもそれももう無い」

俺がそう言うとステ犬が・・・あ、間違えた

ステイルが

「君あとで殺す・・・そういうときは、インデックスはとっくに救われているんだ。君ではなく、ここにいる上条当麻と柴葉葉によってね」

ステイルがそう言うとき、アウレオルスがさらに驚く

「あ、ありえん！魔術師でもないただの人間に、一体何が出来ると言うのだ！？」

「必要悪の協会の、イギリス正教の沽券に関わるので他言は控えるが、そうだね・・・コイツの右手は幻想殺しという、つまり人の身にあまる能力の持ち主って訳だ」

「待て！　ならば・・・」

「そう、君の努力は全くの無駄骨だったと言うわけだ、だが気にするな、インデックスは君が望んだ通り、今のパートナーと一緒にいてとても幸せそうだよ？」

アウレオルスが後退る

するとインデックスが寝言を言う

「とうまあ・・・」

「インデックス！」

「とうまあ・・・おなか減った」

その時、上条がこける

「こんなときも飯のことかよ・・・」

俺はがんばって笑いをこらえる

俺も殺されたくは無い

もし殺されたらまた転生させてくれんのかな

ステイルもめっちゃわらつとる

「りんごお・・・大盛り・・・」

幸せそうな顔してんなあおい

するとアウレオルスが笑い出す

上条も笑っていいのかと思ったのか笑う

俺はがんばって耐えるが上条とステイルのせいで笑ってしまった

「俺（僕）達のせいにするな」

だから地の文に（r y

つか笑いをこらえられるなら笑うなよ

瞬間

「倒れ伏せ!! 侵入者共!!」

アウレオルスがそう叫ぶ

そして俺たちは地面に倒れた

あー動けねえ・・・

ライズ全開!!

ダメでした

ちょっと手足が自由になったぐらいで起き上がるのはできないし

地面に倒れたまま万歳ぐらいしかできん

「我が思いを踏みにじり、我が進化をあざ笑い、良かろう、この屈辱、貴様らの死で贖ってもらおう!」

アウレオルスがキレちゃったよ・・・

「待って!!」

姫神が割り込む

上条がとめようとするが声がうまく出ないようだ

「知ってる、私、あなたの気持ち」

姫神は続ける

「でも違う・・・今のあなたは・・・本当のあなたは

上条は右手を自分に近づける

そして親指を

噛んだ

「死ね」

アウレオルスはそう告げる

そして姫神は・・・死んだ

「姫神イイイイイ!!!!」

上条が走って倒れる姫神を抱える

「フハハ、吸血殺などもはや無用！悠然。約束は守った。これでその女も、己が血の因果から解き放たれたであろう！フハハハハハハ!!!!」

アウレオルスがそう高笑いするが姫神は上条の右手により息を吹き返す

「な・・・！我が黄金練成を打ち消しただど！？ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定した・・・その右手、聖域の秘術でも内包する

か!？」

解説すんな気持ち悪い

聖域とかそういう神様を信仰していることを連想させる単語を出すのやめてほしいわ

「ゴチャゴチャうるせえ・・・んなことはどうだっていいんだよ・・・いいぜ! テメエが何でも思い通りに出来るってんなら・・・まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

8月8日? 「アレ・・・2、3話で終わらせる予定だったのになぁ・・・ふざけ

次回で吸血殺し編は完結だと思われま

今回は主人公ふざけすぎた

吸血殺し編では遊び心全開です

シリアスなんてあまり期待しないでね?

それじゃまた次回

8月8日「アレ……俺、いる意味なくね？」
(前書き)

注意！

今回、主人公はほとんど動きません

今回の前書きはネタバレあります

後半原作とは関係ない物があります

と言うわけですよ

[illegible]

だって君、黄金練成で地面に潰されてる状態じゃん

葉「いやそうだけど・・・そこはまあ色々やって・・・」

色々って？

葉「えーつと・・・」

まあ大丈夫さ

今回で吸血殺しは終りだが最後にだけは動かさせてやる

葉「終わったあとじゃねえか」

ちよつとやりたいことがあるんだよ

自我を失った○○○

と上条の腕からでた『アレ』

葉「○○○はお楽しみで？」

うん

それじゃ本編どーぞ

葉「あらすじは？」

休みます

前書きが長くなってしまったんで

葉「あっそ・・・」

○○○は漢字3文字ね？

8月8日「アレ・・・俺、いる意味なくね？」

「ハア・・・床つめて・・・」

「同じく」

俺は今、思念ソウア体を使っている

こうすることでとりあえずごろごろぐらいはできる

床を転がるだけってどうなんよ

「にしても・・・なんだあれ」

アウレオルスが言葉にする

圧死

窒息死

感電死

などなど上条を殺すために言葉にしているもの

「ホントに言葉一つで現実をゆがめてるみたいだな・・・」

黄金練成は知っての通り

言ったことを現実に変える能力ではなく

考えた事をそのまま現実にしてしまう能力だ

だから原作ではその弱点を突かれて上条に敗北する

「ステイル」

「なんだ・・・」

「暇じゃね？」

「君はまだマシだろう」

まあ確かにね

ステイルはまったく動けないけど俺は能力を使えば転がるぐらいは出来る

「イイイイゲームでもする？」

「なんだよそれは・・・」

「はんにゃ考案のゲーム」

「やらないよ」

つまんね

「銃をこの手に、弾丸は魔弾、用途は射出、数は一つで十二分！人間の動体視力を超える速度にて・・・射出を開始せよ！！」

アウレオルスが銃を構え上条に向けて放つ

だが弾丸は上条の横をそれる

その弾丸は後ろの壁に当たり後ろの壁は大破する

オイオイ・・・どんな威力だよ

「簡単には殺さん。もう少し私を楽しませよ」

「・・・っ」

上条は後ずさる

「先の手順を量産！両の暗機銃にて同時射出」

弾丸が上条に当たる

「ぐあああああ」

だが上条は無事だ

「ハッハッハ！！言っただろう、簡単には殺さんとなあ！」

アウレオルスが高笑いする

「準備は万端！両の暗機銃、同時射出を・・・」

「フン、なんだそれは」

ステイルがアウレオルの言葉を遮る

「本当に言葉一つで現実を歪めてるみたいじゃないか」

「当然。黄金錬成は錬金術の到達点、今や世界」

「だったら、何故、吸血殺しを必要とした？」

その一言でアウレオルの表情が変わる

「作ればいいじゃないか吸血鬼ぐらい。言葉一つで命じるままに」

その言葉に上条が反応する

「なぜだ錬金術師。なぜ黄金錬成とやらで吸血鬼を作らなかった。いやそれ以前に……」

「宙を舞え！ ロンドンの神父！！」

その言葉でステイルは宙へ浮いた

「全てを……言葉のままに歪められるのなら……」

「弾けよ！！ ルーンの魔術師！！」

アウレオルスそう言葉にした途端

ステイルの肉体がはじけ飛ぶ

服が飛び散り

皮膚と肉が飛び散り

血が飛び散る

上条がその光景を見てうずくまる

しばらく何かを考えた後

上条は立ち上がりアウレオルスを見る

「さて・・・貴様の自身の源はその右手だったな」

アウレオルスが銃を弾丸ではなく刀身に変更して言い放つ

「ならばまずはその右手を切断する事にしよう」

アウレオルスは銃を構える

「暗機銃！その刀身を回転射出せよ！！」

銃から刃が放たれる

その刃は

上条の右手を切断した

「フハハ「ふふふ！！」 なっ！」

アウレオルスが笑う

だがその笑いを遮り上条は狂ったように笑う

[illegible]

「な・・・なんだコイツは!!」

アウレオルスが後ずさる

上条がアウレオルスを追い詰める

「あ……暗機銃!! 先の手順を複製! 獲物の首を切断させる為にその刀身を射出せよ!!」

銃から刃が放たれる

だがそれは上条をそれて全然違ふところにあたる

「な……！ て……手順を量産！ 両の刀身を二斉射出！！」

いくつもの刃が放たれる

だが上条には一発も当たらない

「だ・・・断頭の刃を無数に配置!! 速やかにその身体を解体せよ!!」

いくつもの刃が上条に落ちる

だがそれはまるでなにかにかき消されるように消えた

「オイ錬金術師・・・テメエ、まさかこの程度で俺の幻想殺しを潰せるとか思ってたんじゃないやねえだろうな？」

「ひい!!」

アウレオルスがハリを取り出そうとするが地面に落ちる

アウレオルスはそれを集めて拾おうとするが

その前に黒い球体に跡形もなく消される

暴王の月

「よう・・・今まで暇でしやうがなかったぜえ？アレが無いとハイにもなれないなあ・・・」

現在俺は暴王^{ノヴァ}使用中

ビビらせるには最適な見た目なんでw

「雑念を掻き消せないよなあ？どうした・・・言葉にしてみろよ」

上条がアウレオルスに近づく

「言葉のままに・・・歪めてみろよ」

「来るなアアアアアアアアア」

アウレオルスは叫ぶ

そして机まで逃げる

てかあれで隠れたつもりか

（ありえん！我が黄金練成がその効力を失うなど・・・！さて！考えるな！そんな事を考えては・・・）なッ！」

アウレオルスの目の前には無傷のステイルが立っていた

「生きてたのか・・・しぶといな」

「君を殺せるまでは死なないよ」

俺はステイルと軽口を叩く

（やめろ！考えるな！信じよ！！私の力を持ってすればこんな奴らになぞ・・・）

「敵いっこねえよなあ！！」

「ハッ・・・」

アウレオルスの背後に上条が立つ

「なぜならテメエの能力は・・・言葉のままに現実を歪める能力じゃなく・・・考えた事をそのまま現実にしちまう・・・」

（コイツは・・・化け・・・）

「能力なんだからなああああああああああ」

その瞬間ないはずの上条の腕から龍が現れアウレオルスに襲い掛かる

「うわあああああああああああああああああああああ
ああああ」

これでアウレオルスとの戦いは終わった

ようやく終わったか

「疲れた・・・」

そんな事を考えていると上条がぶっ倒れた

「上条!？」

俺は上条を支える

やっべ・・・早く病院へ・・・

そう思っていたら

窓から何かが這入って来た

「オオオオオオオ・・・」

それは化け物と呼ぶにふさわしかった

（なんだアレは・・・こんなシーン原作にあったか！？）

そいつはステイルを気絶させ

呆然としている俺の右腕を引きちぎる

「は・・・？」

あまりにも速すぎて気付かなかった

俺が悲鳴を上げたのはそのすぐ後だった

「ぐ・・・ああああああああああああ」

奴は上条の右手に近づき

その右手を食った

「なっ・・・！？」

なんだアレ・・・

『自我を失った吸血鬼だね・・・』

驚いていると唐突に神が頭に直接語りかけてくる

『いや・・・どっちかという洗脳されているのかな』

は？

なんだそれ・・・

『原作から少しずれてるみたいだね・・・多分フィアンマとかじゃない?』

いや軽いな

ってそんなことしてる場合じゃ・・・!

と思っっていると

上条の右手から『ナニカ』が出た

その『ナニカ』は

吸血鬼の命を刈り取った

跡形もなく

葬り去った

「なっ・・・!?!?」

そして吸血鬼のいた場所には

上条の右腕だけが残った

「なんだったんだ・・・一体」

「よくくつついたもんだね？君たちの体って意外とファンタジー？」

俺たちは今、病院にいる

さすがにライズでもちぎれた腕は治らない

影虎さんほど凄くないんです

その辺は世界のバランスの為

既に壊れているが

つか本当によくくつついたな

ちなみに上条とは同じ部屋だ

なして？

「てかくつつけたの先生でしょ」

「10日のうちに2度も入院してくるなんて・・・もしかして、ナース属性！？」

「なんですかそれ・・・ていうか、そんなことのために腕切ります

か？」

「なんだ・・・同胞の種じゃないのか・・・君はどうなんだい？」

俺に聞いてきやがった

「別にナースに興味ないわけじゃないけどだからって腕切るわけないでしょ」

俺は適当にかえす

「じゃあなんで切れたんだ？お前・・・」

上条が聞いてくる

「こういうこった」

俺はその後の出来事を上条の右手から出た『ナニカ』を除いて有線トランスで流し込む

無線だと届かないが有線なら直接触れない限り届く

「自我を失った吸血鬼って・・・つか本当に存在いたんだな・・・」

「俺も驚いたわ・・・」

「つか俺の腕喰われてんじゃん!!」

「ミステイク」

そこを隠すのを忘れてた

「・・・なんか倒れてる姫神の血イ飲んで勝手に灰になったぞ？その時上条の腕が戻ってきた」

適当に嘘をつく

まさか上条の仕業とは言えん

本当に原作になにがあつたのやら

上条がなんか嫌そうな顔をしていた

まあ吸血鬼の中から出てきた腕なんて嫌か

それでもないよりはマシらしい

その後ステイルがやって来てアウレオールのその後などを説明してくれた

上条と同じことを聞かれたがさっきと同じく有線トランス

なんか凄い驚いてた

そのあとインデックスと姫神がやってくる

その時ステイルは一瞬で逃げた

てか早いな

その後のことはよく覚えてない

いつのまにか眠っていた

これで吸血殺し編はどこかおかしくなったまま終わった

8月8日「アレ・・・俺、いる意味なくね？」（後書き）

まあ結局主人公全然動きませんでしたね

せっかくオリジナル展開やったのに

洗脳したのはフィアンマですね

食べた右腕は魔術で取り出すつもりだったんだと思います

吸血鬼が出てきたのは柴葉やその他の転生者がいるせいで世界に多少のゆがみが出来たからです

原作にはあまり関わらないのでご安心を

ただ単に主人公の腕を千切りたかっゲフンゲフン

主人公の出番を作ったただけです

あまり動かないんで

こういう展開があまり好きではない方には一応謝っておきますがコメントで批判するのはやめてください

それじゃまた次回！

8月10日「マネーカード？」（前書き）

シスターズ
妹達編にやっと入った

それじゃとりあえず前回のあらすじ

腕が切られた

終り

葉「相変わらず適当な・・・」

いいじゃん別に

わざわざ前書きを見てる奴なんていないよ

葉「いや居るかもしれないじゃん」

それじゃどーぞ

葉「無視すんな・・・」

8月10日「マネーカード？」

「あー暇だ・・・」

とりあえず勝手に外出中

一応、風紀委員にしばらく休むことを伝える為だ

なんで電話を使わないかって？

さっき電話使ったけどね

回想

「白井か？ 柴葉だ」

『なんですか？』

「腕が切れちゃって今入院中だから風紀委員しばらく行けないわ」

『馬鹿なこと言ってないでちゃんと来て下さいですの・・・忙しいんですから』

プツリ

回想終了

と言う訳だ

電話しても信じてくれないしだからってサボったら退院した時にまだ完全にくっついてない状態で固法先輩の蹴りとか喰らったらまた腕がとれる

仕方ないんで直接行って休むと言うしかないか

で、現在扉の前にいます

「こんちわー」

「こんにちわーってどうしたんですかその腕!？」

挨拶して入ったら初春が驚く

よかったゝイタズラとか思われなくて

「一昨日ぶった切られた」

吸血鬼には言わない

言ったら嘘と断定される

「切られたってそんな軽く言うことなんですか・・・」

呆れとるし

「一応くつつきはしたらしいから元通り動くかはリハビリ次第だな」

「はぁ・・・大変ですね」

「あの医者なら大丈夫だろ。冥土帰しとか呼ばれてるくらいだし」

「そうなんですか？よかったです」

白井とは違ってちゃんと信じてくれた

すると御坂と白井がやってきた

「やっほーって柴葉、どうしたのその腕？」

リアクションが初春と違って多少薄いのが気にしない

「切られた」

「切られた？誰に？」

「アウレオルスイザード」

なすりつけた

まあ根本的な原因はアイツだし（↑ひでえ）

作者黙りなさい

「誰よそれ・・・外人？」

「錬金術師」

「意味わかんないわよ・・・っとそうだ初春さん。マネーカード拾ったんだけど」

そういえば今日だっけ

「白井さんたちも見つけたんですかー」

初春が言う

「も？」

「ここ数日あちこちでマネーカードを拾ったという報告が来てるんです。今48件・・・あ58件に増えてる」

俺も探そっかなー

やっぱいいや・・・今更金集めてもな

100億ぐらい口座に入ってるし

「ネコババしてる人の分を考えると報告の数倍の数ばらまかれています」

「そんな話わたくし、聞いてませんわよ？」

「紙幣を故意に遺棄、破損することは禁止されていますがマネーカードは対象外ですので、特に通達はしてません」

とのことだ

「カードの金額はまちまちで下は千円ぐらいから上は五万を超えるものまで決まって人通りの少ない道に置かれています。ただ、もう結構うわさが広がっているので宝探し感覚で裏道をうろつく人も多いみたいですね」

「ああ、それであんなに・・・」

「てかそれスキルアウトとかに絡まれたりして危ないんじゃない？」

「だから出来ればなんとかしたいんですよ」

「放っておくわけにもいなくなってきたと・・・お姉さま、残念ですがデートはまた今度・・・」

白井・・・気持ち悪いから残念そうにすんな

「なにか言いました？」

だから地の文に（ry

てか恒例になってきたなこれ

「ううん、私一人で行って来るから気にしないでいいわよ」

そういつて御坂は支部を出る

白井が残念そうにしている

「そいじゃ俺も病院に戻るわ。勝手に抜け出して来ちまったから」

「柴葉さん・・・手の込んだ嘘をつくのはやめてほしいですの」

ええ！？まだ嘘って思ってたんの

「嘘じゃねえよ・・・それじゃ」

俺は瞬間移動で外へ出る

さて・・・なにしよう

と街をふらついていると（本当は病院に戻ったほうがいいのだが戻るのもめんどくさい）

「あれ？」

佐天と御坂が路地で宝探しマネーカードをしていた

参加すっかな〜とか考えていたら後ろになにかぶつかった

振り返るとソフトクリームを服につけたガラの悪い男が数人

ソフトクリームをつけているのは一人

「オイテメエ・・・何してくれてんだ・・・」

ソフトクリームをつけた奴が絡んできた

「あーすみません。弁償するんで勘弁してください

「アー！？弁償したくらいで許してもら・・・」

「ホイ」

俺はさっきまたまた見つけたマネーカードの袋（10枚くらい）を
全部渡す

「これでいいでしょう？」

「・・・あ・・・テメエ！こんなんで許してもらえると・・・」

ついでに持っていた金を渡す

札束である

「おおふ・・・チツ！！」

舌打ちして不良は何処かへ行った

いやー余裕で潰せるとは言え腕が切れてる状態で喧嘩なんてしたくねえわ

不良潰すために蹴りなんて放ったりしたら腕に響く

とりあえず御坂に話しかけてみますか

とか思いながら俺は御坂と佐天に話しかける

「おーい。なにしてんだこんなところで」

「アレ？ 柴葉さんじゃないですか・・・ってどうしたんですかその腕!？」

ハイ初春と同じ反応

「ちぎられた」

うんまあこっちのほうが正しかったです

「いやちぎられたって・・・レベル5の腕をちぎれる人と言えどもしかして第一位とでも闘ったんですか？」

「いや」

「違うんですか？」

「アウレオルスとか言う外から来た奴」

「外からって・・・学園都市のセキュリティを破ってこれる奴なん

ているの？」

これは御坂

「いや・・・俺の知る限りじゃ結構いる」

うん

これまで入ってきたのは4人

今後入ってくる奴らも考えると・・・

えーっと

多すぎて分からん

「ふーん・・・最先端って言う割りにたいしたことないのね」

「全然たいしたことねえよ」

俺でも力ずくで行けば突破できる

つか余裕

「んでお前らはなにしてんだ？」

話が魔術に行く前にそらす

「宝探しです」

「ふーん」

「柴葉さんもやりません？結構儲かりませう」

変な口調で誘ってきた

この腕でやるのもなう

「うーん・・・よし、やりますか」

原作介入したいんで

ギョロ目の話術ってのが見てみたい（↑なんだそれ）

さっきから○つかって突っ込んでくる奴はだれだ

ばふんか？

「そうこなくっちゃー！それじゃ次はこっち行きましょー！！」

俺は佐天について行く

「いやーすっかり日が暮れちゃいましたねー」

佐天がそういった

マネーカードはかなり集まった

佐天は腰にさして持っている

御坂も取り分として数枚貰っている

俺も5枚ほど貰った

御坂はどうしうか困っている

俺も同じく

上条にでもやるか

「ホントだって!!」

後ろからなにか声が聞こえた

「シヨンベンしようど路地入ったら女が例の封筒置いてんのが見えてさ、後つけたんだよ」

いや路地でシヨンベンすんなよ・・・きたねえな

「雑居ビルみてーなところ入ってたからそこがアジトだぜ。外から

見た感じ居るのは女一人だけっぽいから楽勝だろ」

とかなんとか話している

そして何処かへ行った

「どうする御坂」

「とりあえず行ってみるわ。アンタはどうすんの？」

「行く」

俺たちは不良を尾行する

そういう話は気付かれないようにしないとな？

来て見ると丁度不良が次々と気絶させられている所だった

そして最後の一人が気絶する

「いやー面白いものを見せてもらったわ。ヤバくなったら割り込もうって思ってたんだけど」

御坂が拍手しながらギョロ目にそう言う

ごめん・・・名前覚えてねえわ

「演出と話術だけで心を折って不良を鎮圧しちゃうなんてねー」
するとギョロ目が御坂をじっと見る

「ん？なに・・・？」

「あなたオリジナルね」

「へ？」

ギョロ目の言葉に御坂がキョトンとする

「オリジナル？」

「貴方も噂くらいは聞いた事があるでしょう？」

「噂って・・・！」

御坂がハッとする

「アンタあの噂のことなんか知ってるの！？」

御坂がギョロ目に掴みかかる

するとギョロ目は御坂の頭をバッグで殴る

「お・・・おっ・・・？」

頭を抑えて悶絶する

「あなたは中学生、私は高校生、長幼の序は守りなさい」

タメ口禁止と言いながら御坂を注意する

「いや・・・敬語使わなかったぐらいで殴らんでも」

とりあえず言ってみる

するとギョロ目は俺にもバッグで殴ろうとしてきたので受け止める

「同じ高校生なんだからいいじゃん」

「そうだったの」

そういつてバッグを引っ込める

まあそれでも精神年齢的には俺のほうが2つばかり上だけでも

高校卒業寸前に死にました

「・・・・・・・・あの噂の出所について何かご存知なのでしょうか？」

御坂が敬語に直して聞く

「あなたよりはね・・・私が居た頃とは目的も内容も随分変わってしまったようだけど」

御坂が何の事か分からないみたいな顔をする

「知っても苦しむだけよ・・・あなたの力では何もできないのだから」

その言葉に御坂が怒鳴る

「私は何を知っているのかって聞いてんのよ！それに私に出来ないってあんただったらなにができオゴフウ！！」

言う途中で御坂のわき腹にローリングソバットが繰り出される

「~~~~・・・・何かおできになるのですか・・・？」

わき腹を押さえてうずくまりながらそういう

「私だって微々たるものよ。マネーカードをまくのもその一環」

「？」

「人の目で街の死角を潰しているの」

マネーカードを路地にまいて監視カメラの穴を人の目で埋めれば

「そこで行われるはずだった実験を阻止できるかもしれない」

「?、?」

そう説明しても御坂は訳が分からないという顔をするしかなかった

「でも私自身が目撃されて尾行されるとは迂闊だったわ」

そういつてギョロ目は机からなんかの書類を取り出す

「家捜しされてこれを見られたら面倒なことになっていたかもしれないから」

そう呟いてギョロ目は書類に火をつける

「やはり形に残るものはダメね・・・ここも勝手に間借りしていただけだし、この人たちが目を覚ます前に退散しましょう」

そう言ったら御坂がギョロ目の肩をつかむ

「ちょ・・・ちょっと待って！・・・ください」

「あ」

すると書類が落ちて床にばら撒かれる

「何の話をしているの！？アンタは一体何を知って・・・」

御坂は気付いてないようだ

ギョロ目に指を指されてようやく気付く

書類が燃えている

「御坂・・・放火はよくないぞ・・・俺の包帯に燃え移ったらどう

してくれる」

「indeed・・・証拠隠滅するなら現場もろとも目撃者も消し
えしまえと・・・」

俺とギョロ目が御坂に問いかける

「え！？違っ・・・」

「「しーらない」」

ギョロ目はそう言ってビルを出て行く

声が二つ重なってる？俺に決まってんじゃん

俺も出ようとする

そしたら肩をつかまれた

「~~~~っ！！」

千切れているほうの

「御坂・・・何をする」

「アンタも不良運ぶの手伝いなさいよ！」

「無茶言うな・・・こんな腕で運べるか」

「知るか！」

ひでえ・・・暴君かお前は

とりあえず火を消すくらいはしてやろう

俺はデープフリーズとパイロクイーンを使い水をつくる

水を生み出す能力は使えんです

「よし消えた・・・それじゃ後はまかせた」

「ちょっ！待ちなさいよ！！」

「アデュー」

そういつて俺は病院に戻った

8月10日「マネーカード？」（後書き）

妹達編突入したって前書きでも言ったか
シスターズ

まあ主人公はしばらく介入出来ませんが

次回は原作8月15日からスタートします

多分夜には更新できるでしょう

それじゃまた次回

8月15日「ええ!?!また一方通行と戦えと!?!」

やったー!!

ギブス取れたよ

と今俺はテンション上がってます

もちろんまだうまく動かせないがリハビリすれば2〜3日で元通り
だそうだ

さすが冥土帰し

そんなわけで俺は街中をふらふらしている

さて

暇だ・・・・・・・・・・・・・・・・

いやうん・・・せっかくギブスが取れたのに俺はとても暇なんだ

で

ふらふらしてたら猫が木の上で震えていた

そしてその下には

御坂がいた

いや・・・多分、御坂妹だろう

俺は知らないフリをして話しかける

「おーす御坂」

・・・・・・・・・・・・・・・・

無視ですかい

「おーい」

「ミャー」

「ハイ？」

御坂がいきなり訳の分からないことをいつてきよった

ミャー？

「と鳴く四速歩行生物がピンチです」

「ああ・・・なんだ猫か」

「?・・・どうかしたのですか？とミサカは貴方に問いかけます」

「なんだその口調・・・で？猫がどうしたんだ？」

「先ほどの道を通りかかった際に路上駐車された車内に取り残されている赤ん坊を発見しました」

ミサカが説明する

「居合わせた警備員が熱中症の危険性を示唆したのでミサカの力でロックを解除したのですが・・・それに驚いたあの生物が木の上にかけて上がり降りる事が出来なくなったのです・・・とミサカは懇切丁寧に経緯を説明します」

なげえ・・・

「あー・・・なるほど」

とか言ったら御坂がやってきた

そしてミサカを少しにらんだ後

「あんた・・・何者？」

とミサカに問う

「あれ？御坂が二人？」

俺は知らないフリをしてそう言った

「ミャー」

とミサカはさっきと同じ説明をする

一文字たがわず

すげえな

すると御坂が

「はー・・・ってそんなことはどーだっていいのよ!! 私にはアンタがなんなのかって聞いてんじゃない!!」

と叫ぶ

「あ」

とミサカが声を上げる

「どうやら更に危機的状況になったようです」

見ると猫が落ちそうになっている

必死に木にしがみついている

「たすけなくてよろしいのですか？」

とミサカが聞くと

「ちっさくても猫なんだから大丈夫よ! それより・・・」

「そうですか。お姉さまはあの生物が地面に叩きつけられても一向に構わないといわれるのですね? その結果大怪我をして機能障害が出て、生命活動を停止しても関係ない」と

そう言ったら御坂は息に詰まった

「・・・分かったわよ・・・どうしろっての？」

「俺が能力で降ろそうか？」

「そうね。そうして頂戴」

「分かった」

俺は猫をトリックルームに入れる

そして足元にもトリックルームを展開し

「 $\alpha \Rightarrow \beta$ 《ダウンロード》」

猫を足元の箱に移転させる

そしてトリックルームを解除する

「これでよし」

「はー・・・便利ねアンタの能力」

「あの箱の中に人を閉じ込めてもう一個の箱に電撃を溜めて移転させたら凶悪な電子レンジの完成だ」

「余計な補足はいらん」

突っ込まれた

「にしても近くで見ると中々かわいい子猫じゃない」

「コネコ？」

「子供の猫だから子猫よ」

と御坂とミサカは話している

てかややこしい

「でも怯えられちゃうのよねー」

「？」

「私の体から出てる微弱な電磁波に反応されちゃうの」

「ミサカもダメなようですね」

とか話してる

てか猫って元々警戒心強いから普通の人でも触ろうとすれば逃げ
と思うんだが

逃げないってことは元・飼い猫か？

すると

「そーじゃなくってえええええええ」

と御坂が叫ぶ

「アンタ私のク・・・クローンだったりするわけ？」

「はい」

即答

「例の実験とやらは凍結したはずでしょ？なんでアンタみたいなのが存在するのよ」

御坂はミサカに問う

「・・・ZXC741ASD852QWE96, 3・・・とミサカは符丁^{パス}の確認を行います」

「あ？」

「やはりお姉さまは実験の関係者ではないのですね・・・先ほどの質問にはお答え出来ません」

本当にこの頃のミサカって機械みたいな奴だな・・・

「どこのどいつが計画を主導してんの？」

「禁則事項です」

「何のために造られたわけ？」

「禁則事項です」

なんかこの回答ってみく・・・おつとさすがにマズイか（今更）

すると御坂がミサカの腕を引っ張り自分の近くへ引き寄せる

「痛い目にあいたいのか？力づくで聞いたっていいのよ」

そうは言ってもやっぱり御坂

少しためらってミサカをはなす・・・てか本当にややこしいなこの地の文

御坂妹だと長い

つかこのパソコンうまく変換できん

とこんな次元を超えても意味ないな

御坂は

「いいわ・・・行きなさい。勝手に後を尾けさせてもらうから」

そういつてどこか（多分実験場）へ向かうミサカを追う

俺はどうすっかな

「俺はどうすればいいと思う？」

とりあえず聞いてみた

「あゝ・・・帰っていいわ・・・つかアンタが先にいたんだから好

きにしなさいよ」

仕方ない

「じゃありハビリもかねてゲーセンでもふらついてくるわ」

「まったく・・・アンタは気楽でいいわね」

それじゃ

といって御坂はミサカを追いかける

「さて・・・何すっかな」

とか考えていると電話が来た

「はいもしもし」

どうやら暗部グループの仕事のようだ

雑貨家業デパートが学園都市にデメリットなことを行ってるらしい

つか雑貨家業ってこの街にはいくつあるんだろう

んで今は雑貨家業のアジトの前に居る

普段ならネメシスを送るんだが

今日は腕のリハビリも兼ねているので俺がいく

「めずらしいにゃー柴葉が直接来るなんて」

「本当ですね」

はい久々の登場

杉原百合でーすつと

「久しぶりに合ったな杉原」

「久しぶりって言うか初めてあった後は分身としかあったことないんですけど・・・」

少し呆れ気味に言ってくる

「さて・・・潰してきますか」

俺は無視してネメシスの異空間からメタルイーターを取り出す

ちなみに神に頼んでタツオのバースト銃と同じ仕組みにしてある

改造してもらったぜ

ついでに銃についてる腕輪を腕にはめてバーストを常時流し込めば

弾切れ無しという優れ物

ためし撃ちに行ってきたす

にしても随分と広いビルに随分たくさん人間がいるな

俺はバースト銃を力弱めに撃つ

少し離れたところには杉原が敵の手足を凍らせて固定している

よく暗部に入っただけでそんな容赦なく攻撃できるなと聞いたら

「自分を売り飛ばそうとした奴らですもん。殺すのにも特にためらいません」

というかためられません

とのことだ

恐いわ・・・

まあ俺も生命の樹とか躊躇なく使ってるから人のことはいえない

生命力のストックを溜めるためである

「あまり派手には出来ないからな」

せっかくバースト銃を手に入れたのに本気で撃てないのは残念だ

殲滅は30分ほど終わった

さて・・・時間が随分とあまったな

ちなみに腕のほうはもうほとんど動かせるようになってきた

まさかギブスを取ってわずか一日でここまで動かせるようになるとは

さすが冥土帰し

とりあえず全員解散

さて・・・次はなにすっかな

とかなんとかやってる間に日が沈んだ

さて・・・一方通行とミサカが今日戦ってミサカが死ぬハズだが介入しよっかな

とりあえず助けてみようか

とかなんとか考えていると少し離れたところから爆発音が聞こえた

「あっちか・・・」

俺は聞こえた方向へ走る

たどり着くと丁度一方通行が電車(?)をミサカの上に落とそうと
しているところで御坂がやめると叫ぼうとしている(つか一息で説
明するか普通)

俺はミサカに近づこうとする

既に電車はミサカの上に来ていた

そして

SIDE OUT

「本日の実験しゅーりょー」

一方通行は愉快そうに

楽しそうにそう言った

「結構ハデに暴れちゃったがアイツらで片付けられんのかねェ・・・
まあどうでもいいか」

一方通行は人を一人殺したにも関わらず何も気にしていない

学校が終わったから帰ろうみたいな

そんな感じだった

「帰りにコンビニでもよって……」

そう言おうとした途端一方通行に向かって電撃が放たれる

一方通行がそちらを振り向くと

「あああああああああああああああああああああ
あああああ」

そこには怒りの雄たけびを上げて突っ込んでくる御坂美琴の姿があった

8月15日「ええ!?!また一方通行と戦えと!?!」(後書き)

終わりましたゝ

次回は一通VS柴葉です

御坂?

突っ込む途中で介入するんで御坂は傍観するだけです

それじゃまた次回ゝ

8月15日? 「困ったときー! タイトルが思いつかないときー! ー! ってまたかよ

もう柴葉VS一方通行でいいですかね

前と同じっぽくていやなんすよ

それじゃどーぞ

葉「あらすじが消えた・・・」

それじゃどーぞ

8月15日? 「困ったときー! タイトルが思いつかないときー! ってまたかよ

外では御坂と一方通行の闘いが始まろうとしている

その頃俺は

「あー随分傷が酷いな・・・足なくなってんじゃん」

ミサカの治療をしていた

ふむ・・・自分の切れた腕は治せんが他人ならなんとかなるか

時間かかるけど

「とりあえずキュア全開」

すると結構速いスピードで足が生えてきた

正直気持ち悪い

「・・・・・・・・・・よし」

とりあえず治療完了

さて

ちよいと一通さんと第二ラウンドとしゃれ込みますか

一方通行への攻撃に移ろうとしたときに

どかーん☆

とか言うアホな効果音が聞こえ

振り向くとそこには

無傷のミサカを抱えた柴葉が立っていた

S I D E 柴葉

うん

どかーん☆ってのは自分でやりました

今更恥ずかしさがこみ上げた

だがそれを押さえ込み

「やっほー」

と挨拶

「な・・・アンタなんで・・・」

「いやーふらふらしてたら爆発音が聞こえてさ。言ってみたら今にも御坂妹の上に廃車が落っこちそうになっててさあ・・・慌ててレポートして治療して」

「とうかその子足が・・・」

治っていると言いたかったっぽいがつまる

「ああ。治した☆」

なんででしょう

俺はなんだか地味にテンションがハイになってます

「治したって・・・」

「オイ」

御坂が言おうとすると誰かが割り込む

一方通行だ

「よう、一方通行。久しぶりだな」

俺は一方通行に話しかける

「デメエ・・・」

ちょ・・・こわいんすけどその目

なんとかありません？

「なに？知り合い助けてなんか悪い事でもあんのか？」

「あるに決まってるだろオが・・・！」

「あっそ、なら」

俺はミサカを御坂に放り投げる

「ちよっ！」

御坂は慌てて受け止める

「投げるとかなに考えてんのよ!!！」

「>m (m<>m (m<」

「顔文字であらわしてどうすんのよッ!!!!！」

ちよ・・・電撃はご法度

気を取り直し

「んで？ 一方通行・・・こないだのリベンジでもやってみるか？」

俺は一方通行に問う

「デメエ・・・なめてンじゃねエぞ!!！」

一方通行がレールの骨組みを飛ばす

「そんなん効くか」

俺は暴王の渦で消し去り

「流星^{ランス}」

久々に使った気がする

流星^{ランス}を放つ

だが

「あたんねェよ」

一方通行は能力で飛んで避ける

「どーかな」

だが流星は横薙ぎに曲がり一方通行を弾き飛ばす

「なっ!!」

一方通行は壁に直撃する

だがやっぱり無傷

「あーやっぱそう簡単にはダメージ与えられないか」

どーすっかなー

あいにく今日はO2もってきてねえし

よし

アレ使ってみるか

と

気付いたら一方通行はこっちに向かっていた

「よそ見してんじゃねエぞ!!」

俺は一方通行から距離をとり

「陰極まれば陽となり、陽極まれば陰となる。反転滅絶 断ち切れ」

二匹の白と黒の蛇を出す

そして

「陰陽心羅」

一方通行に当てる

すると

「なっ・・・!」

一方通行の能力が完全に解除された

俺はその隙を見て一方通行に近づき

蹴りを入れる

「ガハアッ!」

一方通行は体の中の息を全て吐き出し吹っ飛ぶ

俺は一方通行に近づく

すると

「お待ちください」

という声が聞こえた

「計算外の戦闘は予測演算に誤差を生じるおそれがありますとミサカは警告します」

後ろを振り向くと何十人ものミサカが居た

「な・・・」

御坂が声を上げる

ミサカ達は言葉のリレーをするように順々に話していく

「特に彼はレベル5ですので」

「戦闘により生じる歪みは」

「非常に大きく」

「期間の短縮はおろか」

「計画が破綻するおそれがあります」

「またミサカには今後予定されている実験にあわせた」

「チューニングが」

「施されており」

「計画を途中で変更することはきわめて困難であるとミサカは説得します」

すると一方通行が起き上がってきた

「チツ・・・分かった分かった分かりましたよ・・・ツタク・・・
つづきはまたな・・・柴葉」

まさか名前で呼んでくるとは

「またミサカを殺そうとしてるのを見たらな」

そう言うところ一方通行は舌打ちして何処かへ消えた

なんで俺はこんな善人みたいなこと言ってるのかね

暗部で散々殺してきたくせに

クローンではない人間を

造られた物ではない物を

そう考えると一方通行をとにかく言える立場ではない

むしろよく普通の人間を使わない方法を考えたって褒めてもいいぐらいだ

・・・いみわからん

気を取り直して俺はミサカに聞いてみた

「なんでこんな実験なんかに協力してんだ？」

すると

「ミサカは計画の為に造られた模造品です」

「借り物の体に借り物の心」

「単価にして18万の」

「実験動物ですから」

と言ってきた

御坂は少し離れたところでうずくまっている

とりあえず今はそっとしとこう

俺はミサカを冥土歸しの所へ運びアレイスターの所へ向かうことにした

8月15日? 「困ったときー! タイトルが思いつかないときー! ー! ってまたかよ

とりあえず終わったぜ

御坂VSアイテムには干渉させる術が思いつかないので次回は一気に20日です

ようやく原作3巻に入ったぜ

とその前にアレイスターに合わせるんだった

2回目(実際にはそうでもない)の対面です

それじゃまた次回

8月15日? 「アレイスター」の二回目の対面 (前書き)

こんにちはー

遅くなりました

ついでにフェアリーテイルの転生物書き始めたんでそっちもよろしくお願いします

主人公は違いますけど送った神は同じということに

まあ絡みませんが

それじゃどうぞ

8月15日? 「アレイスターとの二回目の対面」

「そんじゃそいつお願いします」

俺は冥土歸しにミサカを預けアレイスターのところへ向かう

目的は今回の実験の妨害についてのこと

そこで現在窓のないビルにいる

「やっほーアレイスター」

俺はアレイスターに挨拶

「なんで転生者とやらは私とそんな気軽に話せるんだ」

アレイスターってこんなキャラだっけ

ちょっと変わってるような

そうか

作者のせいか

ばふん「そうです」

オイ

出てくんなよ

「転生者って知ってたのかよ」

「君は滞空回線の事を知っているんじゃないか?」

チッ・・・そうだった

「神がなんとかしてると思ったんだがな・・・まあいいや」

とりあえず本題に入ろう

「実験を中止してほしい」

「実験とは・・・一方通行の絶対能力進化実験のことか?」

「そうだ」

「それは聞けない願いだね」

「学園都市の目的はレベル6を生み出す事だろう。俺でいいじゃん」

自分でいって自分に虫唾が走る

本当はレベル6なんざ御免だね

俺は俺のままでもいい

実験に使われるなんて勘弁してほしい

「一方通行は第一位、君は第二位、価値が違う。レベル6になれるのは一方通行のみだ」

「滞空回線があるなら俺が多重能力者で一方通行を倒す実力があることぐらい知ってるだろ？」

「そういう問題ではない」

「上条当麻に一方通行を倒させるのが本当の目的なんだろう」

原作にはそんなことは書かれていない

だが上条に一方通行がやられた際に実験を中止したという事はそういう目的

もしくはそうなくても問題ないということだろう

アレイスターは答えない

「どこまでも見透かせるのはアンタだけじゃない。少なくとも俺は第3次世界大戦の結末まで見れる」

原作知識はそこまでしかない

そこから先は自分で勝手についていく

上条なり御坂なり一方通行なり浜面仕上なり

ついていけば介入できるだろう

「全て計画の内か？なら壊してやるよ・・・その計画げんそくいいたいことはそれだけだ」

じゃあな

そういつて俺は窓のないビルが出る

最後にアレイスターが何か言っていた

『君も計画に使わせてもらおう・・・壊せるものなら壊してみろ』

そうかい

随分恐いこと言ってくれるじゃねえか

まあいい

上条当麻と一方通行に成長してもらわないと困るのは俺も同じだ

出来るだけ原作どおりにことを運ばせてもらおうか

8月15日? 「アレイスターとの二回目の対面」 (後書き)

短くて駄文

すみません

でも仕方ないんです

アレイスターの口調難しいんです

これから先は更新を大体毎日から3〜4日に一話くらいにさせてもらいます

受験生なんでいい加減勉強しないと人生が終わる

とまでは大げさでもないですが大げさなんでしょうかね

日本語がおかしくなりました

取り乱しております

すみません

まあ理由はまず

? 受験勉強

? フェアリーテイルの小説を書き始めた

8月20日「アイテム？何の話だ」（前書き）

遅くなりましたー

3～4日と言って5日目です

理由は叔母が勉強を教えるとかでやってきてパソコンを開く余裕がなかったんです

それじゃどーぞ

8月20日「アイテム？何の話だ」

やっちゃったー

麦のんVS御坂を無視しました

てか忘れてた

「てかいつの間にか20日だよ・・・」

そう・・・既に20日である

原作第3巻開始

上条がミサカと会う日であったりする

まあ既に一方通行との2R目をやってから5日が経過している

その5日間、俺は何か忘れていている気がするとか思いながら学園都市製のRPGを楽しんでいた

風紀委員？とりあえず仕事はしてましたよ

暗部とか風紀委員とか暗部とか暗部とかete・・・

とかなんとか考えながら俺はラスボスとの戦闘を続ける

そして

「ヨッシャクリア！」

さて・・・やることも無くなったし

久々に外に出るか

なんで今更前世の引きこもりが蘇ったかね

俺は着替えて外にでる

「あっちいゝ・・・」

さすがは真夏

暑い・・・

「暑いってレベルじゃねえよ・・・」

どうやら今日の気温は38度あるらしい

インフルエンザ並・・・とまではいかないか

すると隣から上条が出てきた

「アレ？ 柴葉じゃん」

「上条か・・・」

どうやらこれから補修らしい

「どーした元気ないぞ」

「そりゃこの暑さじゃな」

「なるほど」

とりあえず俺はフラフラしながら寮を出る

んでフラついていると御坂を見つける

どうやら研究所のほうを望遠鏡で見ているようだ

「何してんだ・・・」

俺は背後から話しかける

「ひゃあ！」

とか変な悲鳴を上げながらこっちを向く

「・・・なんだアンタか・・・」

「なんだとはなんだ・・・お前もしかしてアレから関連の施設を破壊して回ってたとか言うなよ？」

「その通りよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

呆れて声も出んわ・・・

「・・・お前犯罪をそんなハッキリと自白するとは」

「むしろあの実験の方が犯罪じゃない」

「暗部に目えつけられてもしらないぞ？」

グループに依頼が来ていたら御坂はどうなっていただろう

魔術師に座標移動、魔術師兼精神感応に多重能力者、残虐氷結能力
(最近だんだん黒くなってきた)

・・・俺が出なくても死んでたかもな

いや、多分支部長も行かないだろう

あとは知らん

もしくは俺が原因で原作が代わってスクールが行ったりしたら御坂
の命はないだろう

「なにボケっとしてんのよ」

アレ

「まあいいわ・・・どうやらこの施設では実験を行っていないみたいだし、何とか中止に持ち込めたってことかしらね」

いや・・・実験は続けられている

「じゃあね」

そういつて御坂は何処かへ行った

さて何するか

本気で暇だ

多分介入出来るのも21日からか

うわーやる事ねえ

とりあえず俺は寮へ帰る

んで

「なにやってんだお前ら・・・」

俺と上条の部屋の間、インデックス、姫神、上条、ミサカの四人が集まっていた

「柴葉か」

上条はここまでの経緯を説明する

「なるほど・・・上条は御坂の妹にまでフラグを立てたと」

「おまつ！なに言って・・・つかお前コイツが御坂の妹だってな
んで知ってんだよ」

「この間遭った」

「はあ・・・こんなソックリなのによく見分けがついたな」

「目の色が全然違う。御坂妹は死んでて御坂は普通」

「死んでるというのは失礼ではないですか？とミサカはあなたに少し怒りながら言います」

「確かに死んでるってのは言いすぎだろ」

上条もか

まあ確かに言い過ぎたな

「ワリイ、言い過ぎた。（まあ事実だけでも、前世じゃレ○プ目とか言われてたな）」

自分で規制しました

「んで？猫にノミが大量についてて困ってると」

「そういうことだ」

「そういえば気になっていたんだがその缶ジュースはなんだ」

「2000円が呑み込まれてな」

「理由になってない」

「まア聞け、御坂がやってきて自販機に電撃を流してこんなことになるほど」

「運が悪かったな」

「運が悪いのは生まれつきだ」

ううーん・・・やっぱ俺が介入してから全員のキャラが若干変わってる気が

気のせい？

とかなんとかやっているミサカが猫に電流を流す

すると猫からのみが落ちる

「特定周波数により害虫のみを殺害しました。とミサカは報告します」

はあゝ・・・便利だな電撃使いつてのは

電磁、nでも代用できっかな

まあいいや

「そいじゃな」

俺は部屋に入る

「ちょ！柴葉！！俺の部屋のノミ退治手伝ってくれ！！」

「謝礼金は2000円な」

「酷くない！？」

冗談だ

そういつて俺は上条の部屋に入る

ノミ退治は結構早く終わった

8月20日「アイテム?何の話だ」(後書き)

久々に書いたらなんだこの駄文は

まあなれよう

それじゃまた次回

8月21日「妹達編・・・一番介入すべきところな気がするのに全然介入してわ

とりあえずまずは謝ります

すみませんでした

大分更新が遅れてしまいました

とりあえず久々に前回のあらすじ

.....全然介入してないんで書けませんね

すみません

介入不足はネタ切れの元です

気をつけてください

葉「お前だけじゃね？」

さあ？

葉「うぜえ・・・」

とりあえずどーぞ

8月21日「妹達編・・・一番介入すべきところな気がするのに全然介入してわ

街をふらついていると上条に会った

どうやら補習帰りのようだ

ちなみに一人だけらしい

部屋が隣なので一緒に帰っていたら御坂がいた

「おっすー」

上条が話しかける

「アンタらか・・・今は疲れてるからビリビリは勘弁しといてやるわ」

御坂はそう返答した

「で、用件は？」

「いや、同じ方向ならなんとなく一緒に帰ろうかと」

「ほう？」

ドヤ顔

「常盤台のお嬢様相手にただ『なんとなく』と？ふっ、その位置に立つのに一体どれ程の男どもが努力を重ねているか・・・」

「こんなガサツ女に努力なんてしたがないと思う」

これは俺

「自覚あるお嬢様って最悪だよな」

上条

「冗談よ馬鹿。それと・・・誰がガサツだ!!」

俺の言葉に御坂が殴りかかってきた

俺は軽く避ける

「落ち着け、一応ほめ言葉だ」

適当にごまかす

「どこがほめ言葉だアアアアア」

超電磁砲を撃つとはね？誰も思いませんよ

「どわああああああああああああああああああ」

俺は円盤を展開して防ぐ

「こんな道端で超電磁砲なんて撃つなよあぶねーな」

「「今のはお前あんたが悪い」」

「確かに御坂はやりすぎたと思うけども」

御坂と上条に同時に言われる

上条はそのあと一応フォローもしてくれた

「時に妹は一緒じゃねーの？昨日ジュース運んでもらったから礼とかしときたいんだけど」

「妹って・・・あんたあの後あの子と会ったの!？」

御坂が少し怒りを交えながら上条に問う

「あ？ああ・・・まあ」

上条はその反応に少し驚いたようだった

すると空を飛んでいる飛行船からニュースが流れた

『筋ジストロフィー関連の研究施設は相次いで撤退を表明しており、市場全体の底冷えが懸念されます』

御坂は黙ってそのニュースを聞く

ニュースは天気予報へ変わった

「明日は晴れか」

俺は呟く

上条はそれを見て話題を変えようとする

だが

「私・・・あの飛行船って嫌いなよね」

御坂はそう呟いた

「は？何でだよ」

上条が聞く

「機械が決めた政策に人間が従ってるからよ」

御坂は冷たく言い放つ

「そりゃ・・・なんだっけ・・・樹形・・・」

「樹形図の設計者」

御坂は上条の言葉をさえぎった

ちなみに樹形図の設計者とは世界最高の演算能力を誇るスーパーコンピュータで的中率100%の天気予報をするなんか凄い人口衛星なのである（ウィキピデア調べ）

「機械が決めた・・・ってアレ噂じゃなかったっけ」

上条が言う

御坂は上条を見て何かを呟く

「なに？」

疑問に思った上条に御坂はチョップを放った

「イッタァ！いきなり何すんだ！！」

「あっはは〜！アンタも夢が無いわよねーSFコンピューターと人間の友情ドラマ、なーんてロマンがあると思わない？」

御坂が突然明るくなる

多分大分無理してる

「はあ〜？」

「たとえばメイド型戦闘ロボとか」

「お前は土御門か・・・」

「どこから仕入れた知識だ？それ・・・」

俺と上条は突っ込んだ

そのまま御坂は手を振って何処かへ言った

仕方ないのでそのまま帰ろうとすると

ミサカが猫にエサを与えようとしているのを目撃

「御坂が去ってまたミサカ」

「お前・・・俺が考えてた事言うなよ」

「んなこと考えてたのかよくだらない」

「お前だっけって言ってただろうが！」

とかアホトークをやっているとさっきまで猫のそばにいたミサカが

「何をやっているのですか？」

と聞いて来た

『ミサカは・・・』と言うのは省略

「うわっ！いつの間に・・・まあいいや」

上条はいつの間にか後ろにいたミサカに驚いたようだ

「昨日はサンキューな」

上条はミサカに礼を言う

「謝礼が目的ではありません」

ミサカがそういうと上条はミサカの持っているパンと猫を見る

「（これは・・・昨日の超・クールな態度じゃ全ッ然分からんかったが・・・猫好き）」

「ってリアルタイムで俺の考えてる事を実況するな！！」

俺は上条の頭の中を実況していた

「その菓子パン猫にやるんだろ？遠慮せずにやればいいーじゃん」

「別にそういう訳では・・・」

ミサカは少しうつむいた後

「ミサカはこの猫にエサを与える事は不可能でしょう・・・ミサカには1つ致命的な欠陥がありますから」

「欠陥って・・・嫌な言い方すんなよ・・・」

「電撃使いは動物に嫌われやすいってだけじゃん」

「そうなのか？」

「体から出る特殊な電磁波のせいなんだってさ」

俺は簡潔に説明する

ミサカに説明させると長い

「つまり御坂妹は磁場のせいで動物に嫌われやすいって事か」

「嫌われているわけではありません」

そう言って

「避けられているだけです」

同じじゃね？

と俺は心の中で思った

「同じじゃね？」

上条が言いよった

記憶残したせいなのか？若干遠慮が無い

「と、言うわけです。エサはあなたが与えなさい」

ミサカは動じなかった

で

「おおーーーーーい！結局このパターンかよー！そうだ柴葉ー！！
お前こいつ貰ってくれないか！？」

小学生の時（前世）にペット死なせて以来動物は飼わないと決めてんだよな

「いいよ？」

だが俺はこう答えた

「よssy・・・」

「たしか中国辺りじゃ猫を丸焼きで食うんだよな・・・結構うまいとか」

「すまんやっぱいい!!」

上条はそう断った

「冗談なのに」

「冗談に聞こえねえよ!!」

と言う訳で猫の名前を決めることになった

「どういう訳ですか・・・」

ミサカが突っ込む

ちなみに『ミサカは・・・ました』は省略するぜ

「いぬとミサカは命名します・・・猫なのに犬」

そういいながら笑っている

「まじめにつてか大真面目なんだろうけどもつと威厳あるのにしてやれよ！」

「では徳川家康と」

「大統領なんてのは・・・」

「偉すぎ!!」

上条は突っ込む

「ではシュレティンガーと・・・」

「それは猫にとって禁句だろ」

そう突っ込んだ後上条は本屋を見つける

「ちょっと寄ってくるわ」

「本屋ですか？」

「お前も見ただろ？ウチの修道服、ノミ取りと称して通路で焚き火するやつだからなー、正しい知識を仕入れてやらねば」

そう言つて上条は猫を放り投げミサカに渡す

「フツーに触れんじゃねーか」

そういつて上条は本屋に向かう

「それじゃ俺も行つて来ますか」

丁度買いたい漫画があつた

それと上条に実験が知れないと困る

悪いがこのミサカには死んでもらおう

・・・いやこのミサカじゃなかったな

このミサカは既にやられたミサカを片付けに行つたんだっけ

とりあえず俺は本屋に入る

上条は先に本屋を出た

俺は漫画を5冊ほど買つて本屋を出る

「漫画1冊が820円つてどうなんだよ・・・」

予想外の価格だった

チャンプの漫画（元ネタはジャンプか？チャンピオンか？）を買ったのだが

外では420円のところ（裏に『400円税抜き』と書いてあった）学園都市ではそういうものにはいくら税をつけてもいいということになっているので驚きの820円だ

代わりにバスや文房具などが中古並みに安いと言う

結局は漫画やらを大量に買わない限りプラマイ0

とりあえずさっき別れたところへ行ってみると上条もミサカもいない
少し離れたところに上条が座っていた

「どうした上条」

「柴葉か！？ミサカが！」

「落ち着け、何があった」

「ミサカが殺されて・・・」

すると警備員がやってきた

上条と俺、それから警備員でミサカが死んでいたと言うところへ向かう

そこには何も無かった

死体どころか血の跡も無い

何も無いただの路地裏だった

上条が走り出す

俺はそれを追う

警備員が呼んだような気がするがスルー

そして

「ホントに何も無いのかよ・・・」

少し走ってそう呟く

「勘弁してくれ」

すると猫が鳴いたのにあわせて後ろから人が現れる

肩まで届く茶髪に光の無い目、そして大きな軍用ゴーグル、なぜか
でかい寝袋（多分別のミサカが入ってんだろうな）

ミサカだった

「御坂・・・妹」

上条が目丸くしながら呟く

「申し訳ありません。作業を終えたらそちらへ戻る予定だったので

すが、と・・・」

「無事だったのか!!」

上条がミサカの言葉をさえぎるように叫ぶ

「あー悪い、お前にとっちゃ気分悪い話だろうけどさ」

「本当に失礼な幻覚見やがったな上条」

「うう・・・ゴホン、今の今までお前が危ない目に遭ってるんじゃないかって思ってたんだ」

ごまかしたなこいつ

「・・・あなたの言動には理解しがたい部分があるのですが」

いや実験知らない奴が別のお前の死体見たら誰でも上条みたいな反応すると思う

「ミサカはきちんと死亡しましたよ」

その言葉に上条が固まる

そしてミサカの寝袋を見る

チャックのスキマから茶色い髪がはみ出していた

隠せよ

「ちょっと待て・・・お前一体なにかかえてんだ？その寝袋・・・何が入ってたんだよ」

上条は混乱している

「その寝袋に入っているのは妹達ですよ」

御坂妹が現れた

「黒猫を置き去りにしたことについては謝罪します」

御坂妹Bが現れた

「ですがミサカの都合で動物を巻き込むのは気が引けました」

御坂妹Cが現れた

「実験場に入っている時点で部外者かと思いましたが」

「どうやらあなたは完全な部外者のようですね」

御坂妹D、Eが現れた

ってなにコレ、ドラクエ？

「詳細は機密事項となっているため説明できませんが」

「実験の残骸の後始末をしていただけです」

御坂妹F・・・が現れた

まだ続くのかこのドラクエごっこ

「ココにいるミサカは全てミサカです」「あなたには「ミサカは」
「警備員に通報」「アどれなり」「みさか」「みさ」「ミサカは」「血液なら
凝固剤を使えば一分前後で固められる」「黒猫は大丈夫でしたか？」「
ミサカは」「ミサカは」「ミサカ」「ミサカ」「ミサカ」

怖！

なんかメツチャグチャグチャに話しとる

「現在あなたは極度のストレス状態にある」

「心配なさらずとも今日まであなたが接してきたミサカは検体番号
10032号、つまりこのミサカです」

「ミサカは電機を操る能力を応用し互いの脳波をリンクさせていま
す」

とミサカたちは話し続ける

ちなみに俺は途中から聞いてない

「ミサ・・・お前は誰なんだ」

上条がミサカ達に問う

「学園都市に8人しかいない超能力者」

「お姉さまの量産軍用モデルとして作られた体細胞クローン」

シスターズ
「妹達ですよ」

「本実験にあなたたちを巻き込んでしまった事には重ねて謝罪しましょう」

そういつてミサカ達は去ろうとする

上条は呼びかけて止めようとした

だが一斉にこっちを見られ怖気づいたように上条は何も言わない

ミサカたちは今度こそ去っていった

8月21日「妹達編・・・一番介入すべきところな気がするのに全然介入してわ

ウィキピデアというのは誤字じゃありません

学園都市のウィキペディアです

決して誤字ではありません

そのまま載せるのもアレなので（別に問題ないだろうけどやっぱり変えたかった）

チャンプは・・・どっちでしょうね

どっちでも思ってください

ちなみに浦安合金家族とBROACHと言うのを連載しているらしい

適当に考えた

それじゃまたいつになるか分かりませんが何とか話の目処が立ってきたので早いうちに更新できると思います

それじゃまた次回

8月21日「絶対能力進化実験」

俺と上条は今、常盤台中学の寮へと向かうバスに乗っている
御坂に事情を聞こうとかそんな事でも考えているのだろうか
ちなみに俺は付き添いのな

今更だけどバスにペットっていいのだろうか

上条の膝の上には黒くて小さい子猫が丸くなっている

ためしに尻尾をいじってみた

意外と無反応

猫ってこういうの絶対怒ると思ったんだけど

「こんな所で猫を怒らせるような真似すんな」

小さい声で上条に怒られた

やっぱバスに猫はマズイようだ

そんな事をやっていると

『次は常盤台中学学生寮前ー常盤台中学学生寮前ー』

という放送が聞こえてきた

俺は『降ります』と書いてあるボタンを押す

なんか地味に変な目で見られたのは気のせいでは無いだろう

「上条・・・視線がいたい」

「ああ、あと少しだ。我慢しろ」

上条の日本語は周りの誤解を生んだようで

さらに冷たい目線がこっちへ突き刺さる

俺は上条の頭をはたく

ライズで

「いってええええええ」

上条は悲鳴を上げた

「何すん・・・って居ねえ!!」

俺は既に外に出ている

「早く出ないとバスが出るぞー」

「おまつ! いつの間に!!」

上条が慌ててバスから出てきた

そんでついでに顔面めがけてパンチが飛んで来た

俺は避けてカウンターを喰らわせる

「げばぁ!!」

見事にみぞおちにヒットした

「うう・・・」

上条は地面にうずくまる

「起きろ上条。現実逃避してる場合じゃないぞ」

俺は適当にごまかす

ごまかせてないけど

「現実逃避ってなんだよ・・・」

「現実逃避とは辛い現実にぶち当たったとき人間が妄想の世界に走ることを言う」

「そういうこと聞いてんじゃねーよ」

「アホアホトークはこの辺にしてさっさと行け。御坂に用があるんだろ」

「お前も来いよ」

「がんばれ」

「いやだからお前も・・・」

「がんばれ」

お嬢様学校の寮にレベル0の男子であるお前が尋ねるのは大変恥ずかしいだろうが頑張れ

俺はそう表情だけで告げた

上条は諦めたのか一人で常盤台の寮に入っていく

数分後

上条が顔色を変えて出てきた

「なんか分かったか？」

俺は上条にそう聞いたが

上条は無視して何処かへ走り去ろうとする

「ちょ！ええ！？」

俺は追いかける

上条は大分焦っているようだ

「おい上条ー聞こえてるかー？」

横から話しかける

よっぽど他の事に頭が行っているのか完全に無視

とりあえず殴る

「へぼあ!!」

変な悲鳴を上げて顔面から地面にキスをすることになった

「無視してんじゃねーよ」

俺はそういうが上条はよほど顔面を強く打ち付けたのか顔を抑えて呻いている

「いてえじゃねえかこの野郎!!」

上条がキレた

「無視するお前が悪い」

「とにかく御坂を探さないと!!」

どうやら御坂を探そうとしているらしい

「待て上条。闇雲に探しても見つかりっこない」

「ならどうやって!」

「能力使えば5分からんさ」

『ピーピンググラヴァー』

やっと使い道が出来た

俺の周りからカメラのついた有線トランスを出す

大体4、50本ぐらい

そしてそれを映すウィンドウも同時に出す

そしてそれを学園都市中に張り巡らせた

「さてと上条、このコードに絶対右手を触れさせるな。いいな」

俺は脅すように言う

「あ、ああ、分かった」

上条がビビる

さて御坂はどこにいるかね

つとココか

そこには風も無いのに回っている風力発電のタービン

そしてそのすぐ近く

そこにある橋に御坂はいた

「見つけた」

「どこだ」

俺が言うとう上条が反応する

「こないだミサカと会ったとこの近くにある橋の上だな」

「よし、行くぞ」

俺はピーピンググラヴァーを消し上条の服をテレキネシスで持ち上げる

「上条、絶対その服に手を触れるなよ」

「またかよ!」

「行くぞ」

俺もテレキネシスで浮く

そして上条（の服）を浮かせて御坂のところへ向かった

で

「多分この辺りだったと思うんだけども」

「あいまいだな」

とりあえず風力発電のプロペラを捜す

すると一つだけ風が無いのに回っているプロペラを見つけた

「あそこか・・・行くぞ上条」

「ああ」

橋の上にやってきた

そしてそこに

一人で立っている御坂を見つける

上条の黒猫が御坂のほうへ走っていく

御坂がこっちを見る

「何やってんだよ・・・お前」

上条が御坂に聞く

「ふん、どこで何してようが勝手じゃない。私はレベル5の超電磁砲なのよ？」

御坂は上条に言い放つ

「アンタに言われる筋合いなんてないんだけど」

「・・・やめろよ」

上条が呟く

「やめろって何を？夜遊び程度でしぶってんじゃないっつーの」

御坂がそう言うのと上条が懷から何かの書類を出す

レベルシックスソフトじっけん
『絶対能力進化実験』

「・・・！」

御坂が動揺する

「あーあ」

しかし動揺^{ソレ}はすぐに隠れる

「何でこんなことしちゃうかなあ？その報告書持ってるって事はあんた達私の部屋に勝手に上がりこんだのよね？ぬいぐるみん中まで探すなんて・・・死刑よ？死刑」

御坂無理しすぎ

俺たちを失望させて悲しませないようにしようとしてるのがバレバレだ

だがソレよりも

『達』とな？

俺に変態の汚名を被せる気か

俺は一方通行に関しては大体上条に任せる気にいる

俺が参加したら実験が中止にならない可能性があるからだ

いや多分なるだろうけど

そもそも妹達そのものが計画に必要っぽいし

だがそれでも俺は参加するわけには行かない気がする

なのでココで出来た変態の汚名だけは何とか拭わないといけない気がする

「俺は入っていない。勝手に上がりこんでぬいぐるみの中まで詳しく探したのはフラグメイカーの上条だけだ」

俺はついでに上条のイメージを悪化させて見る

「オイイイイ！！明らかに俺を陥れる気満々じゃねーかアアアアアアア！！」

俺の言葉がよほど胸に突き刺さったらしい

新八みたいなツツコミしてきやがった

「あっそ。それで？あんた達は私が心配だと思ったの？それとも許せないと思ったの？」

上条は迷う

だがすぐに決める

「心配に決まってるだろ」

俺と上条の声が重なる

「勝手に部屋に上がったことは謝る。けどこのレポート……まともな手段で手に入れたものとは思えない。それに地図……あの赤い×印はなんだ？アレじゃまるで……」

確かに上条の持つ地図には×印がいくつか付いている

「撃墜マークのように見えたかしら……合ってるわよそれで」

御坂は続ける

こっからは上条に任せて傍観しよう

あまり介入すると上条×御坂のフラグが立たん（笑）

冗談はここまでにしよう

「研究所の機材って一台数億とかするでしょ？アレを私の能力で根こそぎドカン！研究所は閉鎖、実験は永久凍結^{プロジェクト}」

御坂は続ける

「……のハズだったんだけどね」

「はずだった？」

「研究所を潰すのは簡単なのよ」

とんでもないこといいおったわ

まあ俺でも簡単に出来るけどね！

「だけど実験は他の研究所に拾われる。前人未踏の絶対能力ってのがよっぽど美味しく見えるのね、お偉いさんには」

少なくとも統括理事長の目的は別にあるだろうがな

一つボケてみようか

「食えるのか」

メツチャ冷たい目で見られた

「冗談に決まってんだろ」

「話の腰を折るな」

続けようか

「でもレポートはあるんだろ？こいつを警備員にでも渡せば・・・」

「上条、この街って衛星で常に監視されてんの知らないの？」

「あ・・・」

少しはしゃべらないと二次創作の意味がなくなるので

おっと、さすがにこういう話はいけないか

御坂が突然歩き出す

「どこに行く気だ？」

「実験は今夜も行われる・・・コレは私の引き起こした問題よ、私の手でケリをつけてやる！」

御坂は先へ進もうとする

俺と上条は御坂の前に立ちはだかった

「待てよ」

「何よ・・・どいて」

「「嫌だ」」

「お前に一方通行は倒せない」

御坂の顔色が変わる

「一方通行とお前じゃ戦力差が離れすぎてる。お前・・・死ぬ気か？」

俺は御坂に問う

「・・・超電磁砲を38回殺せば一方通行は絶対能力へと進化する

事が出来る」

だけでもし

「私にそれだけの価値が無かったら？」

上条の表情が変わる

「確かにそれなら妹達は救われる」

俺は納得するように言う

「そうよ・・・だからジャマしないで」

御坂がこちらをにらむ

「そんなやり方で妹達が救われてもあいつらはよろこばねえと思うけどな」

「・・・」

「それにもう一度樹形図の設計者を使って実験が再開されちまうんじゃないのか!？」

上条が御坂に問う

「大丈夫・・・それは無いわ」

御坂が断言する

「樹形図の設計者は二週間前に地上からの原因不明の攻撃で撃墜されてるの。上は隠し通そうとしてるみたいだね」

「2週間前って確かインデックスの・・・」

俺は思い出したようにわざとそう呟いた

記憶が無い原作と違い上条の顔にメツチャ心当たりありますという文字が浮かんだように見えた

実際そんな顔してる

だが今の御坂は気づかない

多分普段の御坂なら気付いたと思う

「・・・さあ、分かったらどいてよ」

御坂が上条の横を通り抜けようとする

「・・・どかねえよ」

上条がそう呟いた瞬間に御坂が威嚇の電撃を放つ

だがコントロールはうまくいかないようで

「当たってる当たってる」

俺の方に飛んで来た

「どけて言ってるの」

「嫌だ」

「そう・・・妹達の命なんてどうでもいいって言うのね」

御坂は叫ぶ

「だったら・・・力づくで止めてみなさいよ!!!!!! アンタがどんな力を持ってるか未だに分かんないけど・・・今回ばかりは負けるわけには行かないの!!!」

御坂が電撃を放つ

その衝撃で猫が逃げた

上条は後ずさりもしない

ただ手を上げた

「な、何やってんのよアンタ・・・戦えって言ってるのよ!!!」

「戦わない」

上条はそう言い放つ

「・・・本当に・・・死ぬわよ」

目が本気だった

御坂が電撃を放つ

だが一発も当たらない

「くっそ・・・戦えって・・・言ってんのよ!!!!!!」

上条の上に特大の雷が落ちた

そして上条は倒れた

8月21日「絶対能力進化実験」(後書き)

一旦終了

後半主人公完全空気

なんかコレ→なんかの熟語みたいです

天上天下唯我独尊みたいな

葉「意味わかんねーよ」

それじゃまた次回

8月21日? 「あれ・・・なんか飛んだ」 (前書き)

すんません

前回の上条倒れた後はほとんど原作どおりなんで飛ばします

もう思い切って割愛

それは駄目だって人は言ってくれば気まぐれで直すかもしれない
し直さないかもしれないです

まあ文句があるならどーぞ的な感じですねハイ

葉「いや大丈夫なのかそれで」

ならば原作通りの会話をずーーーーーっと続けなさいと?

もっと思い切って割愛しないとテンポ悪いでしょうが

他の小説見てみなさい!

みんなテンポよく割愛、省略などやってこの小説は48話でや
っと妹達編が終わるとこだよ!?

他は20話ぐらいで終わってるってのに

そんなわけなんでこっからはバンバン割愛していきます

葉「ヤケクソになるなよがんばれよ」

日野「この前書きで言った事は作者の妄言なんで気にしないでください。最近受験のストレス溜まってらしいんで」

やめればいいんだろやめればアアアアアアアアアア

葉「落ち着けエエエエエエエエエエ！！電磁，n，」

ギャアアアアアアアアアア

日野「次回に入る頃には多分元の状態に戻るんで見捨てないでください」

どーせこの台詞だって作者が書いたもんなんだよオオオオオオオオオオオオオオオオ

葉「それを言っちゃあおしまいだろ・・・」

日野「えーっと・・・とりあえずどーぞ」

ばふんなんてクソ倉b手あ；うjd

シャットアウト

8月21日？「あれ・・・なんか飛んだ」

えー・・・現在

俺は今、一方通行が上条と戦闘しているのを見物しております

ちなみにミサカはこっちで保護しまして

現在キュアで治療中です

「さて、俺の出番はまだ先かな」

とその前にとりあえずあの後にあったことを簡潔に説明・・・せんでもいいか

まあ大体原作どおりでしたよ？

上条に電撃あてまくって上条が倒れてその後上条は御坂に膝枕してもらってもう俺完全空気でしたよ

なんで・・・飛ばしました

現在作者も主人公も情緒不安定です

「誰が情緒不安定だこのヤロウ」

お前だ

地の文Ⅱお前

だからな？

「はぁゝ・・・」

俺は地の文と喧嘩（？）をして（要するにただの独り言）ため息をつく

「暇だ・・・」

「暇なら加勢してくればいいじゃない」

暇・・・と呟いた途端後ろから声が聞こえる

御坂だ

「いやそんなことしたら実験が続いちまうぜ？俺は上条が死にそうになったら加勢する」

「アンタねえ・・・あいつが第1位に勝てると思ってるの！？」

「思ってるさ。見ろよ」

俺は上条と一方通行の方を指差す

「？・・・！？」

御坂は上条の方を見て目を見開く

そこには通常通りマニユアルに一方通行に一方的にやられている上条ではなく

上条の拳を一方的に浴びて押されている一方通行がいた

「う……そ……」

御坂は信じられないというような顔をした

「あいつの右手は特殊なんだよ」

まああの右手のせいで常に不幸なわけだが

「異能力ならたとえどんな強力なものでも跡形も無く打ち消す」

幻想殺し

それが上条の持っている能力

「んな出鱈目な……」

「まあ……そろそろかな」

俺は立ち上がる

瞬間

強い風が吹く

そして

上条が吹き飛ばされた

高く飛ばされた上条はコンテナにぶつかりながら落ちてゆく

「行くぞ御坂」

「え・・・？」

俺は呆然としている御坂の手を掴みテレポートした

「よう一方通行」

俺は一方通行に話しかける

「デメエか」

一方通行は笑っている

そんなに新しい武器を手に入れたのが嬉しいか

「お前をぶつ殺さねエと俺は無敵じゃねエ」

「何を今更」

「学園都市最強？絶対能力？そんなもんはもオいらねエ！今さっき愉快な事思いついちまってなァ！そいつでテメエをぶっ殺しゃア俺を止められる奴なンざいねエンだよ！」

一方通行は禍々しい笑みを浮かべながら言う

「死ねエ！」

一方通行は空に手を掲げる

すると風が一方通行に向かって吹く

いや、その表現は正しくない

吹いているのではない

集まっている

風が一方通行に集まっている

高電離気体
プラズマ

「なんだ・・・面白いものつつーからもうちよい凄い物期待してたんだけどなあ」

俺は一方通行を挑発するが一方通行は笑うだけ

笑いながら学園都市を吹き飛ばすような攻撃の準備をしている

「つたく・・・そんなんで粹がってんなよ・・・」

俺の体が黒く染まる

悪魔のように

どこまでも黒い漆黒

ノヴァ
暴王

「その馬鹿でかい自信をぶち殺してやるよ」

俺は手を前に出す

黒い球体が出来る

1つ2つではない

かなりの数だ

「行け」

一斉にそれを放つ

そして

一方通行のプラズマを全て食い尽くした

「なァ!!」

「終りだ、一方通行」

俺は上条が倒れていたところを見る

そこにはもう誰もいない

「!？」

既に上条は一方通行の懐に入っていた

一方通行は慌てて上条を殺そうと右手を出す

上条は体制を崩し一方通行の手を避ける

一方通行は今度は左手を出した

だが

右手に弾かれた

これで一方通行に一瞬隙が出来る

上条は拳を握り締める

「歯あくいしばれよ最強」

上条は叫ぶ

「俺の最弱は、ちつとばっか響くぞ!.....!」

拳が一方通行の顔面を貫いた

翌朝

俺は上条の病室へ向かう

まあ一応お見舞いだ

扉の前まで来た

「よおーっす上条ー・・・？」

入ると

上条がミサカの胸を触っていた

「!!!!!!!!!!」

俺は携帯を取り出す

その間0・2秒

携帯をカメラモードに

さすがは学園都市

その間0・6秒

そして

撮った

保存

ココまで1・2秒

上条の絶叫が響く

不幸だー！と

「それじゃ、邪魔したなw」

そして扉を閉めた

「誤解だアアアアアアアア」

という悲鳴が聞こえる

俺は無視した

「冗談だっつーの」

本当ならば土御門、青髪、御坂e t e . . .

にメールで配信するところなんだが

「今回は許してやりますか」

そう眩きデータを消す

「まあしばらくはこのネタでからかおうwん？」

すると前から御坂が歩いてくるのが見えた

「おいつす御坂。上条の見舞いか？」

「ちがうわよ！」

「そのクッキーは？上条への見舞いの品じゃないと？」

「ち・・・違うわよ！これはーその・・・いやあいつに借りなんて作りたくないし・・・そう！だからよ！！！」

あっはっはー

おもしろいなw

「ふうーん」

俺はニヤニヤしながら言う

「それで御坂、その御坂の後ろで這いずりながら動いてるのは・・・」

「さあ？」

・・・インデックス

こんな所で寝るんじゃないありません

「んでアンタはあいつのお見舞い？」

「ああ、今終わったところ」

まだあと一人見舞いに行かなきゃ行けない奴もいるけどな

「ふーん。まあいいわ」

御坂はそれじゃと言って上条の病室に入っていった

いやー騒がしくなるだろうな

さて

「インデックスー大丈夫かー」

・・・

返事が無い

ただの屍のようだ

・・・

もう一度話しかける

返事が無い

ただの屍のようだ

「・・・」

俺はこの売店で糸と棒、そして缶詰を買った（なんで病院にこんなもん売ってんだか・・・）

そして缶詰に糸をくくりつけ棒にもう一方をくくりつける

そしてインデックスの前にたらした

「がぶう！！」

獣のような唸り声を上げながらインデックスは缶詰に噛み付く

ちよ！缶ごと食ったら口の中怪我するぞ！！

だが心配は無用だったようで

ガリゴリと缶詰を砕くような音がした後、インデックスはペツ！と

いう風に口から何かを吐き出す

中が空になった缶詰の缶だった

・・・つまり

缶詰を開ける

←

中身を食べる

この缶詰の二つの工程をインデックスは口の中で全て行ったというのだ

なんと言う食い意地・・・

「ふう・・・とりあえず動けるようにはなったんだよ・・・ありがとうなんだよさいば」

そう言ってインデックスは上条の病室に向かう

ちなみに御坂はとっくに外へ出た

「さて、俺も行かねえと」

俺はとある病室に入る

「おいっすミサカ」

そこにいたのは御坂と瓜二つな少女

ちなみに検体番号9982

こないだ助けたミサカである

ミサカはベッドの上でぺこりと頭を下げる

「調子はどうだ？」

俺はミサカに聞く

「なぜ・・・助けたのですか？」

逆に質問された

「人を助けるのに理由が必要か？」

とりあえずかつこいいことを言ってみる

やっぱ俺はパチモンだ

こっから先が思いつかん

「・・・」

「それとも何か助けられた理由でも欲しいのか？」

「質問しているのはこっちなのですが」

「最初にしたのはこっただけど・・・まあいいや。理由が欲しいなら言ってみよう」

そうだな・・・

と俺は適当に考える

「体が目当てだったとでも言えはいいか？」

別にそんな理由ではない

ぶっちゃけ適当だ

理由が欲しいというから適当な理由をつけた

ちよ、そんな目で見ないで！

すみませんちよとした冗談です！！

だが俺は完全に冗談で言っただけなのに

「分かりました」

ミサカはそういつて服を脱ぎ始めた

「ちよっ！！ちよっと待て！！冗談だからやめろ！！」

「？・・・あなたが言ったんじゃないですか」

「冗談だっつってんだろ！！」

最初のいい台詞台無し

このままだと死ぬ

「ええい！！すまん御坂！！」

俺は御坂に催眠ガスを喰らわせる

サルファマスタードだっけ

飲んだ薬品を虫にして飛ばすP S I

ちなみに睡眠薬の場合は蝶です

御坂は眠った

「た・・・助かった」

とりあえずここで見たことはデリートスパイダーで

いやーやっぱ俺は主人公にはなりきれんわ

8月21日? 「あれ・・・なんか飛んだ」 (後書き)

とりあえず妹達編終わりました

えーっと・・・とりあえず謝ります

すみません

前書きで好き放題やってすみません

迷惑かけました

つーか本当に訳分からん

見捨てられてもしようがないよ、うん

まあ作者自体最近ネタ切れとか設定が訳わかんなくなってきたとかもういっそ禁書小説を終わらせようとか思ってきてるんですよね

でもなんかそれも今まで応援してくださった方に申し訳ないかなとなので

アンケート取ります

今後の進路について

以下の選択枝から選んでください

？ここで完結させる

？まだ頑張って続ける

？一回小説そのものを消して書き直す

の3つです

それじゃよろしくお願いします

期間は大体1週間ぐらいで

アンケート入んなかったら？になると思います

それじゃまた次回があれば次回

8月28日「ある意味この世の地獄」(前書き)

アンケート取って色々考えた結果

とりあえずもう少しだけ頑張ろうと思いました

ついでに色々考えたんですが

御使落しには介入させません

介入させて暴れさせるか介入させないで遊ぶか迷ったんですけども

介入させずに遊ぶ事にしました

主人公は誰とも入れ替わらないので御使落しの時の学園都市の様子を勝手に想像して遊ぼうと

なので今の内に言っておきます

今回キャラ崩壊(?)というかなんというかキャラ自体は変わらないんですがちよつとイメージが完全崩壊とかそんなわけの分からない

とにかく初春、佐天の方々のファンにとっては怒りを買う可能性もあるので今の内に言っておこうと思います

まあ御使落しだからしょうがないと思いますが

キャラが大変なことになっております

中身はそのまま外見がファンの怒りを買う可能性があるのですそれを
了承した上で見てください

批判などは受け付けません

それを踏まえてどうぞ

8月28日「ある意味この世の地獄」

8月28日

上条とインデックスが旅行に行き

土御門も必要悪の協会ネセサリウスの仕事でない

青ピもなぜか居ない

まあ・・・暇

グループの奴等は連絡取るほど仲いいわけじゃないし

暇なので非番だが風紀委員の支部にでも顔を出そうと思う

「まあやる事ないし・・・」

そういえば今日って御使落しがある日だっけ

介入すればよかったかなー

いや無理か

そもそも一方通行倒したのが上条だからロクに関わっていない俺が行けるわけもない

御坂はあの後なんやかんやで立ち直った

結構精神的に強いらしい

とかなんとか考えているといつの間にか177支部の扉の前まで来ていた

入った瞬間ワンピースを着たオッサンがセーラー服を着た少女（10歳ぐらい）のスカートを勢いよくめくっている光景が目に入った

「うーいーいーはーいーいーるーいーいーいー！！！！」（野太い声）

「きゃあああああああああ！！」（子供の声）

うわぁ・・・気持ち悪・・・

そうだ・・・今日は御使落し

外見と中身が入れ替わるんだっけ

初春はまだいい

セーラー服着ててもなんで子供が着てんだろーぐらいにしか思わない

だが佐天・・・お前なんでオッサンなんだよ！！

なんでオッサンなんだよ！！（2回目）

絵面が明らかに犯罪だよアレ！！

完全に犯罪にしか見えねぇ！！

畜生！！こんな事なら無理やりにも上条についてきやよかった！！

いやあれだよ！？

絶対俺も御使落しの影響受けるだろうなーとか思ってたからその分大ダメージだよ！！

なんで俺影響受けてないんだ？

『転生者は受けられないようになってるよ』

いらんわそんな補正！！

神の野郎

つかお前もいっそだれかと入れ替わっちまえ

『ナイナイw』

うぜえ

とりあえず支部に入るのは危険だ

まだ誰にもバレテナイ

逃げ・・・

「アレ？柴葉さんじゃないですか」

初春が話しかけてきやがった

アウトー

「今日非番じゃありませんでしたっけ」

「あーそうだったね。間違えた間違えた」

それじゃ

といって逃げようとする

すると

背後から突然の蹴りが入る

俺は顔面から壁にめり込んだ

痛い・・・

顔面を壁から引き剥がし振り向く

そこに居たのは

一方通行

「あなたこないだサボったでしょ」

あーなるほど

「固法先輩？」

「何よ」

やっぱそうか・・・

なんで一方通行？

まあ知り合いなだけマシだ

敵だけど

「こないだ・・・？」

えーといつのことだろう

えっと

「24日」

そういえば非番じゃなかったような

「こないだサボったんだから今日頑張んなさい」

一方通行の声で言われると恐怖も倍になる

タダでさえ恐いの

「ハイワカリマシタ」

あまりの恐怖に片言になってしまった

そして奥に進むと

「お姉さまああああ!!」

と抱きつく幼女

てか打ち止めと（まだ登場してないけどいいんかなあ）

「だあああうつとおしい!!」

それを引き剥がそうとする少女

というかミサカ

どうやら白井と御坂オリジナルのようだ

御坂が入れ替わったのは1万人いるクローンのどれかのようだ

白井が入れ替わったのはまだ原作に登場していない打ち止め

なんか普通の姉妹みてえ・・・

同じやりとりでもここまで印象が違うとは

白井と御坂がこのやり取りすると気持ち悪いだけなんだけど・・・

まあいいか

で、支部長は・・・

なんも変わってねえ・・・

まあそりゃそうか

転生者だし

で他にも何人かいるが、結構見覚えのある奴もいる

吹寄、垣根帝督、ミサカが3人（超カオス・・・）、麦野、浜面、
オリアナ、オルソラ、天草メンバーが3人（名前忘れた）

まだ原作に登場していないメンバーがここまでここにいるなんて思
わなかったよ

となると初春、佐天だけ異質だよな

こいつらだけ誰も知らないモブキャラと入れ替わってるし

モブキャラはメインキャラに変わったけど

まあ出番無いけどね！

で

「終わった……」

いやいや

笑いをこらえるのが大変だったよ

いやー貴重なモン見たよ

魔術sideと科学sideの人間が楽しそうに世間話してんだもん

面白かったわ

さて、とりあえず帰るか

「この光景も明日までねえ」

明日も非番だけど来ようかな

なんてことを考えつつもう二度と来ないと決め俺は寮に帰った

帰り道

「オイ！テメエのせいでソフトクリームこぼれちゃったろうが！！」

「どうしてくれるんだコラ！！」

「責任とってもらおうか嬢ちゃん」

「ひやははゝこのまま夜の街につてかゝ？」

ごついヤクザみたいな人に絡んでいる数人の少年少女を見つけた

おそらく実際には

嬢ちゃんと言っているところからごついヤクザみたいな人は女子で

絡んでいる少年少女は不良なのだろう

助けたほうがいいかなゝ・・・

とはまったく思わなかった

そりゃそうだ

あんなゴツイオッサンがあんな子供に怯えるわけがない

まあ実際には逆なのかもしれないが

でもまたトラブルに巻き込まれるのはごめんだし中身は大人の不良
とは言っても見た目は子供

あれ、どこの名探偵？

まあつまり子供を虐めるのはなんかねー

とか思って素通りしようとしたら

特大のビームみたいな物がこちらへ飛んで来た

どうやらゴツイオッサンが放ったようだ

俺は慌てて円盤を展開し防ぐ

ってこれ原子崩し？

・・・死亡フラグがたった

子供たちが一斉に逃げる

そしてごついオッサンがこっちをにらみつけた

「私の原子崩しを防ぐなんて・・・あんた何者？（野太い声）」

「その質問には答えられません！アデュー！」

変なトラブルに巻き込まれる前に瞬間移動

逃げた

ごつい麦野こええええええええええええ

この時俺はこの一件で麦野に目を付けられたなんて思ってもいなかった

8月28日「ある意味この世の地獄」(後書き)

なんか変な終わり方でごめんなさい

なんとなくやりたかったんです

今回の話は御使落しの間の学園都市はこんな感じかな〜みたいなノリで書きました

すこし原作キャラを出しすぎた気もしますが多分大丈夫でしょう

初春と佐天のアレについてはオッサン同士にするか迷ったんですがこっちの方が面白いかな〜と思いオッサンと少女にしました

それじゃまた次回〜

あ、姫神だせばよかった

やっぱゴツイおっさんか原作キャラになりますけどね(笑)

番外編「てすと」(前書き)

番外編です

時系列的には2学期の始め辺りです

それじゃどうぞ

番外編「てすと」

「柴葉、テストどうだった？」

上条が話しかけてきた

「・・・返事が無い、ただの屍のようだ」

「いや答えてんじゃん」

「お前はどーだったんだよ」

「なんでそんな不機嫌？まあ・・・うん」

「分かった、言わなくていい」

「そうか・・・」

「有線トランスで分かったから」

「アンタ鬼だ！！」

今日はテスト返却日

ちなみに俺の点数

国…52点、数…29、理…32、社…22、英…12

英語乙

死んだわ

「柴葉、レベル5なのにこの点数ってどうなんだにゃー・・・特に英語」

いつの間にか後ろで机においてある俺のテストを見やがった土御門がつぶやく

「うっさい、テストってのはなあ・・・勉強した分テストの方も難しくなってるんだよ!!」

だから前回と同じ点数取れてりゃ成長してることになってんだよお
おとおお!!

「その言い訳は苦しすぎるだろ・・・」

電磁‘n’

「「ぎゃあああああああああああああ」

土御門と上条が悲鳴を上げた

「ったく」

上条に当たったのは運が良かったから

右手の防御が間に合わなかったようだ

ノーモーションって便利

「て……てめえ……」

上条がこっちを睨む

それを無視して上条の机の中にあるテストを見る

「うわーひでー……えーつと国語がに……」

「待て待て待て待て待て！」

「なんだ」

「なに人のテストの点数公開しようとしてんだああああああああ」

「いやーやっぱ読者にもねえ」

「誰だよ読者って」

「さあ」

とこんな感じでぎゃあぎゃあ騒いでいると

「やかましいー!!」

と吹寄がこっちへ向かってきた

吹寄は頭突きを放った

上条に9999のダメージ

上条は倒れた

吹寄オデコDX恐るべし

さらに上条が倒れたのを無視しすぐさまこっちにも頭突きを放つ

ライズ全開！

避ける

「逃げるな！！柴葉葉！」

「いやいや上条みたいな目に遭うって分かってて止まれるわけないでしょーが」

吹寄の頭突き、蹴り、パンチなどを俺は難なく避ける

以前喰らったときは油断していたのだよ

ふはははははははは！！

「!？」

何かに背中をぶつけた

「柴葉……お前だけ無傷ってわけにやあいかなぜよ……」

「てめっ！！土御門！！」

そのまま羽交い絞めにされた

抜け出そうと思えばすぐにでも抜け出せた

だが抜け出してももう遅い

吹寄はすぐそこまで来ていた

「あゝ・・・っ」と

轟音が鳴る

俺はそのまま倒れた

「ひどい目に遭った・・・」

とりあえず血は止まったか

あん時はマジで死ぬかと思った

今は頭にガーゼを貼っている

ライズ使えばすぐ治るじゃないかって？

めんどい

結構スタミナ使うんだよ

この程度の怪我を治すためにいちいち使いたくない

骨折とかそういうのなら別だけど

とりあえず風紀委員の支部へ向かう

「こんちわ・・・」

「あれ？元氣無いですねえ。というかその頭の怪我どうしたんですか？」

といったのは初春

「同級生の頭突き喰らってな・・・」

「頭突きって・・・」

呆れとるし

そりゃな

「テストの点で騒ぎすぎた」

「あ、そういえばどうだったんですか？テスト」

「ひどかった」

「どれくらいですか？」

「教えるわけ無いだろう・・・」

「レベル5なんですし私たちよりはいいと思いますけど」

それって差別？

口には出さずに思うだけにした

幸い支部長はいないので思考を暴露される事は無い

「国語、52点」

とりあえず一番マシな奴を言う

「ああ・・・」

なんか哀れみの目で見られた

ちょ！そんな目で見ないでくださいお願いします！！

「数学はどうだったんですか？」

「なんで数学？」

「演算能力は高いと思いますし」

「いや別に聞かなくていいじゃん、嫌がらせかコノヤロー、国語より酷いわ」

今の俺は多少性格がなんかヤバイことになってます

ストレスです

てか完全に墓穴掘った

「うわー・・・」

なんかまたしても哀れみの目で

テレパシーで見ると俺より点数高かった

「レベル5だからって頭がいいわけじゃないんですね」

「俺の場合特殊だからな」

演算能力に関してはまったく必要が無いし

「そういや初春はどんぐらい？（さっき見たけど）」

「あはは・・・まあ柴葉さんよりは出来ました」

「ひでえ・・・」

なんというか今日の初春黒いよ・・・

そういやこいつの特技情報処理だし

頭良くて当然か・・・ってなんで情報処理能力が高いのにレベル1
！？

うゝむ・・・謎だ

「まあいいや・・・仕事するか」

そのまま俺は席について仕事に取り掛かった

あとで御坂や白井なども来た

俺よりテストの点は高かった

ちくせう

上条や土御門とかの三バカよりはましだしいいか

番外編「てすと」(後書き)

なんかイメージどおりに行かないな

まあいいか

今回はテストの話です

初春辺りなんか強引ですみません

オチがついてなくてホントすみません

柴葉は以前も言ったとおり頭はそんなよくありません

能力使えば話は別ですがさすがにそんな卑怯じゃありません

次回は多分本編です

それじゃまた

8月31日「尾行してみようぜ☆」（前書き）

うわああああああああああああああああああああああ

なんて、ただ叫びたかったただだったりする作者です

それじゃどーぞ

8月31日「尾行してみようぜ☆」

8月31日、夏休みも今日で最終日という今日

0..15分

お隣の不幸だー！ー！ー！という叫び声に起こされた俺

「なんなんだ・・・」

まあ大方上条が昼に柿ピーの食いすぎで鼻血出してティッシュ取りにリビングへ向かったらティッシュを踏んで転んでインデックスの寝ているベッドに倒れこんで起こしてしまいその後上条がインデックスにときめくわけがないとかなんとか言ってインデックスに噛み付かれてその後インデックスに事情を説明し離してもらってティッシュを鼻に詰めた時に机の下に問題集を見つけ宿題をやってない事に気付き先ほどの不幸だー！！という声を上げたのだろう

「なんでそこまで詳しく知ってたよ！！！！」

「うおっ！！上条、なぜここに」

いつの間にか上条がいた

「てか地の文を読むなよ上条、宿題を夏休み最終日にも関わらず1Pどころか1文字たりとも書いていない上条当麻くん」

「わざわざ言い直して解説してんじゃねーよ！」

上条が突っ込む

「というかもうどーせ朝やろうとしてもインデックスがテレビ見て集中できないから外でたらなぜかみさ・・・げふんげふん、なんかめんどいことに巻き込まれたけど仕方ないから協力してたらアステカの魔術師が現れて追われて戦ってなんだかんだで家に戻って宿題を進めていたところやっぱインデックスが本棚を散らかしててプリントが無くなり少し休むかと言ったらインデックスがテレビに映っている豆腐ハンバーグが食べたいから作ってとか言い出して仕方ないからファミレス言ったらまた魔術師に追われてなんだかんだで呪いを解きに病院へ向かって結局夏休みの宿題は終わらないんだから諦めなよ」

と恐らく明日起こるであろう原作イベントを全て言う

「なんで俺の不幸のことをそこまで嫌な方向に予想しちまうんだよお前は・・・」

上条が辛そうな顔をしながら呟く

「まあそうなりそうだからな・・・だから・・・宿題を教えてください！柴葉！！」

そう来たか・・・

ふん

だが甘い

「無★理」

無情にも断った

「★をつけるな★を・・・」

上条が半泣きになりながら呟く

ははは

「はははじゃねーよ。笑い事じゃねえんだよこの野郎」

「地の文を読むなって。そうそう、ちょっと外でてみ？多分一方通行あたりが近くにいますから」

「フツ・・・そんなことで上条さんの興味を引こうたって無駄ですよ」

「マジなんだけどなあ・・・まあ今日は遅いから帰れ、というかマジでどこから入ったんだお前は・・・アレか？お前の幻想殺しはいつの間にやら施錠殺しに変わったんですか？キーブレイカーですか？」

「うつ・・・そ、そうだな・・・」

といって上条はまっすぐ玄関へ向かった

最後に

「また始業式ん時になー不法侵入者ー」

と俺は言い残し上条は泣きながら帰っていった

「言い過ぎたか・・・まあいいか」

そう呟いて俺は布団に入った

8月31日、午前7時55分

「鍵壊れてるし・・・」

なぜだ・・・

犯人は上条か・・・

一応サイコメトリーで見る

するとどうやら違うようだった

昨日の夜に空き巣が入ったようだ

だが俺の部屋を物色された様子は無い

というのも

「俺がその時たまたまトリックルームを設置していたからなんだけど・・・」

電磁‘n’の充電付きで

命からがらその空き巣犯は逃げたようだが

ぶっちゃけトリックルームを設置した目的は遊びである

気まぐれである

最近空き巣が多いとか聞いたので

じゃあ防犯対策・・・というのは建前

空き巣入って感電しないかな〜とか期待してた

まあ能力の実験(?)である

「まさか本当に入るとは思わなかったが・・・」

昨日は疲れて10時半ごろには寝てたからな・・・

理由はまあ・・・色々

暗部とか風紀委員とか

12時に上条に起こされたけど

あの時上条が入ってこれたのは幻想殺しのおかげである

なんか俺に宿題を教えてもらおうとチャイムをならそうとしたらドアが開いていたらしい

心配して入ろうとしたらなんかトリックルームが設置してあったので心配はないと思い

トリックルームを右手で破壊して入ったら俺が地の文で詳しい説明をしていたので突っ込んだと

そういうことらしい

とりあえず能力で直せっかな〜とか思ったけども

生憎そのような能力は無かった気がする

仕方ないのでネメシスの異空間に貴重品の類を入れておきアレイスターにどうにかならないか聞いてみる事にした

すると

『そんなくだらない事で私に電話しないで欲しいね』

という返答が返ってきた

構成員を何人か借りたいだけなんだけどな

まあいいか

諦めよう

とりあえず電話で業者さんと呼んだところ昼過ぎには直せるらしい
ほとんど粉々の状態なのになノブ

これが学園都市のクオリティである

というわけで

「暇だ・・・」

昼過ぎまでは家に入り辛い

現在時刻午前8時40分

とりあえずふらつく事にした

すると

「ウソやああああ！！！！カミヤんが常盤台のお嬢様とデートだなんてえ！！！！」

青ピがなんか騒いでいる

場所は常盤台の寮の前

少し遠くの方には引っ張られている上条と引っ張っている御坂の後姿が見えた

すぐに見えなくなったが

「あれ？柴葉じゃないかにゃー」

土御門はほぼいつも通り

筋金入りのシスコンだ

「青ピはどーしたの？なんかご乱心の様子だけでも」

「ああ、実はにゃー」

と土御門が説明を開始する

どうやら上条が御坂に連れて行かれたらしい

青ピには上条と御坂は恋人同士に見えたんだろうな

面白そうなんで俺は

「土御門、青ピ」

「なんだにゃー」

「なんや・・・」

「尾行してみようぜ☆」

過去最高の笑顔を浮かべてそう言った

8月31日「尾行してみようぜ☆」（後書き）

というわけで次回は上条と御坂のデートを除き見して土御門と青ピそれから途中で会う数人の友人と一緒に上条と御坂のデートをニヤニヤしながら土御門青ピはハンカチをかみ締めながら尾行するとう話です

それじゃまたく

8月31日「尾行中にアステカ」(前書き)

遅くなりました・・・

受験終わって浮かれまくってたんです

あとその内初のオリジナル作品作るかも知れないです

やるかどうかは今後の気分次第だと思いますが

既に4本も書いているのにどれもいまだに終わっていない状態さすがにそれはないで後
一本というのは辛いので何日・・・何ヶ月・・・何年後になるかは
分かりませんがその内書こうと思います

それではどうぞー

8月31日「尾行中にアステカ」

前回、土御門と青ピに上条と御坂のデート（偽）を尾行してみようと提案してみた結果

即答で賛成ときやがった

こいつら・・・

「んで柴葉、もうカミやんたちが走り去っていったから10分近く立ってるがどうやって探すつもりだ？」

土御門がいつもよりかなりまじめな口調で言ってくる

それを見た青ピが・・・

「今までの「にゃー」とか「ぜい」とかの口癖はただのキャラ付けだったんかいな・・・」

などとぼやいている

その意見はもつともだがこの際スルーしよう

「それに関してはどうかなる。『ピーピンググラヴァー』」

先ほどの土御門の質問に答え能力を使う

手元にウィンドウが出現しコードの付いたカメラが10本ほど出てくる

それを地下に沈めさせ進ませる

「柴葉、それで女の子のスカートの中とか盗撮できないかにゃー？」

「ええなあそれ、頼むわー」

二人の馬鹿が何か言っている

この際スルー

「にしても便利な能力だにゃー柴葉」

土御門が言う

まあ確かに便利な能力だ

気づかれずに尾行とかそういうのにはもってこいだ

・・・と思ったら大間違い

不可視にすることはまだPSIを扱いきれていないため無理

結構外見的に目立つので地面から居場所を特定したら即その近くに
レポートする以外方法が無い

下手したら接近中に気づかれ、また妹達シスターズの件でこの能力は上条に知
られているのではれるとまずい

だから

「あまり露骨に使うわけにはいかないんだよな・・・」

つと、いたいた

現在大爆走中☆

いや速いな・・・

すごい速さだ・・・

上条は襟首を捕まれ既に息絶え絶えの状態だ

瀕死だ・・・

にも関わらず御坂は止まる気配を見せない

うそだろ・・・御坂のやつもう1時間も全力疾走で走ってるぞ・・・

「すごい体力だにゃー・・・」

土御門も画面を見てあきれている

まだ走ってるし・・・

上条がもう限界なのか御坂に声をかけた

ウィンドウから会話が聞こえる

『っお、おい、おいつて！どこまでつれてく気だよ！！』

首の絞まった状態でよくここまでしゃべれるもんだ

『うるさい！！』

その声を聞いて御坂がようやく止まり頭を抱えてうずくまる

『黙って！ちょっとだまって！！お願いだから気持ちの整理をさせて！！』

数分後・・・

考えている間に俺と土御門は御坂たちのいるところの工事中のビルの陰にテレポートした

青ピは見てるのが辛くなったとかそういうことを言ったあとで帰っていった

その後姿は・・・とても小さく見えた・・・

さて、シリアスなおふざけはやめよう

御坂がようやく落ち着いたのか立ち上がり呼吸を整える

「……そうよ、いい機会だし、この際すっきりさせちゃったほうが今後のためよね」

こ・ん・ご・だとおくくく!!

と土御門の怒りが爆発しそうになる

それをなだめ上条たちの会話を聞く

土御門はハンカチを噛み「きいくくくくくく!!」

とうなっている

「カミヤんめえくくく!!」

なんか放っておいたら切れて飛び掛って行きそうだ……

「?……話が全然見えねーんだけど……」

上条は御坂がぶつぶつ言っているのを見て何がなんだか分からない
というような顔をする

御坂が口を開く

「なるのよ。アンタと、私が、こ、恋人に……」

土御門の怒りが爆発した

場所はオープンカフェ

お嬢様御用達の場所なのだろう

ホットドッグが2000円

土御門は危うく飛び掛りそうだったのでぶん殴ってネメシスの異空間に10分ほど放り込んだ

外に出し落ち着かせ、二度と下手な動きはしない様言いつけ、現在グラサン、新聞紙、帽子という尾行の王道的な格好（笑）

「このホットドッグうめーな」

「さすがはお嬢様御用達の店だにゃー、というか柴葉、奢って貰ってよかったのか？」

「まあ必要経費だ」

「ゴチになるにゃー」

いつの間にやら俺たちはすっかり御坂と上条の方を見ていない

少なくとも土御門は

俺も時々上条たちの方を見て途中経過を確認する程度

だがそれにはとある会話が原因だった

それはほんの数分前の出来事

ここからは上条と御坂の会話がはっきりときこえる

そのせいで土御門にこれが御坂が理事長の孫にあきらめさせるための偽デートだと言うことがばれた

そのため土御門はすっかり安心してしまった

まあ

『カミヤんが常盤台のお嬢様と知り合いだったってことは後でゆっくりお話させてもらうけどにゃー』

とか言ってたけども

ここは高すぎるため客もほとんどいない

俺と土御門、上条と御坂

それと別の二人のカップル

つかいちゃいちゃしすぎだてめーら・・・暴王の刃ぶっこむぞ

暴王の刃というのは阿修羅・解、毘沙門・叢を暴王化させたということんでもないものである

もしかして出来るか？とか思って実行したら出来た

それぞれの特性が生かされているのでかなり強め

あとイクスプロジア暴王形態とかそんなん

アンチサイキックもいくらか作成した

PSIはプログラム次第でどうにでもなるのでオリジナルの能力も作れるということが数日前に発見した

つと、話がそれた

「にしてもカミヤん・・・偽とはいえ常盤台のお嬢様とデートできるんだからもうちょいテンションあげりゃいいのにやー」

と土御門が呟く

あ、御坂・・・顔にマスタード付いとる・・・

それを上条が教える

拭く

御坂なみだ目

というイベントを見て土御門が笑いをこらえている

上条達が互いに好意が無いことが分かったってだけでここまでテンションが変わる土御門を俺は尊敬・・・しないわやっぱ

お、どうやらホットドッグがどっちか分からなくなったようだ

「土御門、なんか面白いことになってるぞ」

「どれどれ」

上条がホットドッグを適当にひとつ取る

それを御坂が静止し二つを見比べる

ちなみに右手に持っているのが上条

左手が御坂だ

ホットドッグのことね

「カミやんはデリカシーってもんが無いのかにゃー」

「単純に上条の好みと御坂の外見が外れてただけじゃね？」

まあしょっちゅう電撃を撃たれていれば恋愛感情なぞ生まれないだろうが

「海原⇒御坂⇒上条・・・か」

三角関係勃発

大変だねー・・・

御坂がホットドッグをじっと見つめる

数分後

上条が痺れを切らし左手に持っているのをとる

あゝあ、入れ替わった

御坂は顔を赤くしながらどちらのか分からないホットドッグに口をつけた

上条たちは妹達の話をしている

「明らかにデートの最中にする会話じゃないよにゃー」

「だなー」

土御門は暗部の人間なので妹達に関してはあらかじめ知っているの
問題ない

青皮が残っていたらめんどくさいことになってた気がする

「なんか上条の手元に大量のプリントが見えるんだが・・・」

「夏休みの宿題だにゃー。カミヤんさつき終わってねえって言うってたぜい」

そーいや昨日言ってきたな

俺にとって夜中の0時はもう昨日です

御坂が宿題に興味を持ちプリントを奪い取り見つめる

そのまま適当に一問、あつと言う間にといてしまった

オイオイ、高校レベルの問題を

あ、上条落ち込んだ

数分後（めんどくなくなったんでバンバン割愛していきますよー）

御坂がジュースを買いに行きその後すぐにうわさの海原くん（上条命名）がやってきた

土御門は傍観していたが何かに気づいたように俺にささやきかけてきた

「柴葉、海原ってやつに注意しとけ」

「分かってる」

言わずとも分かるだろうが海原はエツアリという魔術師だ

使ってる術式は簡単な術式で皮膚を少し剥いで護符を作ったもの

とはいえコレは簡単な変装に使うもの

プロの魔術師が見れば多分気づく（ハズ）

実際土御門は気づいている

しばらく注意していると御坂が戻ってきた

なんか怖い顔をしている

なんかいろいろ話した後、これで偽デートは終わりにするつもりだよ

御坂が最後におごってあげるといい上条の昼飯を買いにいった

上条は一人取り残されている

「土御門、どうする？」

「とりあえず今は様子見だぜい・・・魔術師^{ヤッ}の目的も分からないし、それにもかしたら仲間がいる可能性がある」

「だな」

海原が上条に接触した

「お一人ですか？話というのはもうお済で？」

「ん？ああ」

海原の問いに上条が答える

「御坂ならあの人山の中で格闘中だぞ」

といって御坂の行った店のほうを見る

そこに海原らしき人影が見えた

どうやら上条にも見えたらしい

海原と何か話した後上条は御坂のいる店の方へ向かう

上条が背を向けたと同時に

海原は懐から黒いナイフのようなものを取り出し上条の方へ向ける

同時に上条の横にいた清掃ロボがバラバラになる

狙いは上条の命か・・・

海原は何か話したあともう一度ナイフをむける

今度は後ろの車がばらばらになった

無造作に砕けたのではなくパーツのひとつひとつがはずればらばらになっただけなので恐らく数日中には直せるだろうが・・・

上条は路地裏へ向かって走る

それを海原が追う

「土御門！」

「ああ、追うぞ!!」

どうやらもう少し尾行することになりそうだ

場合によっては・・・俺も戦わなきゃ駄目か？

8月31日「尾行中にアステカ」(後書き)

そんなわけで次回はVS海原です

前回黒子も参加させるといいましたがなんだか難しそうな上に妹達に關しての話も出ているので關係ない黒子と青ピを参加させるのは・

とか思つたので青ピには抜けてもらい黒子是不参加という形となりました

それではまた次回

また更新遅くなりそうです

8月31日「尾行バレたwww」（前書き）

揺れるウウウウウウウウウウウウウウウウ

地震大変でしたねー

こっちは本棚の本がめちゃくちゃになる程度の被害で済みました

あと更新遅れてすみません

どぞー

8月31日「尾行バレたwww」

鉄骨が上条と海原目掛けて落ちる

俺はその鉄骨をトリックルームで移転させた

「あぶねえ・・・よし！土御門！逃げるぞ！！」

「そうだにゃー！これ絶対ばれてるぜい！！」

上条が海原と少し放し例の約束を誓う

そしてその直後辺りを見回し始めた

なんか怖い顔で

実際「柴葉アアアアア！！」とか叫んでたし

能力でばれた！！

とりあえず土御門の腕を掴みレポートをしようとする

が、する前に誰かに腕をつかまれた

「どこへ逃げる気？」

そこに居たのは

「御坂・・・」

あーうん。死んだコレ

土御門が「じゃあ俺はコレで！」などと言って逃げようとするのをライズであがった腕力で腕をねじり防ぐ

「あたたたたたたた！！」

「テメエ！なに逃げようとしてやがる！！！！」

「黙れエエエ!!! 俺は無関係だにゃアアアアアアアアア!!!」

などと裏切り発言

御坂は顔を赤くしながらバチバチと放電している

「おのれらあああああああああああああああああああああ
ああああ！」

「ギア
アアアアアアアアアアアアアアアアア

晴天の下

巨大な落雷と二つの悲鳴が響いた

「ひどい目にあった・・・」

「にゃー・・・」

「自業自得だろうが」

俺と土御門、上条の3人は寮に向かって歩いていた

罰として上条の宿題を教えると言うことになったからだ

「あーまだふらふらする」

感電で体が上手く動かん

ぐあー

俺も土御門も髪型がすごいことになっていた

「まあでも誤解してた訳じゃないんだからいいじゃないか」

と最後のあがきに出る

「いや偽デートだと分かってみてたんならいいんだけどさ、最初の方で帰った青ピは絶対誤解してるだろ」

上条のその言葉に俺と土御門は今気づいたと言うように口を開く

あいた口がふさがらないというのはこのことだ

「まあ今更だぜい。今更カミやんの一級フラグ建築体質は治せないんだからにゃー」

「それもそうだなー」

「開き直ってんじゃねーよ!!」

などと言いながら寮まで帰る

「つーかずつと見てたんなら助けるよ!なんで俺が海原から追われてんのをのんびり傍観してんだテメーら!!!!」

「「ノリだ(にゃー)!!!!」」

「同時に言うな!!」

上条の部屋に入るとなんかかなり散らかっていた

恐らくインデックスが暇つぶしの道具をあさっていたのだろう

「で、上条、宿題はどれくらい残ってるんだ?」

「.....」

無言

恐らく補習ばっかでやった気になって結局全てやっていないのだろう

「な、なぜ分かった」

「カミさんは単純だからにゃー」

うんうんとうなずく

そんな訳で俺と土御門は一旦部屋に宿題をとりに行く

夏休み終了まであと半日も無い

9月1日「また飛んだ？知らぬわ」（前書き）

考えに考えた結果

どちららにも介入しないという方法を取らせていただきました（笑）

葉「手抜き・・・」

なにか言ったかね？いつそのこと今後全てアトラス視点にしてもいいんだよ？

葉「なんでよりによってアトラス視点！？」

いや彼らマジで出番無いから・・・

つーか柴葉くん以外の転生者本当に出番無いな・・・

宮咲はこの6巻、そして次の7巻

ついでに11、13で思いっきり出番を与える気で居るけども

葉「あ、そうなんだ」

そうなのだ

葉「神b・・・いや止めとこう」

それじゃどぞー

9月1日「また飛んだ？知らぬわ」

「うあ・・・？」

見覚えのある天井

つーかなんだこの始まり方は

9月1日、夏休みも終わり今日から学校が再び始まるのだが

「いや、早すぎるだろ・・・時間」

見るとまだ5時45分

明らかに早すぎる。おかしい、昨日寝たのは魔術師のせいでかなり遅かったはずなのに

先日、魔術師が我が部屋に襲来した

たしか闇咲とか言うオッサンだった

まあそれに関しては上条が解決して今上条はその恋人(?)の呪いを解きに学園都市の外に出ているのだけでも

俺と土御門？行かなかったよ？行く必要も無かったし

上条の学園都市脱出の補助だけしたらテレポートでさっさと寮に帰ったさ

上条は無事戻れるんだろうかねー？

「もう一回寝たいんだけど・・・目え覚めちゃったな・・・」

コレじゃ寝れない

そーさなー

「よし」

寝よう

寝れなくても布団に潜って休んでれば自然と眠くなるはずさ！！

そんなことをすれば遅刻確定なのだがきつと上条の不幸だーーーーー
ーーーー！！が目覚ましとなってくれるはず！

『ピンポーン』

なんてことを考えていると突如来客を告げるチャイムが鳴らされた

「だれだ・・・こんな朝早くから」

まあ寝たふりしてても誰も文句言わないさ

こんな朝から起きてるなんて思わないだろう

『ピンポーン』

『ピンポーンピンポーン』

『ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン』

しつけえ・・・寝てると思えよ！まだ6時にもなってねえぞ！！

『ピンポーン』

アレだけになっていたのが突如止んだ

と思いきや

ズゴォン！！という轟音が鳴る

瞬間部屋の中に扉が突き刺さった

うちの扉だ

「キャアアアアアアアアアアアアア」

同時に悲鳴になる

恐らく防犯用トリックルーム『充電済み』に掛かったのだろう

哀れな・・・

入ることは出来るが出ることは出来ない

ただし無機物と俺を除く

例外として幻想殺しを持つ上条なども居るが・・・まあそれは放っ

ておこう

つかさっきの悲鳴女の声だったな

どっかで聞いたことのある

つかさっきと助けに行かないとやばいんじゃない？・・・アレって一応レベル5並みの電流が流れてるわけだから

「おい、大丈夫か・・・」

目をこするフリをしながら玄関へ向かう

もちろん眠く見せるためだ

が、俺はそこで固まった

「きぬはたー、大丈夫？」

「ちょ・・・超大丈夫じゃありません・・・グフツ・・・」

見覚えのある2人

一人は台詞にしょっちゅう超を付ける中学生ほどの少女

もう一人は下はピンクのジャージで上は半そでのシャツと言うなんかおとなしそうな少女

絹旗と滝壺だった

「わ、私の窒素装甲を破るなんて・・・」

ショックの余り超を付け忘れていいのか、単純に付ける必要が無い部分だったのか

俺には判断がつかない

つか超の使いどころがマジで分からん

滝壺はおろおろしている

「えっと・・・大丈夫？」

少し呆れつつ聞く

でも運がいいなこいつら

もし掛かったのが窒素の装甲をまとう絹旗じゃ無くてろくな戦闘能力を持たない滝壺だったら死んでたぞ？

既に瀕死だけど

・・・とりあえず体晶は回収しておこう

変わりに塩をつめたシャーシンケースを入れてっと

ちなみに全てテレポートで行いました

手先は器用なんです

で

「つまり、俺をアイテムに勧誘しに来たと」

「超そういうことです」

そこに超つけるのか

「悪い、無理」

「なんでですか!？」

「もうグループって組織に入ってる」

「そこを超なんとか」

「無茶言うな・・・まあたまに助っ人に入る程度なら・・・アレイスターに聞いてみないと分かんけども・・・」

つまりグループと同盟を組むと言うことである

「マジですか!？」

「マジっす」

「よかったねきぬはた。コレでむぎのに怒られなくて済む」

「超よかったです」

まだ決まったわけじゃ無いんだけども

その後色々あったけどもなんやかんやでOKくれた

つーか土御門、なぜうらやましがっている

まあそれについての話はこの後AIM拡散力場で出来た人間が来て

魔術師が来て

それを解決した後の話である

9月1日「また飛んだ？知らぬわ」（後書き）

そんな訳で次回から6巻の内容に入ろうと思います

多分柴葉無双、ではなく宮咲無双になると思います

いい加減活躍させねーと

アトラスもだけど・・・

9月1日「そんな出来事、どんな出来事だ、こんな出来事だ、そんな出来事か」

サブタイ意味不w w w

かなり適当にめちゃくちゃにつけました

物語とは関係ないと思いますw多分w

こういう意味の分からないサブタイは結構好きなんで時々あるかも知れないです

つーか今回なげえw w

それでは

9月1日「そんな出来事、どんな出来事だ、こんな出来事だ、そんな出来事か」

9月1日

夏休みも終わり今日から学校である

なんか前回も言ったような気がするがまあいいや

何度だって言いたいんだよ言わせろ!!

コホン、それでは気を取り直して

絹旗と滝壺を帰し俺はちよつと早めの朝食を取っていた

ちなみに昨日の上条の宿題は魔術師が乱入したため終了していない

「あー・・・面倒だ・・・」

今日はシェリークロムウェルが学園都市に進入してくる日である

そんな楽しい(?) 原作イベントの日だが、空間移動が使える俺は恐らく地下街から一般人を脱出させるのを手伝わされるだろう

とても面倒だ

よりによって今日は非番じゃないし

サボったら固法先輩怖いしな・・・

鼻の骨を砕かれ肋骨を砕かれ足を砕かれ内臓を潰され失明しかけた
りして腕を脱臼したり骨折したり痣が出来たり血が出たり・・・ア
レ？これ訴えられるんじゃない？

まあどれもライズ前回で10分もしないうちに直る程度の傷だし

この辺はギャグ補正掛かってるから大丈夫っと・・・

朝食を食べ終わりまだまだ寮を出るには早いなーとか思える時間

そんな時間に隣から悲鳴が聞こえる

「そういえばインデックス昨日縛られてほったらかしだったな・・・

」

縄は俺か土御門が切ったんじゃないのか？　ついていってねーよ

ふーむ、とりあえず上条の助けに行って来よう

部屋を出てすぐ隣

そこがお隣さん、上条当麻の居る部屋

ついでに言うといンデックスも居る

「ういーっす上条ー大丈夫かー」

入ってみると丁度インデックスに噛み付かれている上条を見た

「あ！柴葉！！助けてくれえー！！！」

「うーん・・・」

俺は1分ほど考え・・・

「面白そうだから傍観しようと思う」

そう言い放つ

上条は不幸だー！！！！！！と叫びそのままインデックスの腹の中に・・・

「入ってねえよ！！！」

「さすがの私でも人は食べられないんだよ！！！」

なぜだか信憑性に欠けるのは気のせいではないだろう

つーかマジでこのままだと上条いつかインデックスに食われそうだな

まあそんなこんなで

上条がインデックスに開放され、朝食の準備に取り掛かる

上条、パン1枚

インデックス、パン8枚

どんだけー・・・

「柴葉も食うか？」

「ああ、俺はもう食ってきたからいいや」

ここには暇つぶしで来たただだし

「それより上条、宿題終わってないだろ」

「ぐふぁー！！　　そういえばそうだった・・・」

不幸だ・・・と上条が呟く

「ロスタイム作戦使えば？」

「！？、そのロスタイム作戦とは」

説明しよう、ロスタイム作戦とは

宿題提出日は今日だが、それを一日伸ばす方法である

全てやってきたんですけど家に忘れました！！

と言ってとりあえず提出日を一日伸ばす

「それ意味なくね？」

「意味無いな」

ぶっちゃけそれが通用するのは小学生、よくて中2までである

「まあ頑張れ！まだ6時半だ！！」

「間に合うかあ！！」

そんなこんなで現在登校中

「そーいやさー、昨日の結局どうなったわけ？」

「お前が居ればもうちょい楽に終わった気がするよ・・・」

「あーのなー、呪いが解けるのは幻想殺しもつお前だけだろーが」

「学園都市を出るのにお前の空間移動があったら楽だったって

んだよ!!! つーかお前なら病院まで一瞬で行けて病院から一瞬で帰れたんじゃないの!？」

「病院まで一瞬は行ったこと無いから無理だろうが病院から寮ならどうにかなったな・・・」

「やっぱりか!!! チクショー!!! そうすりゃ宿題終わったかもしれないねーのにいいいい!!!!」

「アホか上条、自分の能力も把握できてないんですかー? お前の幻想殺しがあるせいで俺のテレポートで帰るのはむりだったの」

「そうだった」

上条がひざをつく

「まあテレキネシスでお前の首根っこ掴んで寮まで飛ぶことは出来たか」

「畜生ー!!! そうすr (ry」

「でもアレだぞ? 時速2000kmぐらい出すぞ?」

そうなりや上条どうなるだろうか

ライズで強化された俺ならともかく上条は・・・・・・・・・・

「すみませんでした・・・」

そんなくだらないことを話しながら歩いていると前方に見覚えのあ

る茶髪が通り過ぎた

アレは・・・

「おっすー。若者は朝っぱらから元気だなあ」

俺より先に上条が話しかける

「アンタか・・・」

振り返って機嫌悪そうな顔を見せるのは御坂である

「機嫌悪・・・まあいつものことか」

「いつものことってどういう事よ!!」

俺が呟くと御坂がキレる

そしてこちらへ電撃を飛ばしてきた

「上条ガード」

上条の肩を掴み手前に引き寄せる

「うおおおい!!」

慌てて上条は右手を前に突き出す

電撃はそのまま上条の右手に打ち消された

「なんつーことすんだお前は!!」

上条がこちらへと詰め寄ってきた

「相変わらずお前の反射神経は半端ねーな」

どうやったらあんな至近距離の電撃を防げるんだか

「つーか御坂、お前いきなり人に電撃はなってくんなよ・・・」

「あんたが機嫌悪いのがいつものこととか言うからじゃない!!」

「まあ確かに御坂はいつも機嫌悪そうだけど、今日は特に機嫌悪そうだな」

上条が呟く

「うっさい!! あんたの方こそやけにテンション高い癖に!!」

「昨日色々あったから疲れてんの」

「な、なによ・・・昨日の恋人ごっこってそんなに疲れる仕事だったわけ!?!」

「主にその後起こったトラブルが一番めんどくさかったな・・・」

知り合いがさらわれたりさらった奴に事情があったりそれを助けるために学園都市を抜け出したり徹夜で帰ってきたり

「本当つかれたなあ」

「疲れたのは主に俺だな・・・」

俺が言った言葉に対して上条が恨みがましくこっちを睨む

「その後起きたトラブル？」

「魔jむぐう！！」

言おうとした途端上条に口をふさがれる

「あんま魔術のこと言いふらすなよ・・・」

「お前が言っちゃったよ上条・・・」

上条が口を話した直後上条のミスを指摘する

「あ・・・」

「魔術って何？」

御坂が聞いてくる

言っちゃったほうが手っ取り早いかなー

そうすりゃ今後の魔術サイドの話、手っ取り早く済みそうだし

どうせ22巻でかなり深く関わることになるんだし

「言っちゃったほうが今後楽じゃね？上条」

「あー・・・それもそうか？」

二人でうーんとうなる

ふむ

「昨日海原くんが使ってたようなやつだよ」

「は？」

あれ？最初最後まで見てた訳じゃなかったのか？

「あの・・・えーっと・・・何の槍だっけ」

「覚えられるわけねーだろあんな長い名前の魔術！！」

「そらそーか・・・」

うーんと再びうなる

そうだな

「魔女狩りの王とかそんなんだよ」

「イ・・・イノ？」

御坂が困惑している

「ルーンとか、魔法陣とか、あとは・・・ゴーレムとか」

「????????????????」

御坂の頭に？マークがたくさん浮かぶ

「見たほうが早いか・・・後で支部長に見せてもらいな。あの人使えるから」

かなりの高レベルで

「は？宮咲先輩？」

御坂の？マークが増える

「つか柴葉、お前んとこの風紀委員の支部長って魔術師なの？」

「俺と同じ境遇」

「・・・なるほど」

上条には転生者で神に変な能力貰ったって言うてあるからな

これで十分分かるだろ

御坂は余計に？マークが増えたが

「まあとにかく、後で支部長にでも聞けば分かるから。そいじや」

俺と上条は御坂に別れを告げ学校へ向けて走る

校門を抜け校舎に向かって歩く

すると俺と上条の横を一台の車が通りすぎる

中に乗っているのは

「小萌先生・・・っておい！！ブレーキに足とどくんかい！！！」

駐車場でブレーキをかけ止まった小萌先生の車に上条がツツコミの
ようなものを放つ

すると扉が開き中の様子が分かるようになる

ブレーキに足はとどいていなかった

当然アクセルにも届いていない

「とっ・・・とどかなくなっちゃって運転出切るんですーッ！！！」

足をパタパタさせながら言う

どうやらハンドルについているレバーのような物がブレーキ、アクセル代わりになっているようだ

「ところで小萌先生、そのプリントなんですか？」

上条が小萌先生の持っているプリントの束を指差して言う

「抜き打ちテストですよー」

「「なんですとーッ！！？」」

夏休み前の小萌先生はそんなことする人じゃなかったのに・・・と上条が地面に手をつき大げさにショックを受ける

「冗談ですよー。先生は学生時代にやられて嫌だと思ったことはやりません。大学の友人から論文の資料集めをお願いされてそっちのお手伝いなのですよー」

大学か・・・そういえば大学出てんだっけこの人

ちっさいから分かん

つーかよく入れたな・・・普通子供だと思われて追い返されると思うんだが

やっぱり一方通行が言ってた通り実験動b・・・

「今失礼なこと考えてませんかー？」

小萌先生が怖い顔で睨む

「どんな論文？」

「AIM拡散力場についての文献です」

「えーと・・・確かー・・・」

上条がうなる

そういやこの上条は記憶無くして無いからな・・・授業の内容も覚えてるんだろう

つかそれって知識記憶じゃないのか？

まあ思い出記憶と知識記憶の境目は曖昧だからな・・・

「なんでしたっけ・・・」

「この間補習で言ったと思うんですが・・・はあ・・・」

小萌先生がため息をつく

「AIMはAn-Involuntary Movement、無自覚という意味です。簡単に言えば能力者が体温のように発している力のフィールドの事ですわねー、発電能力者なら磁場、発火能力者なら熱量を知らず知らずのうちに周囲に展開してしまう・・・という具合に。もっとも、精密機器を使わなければ計測出来ないレベルのものなんですけどね」

「じゃあもしもそのA I M何たらを読み取れる能力者がいたら・・・ムッ近くに能力者の気配がする！とかそんな漫画みたいなことが出来るって訳ですか」

「ああ、A I Mストーカー？」

「知ってんの？」

「噂だけだけだな」

「へえ・・・」

「そういや多重能力者だとA I M拡散力場はどうなるんですかね？」

「さあ・・・多重能力者を見たことが無いので分かりませんね」

目の前にいますよー

「つーか俺のA I M拡散力場前に測ったとき無いって言われたんだけど」

「柴葉ちゃん的能力は学園都市でも論外な物ですからね。そんなことがあってもおかしくないのですー。って、のんびりおしゃべりしている場合じゃないのでした！先生は事前準備でいそがしいのです！」

そんなことを言ってそのままどっかへ行ってしまった

教室前

扉を開けると青ピが目の前にいた

「おはー！ーっ！！カミやん柴bくぁwせdrftgyふじこlp
！！！！！！！！」

ので、顔面目掛けて蹴りを放つ

ズザザーッ！と床をすべり教卓の前で止まる

「い、いきなり酷いやん・・・」

「すまん、いきなり目の前に来たからつい（棒読み）」

「めっちゃ棒読みやでー！ー！ーッ！！」

「久々でテンションあがってるんだ（今にも自殺しそうなくらい暗い声）」

「むしろ低そうやッ！！」

「そう、俺のテンションは今ただ下がりなんだ！！（めっちゃ楽しそうな声）」

「今度はあがったでー！！」

まあ馬鹿やっでないでそろそろ席に着こうと思った

9月1日「そんな出来事、どんな出来事だ、こんな出来事だ、そんな出来事か」

長くなっただ、中途半端ですが一旦切ります

それではまた次回ー

9月1日「転校生がやってきたってなんのタイトルだよ!!」(前書き)

サブタイまたしても適当

花粉症が辛いです・・・マジで・・・

ゴミ袋の中が真っ白になったZE☆!!

それじゃどーぞ

9月1日「転校生がやってきたってなんのタイトルだよ!!」

「はいはい席についてくださいよ。始業式までにHR始めちゃいますよー」

教室のみんなに号令をかけながら小萌先生が入ってくる

すると青ピが手を挙げる

「センセー、土御門クンは？」

あ、そういやアレイスターに呼ばれてたっけ・・・

・・・ま、いっか！

いざとなれば生命の木、暴王、パイロクイーン、禁人種なり使って学園都市壊滅させるって脅しやいーし

いやしないけど

そうそう、海原がこないだ暗部グループに入ったよ

「お休みの連絡は受けてませんねー。もしかしたらお寝坊さんかもしれない」

軽いなー

「なああ柴葉、なんか知ってるか？」

上条が俺に聞いてきた

知ってんだけど・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・いや知らない」

「なんだ今の間は・・・」

ため息をつき上条は席に戻る

「えー、出席をとる前にクラスのみんなにビッグニュースがありますっ」

「そーいやこの世界って基本漫画がベースなんだよな・・・」

ちゃんと吸血殺し編とエンゼルフォールはあるけどそれ以外は基本漫画ベース

「今日から転入生追加です！ちなみにその子は女の子！！」

突然男子のテンションが上がる、主に青ピ

上条は逆に下がっていたが

「上条、お前の想像一つ現実を起こしてやろうか？」

一方通行の編入ぐらいならどうにでもなるだろう

ヴェント撃退したらアレイスターに言ってみるのも面白いかもしれない

「止めてくれ・・・っ！か人の心を読むのは止めてくれえ！！」

上条が必死で懇願してくる

「別に読んでないよ？そもそも幻想殺しがあるんだから無理に決まっ
ってんだろー？」

「有線使えばどうにでもなるくせに・・・」

「バレたか・・・でも今回はマジで使ってねーよ」

こんなやり取りをしてるうちに小萌先生が転入生を教室に招き入れる

「さあ転入生ちゃんどーぞ！！」

で、入ってきたのは

「あーっ！とうまだー！！」

インデックス

上条が変な声を上げながら体制を崩す

周りの冷たい視線が上条に刺さる

俺の名前が呼ばれなかったのはテレキネシスで光を曲げて隠れていたから

こうなることは予想できてたから

「シスターちゃん!? どっから入ってきたんですか〜!」

小萌先生が慌てながらインデックスに問う

「でも私はとうまにお昼ご飯のことを・・・」

インデックスが最後まで言う前に小萌先生がインデックスを教室の外へ出していった

すると俺のケータイがb b bと震える

結締からだ

「あい」

『柴葉！！なにサボってんのよ！！』

「今日は始業式で遅れ・・・」

『そっちをサボれええええええええええ!!』

結締のシャウトが俺の耳に響く

「別にいいじゃん。どーせグループの仕事なんて俺が居なくても出来るだろ？ガンバ！！」

『ガンバじゃない!! ったく・・・あんたそんなことしてたら消されるわよ?』

「学園都市も道連れにするが・・・」

『やめなさい』

「そうそう、あと風紀委員の仕事もあるから今日いけねーや！ガンバ！！」

『だからガンバj』

ツーツー

切った

ついでにもう電話が来ないように逆パカして壊す

今頃、結締は激怒していることだろうと思う

ついでに学校の周りにアンチサイキックの障壁を張って

これで結締は入ってこれないって

よし！！

「誰からだ？」

上条が青ピに止めをさしながら聞いてくる

さっきからずっと迫ってくる青ピを叩きのめしていたらしい

「ちよっ！！誤解を生むような描写はしないでってぎゃあああああ

あああああああああああ」

青ピの断末魔

そんな青ピをテレキネシスで椅子に座らせ転げ落ちないよう腰を氷で固定する

「よしっ！」

「グッジョブ！」

やっぱ記憶のある上条は若干性格が変わっている

そんなことをしてる間に小萌先生が戻ってきた

「では、改めて転入生を紹介しますよ」

で、入ってきたのは

「姫神！？」

「こないだの巫女さんやー」

上条と何時の間にか復活し氷を砕いた青ピが反応

「霧が丘女学院から来た姫神秋沙さんです！仲良くしてあげてくださいねー！」

上条のフラグ体質は今更なので小萌先生はもう驚かなかった

始業式が始まり生徒が体育館に向かう

俺と上条はインデックスを探し集団とは逆方向に向かう

しばらく歩いていると話し声が聞こえてきた

保健室からだ

上条は話している内容をしっかりと聞かずに扉に手をかけた

「？、柴葉、なんでそんなところに・・・」

俺は扉を開けても中から見えないよう隠れていた

「ん？なんでって、嫌な予感がするからだよ？」

「そうか・・・」

上条は扉から手を離しノックする

すると

『ひゃあ!!とうま!!ちょっと待って開けないで!!』

という声が中から聞こえてきた

「なんだってんだ？」

上条はなにがなんだか分かってないようだが同時に開けなくて良かったとほっとしているようだった

「多分着替え中なんだと思うぜ？」

「なんでんなこと分かるんだよ!!」

「話の内容を聞けば分かるって・・・」

「で、インデックス。そっちの子はだれ？」

数分後、扉が開かれ現在食堂でインデックスと女の子・・・風斬と対面中

さっきまで着替えていたらしいが上条の声が聞こえた後すぐにもとの服に着替えたそうだ

「よくわかんない。でも友達」

インデックスはその問いにそう答えた

「じゃ、後は任せた上条」

「は？」

俺は空間移動で保健室を出る

と同時に小萌先生が保健室に入っていくのが見えた

さて、俺は体育館に向かいますか

始業式が終わり校舎を出る

「おーい」

学校の木に寄りかかっていたインデックスに上条が声をかける

「じゃ、メシ行くか。柴葉も行こうぜ？」

「ワリ、俺 風紀委員の仕事あるから」

「そっか」

「行けたら終わった後行く」

「おっけ」

上条と簡単なやり取りをした後空間移動で177支部に移動する

「ういーっす」

扉を開け支部に入る

「あ、柴葉さんこんにちわ」

中にいるのは佐天と初春、それと白井だけだった

「あれ？これだけ？」

「はい、今日はみんな外にでてます。白井さんもこれからでるところです」

「？、なんかあったのか？」

「はい、侵入者が入ってきたらしくて・・・後昨日の深夜にゲートを正規の手続きを踏まずに出るということも起こってます」

「侵入者については知らんがゲートを出たやつは俺の知り合いだ」

初春の説明に即答でそう答える

「ええ！？そうなんですか？」

「昨日の夜中色々めんどくさいことがあったんだよ・・・その知り合いに巻き込まれたせいで俺はクタクタだ。てなわけで帰っていいか？」

「駄目に決まってますの」

「色々って朝言ってた魔術師がどーのってやつ？」

御坂が聞いてきたんで答える

「そ、魔術は説明するのがめんどくさいから支部長にでも聞いてくれ」

「魔術ってなんですか？」

「だから支部長に聞け。それで侵入者って？」

「これですの」

白井がパソコンの監視カメラの映像を見せる

そこにはゴスロリを来た色黒の女性が映っていた

「この年でゴスロリとかないよな・・・」

「いや何訳わかんないこと言ってるんですか・・・」

「そのまんまの意味だ。あと白井、こいつを警備員が捕まえられなかったからって警備員に任せて置けないとか考えんなよ？」

「は？」

「そういうことだ。さて、じゃあ頑張ってきて来い」

「あなたも行くんですの！！」

腕をつかまれた

「は？ ちょ・・・」

最後まで言う前に空間移動で外に連れ出された

「私はあのゴス女を捕まえるので、先ほどのようなことを言うならあなたもついてきてくださいまし」

「面倒くさいから遠慮しよう」

無視されそのまま空間移動で空高くまで飛ばされた

その勢いで監視カメラに移っていた場所まで飛んでいく

「面・・・倒・・・く・・・さい」

途切れ途切れなのは空間移動しているせいだ

「アレで間違いないですわね」

「あーはいはい」

前方20mほど先にいるゴス女・・・シェリークロムウエルを見て
白井は懷から信号弾を出す

「警備員は呼ばなくていいのか？」

「たかが侵入者も捕まえられなかったような方々には任せておけませんの」

そういつて信号弾を放つ

「油断は大敵って言葉を知らんのかねえ・・・」

俺の呟いた言葉は周りの騒音にかき消された

「シェリークロムウエル」

俺は目の前の奴の名前を呼ぶ

白井とシェリーが目を見開いた

「あなた・・・」

「なんで私の名前を知ってんのかしら？」

白井の問いをかき消すようにシェリーが問う

「さああてね。イギリス清教とかかわりを持っているからとでも言っておいたほうがいいか？」

「私が所属している組織までしってんのか・・・」

「知り合いにいらんだよ、何？インデックスを回収して来いとも命令された？」

「違う」

「もしかして裏切った？ 必要悪の協会に狙われても知らんけども・・・」

「エリス」

最後まで言う前にシェリーは地面に筆記体で何かを書き名前を呼ぶ
すると突然目の前に巨大なゴーレムが現れた

「な・・・外部の人間の癖に能力者！？」

白井が驚愕しているが無視

「おい、ゴーレムだ。ドラクエ？ FF？ ドラクエなら乗れるよね」

「なに訳の分からないことを・・・エリス！」

ゴーレムが叫ぶ

そのままこちらへ瓦礫で出来た腕を叩きつけてきた

白井の首根っこを掴み飛んで避ける

ぐえっ！という声が聞こえたのは気のせいではあるまい

「今のところ使ったことはないけど・・・試してみるか」

怪獣には怪獣ってな

「創造」

目の前に赤い玉が現れそこからぽこぽこと大きな泡のようなものが出る

その泡がだんだんと何かを形作り巨大な頭、手足、胴体と出来ていく

そしてゴーレムと大体同じ程度の大きさの粘土人形みたいな人型の化物が現れた

「今度はなんですよー！ー！ー！ー！？」

白井が目を回しつつ叫ぶ

「怪獣大決戦キタあああああああああああああああ！！」

俺もテンション上げる

そのままゴーレムと俺の禁人種は取っ組み合いの戦闘を開始する

「な、なんなんですよ・・・」

白井はもうついていけないらしい

「アレが魔術な？あの石のほう」

出来るだけ他者に知られてはいけない超常現象の存在を平気で言いふらす男子高校生の姿がここにはあった

というか俺だった

原作とかさー・・・そのままじゃつまらないよね・・・

「もう訳が分らないですの・・・」

「ちなみに能力者があれ使ったらお陀仏だから絶対佐天とか初春とかには伝えるなよ？」

全身の血管が膨張して筋肉繊維が裂けてまあ色々大変なことになるそんなことをしているとどこからかオレンジ色の閃光がゴーレムと禁人種の核を貫いた

ゴーレムは爆発し消え去った

禁人種は灰となって消えた

煙がなくなった時にはシェリーはどこかに消えていた

「御坂め・・・余計なことを」

「何ですって!!!!」

何時の間にか後ろに立っていた御坂が切れた

「つーか何なのよあの化物どもは・・・」

「片方は俺の能力で作った人工生命でもう片方はゴーレム」

「もう何でもありなのねあんたの能力は」

「上条ほどじゃないだろ」

とりあえず一旦支部に戻る事にした

9月1日「転校生がやってきたってなんのタイトルだよ!!」(後書き)

なんかめっちゃくちゃですみません

基本めっちゃくちゃですこの小説は

それじゃまた次回

9月1日 「今更だけど日付の後にある？とか？とかなくなってるよね」

(前書を

それは作者がめんどくさいからです

葉「サブタイの質問(?)に答えていい」

最近更新ペースがちよつとだけ上がってるのはどうするか決めた部分抜けたからです

6巻以降は結構やりたいことが・・・ある？

葉「なんで疑問系!？」

さて、それじゃどーぞ

葉「無視すんなあああああああ！」

9月1日「今更だけど日付の後にある？とか？とかなくなってるよね」

「なにやってんだ上条」

地下街の通路のど真ん中

シェリーが侵入し停電状態、さらにシャッターが落ち密室真っ暗と
言うそんな空間で上条とインデックスが重なり合っていた

その傍には戸惑っている風斬と・・・

「なんで支部長がここにいますか？仕事しろよ」

宮咲青葉

「いやいや、ここにいるツンツン君に私のテレパシーは聞こえなかつたみたいだね、仕方がないからわざわざ直接口頭で伝えることにしたわけだ」

「じゃあその手に持っている大量のUFOキャッチャーの景品はなんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だんまりかてめえ！！！！」

俺と宮咲が口喧嘩をしている中上条は御坂とインデックスに詰め寄せられそれを見た白井が嫉妬の炎を燃やしているのだがそんなことはとりあえず気にしない事にした

とりあえずこいつ殺す

「まあまあ、殺すなんて物騒なこと言ってる逆に殺されるぞ？特に私なんかは暗部で殺しは慣れているんだ。ちよつとした弾みでサクッと首を刎ねることも出来るんだが？」

笑顔で物騒なことを言う

「あんたに俺が殺せるわけないでしょうg・・・」

最後まで言う前に首筋に氷の刃を押し当てられた

宮咲の頭には輪っかのような物、背中には小さくなっているが氷の柱が数本あった

「大天使・・・ガブリエル・・・」

「その通り、理解してくれて助かるよ」

術式も何も使用せずこいつは自らに大天使を降ろした

どうやら、実力はこいつのほうが上らしい

逆らったらマジで殺されるな・・・

首筋からわずかに血が垂れる

シャツの襟に付着する前にハンカチでふき取り傷が治るまでライズを使用する

「それよりまずあっちの人たち避難させたほうがいいのか？」

「そうだね。さっさと行って来てくれ」

「はいはい」

空間移動を使いシャッターから出られずにいる人たちの近くまで行く

「開けてよお！」

「出してくれえ！！」

などとざわざわと騒がしい

何人かはシャッター目掛けて炎弾や雷撃などを放っていたが無駄だろう

あれは学園都市製、それこそレベル4や5でもなければ壊れない

風紀委員の腕章をつけている俺に気づいた数人が詰め寄ってきた

「オイ！！俺たちは出られるんだろうな！！」

「何とか言えよ風紀委員だろ！！！！？」

一人の男が俺の襟に掴みかかる

その周りで何人かが騒ぐ

うるさいな・・・

何とか言えてまだ出られるか聞かれて1秒程度しか経っていないんだが？

一瞬ぶん殴ろうかと思ったけどとりあえず話そうと思う

「落ち着いてください。俺は空間移動能力者です。今能力を使って外に出しますので」

「出・・・られる？」

「出られるのか！？」

今度はやったーとかなんとか歓喜の声が沸きあがる

うるさいのでさっさとトリック・ルームに全員容れ

「 $\alpha \Rightarrow \beta$ 《ダウンロード》」

外に移転させる

一気に静かになった

さて、戻るか

戻ってみるとインデックスと御坂がどっちが残るかで騒いでいた

インデックスと風斬を先にと上条が言えば

「とうまはその短髪と一緒に残ると言いたいんだね？」

と

御坂と風斬と言えは

「あんたはそのちっこいのと残りたいと・・・」

という感じで中々進まない

俺としては戦闘能力のないインデックスと風斬を先に外に出しても
らったほうが安心できるのだが・・・

でも狙いはインデックスと風斬、上条の3人（もしかすると俺も入
っているのだろうか・・・）だから・・・

「全員残ったほうがいいんじゃないか？」

「「「なっ!!」」」

インデックス、上条、御坂の三人が同時に驚愕の声を上げる
すると突然白井が俺の襟首を掴み

「何訳の分からないことを言ってますの?」

怖い顔を浮かべながら睨んできた

「多分相手は魔術師、んで、狙いは多分上条とインデックス、それ
と風斬の誰かだと思う」

「なんでそんなことを知っているんですの!?!」

余計に怖い顔になった

なんでと聞かれてもなあ

「・・・ちよつと風斬の前だと言いつらいからこっち来てくれ」

風斬たちの居る位置から白井と御坂を連れシャッター付近まで空間
移動する

「AIMバースト、覚えてるか?」

「・・・覚えてるに決まっていますの」

「それがどうかしたの?」

白井が答え御坂が問う

「風斬な、A I M拡散力場の集まり・・・つまりA I Mバーストと同じ物だ」

「「!？」」

「まあA I Mバーストはかなり不完全で人為的、風斬はまだ不完全とは言え完全に近いし、それに偶発的に生まれたものだと思う」

「あなたの言っていることが本当なら、そうなのでしょーうね」

「でも・・・そんな・・・」

御坂は混乱している

「でもそれがなぜ侵入者の狙う理由に・・・」

「あいつは科学sideと魔術sideの戦争を起こす気だ。その引き金になるのは、上条当麻、インデックス、風斬の3人のいずれかだろうな・・・」

「・・・」

「だから、いっそ一塊になってたほうが下手に分けるより安全だろ？学園都市のレベル5が2人、それと10万3000冊の魔道書を記憶している禁書目録、どんな異能でも打ち消す幻想殺しなんつーとんでもないパーティになってんだから」

「なるほど・・・」

「私が外れているのはどういうことですか？」

「あいつの使うゴーレム見たろ？お前はアレをどうにかできると？」

「・・・」

「認めるのも大事なことだ」

そういつて俺は白井の肩に手を置き外に出す

「ちょ・・・」

最後に何か言っていたが無視した

飛ばした場所は177支部の部屋なので戻ってくる頃には終わって
ると思う

上条たちの下に戻ると奥のほうから地響きが聞こえてきた

「もう来たか・・・」

「上条、ここで待つか？それとも行くか？」

「行く。風斬とインデックスはここでまってる」

上条がそういうとインデックスが激怒した

「なんで私が残らなきゃいけないのかな！！」

「危ないから」

「魔術に関しては私の方が詳しいんだよ！！」

「それなら宮咲で足りてる」

あいつ10万3000冊どころかその何倍も記憶してるっつつてたからなあ・・・

「いや、私だけでいいだろう」

突然宮咲が口を開いた

「は！？ちょ・・・んなこと出来るわけないだろ！？？」

上条が宮咲を説得しようとする

「女の子にあんな危ない奴の相手をさせるわけには・・・」

上条の言葉は途中で遮られた

それどころか全員が黙る

「上条君だっけ？それとインデックスちゃん？君たちならこれが何か分かるだろう？私は君たちに危ない奴の相手をしてほしいと思っているんじゃない・・・」

その背中には長いもので3m、短いものだとして10cmほどの氷の柱が何本も突き出ており、翼のようになっていた

頭には天使の輪のようなものがあり手には剣が握られている

先ほども俺相手に使った魔術

自らの体にガブリエルを降ろし、なおかつ意識を保ったままあそこまで使いこなせるのはこの世界でこいつのみだ

さすがは神印のチート転生と言った所だろうか

クビになったって聞いたけど

「邪魔だと言っているんだ」

鋭い眼光でこちらを見て最後にそう言った

瞬きしたときにはそこに宮咲は居なかった

「さいば」

一番最初に口を開いたのはインデックス

「あの人は何者なの？ガブリエルのテレズマを自分に降ろして、それで無事で居られるなんて普通はありえない・・・それに能力者に魔術が使えるはずが」

「能力者が魔術を使ったら全身の血管や筋肉が破裂して死ぬはずじゃねーのか!？」

インデックスの言葉を脚色するように上条が次に口を開く

「あいつは特異体質なんだよ」

そんな言葉で片付けられるような力じゃないが説明が面倒くさいのでそれで済ますことにする

9月1日「今更だけど日付の後にある？とか？とかなくなってるよね」

（後書き

6巻の内容では宮咲に無双させて見たかったんですね

なのでとりあえず宮咲が主に使う力ということで自らの体に天使の力を宿らせるという、まあ想像するとしたらミィシヤクロイツェフのような感じですね

ただ背中の翼は小さくしました

小さいのは能力をしっかりと制御できているからサイズの変更が自由に出来るとでも思っと思ってください

それじゃまた次回！

9月1日「7932兆1354億4152万3222冊の魔道書を持つ少女」

サブタイ長え・・・

宮咲は最初からこの小説最強の人間と決めていた!!!

前世からかなり頭のいい部類だったためにこの世界で生き残る為の能力を選んだ結果全ての世界の全ての魔道書の知識となったわけで

化けモンですね

今回恐らく台詞は一切ありません

それじゃどーぞ

9月1日「7932兆1354億4152万3222冊の魔道書を持つ少女」

さて、今回、今回は私が語り部だと言うことらしいからまずは自己紹介と行こうか

宮咲青葉、年齢、前世と合わせて25

体重は女性に聞くものではないだろう？

私は神のミスでここに居る

ある日私は死んだ

だが本当は死ぬはずではなかったらしく

お詫びとして好きな世界に転生させてくれると言うがそんなことを言われても私は別の世界に行きたいなんて思わない

行きたいと思う世界も無い

好きな小説の世界は危なすぎるしね

それでも転生させてくれると言うのなら魔法や超能力でも使える世界にでも行けたら面白そうと思った

そしたら、学園都市とか言う世界に送ると言われ、ついでにそこが舞台であるとする魔術の禁書目録とか言うライトノベルの原作知識を渡された

だがいくらなんでもそれでは割りに合わないと思わないか？

間違えて殺されて前世の記憶を持ったまま転生できるとはいえまったく知らない世界に行かされるんだぞ？

だから私はもう一つ、その世界で無条件で頂点に立てるだけの知識とそれを使える力をくれと冗談で言ってみた

もちろん本当に冗談だしそんなとんでもない力をポンとくれるわけが無い

半分それぞれ反対の方向の期待を向けながら言う

すると神はOKと言った

だがどうせ本当になるなんて思わないしならなくても私は楽しければ何でも良かった

前世ではロクなことが無かった

そこについてはまたいつか語ろう

転生し暗い穴に落とされ目が覚めたら見知らぬ天井が見えた

そう思った途端に頭に強い痛みが走った

その頭痛は1分も経たぬ内に引いたがそれとともに私の頭に入ってきたのは膨大な俗に言う魔法、魔術と呼ばれる知識だった

この世界では超能力者が使えないはずの魔術を使える体になってい

ることを知った

まさか本当にここまでの力をポン渡されるとは思わなかった

返事がおけーとか軽い言い方で本当にここまでの力をポンと渡されるなんて思うわけがない

ちなみにその魔道書の冊数はざっと7932兆1354億4152万3222冊だそうだ

自らの力とはいえどんなインフレだと思った

それともう一つ、自分の身体能力がとんでもないことになっていた

聖人とか言うらしい

ここまで来たらもう期待するはずだろう？この世界で科学として認知されている超能力

自分が使えるのはどんなものだろうと

だが手に入った能力はただのテレパシー

レベルはそこそだったがまあこれ以上とんでもないものがついても困るし、上々だ

そんなこんなで暗部に入ったり風紀委員に入ったりして物語を傍観していたが

ある日、不良に絡まれた

ただの不良だ

私が蹴りでも入れれば星になって消えるだろう

能力を使うなんて論外だ

とりあえず落ち着くまでボーっつとしていたら

見知らぬ少年がそこに居た不良を蹴散らした

なぜかその少年に親近感が沸いた

なぜだろうか、あったことも無く見たことも無い少年に

気づくとテレパシーで彼の脳内を見ていた

すると彼も同じ転生者じゃないかと

そんなわけで、私は彼を風紀委員に入れた

柴葉葉、私と同じ境遇の人間

後で聞いてみれば他にあと4人も居るらしいじゃないか

会ってみたいと思った

ふむ、オチがつかなさそうだからそろそろお開きにしよう

そんな訳で私は私が愛読していたとある小説のお気に入り台詞の

ひとつでも言ってみようと思った

多少の変更はあるが

「閉塞^{おひらき}に来たぜ、魔術師」

私は目の前に居るゴスロリ女魔術師、シェリークロムウェルにそう
言った

9月1日「7932兆1354億4152万3222冊の魔道書を持つ少女」

オチ意味不なのは作者のいつものことだ

台詞一切ないと言っておいて1つだけあった

今回は宮咲が転生して柴葉と会うまでのことを簡潔に話したただけと
言うかなり適当な話です

次回は宮咲無双となりますね

語り部宮咲は続きますよ

それではまた

9月1日「NO TITLE・・・かっこよく言えば言いと思ったら大間違いだ

さあさあネタが詰まってきましたよ皆さん

てことで、心機一転6巻の内容が終わったら一回終了してしばらくしたら2として9巻辺りから始め様と思う！

何時になるかは分からないけど皆さんそれではさよ・・・

葉「まだ6巻終わってねえだろうが、つか前書きに書くな！」

そうでしたすみません

多分あと2〜3話？

それじゃどーぞ

9月1日「NO TITLE・・・カッコよく言えば言いと思ったら大間違いだ

「おやあ？誰かと思ったら必要悪の協会の裏切り者じゃないの」

「裏切ったつもりは無いのだが・・・まあいいか。とりあえず目的を聞いておこうか」

「テメエには関係ねえだろ？エリス！」

ゴーレム、エリスの岩の拳が私目掛けて飛んできた

ふむふむ、そうだな

「まっがーれ→」

半分以上ノリである

エリスの拳は私に当たらず天井目掛けて飛んでいった

天井が崩れ上から瓦礫が落ちてくる

「そんなふざけた詠唱で私のエリスの攻撃をずらした？一体どうやったらそんなこと・・・ッ!？」

「ぶつぶつ喋ってる暇があるのか・・・しっかりと考えて喋ったほうがいいと思うよ？シェリーちゃん」

拳を腹部に叩き込み足払いで転ばせる

「チェックメイト？」

「なんで疑問系なのよ……」

私は今シェリーの額に銃を突きつけている

なんで銃なんて持ってるかって、暗部といえはいいかも知れないが生憎私は今日は携帯してなかったんだ

うん、警備員からちよつと拝借させてもらったよ

「さあてね、まあ撃たないけれど」

「信用できないわね……まったく」

「さて、何の目的で学園都市に？ インデックスに関しては様子見のままだったはずだろう」

「嘘をついても無駄かしら？」

「無駄だね。それと、後ろで腕を振り上げているゴーレムをどうにかしてくれないか？ 私にあんな石ころを当てたところで何のダメージも与えられないことぐらい分かるだろう？」

同じ組織に居たのなら私の力は分かっているはずだ

はあ……あの時はいい子だったのに

「子供みたいに呼ぶのは止めてほしいわね」

「そうか、それで・・・何が目的？」

「・・・戦争を起こすんだよ、その火種がほしいの。だからできるだけ多くの人間に私がイギリス清教の人間だって知ってもらわないとね。噂をすればなんとやら、自分から来てくれたようだ」

「は・・・？」

これは私の失態

なんであの子が勝手に来ることを予測しなかったのか

まあ出来るわけ無いか

「エリス！」

その声とともにエリスが拳を放った

風斬氷華に向かって

「え・・・？」

風斬さんが一瞬あっけに取られたような顔をする

だけど遅かった

辛うじて軌道を曲げる程度のことは出来たけれど衝撃が緩和出来るわけでもなく、瓦礫は風斬さんの顔面に直撃した

「エリス！」

ゴーレムが止めを刺そうとした

ああ、さすがにアレがやられるのは学園都市的にも不味いな

私はシェリーから離れゴーレムを止めようとする

間に合わなさそうだった

でも

何かが碎けた音がしたと思ったらゴーレムが崩れた

そこに立っていたのは

「ノリとテンションに身を任せて参加しました柴葉葉です」

「テメエ・・・なんつー事を・・・それと何意味の分からないこと
言ってるんだよ柴葉!!! 風斬! 大丈夫か!?!」

柴葉君と上条当麻だった

大体5分前ぐらい

柴葉 side

「あの人は何者なの!？」

インデックスが俺に詰め寄る

「自分に天使の力を降ろしてそれを使いこなせてるなんて人間居るはずが無いんだよ!ましてそれが超能力者なんて・・・」

「何者・・・つーとアレだ、イギリス清教の魔術師、兼学園都市の能力者」

戦闘に関しては主に魔術メインだけど

確かそんなことをこないだ言ってたような

「
ツ!！」

インデックスが何か言っているのを面倒なので聞き流す

「柴葉!」

「どうかしたか上条?」

「風斬知らないか?」

「・・・まさかどっか行っただか言うなよ?」

「その通りだったりします」

俺と上条は同時にため息をつき

その後すぐ真剣な顔つきになって

「魔術師のほう行ってたら不味いよな・・・」

「多分天使の力はこのあたり一帯フツ飛ばしちゃうから使わないだろうけど・・・いやだからこそ魔術師が何かしたら確実に巻き添え食らうな・・・風斬はAIMの塊みたいなものだから一発喰らったぐらいじゃ死なないだろうけど精神的に何があるか分からんし・・・一応インデックスと上条の友達だし・・・」

「お前もだろ？」

「俺はまだだろ、まだ顔見知り、高感度あと10で友達って感じ？」

「どこのギャルゲー・・・つかAIMの塊って・・・」

「朝小萌先生と話したろ？アレ」

「よく分かん」

とりあえず安全確保という事で魔術師が居るであろう方向へ向かう

「！
風斬！」

上条が叫ぶ

そこには倒れている風斬と今にも殴りかかりそうなゴーレムが居た

「上条・・・」

「は？」

俺はすぐさま上条の襟首を掴み

「行って来い！！」

投げた

「どわあああああああああああああああああああああああ」

悲鳴が響く

そして殴りかかるゴーレムの腕に右手が触れた

ゴーレムが崩れる

俺も風斬のすぐ横にテレポート

んで

「ノリとテンションに身を任せて参加しました柴葉葉です」

「テメエ・・・なんつー事を・・・それと何意味の分からないこと
言ってるんだよ柴葉！！風斬！大丈夫か！？」

「その言い方だと魔術師に対して怒っているのか俺に対して怒っているのかわからないぞ」

「両方だよ！！」

「おい風斬、大丈夫か？」

風斬の顔は半分無くなっていた

だが別にスプラッタ映画とかそういう印象は抱かない

なぜなら、その中は空洞で三角柱の形をしたものが浮いていたから

横ではスフィンクスが風斬を心配そうに舐めていた

スフィンクス？

「なんでインデックスの猫がこんな所に・・・」

もしかしてこれを追ってきたのだろうか

まあとりあえず

「上条、宮咲の助っ人、GO」

「人をパシリみたいに使ってんじゃねえ」

「そうだよ柴葉君、それに、彼女は何時の間にやら逃げたようだ」

見ると宮咲が何時の間にか真横に居てさっきまでシェリーがいたであらう場所には誰も居なかった

あ、逃げられた

「あ……れ……?」

ふと声が聞こえそっちのほうを見ると風斬が起き上がっていた

「めがね……眼鏡はどこですか?」

キョロキョロとあたりを見回し、ふとガラスに映った自分を見る

そこには顔面が半分なくなり、中に三角柱の物体が浮いている自分の頭

そんなものを今まで人間だと思っていた子が見たらどう思うか

それは俺にはわからない

9月1日「NO TITLE・・・かつこよく言えば言いと思ったら大間違いだ

オチはもう気にしないでください

前書きでも言ったとおり、あと2〜3話で一旦切ってしばらくしたら新約とか？みたいな感じで大覇星祭編とかからやります

もしかしたら7巻からやるかも知れないけれどそこは不明

そこですね、タイトルを考えていただこうかと思ってるんだ

アンケート的な

それじゃよろしくお願いします

葉「投げやりだな・・・」

まあ連載始めた辺りからこうするつもりだったのでそんな時間は掛かんないと思いますよ？

それとこれで終わりではなくあと2〜3話残ってます

それじゃまた次回！

いつそ休載期間使って思いっきり1話1話書き直していこうか・・・

9月1日「久々の更新ですってサブタイとしてどうなんよコレ」(前書き)

遅くなってすいません

原作6巻を持っていないためコミックスが出るのを待っていました

見ないで書けて話ですけどねw

もしくはアニメ見るとか

ただアニメ見ながらって結構きついです

てことでどーぞ

9月1日「久々の更新ですってサブタイとしてどうなんよコレ」

その後、風斬はすぐに何処かへ走って行った

悲鳴を上げながら

奇声を上げながら何処かへ走って行った

だが今は風斬を追う余裕は無い

なぜならインデックスがいるはずの場所から轟音が聞こえてきたから

「くそッ！あいつ・・・ターゲット変えやがった!!」

「まあまあ落ち着け上条」

とりあえず激昂する上条をなだめる

走りながら

「コレが落ち着いていられるか!!」

「御坂がいるから大丈夫だ。レベル5を信用しろ。リラックスしたまえ」

「若本か」

そんな感じで全力疾走

俺はライズで上条の襟首を掴んで走っている

こっちの方が早いから

「インデックス！」

「！、とうま！さいば！」

「遅い！！」

「しょうがねーだろこっちはこっちでハプニングがあったんだ」

御坂とインデックスはシェリーと対峙していた

思ったより苦戦しているようで御坂には少くない傷が見える

いくらなんでもこんな狭い場所でレールガンは使えないようだ

「ハハハッ！禁書目録に幻想殺し！随分と集まってんなあ！！」

ちなみに宮咲は風斬を追って貰っている

理由はいつが暴れる事が出来るのは誰もいない場合のみ

インデックスがいると危ないからだ

まあもう一つは

「たまには俺にもやらせろ」

「たまにはつつーかいつもだろお前」

「お前ほどじゃない。御坂は休んでろ」

「断るって言いたいんだけど。今回はアンタ達に任せるわ」

今日の御坂は聞き分けがいいな

そんなやり取りを交わしゴーレムに突っ込む

「エリス!!!」

その掛け声と共に振るわれる岩の拳を凍らせつつ足場にしてゴーレムの後ろに居るシェリーの所に辿り着く

そして背後から殴りかかってくるゴーレムを上条がゴーレムの背中に触れる事で破壊した

ゴーレムの岩をテレキネシスで動かしシェリーと俺を囲む

「さあて、2人きりだぜお姫様」

いや悪魔ぽいけどね外見は

「あんた、あんな化物の為に戦うんだねえ！何食ったらそんな気持ち悪い育ち方すんだよ！」

「日本食食ったらそう言う育ち方すんだよ。日本は人種差別の無い国だから」

「答えるとは思わなかったわ・・・エリス!!」

ゴーレムが復活する

「じゃあこっちもギーガー召喚」

遊戯王カードモドキを取り出してPSIで燃やす

そして変わりに禁人種の種を生み出しギーガーと原作では呼ばれていた禁人種の若干小型な奴を出す

「風斬を化物つつーけどさ。この街って化物の巣窟だからね？」

「なるほどね。それであの化物を助けようってわけ？」

「人間らしさの欠片も無いぐらい優しすぎる化物は害にならないかな」

「ハッ！ほざけ！エリス」

宮咲サイド

その頃、私は風斬ちゃんを追って地下街を走っていた

ところどころで気絶している警備員は私が天罰術式で気絶させたもの
銃を向けるとあっさり敵意を向けてくれた

「居た居た。何やっているんだこんなところで」

「ひっ・・・！なんだ・・・宮咲さんですか」

「何だとは何だ。その扱いは無いだろう」

「ごめんなさい」

「謝ればいいってもんじゃないよ」

「じゃあどうすれば」

「化物呼ばわりするな。自分も他人も。言われれば傷つくし化物を

自覚している人間の前で化物に見えない女の子が自分を化物と呼んでいると傷つく」

「・・・」

彼女は肯定しない

うーむ

これは随分大変になりそうだ

先ほど化物の力を見せたおかげか多少警戒は解けているものの（他にも学園都市製のアロマセラピーなんかを使って落ち着かせている。麻薬でも入っているのではないだろうか。効果は絶大だ）まだ落ち着いてはいないようだ

私の方が落ち着いてどうする

いや落ち着いたほうがいいのだろうけど

「言っておくが私や柴葉くんの方が化物だぞ？」

「そんな事ありません・・・私に比べたら・・・」

「学園都市には化物がたくさん居るよ。能力者がただの人間だと君は言えるのかい？」

「・・・」

「まして私は転S・・・おっと」

危ない危ない

危うく口を滑らせるところだった

これは一応最終手段である

あまり言いふらしたく無いし廚二病とののしられるのは嫌だ

なったら言ってきた奴を殺して私は逃げる」

「逃げるの!？」

「口に出てたか・・・」

迂闊だった

それにしてもナイスツツコミだ風斬ちゃん

「少しは落ち着いた？」

「はい・・・」

「じゃあ戻ろうか。ちなみに言えばインデックスも化物だよ。少し前まで一年ごとに記憶を消しておかないと裏切られて危険と思われるてたぐらいだから」

「ツ・・・!」

「な? 化物じゃない人間を化物と呼ばれるのは嫌だろう? そう言う

感情があるうちは君は人間だ」

「・・・ありがとう・・・ございます」

「じゃあ行こうか。終わったら何か食べよう」

「さっき食べたばかりなんですけど」

「私はこの街のメニューを制覇するのが夢だッ！」

くだらないボケで落として次回に続く

9月1日「久々の更新ですってサブタイとしてどうなんよコレ」(後書き)

なんつーかグダグダです

久々の更新なのに本当すみません

最後の風斬とのやり取りはやりたかったからやっただけですがうまく書けなかった

文才がほしい・・・

思った通りに書けないって辛いです

それではまた何時になるか分かりませんが次回もよろしくお願いします

アンケートは継続中です

2期のタイトルを考えてくれい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2427o/>

とある科学と魔術の世界に転生しました

2011年8月26日02時00分発行